

〔ふゆ〕冬

嚴霜。雪飛。氷結。歲寒。日短。朔風。凜々。冽々。

みふゆ。木がらし。年さむぢ。さえゆく。冬がれ。冬ごもり。

●鼻の撃すまじかりける松風の枝も、雪にあつて、狐、山彦のおそび驅りし蘭菊の叢も、霜白う置き渡して、所々の山里の燃火し、見る日さへ暖けなり。澤田の面は、いつしかに大路のやうに行き通ひ、池の水鳥浮ねの杖、いたづらに見なされ、宇治の綱代木、時を得てなん、小野の山人も暇なきころほひなり。

●此わたりには、しる人もなければ、やどりもとらで、袖の露うちらはひつゝ、急ぎ舟に乗るなり、猶しぐれつゝ、古ゆる聖いとむつかしけれど、何となく、折あはれにて、晴間には昔のひまより、ましのぞくに、そことなく、冬がれわたる、柿の中に残る紅葉の、秋をしのぶがほなるも、いとをかしく見わたされて、淀の川舟さしいそげば、やうく難波につきぬ。

●さらでし老の身の苦しき、霜呀ゆる夜もすから、深草の少將の、九十九夜を一夜の心地して、見る人もなきといひけん師走の月を、あかね顔に詠めし。折々かよふ寒さは、御衣をわがせ給ひけん、有りがたき御心にも、是迄の事はおぼしもよらざるべし。おはれ今宵も風さわがし。幾度の行きかひかせんと、兼よとの鐘に寒所とよのへて、例の椽ばなになつ立ち出でたるに、餘所にも夜なべの身じまひにや、戸のからからと鳴る音のしければ、一首はかうぞおもひつきける。

●さて冬枯の景色こそ、秋にはなき、劣るまじけれ。汀の草に紅葉ちり止りて、霜いと白う置けるあした、遺水より烟の立つこそをかしけれ。

●冬はみつばなの露落ちて、無常な死石の上に見れば、火燈籠に吹物は、いつの間にかはこぼれけん。

●曇なき、山にて海の見れば、鳥さ水のたえまなる。江天の暮雪か。尾花波よる眞野の浦、比良のみなの流れ松、みどりにつゞく山風は、それぞ山市の晴嵐の、聲々につげわたる、遠寺の鐘もひびき来て、夕

日山映にかけつくる、海岸ひとりそとしも、波路に歸る老の身の、いざ白髪と御覽するか。神ぞかしといひすて、宮路のかたにあゆみ行く。

●見渡せば、松の葉白き石橋山、幾世凍りし雪ならん。年は安元二年の、冬の日敵も積る雪、下行く水の音までも嵐に咽ぶ源の、右兵衛頼朝は、平治に亂れに流人となり、伊豆の配所の憂き住居、(中略)半や殿原右兵衛佐殿の、御冬籠りの徒然な思ひ中さん、尤と人別に二種一様して、さゆる野掛の暖め酒、籠にたむむ石橋山。拂はぬ雪も杯の、酔に解けつゝ吹き下す、峰の雪吹も御酒宴の、さよんご調ぶる計りなり。佐殿興に入り給ひ、實にも榮えある景色やな。紛はぬ花と詠せしは、咲かぬ梅も有りつべし。慎も梅原も押しなべて、咲きも残さぬ花の雪、折らでも袖にこき入れて、歸る家路も入る山も、白妙匂ふ空の色、朝日夕日の影までも、共に凍りて松の雪、暖かげなると書きたるも是ならむ。

●世の中の苦は色かふる松風の、音も淋しき冬空や、靉交りに降り積る、軒まばら

の放れ家。

●高島やみなを袖山あつ絶えて水も雪もふかき冬哉。

●隙もなく散るもみぢ葉に埋れて庭のけしきも冬籠りけり。

●思ひやれ霜こしぢのあとたえて雪ふりつゝもる冬のさびしき。

●外山なる柴の立枝にふく風の音きく折ぞ冬は物うき。

●思ひやる心さへこそくるしけれわらちの山の冬のけしきは。

●のどかなる花のはるまつ心には長くぞ冬の日なくらしぬる。

●冬さればま木もひばらも級津彦しなぶばかりにふきすさびつゝ。

●にはたふき霜にならひくいとすぢや我冬ごもるやどのほそ道。

●うづみ火にひとりむかひてことなしに世なうらやまの冬籠哉。

●冬や今年よき寒得たりけり。

●鶴の倫に冬長閑なる野がけ哉。

●起きて見よ冬の朝日の出る處。

●使者獨書院へ通るさむさ哉。

●冬は又夏がましぢやといはれけり。

●驚かぬ心や冬の大井川。

●冬三月折角遊べ濱千鳥。

●空に見し雁も影なくなりぬ冬。

●我を守る星はいづれぞ冬の空。

●鳥網のむかふに冬の蝨り哉。

●冬さればさむくつめたき老が身の夜床の伽におこし炭哉。

●花に酒月に芋くふ春秋も冬にはいかで杉焼の鯛。

●葉に霜を置き頭巾して霜てふ菊も杖つぐませの冬枯れ。

●冬の庭わらぶとにする妙園寺。

●夏逃げた日向を冬は追ひまはし。

●ふとよきな日暮秋出て冬歸り。

●心さびしき秋さへあるに、空見がなるこの冬の、ゆふさるゝ野やこゝろあらば、高野のおくのしばなく鳥の、こゝろふきのこせ山おろし。

●げに見わたせば冬景色、木々の梢や、このい、かのい、ながめにあかね霜の花は、入相ころも散らぬ嬉しき。六の花つる中に梅櫻、春待つさまのなりよじふりよし。

●いつもながらの冬はうや、落葉し霜にうづもれて、木の下露に、ぬるゝ夜は、いと淋しき床のうち、枕ならでは白ゆきの、積る思にふし洗む。

●冬の雨が三日降れば、猫の顔が三尺延びる。

●悲夫、冬之爲い氣、亦何惜憚以肅寒。天悠々其淵高、霧鬱々而四幕。夜歸適其難終、日胸晚而易落。伊夫時之方慘、葛萬物之能賦。援長嘯於林抄、鳥高鳴於雲端。矧余情之含瘁、恒視物而增酸。歷四時以迭感、悲此歲之已寒。撫傷憤以嗚咽、望永路而汎瀾。

●一冬天氣如春暖。已被霜風凍作冰。

●刺々風威烈。稜々霜氣清。庭餘鐵鹿腫。樹有凍禽聲。人生何踴躍。歲路太崢嶸。貧賤者誰子。終年不入城。

●小園晴自掃。曝日坐前軒。野風穿山葉。寒鳥啄草根。短籬滿隙地。別徑入孤村。幽趣供尋寂。淹留不復論。(飛來)

●門庭黃葉滿。園樹盡玲瓏。寒水終朝碧。霜天向晚紅。疎養如野寺。茅舍近谿翁。

● 非是分致叙 山來過不周。 (徐幾)
 ● 燒火掩關鳥 窮居訪客稀。凍雲愁暮色。寒日澹斜輝。穿風竹風滿。透庭雲葉飛。已嗟周一歲。竊倚倚荷衣。 (方干)
 ● 閑日難 冬亦自長。 (放翁)
 ● 以松屋冬以掃秀。 (蘇彦)
 ● 綿過冬夕永。 (曹毗)

「ふゆのかは」冬川

水涸。氷結。寒風。凜冽。上氷る。岸のかれあし。うごかぬ波。川風さむし。
 ● かくて舟さし上すに。北風吹きいで、のぼりなやめば。舟子し力をつくし、みなさかのぼれど。短き冬の日。はやく暮れて。雨さへふりいでれば。橋本といふ所より七八丁しなる。寒もなきあたりに舟とめて。舟子ども物などうちくひて。うごさつへさまにも見えねば。さてこながら。夜をわかさんと思ふにやと。舟子とへば。雨風面をさるばかりなれば。いかで舟はさしのぼしてんと。うればしげにいふし。ことわりながら。いとにくし。川かぜ寒き冬の夜を。あくる運しとまちわびんほど。

いかにやと長徳にいへば。いかで此ほど。こころあはげに見ゆれば。寒濕のうれへ。うしろめたして。舟長をよびて。よぶれにのぼりくぐるは。常ながら行くとおもへばなぐさめつ。この廣き水の上をやどりとおもふがいとわびしければ。橋本の宿まで舟をやりてんやといへど。舟をあがりて。外にやどらんは。舟人が心に。又やすからずおもふなどいふは。ふなるじの川非氏に出で入る人なれば。かへりきよむつかられん事をおもひ。又は雨やみ風ふきすまみなば。あけぬうちにも。舟はやりてんとおもふ心と。さはいはれど。おしはかられぬ。 (長伯)
 ● 夕つがた小舟に棹さし。すききぎめぐりありくほど。川風いたう身にしみ。枯葉の上葉は。浪の打よせたるま。氷りつきて。えもいはわけしきなるに。やうくさし出でたる月かげに光りあひたるなどいすまじ。 (一如)
 ● 水に。中ゆる名の龍田川。錦織り掛くる神無月の。冬川になるまでも。紅葉をとづる薄氷を。情なや中絶えて。渡らん人は心なや。 (詠田、龍田)

● うち川はよとせながらしあじろ人舟呼ぶ聲の遠近聞ゆ。 (萬葉)
 ● 泉川水のみわたのふしづけに岩まの氷る冬は氷にけり。 (仲實)
 ● 月さよみ瀬々の網代によるひなは玉にさゆる水なりけり。 (經信)
 ● 網代守さぞさむからし衣手の田上の川もこほるしも夜は。 (爲家)
 ● 柳原このめはるさめ夢なれや枯生をわたるさほの川風。 (長流)
 ● からにしきしぐれの後の一しほをたつたの川にあらふ山風。 (契沖)
 ● 隅田川水の上にもふるゆきのきえのこころは都鳥かも。 (枝直)
 ● 刀根河やきたせでなみに流れゆく雪にけさはうは濁りせり。 (春海)
 ● しみぢ葉はながれつきたる冬川の水の色こそ寒けかりけれ。 (幸文)
 ● いな舟のつな手もくちて最上川はやせに結ぶあつ水哉。 (義門)
 ● 冬川や木の葉は黒き岩の間。 (惟然)
 ● 冬川や筏のすわる草の原。 (其角)
 ● 冬川や孤村の犬の顔を遠ぶ。 (蕪村)
 ● やすき瀬や冬川わたる鶴の雁。 (九葉)

● 雪やけにやけぬる足は冬川のあつ水もふみわたる故。 (宗方)
 ● 冬枯に無地に流るゝ立田川。 (川柳)
 ● したみ程冬の酒匂川の細流れ。 (同)
 ● 峰雲雲過瀟瀟。沙嘴氷生亂石前。枕水簷聲。雁屋。隔道墮落上窗烟。 (茶山)

風のと烈じければ。霜おろさせ給ふに。四方の山の鏡とみゆる汀の水。月かげにいとおもしろし。 (紫式部)
 ● 夕さりつ方より空かきくれて。雪のふりいでければ。いかで深く積らせてしがなと念じつゝ。端近う立ちいで。吹く風の寒きも打忘れてながめたるに。とばかりありて。やうく晴れゆけば。あかす日なしと思ふ程に。月のかげの花やかにさし出で。いと白く積れる上に光りあひたる。こよなう珍らしう心ゆくまなれば。 (弘訓)
 ● さやかなる月の光もうつろひていと。はえある庭の白ゆき。 (弘訓)
 ● とうち獨りこつに更けくもしるく。鐘の聲のほのかにきこえ来る。 (弘訓)
 ● されば朱之助が大膽なるも。才功なくてかへりゆく。旅路は歩も進み難れて。うしと思へど馬を追ふ。榮枯得失身ひとつに。かゝる限のます鏡。曇らで缺けし冬の月。影さへ寒き曉方の天をみあげて別れけり。 (馬琴)

● 冬川を二度越す事か思ひ哉。 (成美)
 ● 冬川に百し捨てたる小舟哉。 (長翠)
 ● 冬川や鳥のさがす舟の中。 (旨原)
 ● 冬川や風に吹かるゝ水車。 (五明)
 ● 冬川や竹の綱橋投げ渡す。 (蝶夢)
 ● 冬川や日暮れてわたる八瀬の馬。 (臥央)
 ● うす氷うすき双紙つかみや川銀杏の葉までとちて寒けき。 (真向)
 ● ろふそくにまじなひの字をかこ川や流しとめて。こほる冬の夜。 (折芳)
 ● 冬ながくあふひのごとく二つはなならへて飛べるかしの川面。 (松丸)
 ● 吹き流すいな葉おろしや大根のふたまた川の冬のから風。 (鐘守)
 ● 山水の音さへたえて谷川に木の葉天狗も氷にけり。 (耳順)
 ● 關守はみえねど越すに。えがたし水さへともる雪の白川。 (隆住)
 ● かみや川といふも名のみぞ寒けきにすく所なく氷る冬の口。 (物成)
 ● 巽の門と氷にとちむらんものも岩間のたき川のくち。 (三笑)
 ● 鴨の香なしの冠毛めだつなりみつ御船をこやし川邊に。 (湖鯉鮒)

「ふゆのつき」冬月
 氷月。凄光。寒月。凍月。片月。幽照。凍照。孤輪。孤影。氷れる光。かげさむき。ほそきかげ。さみしくてらす。ちるばかりなるかげ。かげさゆる。氷りていづる。落葉をてらす。● 雪のかきくらしふるひねもす。ながめくらし。世の人の。すまじき事にいふなる。しはすの月夜の。くもりなくさし出でたるを。み塵まきあげて見給へば。むかひの寺の鐘のこゑ。枕をそばだて。今日もくねと幽なるをききて。 おくれじと空ゆく月を暮れ終にすむべき此世ならねば。

● 夜寒忘れて待つ月の。山の端白き影までも。ふらぬ雪かと疑はれ。冬野に残る菊までも。すは初雪と面白きに。山路のうきや

忘るらん。(謡曲・雪)
 ●冬の夜の月は老女の粧ひてふ、譬しすこ
 き小瀬川の、入江の柳春待ちて、眉作れど
 爛寒き、風の手柳にすきかへし、白粉なら
 で置く霜の、色しきらめく汀の岩、打寄る
 浪も水りぬて、水柱に下る計りなり。
 ●志賀の浦や遠ざかり行く浪間より水りて
 出づる在明の月。(家隆)
 ●天の原空さへさえや渡らん氷と見ゆる
 冬の夜の月。(惠慶)
 ●冬寒み空に水れる月かけは宿にもるこそ
 とくるなりけれ。(顯伴)
 ●天の河さえたる空を見わたせば氷をなが
 す冬の夜の月。(道意)
 ●諏訪の海や雪げの空の雲まより水なを
 つつきのさやけさ。(眞淵)
 ●ふよきせし伊吹風のさえくれて月にしづ
 まる余音の浦波。(同)
 ●獨みる池の水にすむ月のやがて袖にし移
 りわるかな。(後成)
 ●風さむみゆふしもほるならのはの落葉
 がうへをてらす月かけ。(千隆)
 ●冬のは霜にくもれる月よりあらしに

ふけしかげのさむけさ。(春海)
 ●ふゆのよやあふげは空ははるけくて手に
 とるばかりさゆる月影。(枝直)
 ●静なる柿の木原や冬の月。(召波)
 ●雪よりも寒し白髪に冬の月。(丈草)
 ●此木月や銀のさよれて冬の月。(其角)
 ●冷さの身にさし通す冬の月。(杉風)
 ●冬の月人に遠退いて静なり。(櫻堂)
 ●梅なども梅と見ゆるや冬の月。(成美)
 ●獨來て獨を訪ふや冬の月。(蕪村)
 ●冬の月あかきが中に嵐哉。(關更)
 ●あくまで静に出たり冬の月。(士朗)
 ●犬を打つ石の扱なし冬の月。(太祇)
 ●いづも見るものとは違ふ冬の月。(鬼貫)
 ●つらうさへ鏡の穂尖となる軒に月のすこ
 さなみるぞさむけさ。(知可住)
 ●破れたる障子に梅の花ほどの穴から匂ふ
 冬の夜の月。(清澄)
 ●空の海は諏訪のうみとも覚えぬに水りて
 わたる冬の夜の月。(橋近)
 ●指先もさるう斗りと冬の夜の月はさすが
 にさびびとつなし。(横炭)
 ●池水にうつる月さへ冬の夜は水りついた
 とみゆる寒けさ。(春町)

●肝にかよる古葉はあれど冬の月ひかりに
 さえるもとてはなし。(つらき)
 ●水鳥もこよひおそげやふるふらんあまり
 さぶけき月のかげみて。(下風)
 ●薬つく魂の白も氷るらしたがたふふるふ
 月のかげみて。(津々丸)
 ●風あらく月に田づらの厚氷はつたとにち
 むめよりするどき。(近道)
 ●霜さゆる夜には口から出るいきもくも
 うたがふ冬の月かけ。(炭方)
 ●冬の月ほめたりけりてばたりたて。(川柳)
 ●冬の月よりおそろしい月を見る。(同)
 ●名山がふとると月はすこくなり。(同)
 ●乳しらびの外はながめぬ冬の月。(同)
 ●冬の月仄汁で洗つたやうにささ。(同)
 ●こがるよ身には色かへぬ、松の葉さしに
 一ふしのちぎれくや冬の月。(俗語)
 ●月轉 狐輪 滿百城。無端惱殺客中情。
 山疑小雪幾々積。水誤新氷漸々生。永夜猶
 宜閉翠坐。寒風不待出遊行。每思三
 度。願先斷。空放吟詩一兩聲。(管公)
 ●君月上樓還上樓。冬宵三五客衣愁。
 窺。窺玉鏡寒愈小。委。地金波凍不流。何

物梅前吹断笛。誰家雪後與來舟。朔風酒力
 非難。敢說關河減素秋。(祖傑)
 ●清切山中月。依稀水際君。入。霜催覺。渡。
 過。雨自然寒。夕淨米無。果。意深到已淺。
 漁衣須一出。此後對漁。 (維復)

たるやうに見え渡されたるに、峰のあらし
 あらしく、とさく吹き渡して、ちり
 まがひたるなど、輪にかまほしきを、ま
 しも思ふあたりならずとし、心ばかりはあ
 つかれぬべきを、いと一方にのみながめ
 入らせ給へり。(大貳三位)
 ●神無月の始めつた、まだおく霜も深か
 らの程に、いつしかと野へのけしきはかは
 りはて、草どもは押なべて、よに淺ましう
 成りにたるに、残るものとは薄ばかりに
 なん。されどそれだに、おぼめくばかりの
 ままにて、神の秩などいひけんけはひ、露
 見えぬ物から、猶昔思ひ出願、打靡きたる
 こそをかしけれ。(弘魚)

ふる冬はきにけり。(教長)
 ●山賊の蓬がかきも霜がれて風もたまらぬ
 冬はきにけり。(清輔)
 ●神無月ふりみふらすみ定めなき時雨ぞ冬
 の始なりける。(後撰)
 ●我せが上巻のすその水なみにけさこそ
 冬は立ち始めけれ。(小大進)
 ●いつのまにそらのけしきのかはらんは
 げしきけさの木枯の風。(國基)
 ●のこりなく霜つみ車音さえてさびしき田
 井に冬は來にけり。(芳樹)
 ●神無月雪の山口うちしぐれけふこそふゆ
 のふもとなりけれ。(日沖)
 ●しるかかのぬれでやつどふけさよりは時
 雨の雲の出雲やへがさ。(長流)
 ●しち散り鹿のわたゆる山とは秋を
 のふとおもはざりけり。(春海)
 ●時雨つゝあまらるづくにほとりのかつ
 しかのべに冬は來にけり。(筑波子)
 ●初冬や日和になりし京はづれ。(蕪村)
 ●初冬や戸さし寄せたる芳野殿。(召波)
 ●初冬や二つ子に響とらせける。(暖台)
 ●初冬の機に入りてやきりはたり。(養太)
 ●初冬や夕鶯のぬる雨。(長翠)

【ふゆのはじめ】冬始
 地凍。虹藏。閉菰。霜成。襲裘。
 地始凍。水疑氷。
 霜むすぶ。氷りそむる。冬たつ。
 さのふの秋。冬の初空。また冬
 なれぬ。秋のなごり。
 ●十月上の十日は平野の行幸なりけり。此
 度は紅葉盛にて、はそ原。をかしく分け
 入らせ給ふに、山は皆紅なるを見渡させ給
 ふは、北山のおたりほうせん寺、猶わらす
 宰相の通ひ給ひし所などは、なかしかりし
 もおぼし出でらるゝに、こすみの色も心こ
 とに見やらるゝを、煙とこるゝにた
 ら、誰なこめたるきりの隔も、たどくし
 きは、なかいくいと感しきことおほく、
 御覽じわたすに、齊院のわたりの紅葉も、
 いみじう盛にて、色々の錦を、ひさちらし

●秋の内に哀しらせし風の聲のはげしさ
 (謡曲・定家)
 ●冬立つや、旅の衣の朝まだき雪も行き
 かふ遠近の、山又山を越え過ぎて、紅葉に
 残る秋めまで、花の都に着きにけり。
 (謡曲・大社)

●初冬や日利になりし京はづれ。(蕪村)
 ●初冬や戸さし寄せたる芳野殿。(召波)
 ●初冬や二つ子に響とらせける。(暖台)
 ●初冬の機に入りてやきりはたり。(養太)
 ●初冬や夕鶯のぬる雨。(長翠)

- 初冬や起れば見ゆる岐阜の町。(茶静)
- 初冬やかた／＼町のうはすべり。(南枝)
- 初冬や白湯に味ある後夜の鐘。(千梅)
- 初冬や曉走がましき柳輪。(月桂)
- 初冬や刈田のへりの杜若。(抱儀)
- 壁もやれ障子も破れてひとり爐にわたりみらるゝ冬はきにけり。(堅丸)
- 草も木も鳥斗りかふく風のまてかしましきふゆの入口。(吉住)
- 寒けさを七十五日のばしたし氷も霜も今朝ははつもの。(山玉)
- 冬くれば木のは草のはいたむ也八も火鉢にかり付きては。(彦丸)
- 冬立ちて秋を他人にわたしけりみぢらぬ空に聞きなれぬ風。(琴成)
- 今朝冬になりひら朝臣らはやぶるかか、頭巾のうひかぶりして。(台卜)
- 秋露のはや出代りも過ぎぬればけさしもおける冬の口入。(山道)
- 水仙のねにもつ玉の小春とてはかまきくる冬の門口。(白丸)
- けさみれば餅なりのうす氷秋のきをさるまるじなりけり。(天作)
- ふゆのふとはうつてかはつて納豆のくさ木

もたるや今初の木がらし。(松下)
 ●やれはつる扇に秋のふらぬにはやおきかふるけさの水霜。(登)

●萬葉無事入清冬、雖散尊皇酒中空、白菊爲霜翻帶紫、蒼苔因雨却成紅、迎潮預遣收魚荷、防雪先教蓋鶴籠、惟待支那最寒夜、共君披覽訪林公。(皮日休)

●息駕非窮途、未濟豈迷津、獨立大河上、北風來吹人、霜雪自茲始、草木當更新、嚴冬不融殺、何以見陽春。(呂溫)

●沈鬱蕭瑟後、霽色却怡人、霜已千林曙、天猶十月春、黃花蝶過晚、白藜雁衝新、野性自多曠、非關絕世塵。(方朔)

●桐下空塔、綠綺、紹衰初綻、高眠、小爐低帳、還遲掩、酒滴清香似去年。(陸龜蒙)

●江南孟冬天、荻穗軟如綿、綠綃芭蕉葉、黃金橘柚懸。(謝良輔)

●床上卷收青竹篔、運巾開出白綿衣。(菅三忠)

鶯寒冷。獸炭消。
 ねざめがち。ひゆる釜。枕も水る。ねやもる風。ほそき燈。木枯すさぶ。ゆきふく風。

●時々につけても、人の心をうつすめる、花紅葉の盛よりも、冬の夜のすめる月に、雪のひかりあひたる空こそ、わやしう色なきもの、身にしてみても、此世の外のことと思ひ渡され、面白さもおはれさし、残らぬ折なれ、すさまじき例にいひおきけん人の心淡まよとて、御座まきあけさせ給ふ。月はくまなくさしいで、ひとつ色に見え渡されたるに、志をれたる前裁のかけ、心ぐるしう、やり水もいといたうむせびて、池の水のえもいはずすごきに、童部おろして舞まらばしさせ給ふ。(紫式部)

●板びさしに、たはしる礎のあらまじきに、おどろきさめし後、ふた／＼びまどろまれぬは、老のくせなりけり。すびつ近うはひよりにて、香にうづみつるおき、かきおこして、炭さしそへつゝ思ふに、若かりしほどは、かざる寒き夜にも、三史五經の道々ふみたどりしを、今はたゞはかなき歌物語に

「ふゆのよ」冬夜
 風霜。雪月。寒宵。細燈。寒燈。

- 心なやりて、いつしか車をかくる年も近づきにけり。(文雄)
- 秋の葉音もうちまびて、更けゆく夜風のいたう寒きに、問ひ来る人もなければ、委ひさかづき打ふしたる、とみにいねられぬぞ、老のさがなめる。すびつ火も絶々にて、いと長き夜のわびしきに、板戸のひまの、やう／＼まらみゆくは、あけぬなめりといと嬉しく、やなら起き出で、開き見れば、在明の月のさし出でたるなりけり。庭の落葉も霜深く見えて、笈の音のほのかになりぬるは、氷りやしぬらんと、試に水瓶の瓶とりて、ひきあぐれば、手にもさはらず、砕けたる氷の、いさ／＼かづきて上りたるが、月の光にきらめきたる、いと珍らかにをかしくなん。(廣足)
- 霜の上にとびかふ鴨の羽風には獨ある人のいしねかねつる。(讀人不知)
- 冬のは衣手寒し大空の月の光やまこわたるらん。(季行)
- 冬がれはさびしかりけり獨りねの我衣手な誰と探ねん。(師時)
- ふゆのよに幾度斗りねざめして物思ふ宿のひましらすらん。(増基)

- いはとやま世に明けがたき冬のよのあまの、野守誰かするけん。(好忠)
- 水底にうちぬるばかり寒きよのよのあらしぞ海ときこゆる。(長流)
- さえとほるかねの響にねやのとの霜になよのけしきをぞ思ふ。(蘆庵)
- よひのまの時雨霰はきのふかたとどる斗りの冬の夜長さ。(同)
- むらしくれいく度さかば冬の夜のつれなき闇のひましらすべき。(同)
- 小夜中と月かげおけておく霜の白き木ねれに鳥なくなり。(千庵)
- 細の音貸しよ夜半の冬。(蘇村)
- 行燈に水菜揃ふる冬夜かな。(許六)
- 何となう冬夜隣を問はれけり。(其角)
- 冬の夜やどこをわけても月はさす。(成美)
- 冬の夜や鶴の聲を聞き佐ぶる。(白雄)
- 冬の夜や眞柴つみ折る膝頭。(士朗)
- 冬の夜や我に無禮の思ひあり。(几童)
- ふゆの夜やまことしからぬ曙光。(曉台)
- 冬の夜や針失うて恐るしき。(梅室)
- 冬の夜や八つ半時なる犬の聲。(勤也)
- 冬の夜の寒さは身にも余るよりあまりに

- たへぬ麻手小袋。(根丸)
- 池水にうつる月さへ冬の夜は氷りついたとみゆる寒けさ。(春町)
- 寒き夜のみのおき所あんすれば思ひあたりにし埋火のよと。(稻丸)
- 冬の夜はみゆの人の友としてともじのもとにかんじ入りけり。(鴨丸)
- 海ならでみなとをさして一すぢに爐をはなれざる冬の夜すがら。(駒人)
- かされてもかく別寒し冬の夜の月の白むく雪の白むく。(羽袖)
- いつしかに夢はやぶれておのづから目のばち／＼と眩ふるよは。(絹風)
- 風有りとも聞くと寒けし小夜深みまことほれたる雪の松元。(橋洲)
- 雪をれの聲だにせずばしらねばやわたり入けんふれる夜すがら。(常持)
- さゆる夜のねざげの酔はさめるとも空へもち、せ庭の白雪。(貫)
- 冬の夜はかんのけにして待ち人のとかがきたらぬ麻手小ぶすま。(近道)
- 雪の夜にとめすばつねの源左衛門。(川柳)
- のこる燈火かきえて、心ばそくも立ち

いづる。たが跡つけし棚橋の、霜いと白き
 冬の夜は、川瀬の千鳥なきわかれ。(俗語)
 ●昨夜疑霜皎如月。翌五曉々凍將裂。今
 夜明月却如霜。竹影橫。聽更清絕。遺物
 有意娛詩人。供與詩材。次第新。俄風病
 鶴自無寐。山深水絕誰爲憐。四村梅花消
 息動。唧々寒飈漸鳴。儘將醉帽。插幽
 香。此生莫作長安夢。(陸放翁)
 ●苦思搜詩燈下吟。不眠長夜怕寒衾。
 滿庭木葉驚風起。透帳紗窗惜月沈。疏散
 未閑終夜願。盛衰空見本來心。幽棲莫
 定梧桐處。暮雀啾々空遶林。(魚元機)
 ●憶在梁州夜雪深。落梅繁裏玉關心。山
 城老去功名件。臥對寒燈淚滿襟。(陸遊)
 ●忍寒新典調瀾委。夢繞青山舊酒樓。窓裡
 疎燈窗外月。夜深分影照鄉愁。(張船山)
 ●枕上詩成夜思澄。起尋筆硯旋呼燈。
 銀瓶取酒梅花水。已被霜風凍作冰。
 (蘭廷瑞)
 ●玉井無聲月已闌。一庭霜月冷如蟬。誰
 憐寂寞書窗下。凍影梅花伴夜燈。(毛文貞)
 ●一盞寒燈窗外夜。數盞溫酒雪中春。
 (白居易)

船底に背倒れ伏しにけり。(平家物語)
 ●是は阿波の民部の心がはりなれば、沖し
 陸も敵にて、過るべきやうもなかりしか
 ば、教經心におもふやう、天晴源氏の大将、
 義經に逢はよやおもひ、雑兵の舟に入り
 て見れば、まさしく義經が船と見しより
 も、打物やが取り直し、能登守と名乗か
 けて、あたりを拂つて切つて入れば、嵐に
 村雲の晴るゝが如く、數萬の軍兵はつとのい
 て、紛れもなく、義經教經大将二人、きつ
 さきを打ちながへて、しばしは勝負も見え
 ざりけり。(謡曲、先帝)
 ●さる程に源平の兵、宇治川の南北の岸に
 打ち望み、圓の聲矢叫びの音、波にたぐへ
 ておびたよし。橋の行術を隔て、戦ふ。
 (謡曲、細政)
 ●陸にあがれば源氏の兵、あますまじとて
 かけむかふ。景清これを見て、物々しやと
 夕日影に、打物ひらめかいて、切つてかゝ
 れば、こらへずして、はむいたる兵は、四方
 へばつとぞにげにける。(謡曲、景清)
 ●味方の勢は之を見て、あの土佐坊を討ち
 取らんと、我もくと進む中に、江田の源
 三膳井太郎、辨慶を先として、門外に切つ

へノ部

●年光自向燈前盡。客思唯從枕上生。(尊敏)
 [〔S〕兵 (武士の部参照)]
 兵士。兵卒。戰士。銳士。隊伍。
 軍陣。勇卒。破堅。攻敵。拔
 城。死敵。
 つはもの。
 ●元來甲冑の士を兵といへば、兵は士卒の
 事にて候。むかし荷況、古今の兵を論じて
 五とす、湯武の仁義、桓文の節制、秦の銳
 士、魏の勇卒。齊の技擊、これなり。王者の
 兵は道徳に本づき、仁義を崇ぶ故に、三軍心
 を同し、力を戮せて君上の難に赴く事、
 子弟父兄を衛り、手背の頭目を擧ぐが如
 し。是を仁義の兵といふ。桓文の兵は信義

て出づれば、寄手の兵渡り合ひ、なめき叫
 んで戦うたり。(謡曲、正尊)
 ●夏草や兵共が夢の跡、(芭蕉)
 ●葉櫻や草鹿つくる兵等。(蕪村)
 ●羊煮て兵を勞ふ霜夜哉。(召波)
 ●秋の夜に江帥兵を談じけり。(太祇)
 ●つはものとなりひよきたる辨慶が力痛あ
 る鐘かけの松。(むつみ)
 ●雑兵はまた來ましたと後三年。(川柳)
 ●兵の女と見ゆる五月間。(同)
 ●粟めしはどれだくと諸ぐん勢。(同)
 ●雑兵に宿願はやめを買ひにやり。(同)
 ●桶に歩三兵にてなぶられる。(同)
 ●雑兵はもんどりを切るめしを喰ひ。(同)
 ●降参の雑兵腹のへつたつら。(同)
 ●雑兵に葱でも買へと仁田いひ。(同)
 ●てつぼうで士卒はしのぐ冬の陣。(同)
 ●兵者の交りかたわ斗りなり。(同)
 ●降参がすむと一度にひだるがり。(同)
 ●萬卒は得易く、一將は得難し。(俚諺)
 ●一騎當千。(同)
 ●勇將の下に弱卒なし。(同)

を守り、律令にしたがふ故に、三軍畏威
 て一人も節義をこゆる事なし。是を節制の
 兵といふ。蘇秦の兵はたゞ賞罰を嚴にし、
 首級を尙ぶ。曾て兵に節制ある事をしら
 ず。然れども士卒を淬勵して勇敢を倡ぶが
 故に、敵に赴きて戦死する事をたのしむ。
 其強き事魏齊の兵に比するに甚優れり。魏
 の兵は勇力の卒を募り、齊の兵は技擊の材
 を選び、一朝かりあつて敵と闘はしむ。
 其兵など利を要して、あへて死敵の想な
 し。是によりていふに、秦の銳士より以下
 はや、優劣ありといへど、一切に武力をも
 て取勝のみ。すべて兵法ある事をさかす。
 (鳩巢)
 ●其後は四國鎮西の兵ども、皆平家を背き
 て源氏につく。今まで従ひ附きたりしかど
 も、君に向ひて弓をひき、主に對し太刀
 をわく。かしの岸につかんとすれば、波
 高くして叶ひがたし。その汀によせんとす
 れば、敵先を捕へて待ちかけたなり。源平
 の國争ひ、今日を限とぞ見えたりける。さ
 る程に、源氏の兵ども、平家の船に乗り
 つりければ、水主楫取ども、或は射殺され
 或は切り殺されて、船をなほすに及ばず、

●北庭送壯士。虎數最多。精銳奮無敵。
 邊隅今若何。妖氛擁白馬。元帥待驅戈。
 莫守鄴城下。斬鯨海海波。(杜甫)
 ●仁人之兵一心。三軍同力。臣之於君
 也。下之於上也。若子弟之事父兄。若
 手臂之扞頭目。護胸臆也。(荀子)
 ●澤國江山入戰圍。生民何計樂樵漁。
 憑君莫話封侯事。一將功成萬骨枯。(曹松)
 ●海內用兵誰敵君。龍驤虎視起風雲。
 何爲越蚌相待久。遠算還輸旭將軍。(良齊)
 ●武王三年親兵孟津。以下諸侯俊。紂之
 心。諸侯會同。乃退以示弱。(書經)
 ●四面星辰著地明。散燒烟火宿天兵。(韓愈)
 ●天策引神兵。風飛掃鄴城。(庾信)
 ●歲暮遠爲客。邊隅遠用兵。(杜甫)
 ●善爲士者。不武。(老子)
 [へいばふ]兵法
 鶴翼。魚鱗。背水。孫吳。兵術。
 謀略。拙速。見機。制先。
 ●炎漢の初に至りて、高祖の諸將の中に、
 韓信こそは兵術に精しく、合戦の上手にて

ありし。其道王敵を攻めし時、背水の陣にて勝ちしは、今にあまねく世に稱する事也。兵法に右、借山陵、前、左水澤といへるは軍形の常なり。然れ共兵に常勢なし。敵に因つて變化すれば、軍にも常形なかるべし。此時趙兵二十萬と號す。漢兵數萬にたらず。其上背あつたり勢にて、決戦の心なし。韓信これによりて水にそむきて陣せしめたり。水に背きて陣するは死地なり。一足跡へひけば、水に逐ひはめられて死するが故に、自、面々にかせて討死して戦はざる事を得ず。趙軍漢の軍の死地に陥るを見ては、必なへの用意もなく、懇々しくみたまふべし。我死戦の衆をもて、輕進の兵を撃ちなば、必一戦に勝利をうべしとはかりしが、はたしてその謀はづれざりけり。然れども水に背きて陣せしなば、當時諸將も口には許せしかども心には服せず。敵もこれを望み見て大に笑ひしぞかし。これ敵もみかたし形にはめられ、勢にのせられて、みづからおぼえず、戰勝ちても其勝ちける故をしらざりけらし。その外伴りて旗鼓をすて走りて敵をして空、戰遂、利しめ、鼓旗を抜いて漢の赤旗をたて、趙軍の

氣を奪ひしなど、いづれも敵を形におとし、自然の勢をもて馴せしかば、みかたはいよゝゝ勇戦し、敵はみづから死を救ふにいとまらざりけり。孫臏が後、兵の形勢に熟し合戦に長じたるは韓信ならし。此に孫臏韓信が兵法をもて孫武が書に考ふるに、符節を合せたるがごとし。こゝを以て兵法はいよゝゝ形勢にある事をしるべし。孫子にいはずや、先不可勝以待敵之可勝。先不可勝は我にあり、萬全不敗の形也。敵之可勝は敵にあり、必勝不敗の勢なり。其機を形にこめ、其戦を勢に突す。其機を形にこむるに當りては、淵の如くふかく、龍の如く潛まる。いはゆる藏於九地之下のもの也。其戦を勢に決するに當りては、颯の如くおこり、雷の如く撃つ。いはゆる動於九天之上のもの也。忽かくれ忽あらはれ、奇正相生し、虚實相形る。環の無端が如し。兵術の妙、こゝに至りては、兵は神速なるにあり。もし神要をいはず、兵は神速なるにあり。もし神速ならねば、其計策多くは敵にはかられ、又は長陣すれば、將軍も退屈する程に、軍形兵勢も何れの處にか用ふべき。孫子にも

兵聞拙速、未シ觀巧之久也といへり。善將兵者は、たゞ形勢に明にして、其餘勝敗の數にあづからぬ事は多くは不調なれども、反つて是をもて勝利をうる事速也。是を拙而速也といふ。兵家の數ぶ所なり。此勝敗の數に暗くして、たゞ屯營を固備にし、號令を煩濼にして、すきて持久の計をすれば、軍法調熟して、すきまもなく見ゆれども、兵久しければ變生する程に、はては敗軍に及ぶぞかし。是を持而久しといふ。兵家の思む所也。况や兵久しくしてやまれば、其間多く財を糜し、人を殺し、ながく國家に害を貽すことすくならず。むかし蜀の先主自將として、吳を攻むる時、七百萬を連れ、三十屯をたて、吳と相拒ぐこと半年に及ぶ。巧而久しといふべし。つひに兵疲れ、意沮んで陸遜が爲に破られたり。我朝にても近代上杉武田の兩虎争、雄ひしが、いづれも征法練かなるにあらず。軍令精しからざるにあらず。然れども先爲不可勝て敵の可勝をまつ事をしらす。互に一戦の間にかつことなつとめて、しばしば相攻むる事年をへてやまず。是又巧而久といふべし。遂に何の成功なくし

て、僅に其身を終つて國滅びにき。たゞ豐臣秀吉は、もとより不仁にして、誅暴止亂の兵にてはなけれども、勝敗の大數に明なりしかば、出師になにの造作もなく、行兵になにの巧計もなく。戰となれば必功を一舉に收む。遂に兵を領して、曠日することなきがす。いはゆる拙而速なるものに近し。其將略恐らくは、韓信信玄の及ぶ所にあらず。然れども、櫻痴辯賊の人にして、禮樂慈愛は夢にも知らざりし程に、晚節無名の師を起して、朝鮮を征伐し、久しく師旅を暴露し、多く人民を魚肉せしかば、天下の人心離れ叛きけり。亦兵久しくして收めざるの禍なり。孫武が一言、兵の要旨を得たりといふべし。(鳩巢)

傳ふべきよし申して夢さめぬ。やうく口を考へ候へば、今日五日に相當り候ふ程に、唯今下邳の土橋へと急ぎ候ふ。(謡曲、張良)

- 今は何をかつむべき、われ此山に年經たる。大天狗はわれなり。君兵法の大事を傳へて、平家を亡ぼし給ふべきなり。さと思しめされば、明日參會申すべし。(謡曲、鞍馬天狗)
- 身共逆も遊藝に、武士の性根を奪はれ致さぬぞ。はて仰せやるな。此方の如く猿樂洗足に覚え込むは、武藝などに氣が散つてはいかぬ事也。何と流川そうでは無いか。いかにも、當世は兵法より狂言師、ハテまさかの時には、鼓かたげて通げる分と、右衛門を嘲る藤馬か雜音。(淨瑠璃、新撰雪物語)
- 御節を出でしより、信永公に召使はれ、愛かしこの戦に、鐵兜を脱く間も無く、股は馬上にすれ破れ、骨身を碎く數ヶ度の軍功、日に従つて立身出世、これと申すも稀きより、兵法軍術御指南ありし古主のおかき、とくにも伺候し古の、御恩を謝せんと存すれど、軍務に暫しも暇なく、心に思は
- 延引無沙汰。(淨瑠璃、三日太平記)
- 兵法をば使つて見たき野分哉。(櫻良)
- 秋の夜に江神兵を談じけり。(召波)
- 兵法はあなただ次第と月をみて。(過角)
- なぶる蠅弟子もたかつて燈心を棒とつかはす兵法の家。(應人)
- 兵法をつかふ鎗こそなかりけれとかくしないでかなはざる身は。(如竹)
- 履とりてえたる三略六韜もおあしにかふる御代ぞかしこき。(升人)
- 兵書をば夜學の窓にみならひてうちにはなびく螢合戦。(懸升)
- 軍學の思案の胸に手をおかて夢にも更に手をおかぬ御代。(知恵成)
- 太平の世は兵法もはらこなし。(川柳)
- 兵法にもれる泥田の棒の傳。(同)
- 若い身でなま兵法な後家をたて。(同)
- 本望さ娘兵法めに入らず。(同)
- 軍法も笛も狂はぬ張子房。(同)
- 兵法だにまご子と讀んで笑はれる。(同)
- 兵法の奥の手隅田で聲は出し。(同)
- 生兵法大疵の源。(俚諺)
- あのしゝ武者兎兵法。(同)

●馬鹿に兵法なし。(同)

●煩悩兵法。(同)

●治兵、出曰治兵、習戰也。入曰振旅、習戰也。治兵而陳、不至矣。兵事以嚴終。故曰善陣者不戰、此之謂也。善爲國者不師、善師者不陣、善陣者不戰、善戰者不死、善死者不亡。(禮記)

●前有水、則載青旌、前有塵埃、則載鳴鳶、前有車騎、則載飛鴻、前有士師、則載虎皮、前有犛獸、則載貔貅。(禮記)

●百戰百勝非善之善者也、不戰而屈人之兵、善之善者也。(孫子)

●兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也。(同)

●師克在和、不在衆。商周之敵、君之所聞也。(左傳)

●不備不虞、不可以師。(同)

●用兵有言、吾不敢爲主、而爲客。(老子)

●師出以律、否臧凶。(易經)

●兵貴勝、不貴久。(孫子)

●以奇用兵。(老子)

〔へいわ〕 平和 (政治之部参照)

太平。靜謐。無事。鼓腹。祥雲。瑞氣。

波風たぬ。吹く風も枝をならさぬ。治まる御代。安らげき世。萬代の聲。

●然れども白河鳥羽の御代の頃より、政道の古きすがたやうく衰へ、後白河の御時兵革起りて、姦臣世を亂る、天下の民、殆塗炭に落ちにき。頼朝一臂を揮ひて其亂を平げたり。王室はふるきにかへるまでなかりしかど、九重の塵も斂り、萬民の肩もやすまりぬ。上下堵に安んじ、東より西より其徳に服せしかば、實朝なくなりても叛くものありとは聞えず、是にまさるほどの徳政なくして、いかでたやすく覆るべき。又失はれぬべしとも、民安からずば上天よも與し給はじ。(親房)

●近久元年正月三日、御年十一にて御元服たまふ。おなじき三年三月十三日に、法皇かくれさせ給ひに後は、御門偏に世をしるしめして、四方の海渡しづかに、ふく風

を運れば、三大將怒りも解くる和睦の悦萬歳唱ふる士卒の聲、支徳は照烈皇帝、曹操は武徳皇帝、孫堅は武烈皇帝と稱し、吳魏蜀の旗幟と風に飄し、孔明功へり仲達忠あり、關羽歎業張飛重疊、鼎の足と分くる國、代々を重ねて今の世の、軍書の鑑世の鑑、日に増し月に名に高き、響は千鶴萬鶴樂、盡させぬ御代とぞ祝ひける。(浄瑠璃、孔明鼎軍談)

●近年四海縁かに、町家は商のかくを利し、ひいふ匹夫の類まで、しうしの榮に誇ること、臣一人の武功にあらす。君の聖徳各々の忠節天に感じある故、風雨順を違はず、年も豊に土肥えて、樂むべきは此時なり。(浄瑠璃、曾我妻富士)

●あらましにいとふは今しやすき世を誠にならばすてやかねまし。(浄瑠璃)

●いたづらに安くもする月日散いつなますべき命ならぬ。(談天門院)

●もる人のねがふ心のあふみなるやすらの里の安らげくして。(輔親)

●なにごとにつけてうらみんおるかなる身も安國の教ある世を。(枝直)

●もるこしはかみやすらん萬代とふみの

も枝をならさず、世をさまり民やすくして、あまねき御うつくしみの涙、秋津島の外までながれ、しげき御恵、筑波山のかげよりもふかし、よろづの道々にあきらめくおはしませば、國に才ある人おほく、むかしに耻ぢぬ御代にぞありける。(増鏡)

●されば去年の春、隱岐國へ移されさせ給ひし時、そよりに宸襟を懽されて、御泪の故となりし山雲海月の色、今は龍顔を悦ばしむる端となりて、松ふく風も自萬歳をよぶかとあやしまれ、鹽やく浦の煙まで、にぎはふ民の聲となる。(太平記)

●濱の眞砂より、數多き言の葉の、心の花の色香までも、妙なるや敷島の、道ある御代の賑ひ、然れば三十一文字の、神も守護し給ひて、無見頂相の如來も、感應垂れ給へば、君も安全に萬民時を樂しみて、都鄙圓満の雲の下、四海八洲の外までも、波の聲萬歳の響は、長閑けかりけり。今上天皇の御代久に、萬の政の、道すぐに渡る日の、東南に雲をさまり、西北に風靜にて、言葉の林榮行くや、花も常盤の山松の、春に歌ふ聲までも、是れ和歌の詠めに洩るべしや。(詩曲、志賀)

ばしたるあし原の國。(芳志)

●あいた口戸さうの御代のためたさをおはめ申すもはよかりの關。(赤良)

●なさまりて月さうの御代は昔人のことばもかどを立てぬめでたき。(水吉)

●あせ水を流してならふ劍術のやくにしたため御代ぞめでたき。(木綱)

●先以て御機嫌のよき君が代を恐れ乍らも祝ふめでたき。(田造)

●活計にはらのふくるゝ世にあへば天下たいへいをこく土萬民。(未得)

●とんとんとんと逢ふ坂關が原うちおさめたるよろづ代のこと。(志道軒)

●御代豊風風音に麒麟角。(川柳)

●四海波靜な御代の濱の松。(同)

●甲冑に樟櫛くさき太平さ。(同)

●御道具の御道具となる太平さ。(同)

●風の凧上るも御代の時津風。(同)

●泰平さ智者も勇者もしれぬ御代。(同)

〔へび〕 蛇

長蛇。白蛇。毒蛇。蝮蛇。蛇足。兩頭。百毒。掉舌。盤身。吞象。化龍。

●龜は萬年の齡を経て、竊も千年を送りつゝ、舞ひ遊ぶ風情は、又たぐひ、嵐の音はざんざん、濱松の音はざんざん、君ヶ代の、久しかるべきためしには、兼てぞ植ゑし住吉の、松の木の間より沐むれば、水穂の國は名のみして、島隠れ行く、舟をしぞ思ふ明石海、朝霧も立ち渡り、民の腫は眼はひて、月さうの御代に住む人は、御子孫も繁昌、御壽命も永くいきの松の、千代懸けて御悦びの、御酒をいざや勤めん。(諸曲、明石)

●四海波しづかにて、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや。逢ひに相生の松こそめでたかりけれ。げにや仰きても、こともおるかや斯かる世に、住める民とてゆたかなる、君のめぐみぞ有難き。(諸曲、高砂)

●古夏の禹王は宮中にて、鼎を鑄、國を治むる實とし給ふ。鼎の三つの足は、智仁勇の三徳を表し、一つの缺けても詮無き鼎、此聖人の教にまかせ、四百餘州を三つに分ち、吳魏蜀の三國鼎の如く、此玉璽を守護し給はし。聖徳北狄の煩ひなく、御子孫幸福、王者榮久、基ならんと、守舌玉

くちなは。をろち。わだかまる。まつはる。

●かくてやくと焼く程に、この事巳の時に
はじまりて、申の比に及びしかば、さしも
稀なる大櫃に、火熱の至らぬ限もなけれ
ば、終に幹までやけくだけて、灰燼となり
て、倒るゝ折から、倏忽大地震動して、轟
然たる物音、響へば百千の雷電の、一度に
際うて霹靂の如く、穴の中より二すぢの、
白氣忽然と煙をついて、立ちのぼると見る
程に、二つの白蛇隠々と、煙の中に顯はれた
る、その長各廿四あまり、真白き相を引け
るが如く、鱗々として東へ跳き、西へ流れて
閃きたり。かゝる處に沼上より、最羨しき
山雞と、逞しげなる雄野雉と、はたゞき高く
かけり出で、件の白蛇を追はんとす。そ
の時白蛇の身中より、薄曇色なる二の蛇走
り出で、さへきりとよめて件の鳥と戦ふ程
に、なほ又夥の小蛇共空中にあらはれて、
その鬨を援けしかば、山雞野雉はうち負け
て、既に危く見えたる折、又沼上よりいと大
きな雌雄と一羽の錦雞まひのぼりて、山
雞野雉に力を競し、彼薄ぐるき二の蛇と、

夥の小蛇を追ひちらし、突落し、俱
に白蛇を撃たんとす。されども白蛇はおそ
るゝ色なく、頭を上げた舌をばきて、四の
鳥を呑まんとしつゝ、且く挑み戦ふ程に、
又西の方よりして、形状驚より大きかるべ
き、一羽の孔雀翔り来て、山雞等を又相た
すけて、はや四方より捕りこめて、嘴もて
つくとも見るまゝに、二の白蛇は四段となり
て、地上はるかにおちんとす。時に疾風ふ
きあれて、砂を起す天色の朧々となるまゝ
に、白蛇はさらなり、五羽の鳥もいづこゆ
きけん、かき消す如く影だに見えずなりに
けり。
(馬琴)

●弘誓深如海とあるわたりをよむ程に、谷
の底の方より、物のそよ／＼と来る心地の
すれば、何にかあらんと思ひて、やをら見れ
ば、えもいはず大なる蛇なりけり。長さ二
丈ばかりもあるらんと見ゆるが、さしにさ
して匂ひ来れば、我はこの蛇に喰はれなん
ずるなめり。悲しきわざかな、観音たすけ
給へとこそ思ひつれ。こはいかにしつるこ
とぞと思ひて、念じ入りてあるほどに、唯
きに来て、わが膝の許をすぐれど、我を呑
まんと更にせず。唯谷より上さまへのぼら
んとする氣色なれば、いかせん、唯これ
に取りつきたらば、のぼりなんかしと思ふ
心つきて、腰の刀をやはら抜きて、この蛇
の背中につき立て、それにすがりて、蛇
の行くまゝに引かれてゆけば、谷より峯の
上さまにこそ／＼と登りぬ。そのをりこの
男離れてのくに、刀を取らんとすれど、強
く突きたてければ、え抜かぬ程にひきはづ
して、背に刀さしながら、蛇はこそと渡
りて、向の谷にわたりぬ。
(隆國)

●川風暗く水渦き、雲は地に落ち波立ち上
り、山河も崩れ鳴動して、顯はれ出づる大
蛇の勢、年ふる角には雲霧かゝり、松柏そ
びらに生ひ伏して、眼はさながら赤かぶち
の、光を放ち角を振りたて、さも恐ろしき
勢なれども、さすが心を奇類の、舟にうつ
るふ御形を呑まんと、頭を舟に落し入れ
て、酔ひ伏したるこそ恐ろしけれ。
(謡曲、大蛇)

●今行末の淺茅原、くちばみ残す繁みよ
り、あさる雉子の聲立て、此處にあるか
を聞きとがめ、紫蘇女遂に見馴れば、い
ざとて二人立ち留り、見るとも知らず啼く
聲に、つれて傍の叢戦ぎ、揺られ出でたる
雄蛇の、舌を振り立て頭を上げ、雉子を見付
けて挑みよる。これこそ音に聞き及ぶ、き
よすくちなはの聞ひなめれ。聲はしそそ
と見る中に、ばつと雉子の羽根打展げ、飛
ぶよと見しが左は無くて、あさる間もなく
雄蛇の、頭さす雉子をくる／＼、巻い
て引しめ締め付けたり。すはや油断の雉子
の鳥、しめ殺されんと思ひしに、開き羽番
ひ銀嘴に、けい／＼はた／＼、ほろ／＼うち、
音より早くくちなはの、繩にもかゝらず微

塵となり、猶けん／＼を見よ／＼と、聲は
かりして啼く雉子の、草に葉隠れ入り
ける。
(浄瑠璃、今國性靈)

- 主従共に木陰により、其枝此枝取々に、
振り仰ぎし槍の方、尺に餘りし蛇見はれ、
頭を擡げ打まれば、勝元はつと計りに
て、顔色變じ忽に、後にかつばと臥しにけ
り。將軍御手を拍ち給ひ、數萬騎の戦場
も、後れを取らぬ其方が、小き蛇に腹する
事、天性とて可笑やと、覺えず笑ひ坐す。
(浄瑠璃、室町合戦)
- 草薙の大みつるぎも鳥上のみねのなるち
ぞたてまつりける。
(枝直)
- 雲をおこし雨をふらす神すらも小なる
ちなせる朝倉の宮。
(魚彦)
- 蛇を追ふ鱗の思や春の水。
(蘇村)
- はね釣瓶蛇の行方や燕子花。
(丈草)
- 蛇穴を出るや道草も花を持つ。
(竹馬)
- 恐しや釣鐘草に蛇の衣。
(曾北)
- くちなはの衣脱ぎかけし茨哉。
(曉齋)
- 雨の日や泡とも消えず蛇の衣。
(沂衣)
- 蛇の草そよがして逃れけり。
(藏人)
- 蛇しせよ木兎もせよ雪の猫。
(風雲)
- 蛇のきぬ脱ぎてかけたる櫻哉。
(許六)

●しほらしや蛇も浮世を捨衣。
(一茶)

- 蛇落ちて驚く崖の若葉かな。
(維駒)
- 世の中をはいりかねてや蛇の穴。(惟然)
- 蛇の出るひがんのころは火繩にもとぐる
まかれて行くのがけ道。
(和權)
- 手をついてわびる姿かひきがへるのみ込
みがほに蛇はみゆれど。
(參二)
- 是も又にくまるゝなりからす蛇蛙をねら
ふ己がくちゆゑ。
(鼻成)
- くるがねをさらふなるちのにげなくも口
より針をなど出すらん。
(龜村)
- 一つ松人ならなくにくちなはのころしは
一重ぬぎてにげり。
(花守)
- 松が枝にはひまつはれるにしき蛇夏さへ
葛のもみぢをぞみる。
(淨影)
- いきの音をとめんとかせしくちなはも笛
におそれて逃げにける哉。
(夜宴)
- 文錢のかた山かげのあなたより首さし出
すなめら蛇かも。
(藏吉)
- 蛇ならば喰ひ付いてなど止むべしけふの
ひばかりあきとおもへば。
(彦丸)
- 蛇の道は蛇いちごまで庭もせのつりがね
草にまどへるも有り。
(桐保)
- 富士の蛇は六萬坪の主となり。
(川柳)

- けんぎやうは手引があるで蛇におどる。(同)
- 猿虎に合せて蛇のやくぶそく。(同)
- 酒五并蛇が蚊をのんだやうな事。(同)
- どつちらもすきで大蛇はしてやられ。(同)
- 石になつた蛇に成つたは清と佐用。(同)
- 夢わらが化けて蛇となるあつい事。(同)
- 下女が帯蛇が蛙をのんだやう。(同)
- 蛇のみちを女の知るは糸と針。(同)
- 其意どんぶり此處どんぶり、井屋の娘は蛇に命を取られた。其蛇は何處の蛇だ。根殺山の青大将、木にからまり、柳にからまり、椿の小枝にからまる。在郷では金だと定めて、江戸では天下の光物々々。(俗語)
- 今夜ほど、へ泊らうか。お祖父のお部屋へ泊らうか。おちのお部屋にや蛇がある、く、蛇ぢやないもの繩ぢやない。(同)
- 蛇に足無し魚に耳なし。(俚語)
- 灰吹から蛇が出る。(同)

- 敵を突いて蛇を出す。(同)
- 大蛇の道は蛇が知る。(同)
- 大蛇は一寸にして人を呑むの氣象あり。(同)
- 蛇を齧いて足を添ふ。(同)
- 高皇帝將欲、戰時、猘、禍亂。乃耀、聖武、奮、英、斷。提、神、劍、於、手、中。斬、靈、蛇、於、澤畔。何、精、誠、之、潛、發。信、天、地、之、幽、贊。卒、能、滅、強、寇、降、暴、秦。創、王、業、於、炎、漢。于、時、瓜、割、宇、宇、蜂、起、英、雄。以、聖、甲、利、兵、相、視。以、壯、圖、銳、氣、相、高。皆、欲、定、四、海、之、洶、々。救、萬、性、之、嗷、々。帝、既、心、闕、成、陽。氣、王、世、爲、率、卒、長、往、繼、徒、夜、亡。有、大、蛇、分、出、山、穴、巨、路、傍、凝、白、虹、之、精、彩、凝、紫、龍、之、文章。鱗、甲、晶、以、雪、色。晴、眸、赫、其、電、光。體、其、身、形、婉、婉。而、莫、犯、其、身。勢、雄、々、而、踞、亢。勇、夫、聞、之、而、挫、銳。壯、士、視、之、而、摧、剛。於是、行、者、告、于、高、皇、帝。乃、奮、布、衣、挺、干、將、橫、臂、直、進。臨、日、高、曠。一、呼、而、猛、氣、咆、哮。再、叱、而、雄、姿、抑、揚。視、其、將、斬、而、未、斬、之際。地、方、欲、變、毒、螫、肆、其、毒、。我、則、審、其、計、度。其、勢、口、謀、雷、雷、手、操、鋒、銳。滾、龍、頭、而、色、作。振、虎、威、而、聲、厲。荷、天、之、靈、啓、神、之、契。舉、刃、一、揮、溘、然而、斃。不、知、我、者、謂、

我斬白蛇。知我者謂我斬白帝。於是
 龍、雨、血、播、霜、麟、塗、野、草、滅、路、塵、嗟、乎
 神、化、將、窮、不、能、保、其、命、首、尾、雖、在、不
 能、衛、其、身、盛、矣、哉。聖、人、之、草、味、經、倫。
 應、乎、天、順、乎、人、制、動、敵、必、示、以、乃、武、乃
 文。靜、矣、禍、不、可、以、躬、躬、親。若、夫、龍、泉
 黯、々。秋、水、湛、々。荷、非、斯、劍。她、不、可、斬。
 天、威、煌、々。神、武、沈、沈。苟、非、我、主。她、不、可、
 當。是、知、人、在、威、不、在、衆。我、王、也、萬、夫、之
 防。器、在、利、不、在、大。斯、劍、也、三、尺、之、長。
 于、以、警、萬、物。于、以、威、八、方。曆、數、既、終。聞、
 紫、靈、之、夜、哭。嗜、欲、將、至。知、赤、帝、之、道、昌。
 絲、是、氣、吞、秦、傑。威、振、幽、遐。素、車、降、而、三
 秦、歸、德。朱、旗、建、而、六、合、爲、家。彼、戮、鯨、鯢
 與、載、犀、兕。未、若、我、提、青、蛇、而、斬、白、蛇。
 (白居易)

●昭陽爲楚伐魏、移師攻齊、陳軫爲齊
 王使、見昭陽曰、有祠者、賜其舍人酒
 一卮、舍人相謂曰、數人飲之不、足、一人
 飲之有餘、請畫地爲蛇、蛇先成者飲酒。
 一人蛇先成、引酒且飲、乃左手持酒、右
 手畫地曰、吾能爲之足未成。一人蛇成、
 奪其卮曰、蛇故無足、子安能爲、遂飲
 酒。爲蛇足者、終亡其酒。今公攻魏破

ほノ部

- 軍殺將、又移師攻齊、戰勝不知止猶爲蛇足也。昭陽乃解軍而歸。(戰國策)
- 嘉新辛丑歲。郡侯得召伯。是時夏六月。雲日紅霧。殿北古龍堂。窗戶久不關。俄然靈蛇見。宛轉真象側。鱗甲錦繡文。燦爛輝五色。視之頗馴。擗之不懈。傷邪侯率軍。朋來擁。潮戰。遲留夜未半。風雨滿天。迅電暫四起。狂雷隨一擊。須臾風雨散。形影誰能覓。斯蓋龍之靈。變化固難測。方知至神物。其來表有德。(黃希旦)
- 二物穴居。歲月亦已老。一朝雙蟻。觸出幽草。安行免。噬。敢望。吐珠報。己月不殺蛇。昔賢有遺告。(張采)
- 靈似蛇。靈似蠟。人見蛇則驚。見蠟則毛起。漁者持蠟。婦人拾蠟。利之所。在。皆爲寶。 (韓非子)
- 惟危惟蛇。女子之祥。(詩經)

- 藪を突いて蛇を出す。(同)
- 大蛇の道は蛇が知る。(同)
- 大蛇は一寸にして人を呑むの氣象あり。(同)
- 蛇を齧いて足を添ふ。(同)
- 高皇帝將欲、戰時、猘、禍亂。乃耀、聖武、奮、英、斷。提、神、劍、於、手、中。斬、靈、蛇、於、澤畔。何、精、誠、之、潛、發。信、天、地、之、幽、贊。卒、能、滅、強、寇、降、暴、秦。創、王、業、於、炎、漢。于、時、瓜、割、宇、宇、蜂、起、英、雄。以、聖、甲、利、兵、相、視。以、壯、圖、銳、氣、相、高。皆、欲、定、四、海、之、洶、々。救、萬、性、之、嗷、々。帝、既、心、闕、成、陽。氣、王、世、爲、率、卒、長、往、繼、徒、夜、亡。有、大、蛇、分、出、山、穴、巨、路、傍、凝、白、虹、之、精、彩、凝、紫、龍、之、文章。鱗、甲、晶、以、雪、色。晴、眸、赫、其、電、光。體、其、身、形、婉、婉。而、莫、犯、其、身。勢、雄、々、而、踞、亢。勇、夫、聞、之、而、挫、銳。壯、士、視、之、而、摧、剛。於是、行、者、告、于、高、皇、帝。乃、奮、布、衣、挺、干、將、橫、臂、直、進。臨、日、高、曠。一、呼、而、猛、氣、咆、哮。再、叱、而、雄、姿、抑、揚。視、其、將、斬、而、未、斬、之際。地、方、欲、變、毒、螫、肆、其、毒、。我、則、審、其、計、度。其、勢、口、謀、雷、雷、手、操、鋒、銳。滾、龍、頭、而、色、作。振、虎、威、而、聲、厲。荷、天、之、靈、啓、神、之、契。舉、刃、一、揮、溘、然而、斃。不、知、我、者、謂、

我斬白蛇。知我者謂我斬白帝。於是
 龍、雨、血、播、霜、麟、塗、野、草、滅、路、塵、嗟、乎
 神、化、將、窮、不、能、保、其、命、首、尾、雖、在、不
 能、衛、其、身、盛、矣、哉。聖、人、之、草、味、經、倫。
 應、乎、天、順、乎、人、制、動、敵、必、示、以、乃、武、乃
 文。靜、矣、禍、不、可、以、躬、躬、親。若、夫、龍、泉
 黯、々。秋、水、湛、々。荷、非、斯、劍。她、不、可、斬。
 天、威、煌、々。神、武、沈、沈。苟、非、我、主。她、不、可、
 當。是、知、人、在、威、不、在、衆。我、王、也、萬、夫、之
 防。器、在、利、不、在、大。斯、劍、也、三、尺、之、長。
 于、以、警、萬、物。于、以、威、八、方。曆、數、既、終。聞、
 紫、靈、之、夜、哭。嗜、欲、將、至。知、赤、帝、之、道、昌。
 絲、是、氣、吞、秦、傑。威、振、幽、遐。素、車、降、而、三
 秦、歸、德。朱、旗、建、而、六、合、爲、家。彼、戮、鯨、鯢
 與、載、犀、兕。未、若、我、提、青、蛇、而、斬、白、蛇。
 (白居易)

●昭陽爲楚伐魏、移師攻齊、陳軫爲齊
 王使、見昭陽曰、有祠者、賜其舍人酒
 一卮、舍人相謂曰、數人飲之不、足、一人
 飲之有餘、請畫地爲蛇、蛇先成者飲酒。
 一人蛇先成、引酒且飲、乃左手持酒、右
 手畫地曰、吾能爲之足未成。一人蛇成、
 奪其卮曰、蛇故無足、子安能爲、遂飲
 酒。爲蛇足者、終亡其酒。今公攻魏破

あて顔にあて、ムウ／＼ウ伽羅、君が
移り香、抱き寄せしめ付け紙り付け、大將
の甘い顔、齊藤が甘い顔、淫に甘い柿の
木、ほの／＼ほの字、阿房のほの字、つと
ると知らぬ風さよ。(淨瑠璃、大塔宮)
●風先に鳴門すきゆく沖の舟つくる帆は
やいく手なるらん。(春海)
●伊勢島やふの浦浪高ければまほには人
をこひしと思ふ。(秀吉)
●めづらしとみればかくれぬ帆あげてき
ほふ船路にうかぶ島山。(菫歌)
●うら風の今やおひ手になりぬらんまほに
かけたる沖の舟人。(浦波)
●水鳥のつばさとみしは海上やおきゆく舟
の帆かけなりけり。(千蔭)
●松浦浪浪まにみゆるほかけこそもろこし
舟のみつきなるらめ。(同)
●わたの原八重の浪路の關守は真帆ふきか
へすしきなりけり。(菅野)
●すみみえの松ふく風を帆にあげて沖ゆく
船の安き御代哉。(久道)
●一帆見え二帆つらねてあくる夜のしら、
の沖に舟きほふなり。(諸平)
●川の帆や青葉が中の雲の峰。(野坡)

◎細網沖には幾つ帆かけ舟。(其角)
◎忙がしや沖の時雨の真帆片帆。(去來)
◎島陰を歸釣船の歸帆哉。(馬貞)
◎白鷺の翅に霞む白帆かな。(紋水)
◎小春風真帆も七合五句哉。(蘇村)
◎わや／＼と宿は帆をぬふ月夜哉。(鮎物)
◎夕かすみ赤石の浦を帆のおもて。(芭蕉)
●つゝ立つて帆となる袖や涼み船。(丈草)
●江戸向かぬ帆はなかりけり春の風。(蓼太)
●花にいと風をふくみつむるを出でひら
けかけたる帆もみゆる也。(居安)
●目のかぎりいくつともなく南海のはてお
もしろきま帆に片帆に。(巴)
●空生の浦雲に分け入る帆かけ舟梨子の花
とも見えて小さし。(梅園)
●船出せしみなとは跡にほととぎす帆を十
分にかけてなく聲。(はね炭)
●筆の海帆はたんざくの如くにて水入ほど
にみゆる親舟。(網人)
●高砂のうらなく語りあかせしにけふはさ
らばの聲を帆に上げ。(司嘜)
●千を持てる船をこそとれうがひ舟風をは
らめる帆はかけれども。(駒早成)

◎尻に帆をかけ取もあらそがしやよせて
ははしり行く年の波。(廣丸)
◎明けぬとや泊りの出舟さわがらん白帆は
のめく磯山の雲。(海瀟)
◎嬉しきは帆の間に見ゆる國の松。(川柳)
◎楫の取やう舟の帆も腹をたち。(同)
◎一帆づゝ霞へたゝむ明石瀉。(同)
◎筑前の沖を白帆のはだか綱。(同)
◎隅田の春平井の舟に日傘の帆。(同)
◎おろす帆に裾模様程千鳥立ち。(同)
◎風のさしひく心の楫に、しめつゆるめつ
得手に帆を、あげのいとまに身をわきばな
は、ほんに阿漕が浦にしき。(俗語)
◎船をだしやば夜ぶかに出しやれ、ふい
／＼帆影見ゆればなつかしや。(同)
◎沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の
國蟹船船。(同)
◎舟は出てゆく帆かけてはしる、茶やの女
子は出てまねく。(同)
◎さまが船かや神崎沖に、からすかくれに
帆が見ゆる。(同)
◎帆影八里船端三里。(俚談)
◎得手に帆を揚げ。(同)
◎尻に帆掛ける。(同)

●帆かけ船に楫を押す。(同)
●追風の吹く間に帆かけて走れ。(同)
●岸曲沙通著遠徒。半江落日半江陰。悠々
難、逐春潮。上。淡々遠隨。暮霞沈。曾帶
斷。孤。又移。殘月出。疎林。誰憐
獨倚。危樓。暈。日極天涯思不禁。

●向浦余差出。隨波遠近還。初移芳草裏。
正在夕陽間。隱映回孤。微明出亂山。
向空看不盡。歸思滿江關。(司空曙)
●一帆何處去。正在霧中微。浦迥插空
色。汀迴日落暉。每爭高鳥度。能送遠人
歸。似似南浮客。愁拂無所依。京甫舟
。江心雲破處。遙見去帆孤。浪闊疑升
漢。風高若泛湖。依微過遠嶼。彷彿落
平蕪。莫問乘舟客。利名同一途。(張維)
●天門中斷楚江開。碧水東流至北迴。兩
岸青山相對出。孤帆一片日邊來。(李白)
●別離不。獨恨。波口風帆發更頻。何
處青樓方。牛江斜日歸人。(羅邨)
●勢比陵巖宋武。分明百出遠帆開。蜀江
。雙溪西江。強半春寒去却來。(杜牧)
●大幅高帆十八洋。舟師乘便太匆忙。須
。亦石佳風月。枉付篷窓夢一場。(星應)

◎殘風疎柳幾灣々。立盡斜陽慘澹間。帶
得別愁多少去。一帆寒影大於山。(佛山)
●粉壁紅欄一萬家。管絃聲隔荻花。千帆
幾去千帆至。此是山陽小浪華。(淡窓)

〔ほうわり〕 鳳凰
五采。六像。羽儀。文彩。紫庭。
丹穴。棲梧。舞鏡。千金毛。
燦文章。
桐にすむ。梢にまふ。めでたき
鳥。治まる御代。

●昔秦穆公の娘に弄玉と申す人ありけり。
秋の月のさやく限なきに、心をすまし
て、又々世の事にほだされず。又蕭史とい
ふ樂人あり。秋の月清くすまじき晴に、
蕭をふく聲哀に悲しき事限なし。弄玉それ
にや心をうつしけん、進みてあひたまひに
けり。世の人、あまましき事に思ひをしり
たれど、いかにとも苦しと覺えず。唯諸共
に臺の上にて蕭をふき、月をのみ眺め給ふ
事二心なし。鳳凰といふ鳥、とび来てなん
これをさくける。月やう／＼西に傾きて、
山際近くなるほどに、心やいさぎよかりけ

●この鳥、蕭史、弄玉二人の人を具して
とび去りぬ。
たぐひなく月に心をすましつゝ雲井に
いりし人もありけり。
むなしき空にたちのぼるばかり、心のすみ
けんも例少くぞ。又蕭の聲にめで、人
のあざけりを忘れ給ひけんも、好ける御心
のほど推し置られていとみじ。
●おもしろや、かゝる天仙理王の、來臨な
れば數々の、孔雀、鳳凰、迦陵頻伽、飛び
廻り聲々に、立ち舞ふや神の羽風、天つ空
の衣ならん。天の衣ならん。(唐物語)

●一聲の風管は、秋秦嶺の雲を動かせば、
鳳凰も是にめで、梧桐に飛び下りて、翅
を連ねて舞ひ遊ばば、律呂の聲々に心聲に
發す。(謠曲、經政)

●龍田山大明神の拜殿にて、后成の裝束始、
麒麟鳳凰連理の竹、梧桐の旗、御即位の儀式
を寫され、正面に玉の風管、錦縁の疊を重
ね、綾の几帳を龍田姫、染め出す色かと誤
たる。
●上は天下の武將たり。御譜代忠功の斯波

の武衛、笛一本に思召かへられんや。とは思へども忠臣を厭ひ、倭人に心を許し、酒宴伎楽に御目眩み、枕元の太刀取らるゝ程の大愚將、山雞を鳳凰とし、燕石を玉と見て、國を失ひ身を破り、名を末代に損ひ給はん事、口惜の御所存や。

(淨瑠璃、五枚羽子板)

●百敷や桐の梢にすむ鳥の手とせは竹の色もかはらじ。

(寂蓮)

●鳳凰も今や出づべし君が代のことりづかひにもよほされては。

(金持)

●鳳凰のすむてふ桐の扇宮にほんは長くなまされる國。

(飯盛)

●聖代になりゆく駒や中將基いさほひしよき麒麟鳳凰。

(帶武)

●鳳凰の文使をやいたすらんきりにまじはる雁のひとつら。

(常持)

●鳳凰にゆかりの桐は秋のさく風にひとはの舞ひ下るなり。

(肉親)

●鳳凰も孔雀も時にあふむまでいでやすみこしあとは山がら。

(橘洲)

●月をさよふ軒につるさんすかし給の鳳凰もすむ切子灯籠。

(玉歌)

●みやしろの欄間にほりし鳳凰も出づべき

きりの箱崎の神。(千代住)

●鳳凰と名に負ふ竹もけさのほどきりの間にみゆる目出度さ。(留滿)

●鳳凰は夜着のもやうにあらはれて枕を高くいぬる君が代。(成安)

●ほうわうのふはくを喰ふ阿房宮。(川柳)

●鳳凰に松とは別な世界なり。(同)

●鳳凰の曰く出やうかナア麒麟。(同)

●桐つない鳳凰天々舞うてゐる。(同)

●鳳凰は御製の煙のうへで舞ひ。(同)

●龍を出る鳳凰桐の光なり。(同)

●麒麟があらはれ世界真四角。(同)

●鶴にいひそな所鳳凰なり。(同)

●鳳凰の集立ち廿六年目。(同)

●さいたぐ見さいな。鳥をさいた見さいな。唐土の鳥さしは、孔雀鳳凰に、いんこの鳥に孔雀、雁鸚鵡に比翼の鳥を、さいたさ。(俗語)

信也。(抱朴子)

●君不見瀟湘之山衝山高。山巔朱鳳聲嗷々。側身長願求其曹。翅垂口噤心勞々。下悠百鳥在羅網。黃雀最小猶難逃。願分竹實及蠶繭。盡使鷓鴣相怒號。(杜甫)

●鳳凰集南岳。徘徊孤竹根。於心有不可厭。奮翅凌紫氣。豈不苦勤苦。羞與黃雀群。何時當來儀。要須聖明君。(劉楨)

●樓跡依丹穴。尊爲百鳥王。九苞昭聖瑞。五包備文章。廣向秦臺側。類過雒水陽。鳴岐今日見。阿閣佇來翔。(李嶠)

●鳳凰鳴高岡。有翼不好飛。安知鳳凰德。貴其來見稀。(李陵)

●南山有鳴鳳。其音和且清。鳴於有道國。出則天下平。(歐陽修)

●四靈爲三音。何爲四靈。麒麟鸚鵡。謂之四靈。(禮記)

●鳳凰鳴矣。于彼高岡。梨桐生矣。于彼朝陽。(詩經)

●鳳凰于飛。翾々其羽。亦傳于天。(同)

●鳳鳥不至。河不出圖。吾已矣夫。(論語)

〔ほ乙〕 矛

戈矛。長戈。矛戟。

くはし矛。ちまさのほこ。ぬほこ。さかほこ。ひらさぎのほこ。

●それよりは真直に登る所あり。此ところに至れば、天地又常の如くにして奇怪なし。只いさを限りに登る程に、つひに絶頂に至れり。絶頂は尖りて繞の地面に天の逆鋒あり。是を見得しときうれしき、何にかたとへん。逆鋒のありさま、全盤は唐金のこくとくに見えたれども、風霜にさらせるものなれば、青くまびてしかとれがたし。長さ一丈餘ばかり、ふとさ大なる竹程にてさかさまに地中にたち、其石突の端の所に、南面に鬼面の如きもの見ゆ。是も風霜にさらされたれば、鼻目しかとは見え難し。土中に入りたる先の方は何程深く入りたるや、しるべからず。其絶頂に此鋒一本のみにて、外に堂宇等のごときもの一もなし。神代の舊物なりや、其程はしらすといへども、實に三百年、五百年位の近きものとは見えす。天下の奇品なり。もし銘などもあやとくはしく見しかども見えす。(雨翁)

信也。

●君不見瀟湘之山衝山高。山巔朱鳳聲嗷々。側身長願求其曹。翅垂口噤心勞々。下悠百鳥在羅網。黃雀最小猶難逃。願分竹實及蠶繭。盡使鷓鴣相怒號。(杜甫)

●鳳凰集南岳。徘徊孤竹根。於心有不可厭。奮翅凌紫氣。豈不苦勤苦。羞與黃雀群。何時當來儀。要須聖明君。(劉楨)

●樓跡依丹穴。尊爲百鳥王。九苞昭聖瑞。五包備文章。廣向秦臺側。類過雒水陽。鳴岐今日見。阿閣佇來翔。(李嶠)

●鳳凰鳴高岡。有翼不好飛。安知鳳凰德。貴其來見稀。(李陵)

●南山有鳴鳳。其音和且清。鳴於有道國。出則天下平。(歐陽修)

●四靈爲三音。何爲四靈。麒麟鸚鵡。謂之四靈。(禮記)

●鳳凰鳴矣。于彼高岡。梨桐生矣。于彼朝陽。(詩經)

●鳳凰于飛。翾々其羽。亦傳于天。(同)

●鳳鳥不至。河不出圖。吾已矣夫。(論語)

●知康は、赤地綿の直垂にわざと鏡はさきりけり、甲ばかりをぞ着たりける。四天王の像を繪に書いて甲におし。右の手には金剛鈴をふり、左の手には鈴をつき、法住寺殿の四面の築地の上にのぼりて、軍をまねきて時々舞ひにけり。(平家物語)

●櫛のかけふむ道のやちまたに、押なびける色々の旗手ども、かつらの道風に翻り、家々の軒端毎に、立て並べたる黄金白銀種々の鈴ども、其音のあさつゆにさらめきあひて、見るも清々しいさまし。(兼盛)

●城中の男女ども、つはものあらそひ取りて、陣のうちへめて来る。男の首は鈴にさされて先にゆく。女はなみだをながしてあとにゆく。(後三年合戦記)

●伊弉諾伊弉冉は、天祖の御教へ、直ぐなる道をあらためんと、天の浮橋に、二神たよすみ給ひて、此御矛を海中に、さし下し給ひしより、御矛を改めて、天の逆矛と名付けしめ、國富み民を治め得て、二神の始めより、今の代までの寶なり。其後國土治まりて、御代平になりしかば、瀧祭の明神、此御矛を預りて、所も替れしや、此御山に納めて、寶の山と號すなり。そもく御矛

のまたりし、名も深き瀧祭の、神の社はいづくぞと、問へば名を得し龍田山、紅葉の八葉も即ち矛の刃先より、照す日影や紅の、光りさし下す矛の露、天地すなはなる事も、こゝこそ寶身は知らず、國の寶の山高み、よくく禮し給へや。(謡曲、逆矛)

●我初初より、このかた、此秋津洲に地をなして、御代を守りて御矛を守護し、紅葉の色も八葉の色も八葉の葉、即ち矛の刃先なるべし。鯉の鱗の法味に引かれて、夜半に神燈明なり。(謡曲、龍田)

●夫れ久堅の神代より、天地開けし國の起り、天のにはこの直なるや、名も二柱の神こゝに、八洲の國を作り置き、すめら代なれや大君の、御影のどけき時とかや。(謡曲、金札)

●甲に似せて穴をほる、蟹侍とは貴殿の事我鋒先にて切り取つたる一國一城、恩にさるべき主も無ければ、刃向ふべき敵もなし。足る事を知り此城に、世を我儘の隠居親仁、國都望におりない、よしなき音物様はしと、齒に齧きせぬ老人の、にべなくいひ放せば。(淨瑠璃、蝶花形)

●池神の力士まひかもしらさぎの鈴くひも

ちてとびわたらん。(高葉)
 ●ものゝ手のごとにもたる細戈千足の國ぞたけき國なる。(蘆庵)
 ●神のます宮の守りの杉なればおのがほこそ立て並べけれ。(言道)
 ●大汝神のみことの執りまし御はこの廣にひろりませせ君。(魚彦)
 ●久方の天のの矛のしたよりゆたれる御國となりけらすや。(同)
 ●比々其藝のいかし御矛の御被威はや殿し御國と願しづめます。(同)
 ●まゆみにも矛にもかへて筆とれば國ぶりならぬ跡はとよめじ。(諸平)
 ●四方山の人のまほりにする矛を神のみまへにはひつる哉。(神樂歌)
 ●春立や氷柱の鋒の雫より。(希因)
 ●忠と義を楯になしつ守る城はなかほこも通らざりけり。(季照)
 ●あしかびの中になつよふ釣舟のゆりこむ梓やあまの逆鋒。(白圭)
 ●泰平さ鋒し鏡も祭の具。(川柳)
 ●逆鋒の筆で國が二つ出来。(同)
 ●ふたばしら、遠つみ祖のあとたれて、逆矛たてしその峯に、たえせわけより千代か

けて、あらしにはるゝ霧島の、神のみすゝもことふりて。(俗語)
 ●オットあぶない鼻の先、うける曲撥三尺の、劍にひやうやうわさるの、これぞ茅糲の玉矛に、おつ立てられし大神樂、逃げる拍子に狂ふ獅子。(同)
 ●楚人有鬻楯與矛者。譽之曰、吾楯之堅、莫能陷也。又譽其矛曰、吾矛之利、子物無不陷也。或曰、以子之矛、陷子之楯、何如、其人弗能應也。(韓非子)
 ●畫戟似蛇長、誰論半投槍。日斜親開籠。高冥車沙揚。(高啓)
 ●判身入矛戟。輕敵比錘銖。(元稹)
 ●兩矢逐天狼。電矛驅海若。(韓愈)
 ●造矛造矛、小問弗忍、終身之羞。(周武王)
 ●備乃弓矢、銀乃戈矛、礪乃鋒刃、無敢善。(書經)
 ●滿枝爲鼓吹。衷甲避戈矛。(杜甫)
 ●修我戈矛。與千同仇。(詩經)
 ●手接天矛。裁修鏃。(柳完元)
 ●長戈利矛日可磨。(李商隱)

〔ほし〕星

晨星。隕星。彗星。北斗。七星。星斗。星辰。紫宸。珠璣。金精。隱見。森羅。燦爛。煌々。暫々。星かげ。星の森。星づくよ。夕つよ。あまつ星。星のやどり。星のきらめき。あかほし。星の位。星をいたゞく。
 ●その冬のころ、宮いたう忍びて、石清水の社に詣でさせたまひ、御念誦のどかにま給ひて、少しまどろませ給へるに、神殿の内には椿葉のかけ、二たび吹まると、いとあざやかにけだかき聲にて、打誦し給ふとき、御らんじあげたれば、明方の空すみわたれるに、星の光しげざやかにていと神さびたり。(増鏡)
 ●御かたちようて、いはゞ毘沙門のいきほひ見奉るがやうにおはします。御相かくの如しといへば、誰よりも勝れ給へりこそ申しけれ。いみじかりける上手かな。あてたがはせ給へる事やおはしますめる。帥のおとよは大臣まですがやかに給へり

じな、初よしとはいひけるなめり。いかづちのおちぬれど又もあがるものを、星のおちて石となるにぞたとふべきにや。それ、そかへりあがる事なけれ。(爲業)
 ●たましくこまかしこに残る家に、人の住むとは見ゆるもあれど、昔には似つゝもあらね。いづれか我住みし家ぞと立ちまどふに、こま二十歩ばかりをさりて、雷に推かれし松の聲えてたてるが、雲間の星の光に見えたるを、げに我軒の標こそ見えつれと、先婦しき心地してあゆむに、家は故にかはらであり。(秋成)
 ●七月二日、御會あり。夕月夜の頃なれば、更けゆくまゝの空は、星の光ばかりなるに、静りたる夜の景色、長閑におもしろし。(中務内侍)
 ●實におもしろしや此道は、冥途に通ふなるものな、心ほそ鳥部山、煙のすゑもうす霞む、聲も旅雁のよこたはる、北斗の星のくもりなき、御法の花も開くなる、經書堂は是かとよ。(詩曲、熊野)
 ●傳へ聞く、遊子伯陽は、月に寄つて契をなし、夫婦二つの星となる。今の雲の上人も、月なき夜半をこそ悲しみ給ふに、我は

それに引かへ、月の夜頃をいとひ、闇になる夜をよるこべば、船舟に燈す篝火の、消えて闇こそ悲しけれ。(詩曲、鶴岡)
 ●我曉天星を戴き、宮中を拜する所に、是なる老人夫婦、神前を清め、御垣を圍ふ氣色見えたり。(詩曲、源太夫)
 ●今昔限りの憂き命、留めて留まらぬ三瀬川、岸に繫ぎし綱手こそ、私野の舟と觀念し、歎く心は曇れども、曇らぬ空の星月夜、あらまほしやといふほしも、年に一夜の契ぞや。譬へば雲の上とても、天の川を隔てなば、人のつらさに變らじな。糸かけ星のほそくと、付添星や妬むらむ。思ひ星とは七夕の、縁と聞けど儘ならぬ、浮世に似たる類ぞや。光も薄く丑寅に、あれあれ見ゆる星様は、チー假の現の星佛、宿り星とはいつまでも、妹背替らぬ夫婦合、我身の果はすばるばし。ア、思ふまい心から、たとひ奈落に落ちるとも、後に返へらじまりながら、女はいとぞ罪深く、従ふ道も忘れみづ、あはれみやこのひばの星、結日解けて濁江に、うかれし事を思ふには、普き門に立よるも、爰ぞ一念十願寺、念彼觀音の力星、助け給へと請共に、心をこめて願

ひ星。亂れ心の亂るとも、利劍即是の誓にて。(淨瑠璃、二つ腹帯)
 ●鐘ばかりかは草も木も、空も名残と見上ぐれば、くも心なき水の音、北斗は浮えて影映る、星の妹背の銀河、梅田の橋を鳥鶴の、橋と契りていつまでも、我れと和女は女夫星、必らずさうと纏り寄り、二人が中に降る涙、川の水嵩も増るべし。(淨瑠璃、曾根崎心中)
 ●にし山や柿のあらしきえくれていとよきやけきゆふつよのかけ。(千隆)
 ●行く水の空にありとも見えなくによひよひごとに星ぞながる。(勝微)
 ●世の人のしげき思のかすくはほしの林をためしなるらん。(春滿)
 ●冬の木の霜もたまらぬ山風にほしのひかりのまさりがほなる。(定家)
 ●わがこひは七ます星にいのりのみ人のおもひをそらにするなり。(仲正)
 ●木のまこそはやわけぬらめ明星の山のはたかく光さえる。(光俊)
 ●くるまにいでそふほしの敷しらすいやましにのみなる思哉。(爲家)
 ●日暮るれば山のはいづる夕つよのほとは

見ゆれどはるけきやなぞ。(虫寄)
 ●うらやましたれなみ空のよばひ星くられ
 ばいで、ひかりまららん。(爲忠)
 ●うき木あれば星にも人はあひにけり想ち
 にかよふことのはもがな。(俊成)
 ●手にとらば手にとりつべき浮雲のたまま
 に高きほしのかげ哉。(定信)
 ●すかし見て星にさびしき柳かな。(李流)
 ●明星やしめ野の昔天子集にぞなく。(白雄)
 ●こゝかしこ蛙なく江の星の敷。(其角)
 ●明星は乞食もみるか雪の上。(風雲)
 ●闇の夜も又おもしろや水の星。(鬼貫)
 ●大空に月しうかれて見ゆるなりそばには
 星のはやしたつれば。(炭方)
 ●雨つよきつきの時代時給さへきらめく
 星にはげかゝる雪。(岸渡子)
 ●よみやすき文か雁のかへり點句をきり
 星の見ゆる曉。(光)
 ●なゝのかすそるふ破軍のけんといけん竹の
 はやしし星のはやしし。(宇波盛)
 ●仰ぎみて天文とやかんがへん是し砂糖
 の大白のほし。(中吉)
 ●ほしなりと人のうたがひうけるとも空の
 みにほくらきことなし。(喜丸)
 ●春の月弓張にかへるかりまたは北斗の星
 やめあてなるらん。(満水)
 ●送かたの狐火の如見る星の落つれば是も
 石と化しなん。(音清)
 ●地に落ちて苦むす石となりかねんさびの
 みえざる金銀の星。(浦風)
 ●星を見て飛んで見やれと親鬼。(川柳)
 ●すよみ台また始まつた星の論。(同)
 ●むつかしい星におくさま御あたり。(同)
 ●松の内七つの星をよくおぼえ。(同)
 ●北辰の手前もはぢよ夜道星。(同)
 ●間のわるき唐崎へ来て星がふり。(同)
 ●星一つ減つた夜に召す桂姫。(同)
 ●星が目について異見を空にさき。(同)
 ●大原しづはら八瀬の里、柴めさわか露ふ
 みわけて、十でとしからちらめく星かす
 く、あかつきの明星が、西へちろり、東
 へちろり。(俗語)
 ●星を戴いて出づ。(俚語)
 ●雨夜の星。(同)
 ●二月十二日天昏浩。一星東奔南有光。
 林木盡明禽驚起。殘尾曳素丈餘長。星平

の色。
 ●牡丹は花の富貴なるものにして富貴を人
 の好まぬはなし。三人のいき過は甚にくし
 といへども、世のため人の爲に富貴ならば、
 福運に心懸、鬼に憤辱にして、晨朝に乞
 食もし給ふまじ。まして子路が妻の、この
 かみのやつかひにも成るまじ。五百の羅漢
 の腹をふくらし、三十にかゝり物もかけず、
 顔回ひとり仕合ならん。不義而富貴、於
 『我如浮雲』といへる孔子ならでも、誰も誰
 もあやふし、富貴なる人はお尻の塵をと
 り、御尤めかすれども、陰には畜生とな
 らでは人いはず。和漢ともに妬しとおもふ
 心はかはらず。儒佛の甚にくめるも、よき
 ころに推量して、だまされぬこそかしこけ
 れ。(許六)
 ●まづ僧坊におりみて、見出したれば、前
 に横結ひわたして、まだ何とも知らぬ草ど
 も、しげき中に、牡丹草どもいとなきけな
 げにて、花散りはてゝ立てるを見るにも、
 前ゆるうへはとよといふ事をかへし覺えつ
 ゝ、いと悲し。(道綱母)
 ●獅子團亂旋の舞樂のみぎん、牡丹の花房
 にほひ満ち、たいきんりきんの獅子
 にははくらきことなし。
 ●春の月弓張にかへるかりまたは北斗の星
 やめあてなるらん。
 ●送かたの狐火の如見る星の落つれば是も
 石と化しなん。
 ●地に落ちて苦むす石となりかねんさびの
 みえざる金銀の星。
 ●星を見て飛んで見やれと親鬼。
 ●すよみ台また始まつた星の論。
 ●むつかしい星におくさま御あたり。
 ●松の内七つの星をよくおぼえ。
 ●北辰の手前もはぢよ夜道星。
 ●間のわるき唐崎へ来て星がふり。
 ●星一つ減つた夜に召す桂姫。
 ●星が目について異見を空にさき。
 ●大原しづはら八瀬の里、柴めさわか露ふ
 みわけて、十でとしからちらめく星かす
 く、あかつきの明星が、西へちろり、東
 へちろり。
 ●星を戴いて出づ。
 ●雨夜の星。
 ●二月十二日天昏浩。一星東奔南有光。
 林木盡明禽驚起。殘尾曳素丈餘長。星平

星乎何所舍。突如其來其占園。吁嗟星乎
 星乎尙且無所舍。何況下土之措大。屋盛
 焚落盡。風淅而驚臥。朝復朝。夜復夜。
 (星賦)
 ●衆星如白石。繁網列蒼髮。過雨光偏
 爽。出雲色轉新。少微悲處士。大史奏
 賢人。邈矣無爲化。至今拱北辰。(鳩巢)
 ●楊柳池塘表裏青。魚兒眼眼長。蜻蜒。夜
 來雨過昌蒲靜。倒浸中天四五星。(如璧)
 ●水似晴天天似水。兩重星點碧琉璃。
 (李沙)
 ●遠從南斗外。遙望列星文。(蘇味道)
 ●星臨萬戶一動。月傍九霄多。(杜甫)
 ●星隨平野潤。日湧大江流。(同)
 ●稀星點銀燭。落月墮金環。(白居易)
 ●憶君倚夜欄。衆星影茫茫。(佛山)
 ●寒星無散傍船明。(秦觀)
 ●春星落萬家。(謝茂秦)

草、笛のこゝろ、難題の、太鼓の音迄も揚
 羽の蝶、飛び連れ、拍子に浮かれては、
 たはれ、獅子の舞に、よつと顔出す甲賀
 の四郎、後にもちらりと作太夫、見合す蝶
 の三人が、羽にくるめてちら、打
 てや蝶せや牡丹ぼ、くわうきんのす
 め顯れて、花に戯れ枝に臥す、奮迅自在の獅
 子頭、脱いで二人が小獅子の働、肩にたち
 舞ふ扇の拍子、牡丹の花笠花やかなりし次
 第なり。(浄瑠璃、箱物語)
 ●あなたの好の花鳥、夜の間にあだに見捨
 てんより、卒とて夫婦打連れて、見廻す花
 の雨覆ひ、さながら雛の殿作り、手燭に照
 す色々は、枝々爛々と咲く中にも、是なう
 お婆々、是は去年の取木にて名も高き屋
 に、劣らぬ色をそめい山、此方の花壇は三
 國一富士や、淺間と花の素顔は較ぶれど、
 白き司は此雛鶴、二葉の松葉姫松紅、花し
 春夏を、隔て、咲くや清見が關、霞が關も
 開き初め、土地しろくと三かの原、湧き
 て流るゝ布引や、落ちねど餘所に響の灘、
 空の星さへ此花に、愛で、向ふか北斗紅、
 名残のやそじやよの霜、夜は抱て男の袖の
 内、夕日見返り辰の市、寫し繪たくみの天が

下、紅白美容を争ひて、富貴の名とる深見草、見れば心の富貴ぞと、花に酔ふ延ばへけり。
 ●草の名のはつかにいづる日影にもくれなひ白ふ露の花ぶき。(通綱)
 ●咲きにけり何ぞは色の深み草さらでも人の花になる世を。(頼阿)
 ●うつせみの世にさき出でし花ぞとはかけても見えぬ深見草哉。(夢宅)
 ●たきしものから木のまぜを八重ゆひて花も宮みたる殿作りせり。(諸平)
 ●色も香もあかねのから野に山にさかぬ恨の深見草哉。(名垂)
 ●大君のなをしもおへる花見ればうべも世に似ぬ色香なりけり。(春海)
 ●夢にだに見ゆるもの顔よ人おしかげにほふ深見草哉。(有功)
 ●蓮生の露しひとつのふかみ草げに草の月になしき色哉。(定信)
 ●けき見れば夜の小雨にそぼわれていとよほへる深見草哉。(幸文)
 ●一花し折るはあたらし深見草枝ながら、そ見るべかりけれ。(常採)
 ●なとり子の笠並べたる牡丹哉。(支考)

●西東六條殿の牡丹かな。(許六)
 ●あるが中に物静なり白牡丹。(旨原)
 ●花暮れて月を抱けり白牡丹。(曉齋)
 ●園廣し黄なるも交る牡丹哉。(召波)
 ●牡丹葉深く出づる蜂の名残哉。(芭蕉)
 ●眠る蝶夫とも散る牡丹哉。(來山)
 ●古庭にあり来りたる牡丹哉。(風雲)
 ●元信が三十四五の牡丹かな。(大江丸)
 ●上氣ほどおしるいさむる牡丹哉。(杉風)
 ●金屏のかくやくとして牡丹哉。(無村)
 ●十日づゝ春と夏とに咲きわけし花やどちらが色ふかみ草。(赤良)
 ●けふこすばあすは色香もふりぬべし花の口敷もはつゝか草。(東作)
 ●たはれ雄がとなり草なら咲く花に廿日の外のひもしらへかし。(好秋)
 ●ぼたんには鑑てふ名のあなるとて茂れる夏の草下りにさく。(氣成)
 ●おそく散ら散れば牡丹の舞の代や花の玉から玉に誤りて。(歌府)
 ●駒ならばなしや櫻も散りぬべしうしに牡丹のりかへてみん。(清見)
 ●智者いしやの中に牡丹のふく者なら先一ばんに近づきてみん。(春琳)

●鼠ならちいさかるべき二十日草うしにゆかりの花の大きさ。(日里里)
 ●春夏の堺傳受の牡丹花は我も主人にかへてやさく。(袖慶)
 ●腹はどくこれはみるさへ目のくすり牡丹の花にてふはとまれど。(糸女)
 ●五里七里人もみにこよ寺の庭くりまでつよく牡丹畑な。(方丸)
 ●牡丹見る人に頼んで納め針。(川柳)
 ●冷症で二十日ほど喰ふ冬牡丹。(同)
 ●牡丹花に二度降る雨の物静か。(同)
 ●獅子と蝶二十日あまりは中のよき。(同)
 ●春十日夏へ十日の花美なり。(同)
 ●牡丹一本を二人の子に泣かれ。(同)
 ●牡丹がちると忠兵衛は二分残り。(同)
 ●手牡丹の花火二十日の間にちり。(同)
 ●たけき身にしも心のやさし。君が園生の牡丹になれて、おのが富貴の花とのみ、めぐる姿はにくからぬ、瀧のしらべの音へて、おつる白玉千代のかず。(俗談)
 ●假そめの、ゆめも浮寝のあだまくら、むすぶちきりは深見草、花にたはるゝ越後獅子。(同)

●たぐひなき花の色に、心うつすこの君、うつなき思ひこそ、いとよなほも深見草。(同)
 ●牡丹の睡猫。(俚談)
 ●牡丹にから獅子。(同)
 ●牡丹芳。牡丹芳。黄金葉紅玉房。千片赤芙蓉爛爛。百枝綠點燈煌煌。照地初開錦繡段。宮風不結蘭麝。仙人琪樹白無色。王母桃花小不香。曉露輕盈汎紫艷。朝陽照耀生紅光。紅紫二色間深淺。向背萬態隨低昂。映葉多情隱羞面。臥叢無力含醉粧。低嬌笑容疑掩口。凝思怨人如斷腸。穠姿貴彩信奇絕。雜卉亂花無比方。石竹金錢何細碎。芙蓉芍藥苦尋常。遠使王公與朝士。遊花冠蓋日相望。庫車軟響發公主。香衫細馬蒙家耶。衛公宅靜閉東院。西明寺深開北廊。戲蝶雙舞看人久。殘鶯一聲春日長。共愁日照芳難虛駐。仍張羅幕重陰涼。花開花落二十日。一城之人皆若狂。三代以還文勝質。人心重華不重實。重華直至牡丹芳。其來有漸非今日。元和天子愛農桑。邸下勳天降祥。去歲嘉禾生九穗。田中寂寞無人至。今年瑞麥分兩歧。君心獨喜無人知。

無入知。可歎息。我願暫求造化力。滅却牡丹妖艷色。少迴卿士愛花心。同似吾君愛稼穡。(白居易)
 ●似共東風別有因。絳羅高捲不勝春。若教解語應傾國。任是無情也動人。芍藥與君為近侍。芙蓉何處避芳塵。可憐輕合功成後。幸逐穠華過此身。(羅隱)
 ●春淺長安富貴家。重欄曲雪暎黏沙。夜來一雨纔回暖。木末東風已綻芽。指甲染成含紫液。乳房露出帶丹霞。豈宜必壓長如此。始知銷閉斗火花。(星塵)
 ●露雨不成點。映空疑有無。時於花上見。的皪走明珠。秀色洗紅粉。暗香生雪膚。黃昏更蕭瑟。頭重欲相扶。(蘇東坡)
 ●奇葩出洛陽。素艷皎如霜。羅幃春光滯。珠簾午影長。梨花留月色。桂子借天香。十五歲家婦。憑欄愧親粧。(白石)
 ●殷紅過露曉來披。恰似傾城含笑時。顏色年光兩不住。春風向汝幾回吹。(淇園)

草際。照書。隔幙。照苦徑。點沙庭。みだれとぶ。身をこがす。おもひにもゆる。草のぼる。玉とみだる。川下りゆく。風にみだる。袖につくむ。夜をしる虫。●小野には、いと深くしげりたる青葉の山に對ひて、まぎるゝ事なく、遺水の聲ばかりを、音おほゆるなぐさめにてながめ居たまへるに、例のはるかに見やらるゝ谷の軒端より、さき心ことに追ひて、いと多くともしたる火の、のどかならぬひかりを見るとて、尼君たちもはしに出で居たり。(紫式部)
 ●五月ばかり夕闇の程、庭の遺水のほとりに、盛茂く飛びまがひたるは、いはん方なくをかし。わらべのおりて走りありきつゝ、扇してかき落して、薄き物覆へる少なき籠に、多くいれてもたるが、すきて見ゆる光も、いと涼しげなり。此物なからましかば、月なき比の夏の夜、いかに物むつかしからまし。かばかりなつかしき光を、あしき神のたとへにし、いはれける事よ。

●螢はたぐふものなく、景物の最上たるべし。水に飛び交ひ草にすたく。五月の闇はたゞ此の物のためにやとまで覚ゆる。しかるに竹の學者に取られて油火の代にせられたるは、此のものゝ本意にはあらずべし。歌に螢火とよませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。
(也右)

●もし夜しづかなれば、螢の月に古人なしのび、螢の聲に袖をうるほす。草むらの螢は、とほく眞木の鳥のかより火にまがび、曉の雨は、おのづから木の葉吹く風に似たり。
(長明)

●八橋や三河の水の底ひなく、契りし人々のかすゝに、名をかへ品を代へて、人待つ女、物やみ、玉すだれの、光も亂れて飛ぶ螢の、螢の上までいぬべくは、秋風吹くと假にあらはれ、衆生濟度の我ぞとは知るや否や。
(詠曲、杜若)

●あら恨めしの心や、人の恨の深くして、憂き音に泣かせ給ふとも、生きて此世にましまさば、水聞き澤邊の螢の影より、光る君とぞ契らん。
(詠曲、葵上)

●去ながら螢は夏のものなるに、今の螢は偽ならん。假へありとも火は燈さじと宣へば、後藤が妻承り、されば螢は、水に隨ひ流れて下り候ゆゑ、都方にも瀬田より宇治は運きとや。川水の果て埋れ澤、秋の螢と古歌にも連れ、光は夏より明なり。今宵お庭に放されて、とぼさぬ螢一つにても候はよ、如何様とも計ひ給へと、螢より實に調の光あざやかにこそ申しけれ。
(淨瑠璃、小栗判官)

●ヤアラとをかしや、天皇の御謀反に組したる、土岐頼貞といふ一方の物頭、矢の一本も射出さず、この齋藤が武勇を、兩戸越に聞き怖ぢして、腹切る程の腹痛物、兩六波羅を敵に持ち、鎌倉殿を亡さんなどゝは、螢火を以て満月の光を消さんとするに同じ。成らぬと及ばぬ事。
(淨瑠璃、大塔宮)

●とまやかたてらさず螢は彦星の進むかへ舟こがかとぞみる。
(重仲)

●夏虫のかけみだるめりさよ涙やしがの唐崎風やふくらん。
(範季)

●難波女がすくもたく火の深き江に上にもえても行く螢哉。
(雅經)

●物思へば澤のほたるもわが身よりあくがれ出づる玉かとぞ見る。
(和泉式部)

●五月雨にさがやの軒の朽ちぬればやがて螢ぞ宿にとびかふ。
(成實)

●こゝろをだに忍ぶとならばゆく螢がると人にしられずも哉。
(枝直)

●ほしさまのあまのいさり火かすそへて空もひとつにとぶ螢哉。
(契沖)

●わさなへの葉末の露のくれそめてちると見ゆるは螢なりけり。
(千藤)

●風さそふしのゝをさゝにちるつゆのなごりおぼえてとぶ螢哉。
(春海)

●なのゝえし朽ちて光はなきものをいかなるくさのなれる螢ぞ。
(有功)

●晝見れば首筋青き螢かな。
(芭蕉)

●すいと行く水際涼し飛ぶ螢。
(牧童)

●狩人の袖のうら道ふ螢かな。
(蕪村)

●むら松や消えんとしては行く螢。
(白雄)

●更け行くや螢地を道ふ町の中。
(曉堂)

●すつと来て袖に入りたる螢哉。
(杉風)

●蚊道火の烟にそれる螢かな。
(許六)

●大螢ゆらりと通りけり。
(一茶)

●鐘の音の消ゆる頃より飛ぶ螢。
(道彦)

●遣り放つ心車に飛ぶ螢。
(鬼貫)

●螢火を窓にあつめて物よむは川邊の草のくされ備者か。
(卯雲)

●夜軍に尻のかより火ふりたてゝおいつまくりつ螢合戦。
(穴主)

●螢とる數もひとふたみそこしによつゆもいつか結びける哉。
(めしもり)

●蚊道火の嘘のふせやと見えにけりたけのよふかにもゆる螢は。
(喜芳)

●とれたかと問へど答も夕まぐれ飛びちがひたる夏蟲のかけ。
(琴成)

●暮るゝよりやくめに火をばともしゆる螢は夜の番太郎か。
(菊永)

●不思議やな風にまたゝく燈火のきえぬと思へば螢にて候。
(貞登)

●數あまた螢の火影うつると野中の清水よるもゆるまん。
(鐘起)

●侶のはなり螢が着るとしまひなり。
(川柳)

●學問のじやまだとはなる一つや。
(同)

●ほたるさへまけて平等院へにげ。
(同)

●一びきの螢で扇す門涼み。
(同)

●螢買つた螢を隔へ持つて行き。
(同)

●扇の芝へ落ちて来る負けはたる。
(同)

●刑鞭のはたる政事に聞はなし。
(同)

●燈心草にもえてる車風が火。
(同)

●ぶ細工も子故の闇のほたる籠。
(同)

●細川でないた螢が世にきこえ。
(同)

●村雨々々暗間を凌ぐ、人目づみの草葉の螢、胸にたく火のたぐへてもゆる、我はきえなん、我は我は消えなんいつかへ。
(俗語)

●思ひみだれて蘆屋の里に、海士のたく火か飛ぶ螢。
(同)

●聲にあらはれなく虫よりも、いはで螢の身をこがす。
(同)

●螢火を以て須彌をやく。
(俚諺)

●螢の功。
(同)

●碧梧含風夜氣清。林塘五月初飛螢。翠屏玉鏡起涼思。一點秋心從此生。方池水深涼雨積。上下輝々風凝碧。幸因一簾卷到華堂。不覺人驚拂玉席。漢宮千門連萬月。夜々燦燦暗中度。光流太液池上波。影落金盤月中露。銀燭茫茫玉漏遲。年々爲爾足愁思。長門怨妾不成寐。團扇美人頭賦詩。避暑風廊人語悄。剛下撲來羅扇小。已投幽室夜分明。更伴殘星天未曉。君不見連昌宮殿洛陽西。破瓦頽垣今古悲。

●荒村鹿草無人迹。只有秋來熠燿飛。
(張耒)

●暗飛幾點隔藤欄。影亂繁星度遠空。莫入班姬金閣裡。滿耳空歌不聽君。
(朱受新)

●葉間疑似露。日暮尚依稀。帶雨初懸竹。隨風潛點衣。明珠垂水麗。銀燭隔牆微。莫傍玉階月。偏臨長信飛。
(徂徠)

●水殿四風玉戶開。飛光千點去還來。無風無月長門夜。偏向階前照綠苔。
(羅鄴)

●柳外流光照水清。無風無月夜三更。一螢忽被垂條觸。誤墜波心滅復明。
(韓偓)

●明々仍在、誰追月光於屋上。皓々不消、豈積雪片於床頭。
(紀納言)

●山經卷裏疑過岫。海賦篇中似宿流。
(直幹)

●螢火亂飛秋已近。辰星早沒夜初長。
(元稹)

●兼葭水暗螢知夜。楊柳風高雁送秋。
(許渾)

〔ほとけ〕佛

佛陀。浮圖。真如。大覺。金像。妙相。莊嚴。神通。七寶。三十二相。八十隨好。のりの身。みほとけ。なむあみだ。佛のたね。ほとけの國。雪の山人。わしのみ山。みよの佛。ひろきちかひ。ほとけのみ手。三十あまり二つのすがた。

●天喜三年、十月十三日の夜のゆめに、居たる所の嵐のつまの庭に阿彌陀佛たち給へり。さだかには見え給はず。霧一重へだされるやうに透きて見えたまふを、せめてたまに見奉れば、蓮花の座の、つちをわがりたる、高さ三四尺、佛の御たけ六尺ばかりにて、金色にひかりかややき給ひて、御手片つ方をばひろげたるやうに、いま片つ方にははぬんを作り給ひたるを、こと人の目には見つけ奉らず。我一人見奉りて、さすがにいみじくおそろしければ、簾のもと近くよりても見え奉らば、佛さばこのだひはかへりて後、むかへに來んと給ふ聲、我

耳ひとつに聞き居て、人はえ聞きつけずと見るに、うち驚きたれば十四日なり。

●八つになりし年、父に問うていはく、佛はいかなるものにか候ふらんといふ。父がいはく、佛には人のなりたるなりと。またとふ。人はなにして、佛にはなり候ふやらんと。父また、佛のなしへによりてなるなりとこたふ。またとふ。なしへ候ひけるほとけをば、何がなしへ候ひけると。またこたふ。それもさきのほとけのなしへによりてなり給ふなりと。又とふ。そのなしへはじめ候ひける第一のほとけは、いかなる佛にか候ひけるといふ時、父、そらよりやふりけん、土よりやわきけんといひてわらふ。とひつめられて、えこたへすなり侍りつと、諸人にかたりて興じき。(兼好) ●抑われらば無上念王のそのかみ、彼國の黎民などにて、縁をむすび奉りけるにや、すぶるに彌陀佛の頼もしく哀く覺え侍る。なげきの我かなしびの戸ぼそにも、かこつかたとては、此佛の御名をととなへ奉り、戀慕哀傷のたぐひ、貧窮孤獨のすみか、廣野燈きえて、秋風ひとりすまじきやか

らまで、たゞ頼む方とては、此御佛のみなり。(西行)

●西なる僧坊の、人も住まずあれたるに、月を見出したるに、思ひのこす事なし。いたく破れたるそり橋、たどるく渡りて、堂のもとに行きたれば、皆あけて人もなし。月のかげに見れば、皆金色の佛見え給ふ。哀なりとは世のつねなり。(定頼) ●佛も下駄もおなじ木のされと、例の一体のまめしに逢ひて、はじめて輪廻の鼻緒はきれてん。(也有) ●笙歌はるかに聞ゆ、孤雲の上なれや、聖衆來迎す、落日の前とかや。昔在靈山の、御名は法華一佛、今四方の彌陀如來、慈眼視衆生顯はれて、娑婆示現觀世音、三世利益同一體、有難や、我等が爲の悲願なり。若我成佛の、光を受くる世の人の、我力には行き難き、御法の御舟の水調神、さよでも渡る、彼の岸に、至りく樂を、極むる國の道なれや。十悪八邪の、迷の雲も空晴れ、眞如の月の四方も、こゝを去る事遠からず。唯心の淨土とは、此誓願寺を拜むなり。(諺曲、誓願寺) ●一人なほ、佛の御名を尋ね見ん。おのお

のかへる法の場、知るも知らぬも心ひく、野の綱にもるべきや。しる人もしらぬ人も渡さばや。彼國へゆく法の船、浮ぶも安き道とかや。(諺曲、實盛) ●これにつけても後の世を、願ふぞ誠なりける。砂を塔とかされて、黄金のはだへ、まやかに、花を佛に手向けつ、さとり道のに入らうよ。(諺曲、卒都婆小町) ●百年の榮耀は風の前のとし火、情れば我も佛なり。如願菩提とあきらめて、加藤左衛門の財繁氏入道、菊道心と名を改め、佛法修行の山坂を、たどるも後世の便りかや。(淨瑠璃、菊道) ●さとりえし心の月のあらはれて、驚の高根にすむにぞありける。(西行) ●驚の山月を入りぬとみる人はくらきにまよふ心なりけり。(覺性) ●世の中は皆佛なりおしなべて何れの物とわくぞはかなき。(花山院) ●世をてらす佛のしるしありければまだ燈火もさえぬなりけり。(覺忠) ●はかなくぞみよの佛と思ひけるわが身一つにありとしらすて。(教長) ●照すなる三世の佛の朝日にはふるゆきよ

りも罪やきゆるん。(覺性) ●うき時は親だに子をばすつるなる佛しなくばたれたるまん。(契沖) ●わしのみ山さよけてしめり花のかは又うへもなき峯のはる風。(蒲蓮) ●上もなきすがたにだにも殘さずは佛を末のよにはしらしな。(蒲蓮) ●天の下しづまる道もふたつなきのりをひるめし思ふぞ思ふ。(同) ●たぐひなきかをりをよにつたへよと御法の花やひらけそめけん。(春海) ●夢めしを母にはかせて佛生會。(其角) ●死花をばつと咲せる佛かな。(一茶) ●佛には佛がなつて涅槃かな。(完來) ●寒食や其日にあたる佛だち。(立吟) ●散る芥子の中に生るゝ佛かな。(青蘿) ●卯月八日死んで生るゝ子は佛。(蕪村) ●五香水佛の膳を見つけけり。(夢光) ●から獅子のかほで佛の別れかな。(李由) ●お佛に花物言はぬ別れかな。(白兒) ●紅梅を今日の佛に折りにけり。(道彦) ●うらばんに佛のいともくるくといふも思ふも虚空法界。(相宥) ●郭公咽よりいまたちごころもなくて生る

うけふの御ほとけ。(岸賴) ●黒髪をおろし大根のりの道佛のそばや近づきゆるん。(東作) ●此年ではじめて御にかゝるとはみだにむかひて申しわけなし。(慶紀道) ●蓮の葉に置きにし露の玉祭世々の佛に水手向けばや。(半四郎) ●すとりて夫からとなふ御佛の恵につみはちりほどもなし。(廣住) ●みほとけのおます嵯峨野は朝露のつるつる上る水引の花。(香保留) ●釋迦摩羅尊きなしへをめのまへにしらぬがぼんの佛なりけり。(杣人) ●あみだ佛南無あみだ佛みだぶつとぶつぶつみななみなとなふなり。(折芳) ●彼岸櫻咲ぬる花を目の佛見てたのしむし淨土なるべし。(蒲永) ●あな尊と生れながらに何もかもしつた太子と申す御佛。(下道) ●生れさせ給ふ水子にはごる世を頼て行ひすます御佛。(一九) ●佛にも木性金性京と奈良。(川柳) ●大佛は見るものにして尊ます。(同) ●極樂の道をしらぬがほとけなり。(同)

- 竹の根をほるとは釋迦し仲人口。(同)
- 大佛のほのまぬらぬ世のたすけ。(同)
- 大佛も元いる事で出来給ふ。(同)
- おしやかさま生れ落ちるとみそをあげ。(同)
- またしても前の佛で小さいかひ。(同)
- いや高きめぐみに何か上野山、花と戀とににくまれて、ほんにく、ほんにくになにあふすが、練つきばんさま、見よや濁世の、やぼすらに、しめさん爲に、御佛のわれありがたき御姿、なかばは花にかくれます。(俗語)
- 法華が佛になれば牛の糞が味噌になる。(俚語)
- 石佛も物を云ふ。(同)
- 佛も原は凡夫なり。(同)
- 佛はつとけ神構うな。(同)
- 佛の面に糞を塗る。(同)
- 知らぬが佛。(同)
- 佛造つて魂入れぬ。(同)
- 地獄で佛。(同)
- 佛の飯も三度。(同)
- 夫佛木夷狄之人。與中國言語不通。衣

服殊製、口不言先王之法言、身不服先王之法服、不知君臣之義父子之情。假其身至令尚在、奉其國命、來朝京師、陛下容而接之、不過宜政一見、禮資一設、賜衣一襲、衛而出之於境、不令令惑衆也。況其身死已久。枯朽之骨、肉骸之餘、豈宜入宮禁。

●國開兜率在西。西方。號作中天淨梵王。妙相端居金色界。神通大放玉毫光。開淨壇水心無染。優鉢曇花體自香。率土蒼生皈仰久。茫茫苦海泛慈航。(願禮庵)

●彌陀身光如金山。相好光明照十方。唯有金佛聚光攝。當知本願最爲強。六方如來舒舌証。專稱名號至西方。到彼華開開妙法。十地願行自然彰。(善導)

●星夜朗然成道秋。阿僧祇劫果何修。稱尊呼佛皆名句。只是西天一比丘。(星屋)

●龍眉袖手出巖阿。及至拈花事已訖。千古雲山下路。杖藜無處避藤蘿。(完顏瑋)

●玉蓮水開。銀花樹落。惟聖降神。拯彼沈淪。(梁簡文帝)

●香火一爐燈一盞。白頭長禮佛名經。(白居易)

〔ほととぎす〕杜宇
子規。蜀魂。郭公。一聲。夢斷。夜聽。叫破。啼血。思歸。蜀天子。千萬恨。萬古怨。不如歸。なのる。よたどなく。なきかはす。さよの一聲。しのびねの聲。雲路にむせぶ。よなれぬ。深山にかへる。ねざめてきく。よそ

●郭公は花橋に宿りてなく物のやうにぞ。昔より歌にもよみける。されど此木ありても、たやすくはきなからず。我宿をしも過ぎがてにといひけん、こそうちやましけれ。

一聲だにとまでど、更にかすかなるをもしえわが、口をしさに思ふやう、此鳥は山杜宇といへば、深き山里の世離れたる所にこそと、同じ心の友だち打つれ、岩のかけ道踏みならし、尋ねいるに、日くれれば山殿の小屋に旅寐して、夜一夜今やくと待つに、曉近うなりて、谷の水音もまさるにあはせて、うち出でたる聲のさやかなるは、めづらしくも、あはれにもおぼゆかし。

- 郭公の古歌とも思ひいで、打すしける折しも、村雨の晴間におぼつかなき聲を鳴きすてたる、それかわらぬか、夕晴の空いとたどしき物から、折にあひてまづめづらしく、やがて今宵ははしぬながらにとて、空のみ打まもりつゝなるに、月もやうくさし出で、前栽の若葉の精、いとなまめかしく、雨の名残の露、月にきらめきあへるなど、いとよなき夜のさまなり。かゝる折には、惜むらん初音も、まるともえしのびあへじなど、頼もしく待ち渡るに、いづくともわかず、二聲ばかり鳴きたるは、いとほのかながら、うれしさいはんかたなくん。(真臣)
- さる程に、卯月の末になりければ、時鳥の初音ほのかにも思ひたえたり。人づてにさげば、比企の谷といふ所に、あまた聲なされるを、人さうたりなどいふなきうて、忍音はひきのやつなる時鳥雲井にたかくいつかならん、

きく人ありけるこそ、人わきしけるよと、心づくしに恨めしけれ。(阿佛尼)

●念佛する僧の、曉にぬかつく音の尊く聞ゆれば、戸をおし明けたれば、ほのく明け行く山際、こぐらき楢ども、露わたりに花紅葉のさかりよりも、何となく茂りわたりて、空の気色、くもらはしくをかしきに、時鳥さへ、いと近き木すゑに、あまたうび鳴いたり。(孝標女)

●そも、幾許の、田を作ればか時鳥、四手の田長を朝な、呼ぶと、詠せしもことなり。死出の山田の時鳥、此土に來り聲立て、程時過ぐる世の中の、教へを知る故に、時の鳥とは申すなり。五月山、楢を高み時鳥、鳴く音空なる戀やする。我も戀しき縁兒の、行方も知らで足引の、山路に迷ひ里に出で、國々浦々めぐる日の、積る三年の春過ぎて、夏もはや五月雨の、振分葉の玉かづら、斯かる業はいつか身に、馴衣袖ひぢで、いざ、早苗取らうよ。(謡曲、飛鳥川)

●曲水の宴の有りし時、御土器度々廻り、有明の月更けて、山時鳥誘ひ顔なるに、寂慮を受けて遊樂の、月に鳴け、同じ雲井の

時鳥、天つ空音の萬代までに。(謡曲、采女)

●聲も涼しき夏陰や、糺の森の楢より、初音ふりゆく時鳥、なほ過ぎがてに行きやらで、今一通り村雨の、雲もかげるふたづく日、夏なき水の河隈、汲ますとも影は疎からじ。(謡曲、加茂)

●何事もはかなかりける世の中の、此程は、人目をつむ我宿の、垣ほの薄吹く風の、聲をも立てず忍び音に、泣くのみなりし身なれども、今は誰をかはよかりの、有明月の夜たよとも、何か忍ばん時鳥、名をも隠さで鳴く音かな。(謡曲、清經)

●涙も曇る中空に、若時鳥橋に咲く、櫻の花になちかへり、本尊かけた木尊かけたと告げ渡るは、いと涙の種ならし。照手つくく、聞き給ひ、實に時鳥は冥途の鳥、死出の田長を啼くとかや。彼鳥ならば我も亦、冥途の夫に逢ふべきもの、懐かしやまよしと、少時間き入りおはせしが、ア、能くく思へば、思ふ人を先き立て、何樂みに世を立て、誰に見すべき髪容、姿を換へて一筋に、菩提の道に入るべきぞ。汝も心のあるならば、斯と傳へよ是までと、

わたりの柳笛押明けて、木の剃刀取り出し、みるよきの黒髪を、愛相もなく引き上げて、既に切らんとし給ふ時、時鳥一文字に飛び下り、羽風をたて、剃刀はたと打ち落す。こは如何にと取り上げれば、又立歸り打ち落し、二聲三聲響に鳴き、行衛は月ぞ残りける。
(淨瑠璃、會稽山)

笠の下より降る涙、空に知られぬ五月雨を、折知り顔に郭公、冥途の鳥と聞くからに、悉陀太子に別れにし、しやのく童子が古を、同うて覚えて今こゝに、泣いて知らせよほとぎす、聲する方を眺むれば、富士の烟も横折れて、いでこし野邊のくまぐまに、黄金花吹く螢火は、袖より漏るゝ魂か。
(淨瑠璃、曾我妻富士)

雲より上の一撃や、又二撃や、三撃とだにも啼き捨て、いづち行くらんややや待て、汝と冥途の鳥ならば、死出の山路に聞振みて、先き立つ我子留めよかし。
(淨瑠璃、會稽山)

ほとぎす語らふ聲をさししよりあしのしの嵐にいこせられね。
(龍因)

いかにせんこねよあまたの郭公またじと思へば村雨の空。
(家隆)

●我にたよなきてきかせよ郭公しのびねならば人にかたらし。
(辨内侍)

●昔思ふ草のいほりの夜の雨に涙なそへそ山郭公。
(俊成)

●なかねよもなくよも更に郭公まつとてやすくいやはねらる。
(赤染)

●むらさめのすぐるみ空の雲のあしにおくれ先だつほとぎす哉。
(子蔭)

●妹とわが二人きかんの一聲をたたくもなしむ郭公哉。
(秋樹)

●人なみにまつとも我をとひはこじ尋ねてきかん山郭公。
(蘆庵)

●峯のいほにこことひすて、郭公ふもとのくもに又名のるなり。
(春海)

●研なれど行くへまだかに郭公とほざかりゆくこゝみの一すぢ。
(言道)

●郭公なくや雲雀と十文字。
(去來)

●屋々や下馬の折ふし時鳥。
(其角)

●残るもの銚子燭臺ほとぎす。
(野坡)

●鞘走る友切丸や杜宇。
(蕪村)

●杜宇なくや近江の西東。
(召波)

●室の津や千聲なきこす杜宇。
(剛史)

●杜宇未だ俳諧のなき世かな。
(芭蕉)

●時鳥聞けば座頭の根付かな。
(嵐雪)

●提灯の空にせんなし子規。
(杉風)

●啼かぬ間に空一ぱいの時鳥。
(丈草)

●雲枕花の氣さむる時鳥。
(鬼貫)

●ふみゆけば月もすむよの中空にゆめともきかねはつ郭公。
(無錢法師)

●十分にかけたか船のほとぎす三浦の風に聲の落ち来る。
(師賢)

●ほとぎすまじし心に汲みかへて井もみな月のしわがれし聲。
(馬貫)

●いづれまけいづれかつなと郭公ともににつねの高うきこゆる。
(橘洲)

●岩くらにたんとしこみし時鳥はつねを高くふり出でなく。
(萬葉亭)

●ふる小袖ときほとぎす洗濯のたらのひのたがもかけたかと鳴く。
(桑つみ)

●ほとぎすとつて置かかと山姥が山ふところのおくもたづねん。
(杉丸)

●たづねいれどきかてむなしう歸れるはなしや寶の山ほとぎす。
(世襲)

●いづこぞと聞けば雲井に遠からず二四八條と鳴く郭公。
(加波澄)

●郭公鳴きつる方は月よりも今一聲をほしとおもへり。
(讀人不知)

●鶯の恩は谷より深くして山より高く鳴く

郭公。
(同)

●夏の夜は時鳥にぞくちはるゝ蚊屋にも入らで待つとせし間に。
(貞徳)

●かしましや此里過ぎよほとぎすと思ふ程に一度ききたや。
(貞柳)

●當年の茶を煮るうへを郭公。
(川柳)

●ほとぎす月をも見せず敵は取り。
(同)

●北野では義理づめで鳴く時鳥。
(同)

●よしきりに地をうたはせてほとぎす。
(同)

●光陰の一暮すぎてほとぎす。
(同)

●人宿でまだ聞いて居るほとぎす。
(同)

●ほとぎす有明たどんのこつてる。
(同)

●初がつな山ほとぎす敵の魂。
(同)

●時鳥二十六年は案じませ。
(同)

●一聲は唯有明の月ばかり。
(同)

●一聲に御親水の御手がなり。
(同)

●明六つはあたまの上を啼いて行き。
(同)

●見たやあひたや山時鳥、すがたならすば聲ばかり、すがたならすば聲ばかり。
(同)

●そらになくねは皆うそ鳥よ、闇のうらゝ時鳥。
(同)

●君は今頃駒形あたり、鳴いておかせし山時鳥、月のかほみりや思ひだす。
(同)

●涙くらべん山時鳥、我もうき世のつらければ。
(同)

●竹の口説のしらけたあとを、泣いて通るや時鳥。
(同)

●時鳥は八千八聲啼けば血を吐いて死ぬ。
(俚諺)

●昔聞昔有つ天子。化作冤禽名杜宇。一身流落國故郷。萬里迷入訴離苦。西來縱呼巫峽間。楚臺花落春春開。臺中夢魂久寂寞。行雲日暮愁空山。明朝復向瀟湘發。北叫蒼梧。江竹裂。竹上之淚花上血。怨入東風。恨不滅。天涯無窮朝暮啼。玉孫草絲不。思歸。哀哉王孫終不歸。江南江北楊花飛。
(李坦)

●楚天空濶月成輪。切魄聲々似告人。啼得血流無用處。不如絨口過春春。
(杜荀鶴)

●花愁月恨只長啼。兩夕風晨不住飛。白出鈴江歸未得。至今猶勸別人歸。

●野人自愛山中宿。況是菖蒲井井西。庭前有箇長松樹。夜半子規來上啼。
(顧況)

●楚雲餘春聽漸稀。斷猿今夕淚沾衣。雲埋老樹空山裡。彷彿子聲一度飛。
(寶常)

●暮春滴血一聲々。花落年々不忍聽。帶月莫啼江畔樹。酒醒游子離離亭。
(李中)

●空山初夜子規鳴。靜對琴書百慮清。喚得形神兩超越。不知底是斷腸聲。
(朱彥)

●輕烟終日鎖樓臺。細雨絲絲半濕苔。杜宇一聲青嶂外。溪流時送落花來。
(高翥)

●白雲流水淨含沙。傍水斜陽三兩家。一夜山中寒食雨。杜鵑啼落刺桐花。
(謝肇淛)

●十二峰頭月欲低。空船離上子規啼。孤舟一夜東歸客。沈向春風憶建溪。
(李涉)

●友風子雨易銷魂。滿院蒼苔掩門。殘夢驚回春寂々。一鵲啼度落花村。
(星廣)

●一聲山鳥響雲外。萬點水螢秋草中。
(許渾)

〔ほね〕骨

白骨。骸骨。欄腰。朽骨。亡骨。埋骨。粉骨。かばね。くち残る。されこうへ。くさむすかばね。

●されども貞能は、西八條の燒跡に大葬引かせ、一夜宿したりけれども、歸り入らせ給ふ平家の公達、一人もおはせざりければ、さすが世の有様心うくや思ひけん、源氏の駒の蹄にかゝらせじとて、小松殿の御墓掘らせ、御骨に向ひ奉りて、泣く／＼申しけるは、あなあさまし、御一門の御はて御覽候へ。生あるものは必滅す。樂つきて悲來るといふ事をば、昔よりかきおきたる事にて候へども、まのあたりかゝる憂き事候はず。君はかゝるべかりける事をかねてさとらせ給ひて、佛神三寶に御祈誓ありて、御世を早うせさせまし／＼けることこそ、ありがたう候へ、いかにもして其時、貞能も、後世の御供仕るべう候ひしものを、かひなき命ながらへて、今日かゝる憂き目にあひ候事こそ口惜しう候へ。死期の時

は、必一佛土へ迎へさせ給へと、泣く／＼途に掻きくどき、骨をば高野山へおくり、あたるの土をば賀茂川へ流させ、行末頼もしからずや思ひけん、主と後合に、東國の方へぞ落ちゆきける。(平家物語)

●あはれ故大膳入道は士を養ひ、武を講ぜし事二十餘年、人を殺し地を辟きしこと五六州、されば自天下定むるにたらずと思はれしに、身死し骨いまだ冷かならざるに、國破れ、家滅ぶるに至りては、年比思にほこり、功をたのみし家の子郎等ら、強きものは、君父にそむきて後矢を射、弱きたぐひは妻子を携へて逃げかくれ、此日天正十年三月十三日、四郎と共に死したりし侍雜人僧童都合機に四十四人。(白石) ●蛇穴のほとりに赴きてつら／＼と是を見るに、白蛇は火攻の苦にやたへざりけん、穴より半身を出しつゝ、遺る隅なく焼け亡せたる、その白骨兩骸あり、頭骨の大きなこと、板挽白にもまさりつべし。この餘小蛇の骨多かり。さればこの爲體に、親るものみのけいよだつまでに、駭嘆せずといふことなし。(馬琴) ●むなしく北邙の露ときえぬる夕は、むつ

まじかりし妻子、去りがたかりし親子も、かゝへもたんといふ事や侍らん。只いそぎて野邊におくり、薪につみて、一片の煙にたくべきは、むなしくよきぎる雲ばかりをうらみ、朝に行いて、別れし野邊をみれば、あさちが原の秋風の身にしみて、僅に名残と見ゆるは、形もなき白骨なり。(西行)

●南隣にも哭し北里にも哭す。人をおくる涙いまだつきず。山下にもそひ、原の上にもそふ。骨をうづむ土、かわくことなし。(存慶) ●悲しきかなや、形をもとむれば、昔底が朽骨、見ゆるもの今は更になし。さて其聲を尋ねれば、草徑が亡骨となつて、答ふるものも更になし。三世十方の佛陀の聖衆も、あはれむ心あるならば、亡魂幽靈もさこそうれしとおもふべき。(謡曲、朝長) ●白刃骨を砕く苦眼晴を破り、江波楫を流す粧、胡蝶に殘月を亂す。(謡曲、兼平) ●それ朝に紅顔あつて、世路にはこるといへども、夕には白骨となりて郊外に朽ちぬ。(謡曲、朝長)

●我こそ土岐が女房早咲と申す者、耻しや情なや。數ならぬ我夫の魂を、士と御覽じ付けての御頼は、名の譽身の大度、殊に白らは若宮の御母后、三位様の御慈悲にて命を助かり、御殿約にて夫婦となりし頼貞、骨を粉にはたかれ、屍を漆に曝せばとて、そもやそも二心のあるべきか。(浄瑠璃、大塔宮)

●長歌やがて油壺包取り出し押開けば、笑めがが如き圓懐、夢に知らせし父の骨は是なるかと、御前を打忘れ、肌添へ顔に當て、前後不覺に見えにけるが、實にや弓取は白骨に成つてし、其功を願す事は、同じ筋骨受けながら、何連父に劣りしぞ。譬へは恐れ多けれども、佛は腐爛の煙の下に、三石六斗の骨となつて、三回に分身し、八恒河沙の迷の衆生を濟度あり。是もこれ弓矢の家の佛舍利ぞや。數萬の軍兵を勵して、武運を守護し給へや。(浄瑠璃、歌軍法)

●骨よりもかへりて骨をなる物はたゞむ病のなりめなりけり。(蘆屋) ●さりともさせる事なきやぶれが骨を折りてぞ君につかへし。(信實)

●山ふかくまことの道に入る時はわが身をわりと骨をなる哉。(光俊)

●世のあやめ見すや菰の欄腰。(嵐雪)

●骸骨の上を纏うて花見哉。(鬼貫)

●骨拾ふ人に親しき童哉。(蕪村)

●月花も我骨祭る二十日哉。(大江丸)

●みなのやは首の骨こそ甲なれ。(仙花)

●夏瘦の我骨探る曉覺哉。(蓼太)

●老れば骨もなるなり濤團扇。(五明)

●骨をもて作れば和歌の壁美なり。(几童)

●夏瘦のけしきは見えす首の骨。(許六)

●夏まではねせものなりと扇うり殘る暑さにはねや折らん。(染人)

●老ねれど今にかまね腰際子昔つくりないはふ骨ぐみ。(男)

●寝もやらでいたく待つ夜の首の骨かくや契も引ちがへなん。(橋洲)

●人目をばつみかくせど笠蔭のふすまのほねのかみかけし中。(黒蝶)

●たゞきにもなれるうづらの聲のして骨にこたふる秋の夕ぐれ。(輕雲)

●たれんも骨うち祝ふけふのみは猫やむなしくのどならずらん。(百年)

●鬼こもる安達が原に今も猶骨のみえぬる

あばらやもあり。(垂安)

●秋はてゝ君にあふぎのつてもなし骨折ぞんと人やいふらん。(無作登)

●此暮が骨だとみんな鼻をかみ。(川柳)

●薪河岸は上で股野が骨を折り。(同)

●まげをしみ骨と皮との馬を見せ。(同)

●骨つきりかせげと叔父は二貫貸し。(同)

●いゝ男骨を膝でこづかれる。(同)

●白骨になつても歌はやまぬなり。(同)

●骨付の方を尊氏しめておき。(同)

●鳥の骨信濃にきけばすてました。(同)

●野晒のやうにあら煮の魚の骨。(同)

●八瀬の嫁首の骨から先見立て。(同)

●阿鼻大地獄の者は、鉄石をたつ事一由旬、劍をひつしと植ゑならべ、罪人をおひまはし、岩石脊にゆひつけられて、峯よりどうとつき落さるれば、骨はみぢんにくだかれて、風に木のはの如くなり。(俗語)

●堂塔門院古事古跡、ながみめぐりてそのちには、花にもいたし首の骨。(同)

●骨を舐つて皿におよぶ。(俚談)

●皮の有るうち骨を見よ。(同)

●他人の飯には骨がある。(同)

- 海月も骨に逢ふ。(同)
- 瘦腕にも骨あり。(同)
- 莊子使楚、見空欄、擊以馬柱、而問曰、夫子貪生失理、而爲此乎。將有凍餒之患、而爲此乎。語卒、擲欄、枕而臥。欄見夢曰、夫死無君、於上、無臣、於下、亦無四時之事、與天地爲春秋、雖南面帝王樂不能過也。(莊子)
- 黃沙枯欄。本是桃花面。如今不忍看。當時恨不見。紫風相鼓擊。美日巧笑倩。無脚又無眼。者便成一片。(黃庭堅)
- 自古邊功緣底事。多因孽債欲封侯。不知直與黃金印。惜取沙場萬箇頭。(劉貞父)
- 九日驅馳一日閑。浮君不遇又空還。怪來詩思清人骨。門對寒流雪滿山。(晝應物)
- 是誰喚出白雲端。萬古濃藍色未乾。下有城中賣人骨。夜來風雨漆燈寒。(星塵)
- 君莫話封侯事。一將功成萬骨枯。(曹松)
- 莫笑賤貧誇富貴。共成枯骨兩如何。(白居易)
- 朝有紅顏誇世路。暮爲白骨朽郊。

- 味方の勢は是を見て、打物の鏝木くつろげ、時宗を目がけてかゝりけり。あら物々しやむのれ等よ。先に手並は知るらん物をと、太刀取りなほし。立つたるけしき、ほめぬ人こそなかりけれ。(謡曲、夜討曾我)
- ア、有難しとも嬉し共、申し上ぐる詞なし。平家の中にも小松殿か能登殿かと、一といふて三の無き、文武二道の御大将。數ならぬ下司女に道を立て、取らせうとの海山の御恩徳、夫の名を汚さず、生きての本望死しての聲、いで白も清盛公の御詞のたつ御返事なと、ふところの守刀、するりと抜いて肝先に、ぐつと突立て一くりくつて、申し致経様、あづまやが死ねれば、平家の御意を背くもの此世にない。御意を背くもの無ければ、入道殿の御詞はたつたぞや。(浄瑠璃、平家女護島)
- 惜むべし一味齋、今少し年若くば、三陣攻に一方の大將ともなさんや器量、へそ殘念く、當座の寶美一千石、汝に與へ道はす所、相違なき儀書をば、千々孫々に傳ふべし。(浄瑠璃、彦山権現)
- くるさとりくさしかりつつかへめどいそしきわけとほめんともあらず。(家持)

原 (義孝)

〔ほまれ〕譽

廣譽。名譽。聲譽。毀譽。大譽。褒貶。身後譽。ほめたふも。もてはやす。くちぬほまれ。代々に傳ふ。

●まろが文をかくし給ひける。又猶うれしきことなり。いかに心愛くつらからまし。今よりも猶頼み聞えんなどの給ひて、後に經房の中將、頭辨はいみじう譽め給ふとは知りたりや。一日の文のついでに、ありし事など語り給ふ。思ふ人に譽めらるゝは、いみじく嬉しくなど、まめやかにの給ふもなかし。うれしきをも二つにてこそ、かの譽めたまふなるに、又思ふ人の中に侍りけるをなどいへば、それはめづらしう、今の事のやうにも、よろこび給ふかなとの給ふ。(清少納言)

●知恵と心とこそ、世に勝れる譽もの、こまほしきを、つらく思へば、譽を受するは人の間を喜ぶなり。譽むる人、毀る人共に世にとまらず、傳へきかん人、また

- けふほめて雲井にうつす菊の花天津ほしとやあすよりは見ん。(兼輔)
- ほまれある名をばあふぎて大方は君が心をしらぬなりけり。(秋成)
- 言のはも人の譽しおのづから六つてふかやにあふや何なり。(同)
- 君王の夕立ほめる葉かな。(召波)
- 節分やよい巫女譽める神樂堂。(同)
- 夢ほめて初卯登りの通りけり。(道彦)
- 鞍馬顔見えぬ迄譽めにけり。(太紙)
- 木隠れて名譽の家の織哉。(無村)
- ほめられて針咄ふも哀なり。(藝太)
- 祖父の目に姿を譽めけり風巾。(也有)
- 欠伸して月譽めて居る障かな。(几叢)
- 秋くれば世界の人にほめらるゝ桂男や月の全盛。(孫彦)
- 松魚より女房をほめて鼻をかみ。(川柳)
- しからずにとりなりの嫁をほめておき。(同)
- 譽めらるゝ度も直す花の枝。(同)
- 片うでになつたと譽める刀鍛冶。(同)
- たばこ入譽めて娘は帯へあて。(同)
- 花はほめ葉はじやまに成る明り窓。(同)

く速に去るべし。誰にかはち、誰にか知られんことを願はん。譽は又毀のもとなり。身の後の名残り、更に益なし。これを願ふも次に愚なり。(兼好)

●我身の行の善悪は、世人のほめそしりを、あながちに常にして喜び懼るべからず。たゞ道理をもてつくすべし。わが行は理にかなはば、世こそぞりて毀るとも懼るべからず。わが行道理に背かば、世こそぞりて譽むとも喜ぶべからず。よき人に譽められ、あしき人に毀らるゝこそ君子とはいふべけれ。人ごとにほむる者は、かへりて疑はし。多くは巧にしてかざれる人なるべし。(益軒)

- 祇園の祭水無月の、既に半も杉の村立、林の鐘の音、名に聞けばかり、暮れゆく今日の、祇園の祭の上はあらじと、ほめぬ人こそなかりけれ。(謡曲、無車)
- いにしへ佛御前と申し白拍子は、此國より出でし人なり。都に上り舞女のほまれ世にすぐれ給ひしが、後には故郷なればとて、此國に歸り、終にこゝにて空しくなる、跡のしるしも此草堂の露と消えにし其跡なり。(謡曲、佛原)
- 料理人まはらね舌で譽めらるゝ。(同)
- 風のくる度にとりなりの梅をほめ。(同)
- 引事による息子をやたらほめ。(同)
- 後家さかりだとほめやうもあらうのに。(同)
- 醫者衆も辭世をほめて立たれけり。(同)
- 宗林をほめ、造るかつをうり。(同)
- 佛畫師の名譽を誇す給の具谷。(同)
- こひには八瀬の里音ち、軒の簾の床しさは、玉簾髪をとりあげて、誰に見しよとて夕化粧、わしがきりやうは譽めもせで、姿がよいの生際がよいの、口説に無理ないとりごと、わしほどすぐれた女をば、嫌ふおまへの氣がしれぬ。(俗謡)
- 清き流の水車、くるくると、二巴や三巴、うつや太鼓の拍子とりん、開く扇の舞鶴は、大いぢ大まん大吉日と、馬の乗初号初、上覽ありておのくも、譽を残す富士のまきかり。(同)
- どうもいはれぬ夕まぐれ、ほめられて、何の益なき婆娑世界、すゝもぶすもうちこんで、飲めや唄へや、一寸先は闇の夜。(同)

● 髣髴らんとしりなけれ。(但説)
 ● 髣髴はそしる基。(同)
 ● 古之君子信道也。而自知也。明。其中無缺。萬人毀之。沒如也。其中未至也。萬人譽之。確如也。彼豈以外易内哉。人知之也。未嘗喜人之不知也。未嘗慍其心方師。友乎。賢。而以百世爲旦暮。納集而頌散者。於我何哉。嗚呼。不以毀譽觀人者。吾弗得見之矣。能不變。風於毀譽。於道也。其庶矣乎。(方孝孺)
 ● 沈約。何遜。延年。毀謝莊。清新俱存得。名譽底相傷。(李商隱)
 ● 令聞。譽。施。于。身。所。以。不。顧。人。之。文。極。也。(孟子)
 ● 人有厚德。無問其小节。有大譽。無疵其小故。(淮南子)
 ● 舉世譽之而不加勳。舉世非之而不加沮。(莊子)
 ● 惟我與君堪。便成。莫將。文。譽。作。生。泥。(皮日休)
 ● 江上易。從。游。城。中。多。毀。譽。(白居易)
 ● 放棄樂。餘年。道。惟。身。後。譽。(陶潛)
 ● 不。結。於。譽。不。恐。於。非。(荀子)
 ● 庶幾。夙。夜。以。永。終。譽。(詩經)

まの部

「まくら」枕

長枕。客枕。素枕。角枕。枕上。枕邊。邯鄲。一睡。手枕。かりまくら。つげの枕。夢の枕。まくらの山。枕のちり。ふるき枕。苔の枕。かりねの枕。草枕。たび枕。かはす枕。● 敷妙の枕は床邊の臥具にして、老少男女のいなやすからしめ、勞をたすけ閑をそふる寶器なれど、人つねに目なれて、此徳の基を失らす。もろこしの人も是をいみじと思へるにや、香木をもてけだものゝ形なきざみ、玉をみがき、琥珀をのべて、あしき夢をもさけ侍る。此國の歌人のよみ置き侍りしも猶こちたし。(中略)されば我枕はこれらの品にはあらで、みづから老のするに二つの枕を求めて、座の左右にして愛する事あり。一つは桑の木の間枕なれば、その形によせてお玉と名づけ、今一つは滑なる方石なれば、やがてお岩といふ。むかし近くめ

しまつはせし少女の、それが名をかれるものなり。玉といひしはむつくと肥えて、膚のすべらかなりしかば、をさなき比まり傍にふさせ侍りし、新手枕も忘れがたし。岩はよなく、あたまをせつるに、睡のあらましくて、あかよりのむつかしかりければ、思ひなぞらへていふなるべし。宋司馬文公が圖枕は、學窓にまらばし、長き眠のさめやすくして、讀書にたゆみながらしめんが爲に、孫楚が流を枕せしは、耳を洗はんが爲とかや。下官が愛するはさる心にあらで、桑は中風をふせぎ、石は頭熱をさまたんとなり。唯よく生をやしなふ便なれば、あにいたづらぶしといはんや。或日ひとり友來りて、此二枕をあやしみて猿のつぶりやもたりけんと思ふに、此記をかきてその人に答ふるのみ。(眞室)
 ● めかれせざりつるほどだに、あれまざりつる庭も離れ、ましてと見まはされて、草はしげなる人々の袖の華も、慰めかねたる中にも、侍従、太夫などのあながちうちくづしたるさま、いと心ぐるしければ、さまくらといひこしらへ、闇の中を見れば、昔の枕さへ、さながらかはらぬを見るに、

今更かなしくて、傍にかきつく。とよめおくふるき枕のちりなだにわが立ちさらばたれかはらばん。(阿佛尼)

● 藤原季房も、三日まで口中の食を断らければ、足たゆみ、身疲れて、今はいかなるめに逢ふとも、逃げぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に、うつゝの夢に伏し給ふ。(太平記)

● 御前にいと人すくなにて、うちやすみわたれるに、ひとりのめをさまして、枕をそばだて、よしの風をききたまふに、波たよこゝもとに立ちくる心地して、涙おつとおぼえぬに、枕うくばかりになりけり。(紫式部)

● 是は蜀の國のかたはらに、盧生といへるものなり。われ人間にありながら佛道をも願はず。たゞ性然とあかしくらす處に、楚國のやうひびんに、たつとき知識のまします由、承り及びて候ふ程に、身の一大事をたづねばやと思ひ立ち候ふ。しかく。さて其まくらはいづくに御座候ふぞ。しかく。さらば立ち越え一睡見うするにて候ふ。

しかく。さてはこれなるが、聞き及びにし邯鄲の枕なるかや。是は身をしる門出の、世のこゝろみに夢のつげ、天のあたふる事なるべし。一村雨のあまやどり、日はまだ残る中宿に、かりねの夢を見るやと、邯鄲の枕にふしにけり。(謡曲、邯鄲)
 ● 此程の旅の衣の口もそひて、いく々ぐれの宿ならん。夢も敷そふかり枕、あかしくらして程もなく、都に早く着きにけり。(謡曲、熊野)

● あいとおまゆんが供々に、暫しこの世をかり蒲團、薄き親子の契りやと、枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更け行く鐘も哀そふ。頃しも師走十五夜、月はさゆれど胸の闇、過ぎしわかれのいひかはし、死なば一所と傳兵衛が、忍ぶ姿のしよんぼりと、そむ軒は見覺えの、儘に爰と門の戸へ、さほる相圖の咳拂ひ、聞くにおまゆんは飛び立つ思ひ、上げる枕もうちはづす。(浄瑠璃、河原の逢引)

● 文覺むつくと起き上り、あたりを見廻し、むし聞えたく、邯鄲の枕に五十年の夢を見し、それは唐土是は又、義朝が醍醐を枕にしたる一睡に、平家の滅亡源氏の榮を見

たること、夢にあらす現にあらす。正八幡の告ぞかし。(浄瑠璃、平家女説島)
 ● うたゝねのきのふのひるね思はせてありしところにある枕哉。(言道)
 ● 道しばやおどろのかみにならされて移れるかこそ草枕なれ。(小大君)
 ● 干はやぶるいつきのみやの旅ねにはあふひぞ草の枕なりける。(實方)
 ● みちのくのくりこま山のほゝの木の枕はあれど君がまくら。(説人不知)
 ● 敷妙のまくらせし人こと問へやその枕にはこけおひにけり。(人丸)
 ● ますらをも枕をたかみやすきよにひとりなげきはぬるよともしなし。(爲家)
 ● とこのうへにふるき枕もくちはてまかはらぬ夢ぞ遠ざかりゆく。(定家)
 ● 五月雨に山田のあざのたき枕かすをかさねておつるなりけり。(西行)
 ● あまのかみ玉藻の枕しもとどてわれからさゆるかたしきの袖。(家隆)
 ● 若草のつま屋の枕つくくと見しよの春の夢をしぞ思ふ。(諸平)
 ● 秋しるや養葉も桐の枕より。(也有)
 ● 短夜や枕に近き銀屏風。(無村)

●涼しさに大福餅の枕かな。 (一茶)
 ●ひとつねに僕も朝寝の枕哉。 (白雄)
 ●むし千の目にたつ枕ふたつか。 (文淵)
 ●五月雨や顔も枕もしの木。 (俗水)
 ●春雨や枕くづるうたひ木。 (支考)
 ●木枕の垢や伊吹に残る雪。 (丈草)
 ●寝ぐるしう枕をかへず異哉。 (細石)
 ●音信るゝ時雨や我が病む枕。 (杉風)
 ●から人はいかによほひの長枕七もよとせ。 (橋度)
 ●なまたぎ越しけむ。 (橋度)
 ●我もしらす寝入りしはなのありかなばう。 (風香園)
 ●ちわりてみよこれの木枕。 (風香園)
 ●かんたんに似たる船の帆まくら夢の間。 (田湖)
 ●にさへ五十里もゆく。 (田湖)
 ●金拾ふ夢のなかに落したる枕とる手は。 (茶売坊)
 ●かるさほいなさ。 (茶売坊)
 ●思案にはわるとしいへば智恵ぶくる枕の。 (照海)
 ●中に入りてあるらん。 (照海)
 ●笑しきまぬた枕にかされたる夕の紙しう。 (四成)
 ●ちかへしけり。 (四成)
 ●ふたりねる間の枕は妹と昔の山の連理の。 (砂兄)
 ●木にやつくりし。 (砂兄)
 ●なには江のわしのかり寝の枕こそ名しよ。 (享)
 ●し原といふべかりけれ。 (享)

●背丈をばのびよと親はそばがらないて。 (蝦丸)
 ●なるこの枕とやる。 (蝦丸)
 ●まるといへどしられて耽る事いなし何。 (風々)
 ●なかにつげの木枕。 (風々)
 ●半分は枕へわける五十年。 (川柳)
 ●しのよふの油じみたる長まくら。 (同)
 ●寝かへりの小つぶでいたむ旅まくら。 (同)
 ●ねがひけり枕をうりて五十年。 (同)
 ●鼻氣見舞枕と團扇持つて逃げ。 (同)
 ●留守番に飯と枕を出してやり。 (同)
 ●目の覚めた細工枕で時をうち。 (同)
 ●こがれくで逢ふ今宵、なぜおまへはそ。 (俗語)
 ●のやうに、そむいてひとりねやんすへ、枕。 (俗語)
 ●ばかりがあやしいか。 (俗語)
 ●情氣心か枕な投げそ、投げて枕にとがは。 (同)
 ●よしあらし。 (同)
 ●幾夜ねざめの涙のうせ、なみのうわう。 (同)
 ●ね浮枕、 (同)
 ●残る移香枕にそひて、いと忘れぬねや。 (同)
 ●のうち。 (同)
 ●大は小を兼ねるも長持は枕にならず。 (佷詮)
 ●世間知らずの高枕。 (同)

●後生願は西枕。 (同)
 ●邯鄲夢の枕。 (同)
 ●開元中出翁經邯鄲。有盧生同邸。主人方炊黃粱、翁取一甕中枕、授盧曰、枕此榮適如願、坐臥夢身適一枕穴中、未幾登第、出入將相五十年、其夕卒。遂寤時、呂翁猶在旁、主人黃粱尚未熟也。 (枕中記)
 ●客枕春來歸夢饒、千山萬水路迢々。東風一夜渡蕪湖。綠到南塘第幾橋。 (星巖)
 ●孤館殘燈照獨眠、寒江落木正蕭然。西風遠送終宵雨、併入江聲到枕邊。 (萬虞愷)
 ●帝城春雨響春殘、夜雨愁聽客枕寒。莫入鞦韆一使花、落一枝留待我歸看。 (高啓)
 ●制爲素枕、聊以假仰。撫引應適。永御君子。 (張望)
 ●有美一人、碩大且嚴。寤寐無成、輾轉伏枕。 (詩經)
 ●角枕粲兮。 (同)

●町々は居ながらにして商人のかけねを引いて買ふあやめ草。 (木公亭)
 ●京草履大坂あしだ江戸へ来ててりふり町の中のおしさま。 (兎十)
 ●中の町うゑたる花のかたはらに深山木などは一本もなし。 (赤良)
 ●ねもせずにおみこんで見る燈町表にさせしあつらへの月。 (占正)
 ●軒毎のまやけさかげに驚すららん志ん町の月にめはなし。 (可々志)
 ●降る雪にふりのかはつた白木簀白うし引いて行く京の町。 (犬丸)
 ●春雨のつよく軒端の糸屋町くる人稀に夢結ぶらし。 (有斐)
 ●猿棚も氣のはる所中の町。 (川柳)
 ●難にこもふき合せずの尻張町。 (同)
 ●御中入四百四町は新手なり。 (同)
 ●町内に人は無いかと打たれ損。 (同)
 ●町風かなどお針に見てもらひ。 (同)
 ●中納言小田原町の犬を出し。 (同)
 ●町内のほとけとらへてさる彦彦。 (同)
 ●突隼蜀の一つはなれて木挽町。 (同)
 ●京の町平なとこで上り下り。 (同)
 ●嘘よりは八町多い江戸の町。 (同)

〔まち〕町 (市の部参照)

市町。市街。街衢。殷盛。繁華。

●般賊。車馬絡繹。往來。櫛比。 (光行)
 ●まちや。まちつゞき。たちつゞく。 (光行)
 ●家居つらなる。のきををつらぬる。ゆゑ、たえぬ。にぎはふ町。 (光行)

●細波や近江の湖に沈めても、一升甕は其通りなり。大津の町に醤油屋の喜平次といふ者ありける。此所は北國の舟着、殊更東海道繁昌。馬次ぎかへ、駕籠車を雇し、人足の働、蛇の陣鬼の角細工、何をしたらばとて賣れまじき事にあらず。近年間屋町長者のごとく風作り昔にかはり、二階に播音やましく、柴屋町より白女よび、寄客の遊興、晝夜のかぎりもなく、天秤のひよきわたり、金銀も有る所には瓦石の如し。身袋程高下のあるものはなしと、喜平次荷桶おろして、無常觀じける。 (西越)

●其後立出で見れば此所の景趣は海あり山あり、水木たよりあり。廣きにもあらず狭きにもあらず。街衢のちまたはかた／＼に通り。實に此道おなじ色をなす郷里、都を論じて、望よづめづらしく、奈をえらび比を選ぶ、門掃まきかならべて地又眼へり。 (光行)

●美豆の渡りに暇の女が、松を植よなら植木町の松よ。何時も髪らぬ緑の色や、長き契りをか取り妻で、粋な仕様ぢやないかいな。宵寝枕でまだ膝が足らぬ、私が小枕御手枕、ヤレ面白や、粋な仕様ぢやないかいな。話ふ伏見の町過ぎて、小倉繩手に時ならぬ、神を勇めの音するは、町々廻る太神樂。 (浄瑠璃、菅浦落操)

●鶯の町に來鳴くや植木店。 (關更)
 ●鶯や庭樹のつゞく京の町。 (蕪村)
 ●町中の塚の茂りや寫るし。 (道彦)
 ●隠家や町から見えぬ夏木立。 (太祇)
 ●蠅道うて狐燈町に入りけり。 (巢光)
 ●蝶々の町飛ぶ春となりけり。 (玉川)
 ●春駒や部の町の小松原。 (柳飛)
 ●下町や丸太轉ばす蟻蛾の町。 (杉化)
 ●町ありく鹿の音高し臘月。 (雷夫)
 ●若草や町を佐び行く馬の聲。 (寶山)
 ●實や月間日子金の通り町。 (芭蕉)
 ●町中や車頭をよけて飛ぶ乙鳥。 (許六)
 ●北緯岬や町を打越す鹿のこゑ。 (丈草)
 ●白く候紅葉の外は奈良の町。 (鬼貫)
 ●春の夜しかたむく月や連歌町。 (召波)

●七日町から鹽川見れば、たいちよ持てなすおつめ茶屋。
 ●財無くして町に臨むな。
 ●町には事なけれ。
 (俗語)
 (俚語)
 (同)

〔まつ〕松

堅心。勁節。霜根。幹雪。龍形。蓋影。龍鱗。鶴翅。亭々。楚々。十八公。大夫封。

わか松。おい松。そなれ松。はま松。をのへの松。ひめ小松。あひおひの松。ちりうせぬ。とさはかげ。色かへぬ。松のよはひ。松のおちば。千とせのかげ。岩ほに根さす。

●から嶺の松は、北より南にさす枝、凡三十間ばかり、東より西にいたり廿間餘、みさは、三かゝへにあまり、木の丈高からず、まん丸に茂り出す。是亦天下の名木、實に一奇觀といふべし。傳に云ふ、から嶺の松かれたりしを、明神光秀、植ゑかへたりし時。

わが外にたれかうるけん一つ松心してふけしがのうら風。

その後、これも枯れたりしかば、長嘯子またうゑらる。これもまたかかれて、今の松は大坂加番の諸侯某氏うゑられし所なりといふ。松のめぐりの岸に、石垣をしていと厳重なり。近年松枝にだいに垂茂するを以て、石垣をつき出すこと度々なりといふ。是皆公儀御入用にて修理し給ふ。松の前に西に幸崎明神の社あり。小社なり。或人のいふ、前の説ことく非なり。から嶺の松は已に四百年におよぶか。そのこと叡山の記録にありといふ。いかさま木だちのさま、百年來のものにはあらず。

●今一入のと昔人のいひしは、げにさる事にて、いつともわかぬ松の葉の緑も、春のはじめ雪消ゆるより、色添ひて見ゆるなん、又なくいみじき。夏はふく風の涙の音にまがふも、ひややかなる心地するに、日をさへて下すよみいひしらす。秋は葉越の月影、殊にさやかに見え、冬は雪の積りたるさまいはん方なく、なべての木とひとしなかにやは見ゆる。かく折ふしにつけて、な

かしく見所ある此木も、千年の物にて、人の齡長かれとのねぎ事にも、まづ例にいひて、是が根にある葉の、老を助くるなど、よるづたらひてめでたく、いさゝかもなんすべきくさはひまじらざりけり。あなにかしの木や。

●播州曾根は高砂より程ちかし。菅丞相國縁の地ゆゑ天満宮を祭れり。宮居の前に年ふるき松の木あり。まことに龍蛇の如く横さまに臥し廣がりて、千年の古色あり。其むかし菅公筑紫へ御配流の時、暫くこの地にあがらせ給ひ、御手づから松をうゑおかせたまひけるに、其後年々に繁茂して、其松今に存在するといふ。誠に松は諸木に勝れ、齡長くめでたきものと、世にいひならはすもことわりなり。

●抑松を貞木といふことは、まさしく人のために、かの木の貞心あるにあらず。雲霧の烈しきにも、色改らず緑なるは、これを貞心にとふるなり。勁松は年の寒にあらはれ、忠臣は國のあやふきに見ゆ。潘安仁が西征の賦にかける、その心なり。

●丑寅の方を見れば、住吉の松むら立ち

て、絶えんゝに強みて見ゆ。(申務内侍)

●それ草木こゝろなしとは申せども、花實の時をたがへず、陽春の緑をそなへて、南枝花はじめ開く。然れども此松は、その景色とこしなへにして、花葉時を分かず、四つの時至りて、一千年のいる、雪のうちに深く、又は松花のいる、十返とも云へり。かゝるたより松が枝の、首の葉草の露の玉、心をみかく種となりて、生きとし生ける物毎に、數島のかけによるとかや。しかるに長龍が首葉にも、有情非情のその聲、みな歌にもるゝ事なし。草木土砂風聲水音まで、萬物のこもる心あり。春の林の東風にうごき、秋の蟲の北露に鳴くも、みな和歌の姿ならずや。中にも此松は萬木にすぐれて、十八公のよそほひ、千秋の緑を爲して、古今の色を見ず。始皇の御厨に、あづかるほどの木なりとて、異國にも本朝にも、萬民、これを賞讃す。

●高砂の、尾上の鐘の音すなり。曉かけて霧はおけども松が枝の、葉色は同じ深みどり、立ちよる陰の朝夕に、かけども落葉の盡させぬは、まことなり松の葉の、散りう

せすして色はなほ、正木のかづら長き世の、たとへなりける常野木の中にも名は高砂の、未代のためしにも、相生の松ぞめでたき。

●さて松を大夫といふ事は、秦の始皇の御狩の時、天熊にかき曇り、大雨しきりに降りしかば、帝雨をしのがんと、小松の陰にやり給ふ。此松俄に大木となり、枝を垂れ葉をならべ、木の間すさまじきて、其雨をもらさざりしかば、帝大夫といふ爵を、贈り給ひしより、松を大夫と申すなり。

●千年ふる、松にたぐへて和歌の道、替らぬ色を見せんとて、方便はかたじけなや、松こそ久しかりけれ。されば住の江高砂、何れも和歌の家人を、守り給へる御誓ひ、此神ぞ久しき。松こそめでたかりけれ。

●筑波峯の時より落つる混の白玉、一二三四五六七八、九軒の町に羽子かはす、比翼の羽子板むくろじも、みがきが入つては色になる、戀の二葉のかぶる松、枝と枝とをやり羽子も、三四五も末ながき、返事になるゝ門の松、かゝへの松あり客も待つ。先

づ新町の初子の口、松澤山に深みどり、千代も根引を絶えずまじ。

●御哥や、立別れ、因幡の山の峰におふる、松としきかば、今歸り來ん。夫はいなばの遠山松、これは懐かし君茲に、須磨の浦端の松の行平、立歸り、ば我も小隆に、いざ立寄りて、磯馴松の懐かしや。松に吹き來る風も狂して、夫の留守居の淋しき折から、鼓に心を慰むなり。

●昔みし庭の小松に年ふりて嵐の音を楯にぞさく。

●あられうつあらゝ松原住のえのおとひなとめと見れどあかぬかも。

●我みても久しくなりぬ住のえの岸のひめ松幾世へわらん。

- 千陰 千陰の松がえ。
- 宣長 千とせの友ならぬよは。
- 成章 いくれむぢのなかに松は梢には雲井たなびき神さびにけり。
- 景樹 萬代はゆめなりけりと手杖の松もわいてつ思ひしらん。
- 芭蕉 山松の枝さく音のあぢさなき千歳しちやにきりやと。
- 芭蕉 清瀬や波にちりこむ青松葉。
- 無静 風なくて静に松のちる日哉。
- 冬季 夕風や松の花散るす露。
- 葛三 松の花時めさつゝも静なり。
- 几童 神鳴の上りし松や夏月。
- 支考 高砂のゆかりや松の下すゞみ。
- 其角 地風や花の外には松のかり。
- 蓼太 寒食や灰に交りて青松葉。
- 丈草 夕立に飛びのく月や松の上。
- 惟然 未だ山の味覚えねど松の花。
- 士朗 美しき砂に小松のみどり哉。
- 爲懸 みな人のみどりよべる禿松大犬にならん色ぞみまける。
- 智恵内子 六十とせにひととせあまる一つ松これからさきのよは幾代ぞ。

- 吹きさらす磯邊の風のをと松若木とみえて寒さうもなし。
- かつ餅 おきなごのむかしばなしの口くせに夫からさきの松のことは。
- 面成 にはかなる雨をふせきしから笠は大松だけやとつてかつぎし。
- 實権 一此松たしかなるものにつききみが千年の御伽奉公。
- 古文 松二本小柄にとつて云ひのべる。
- 川柳 腰帯は見越の松に逃げ残り。
- 同 鳥が来たぞと松の上でいひ。
- 同 我松を二本はのこす小松うり。
- 同 松の木の下できめがさしはるなり。
- 同 松に目を休めてとほる吉野山。
- 同 松はつれないが櫻はつれがある。
- 同 花の外には松の木やうな女。
- 同 まづ最初松葉のてい御目にかけ。
- 同 熊坂は松のうへからひまぐつて居。
- 同 松がさる、軒に五葉のみどりして、また若松や姫小松、常樂木祝ふ千代かけて、子の口とこよの松のえだ、こゑ住の江にまつさ

- つの、まつと木のまの春がすみ、あからむうちに、志賀からさきの松かさや、いつのまにかは磯馴まつ、いろもふかき松がさね、その蒲葎にかきおくる、ふみとかりねや曾根の松、つきぬ真砂のたとへよる、つさせじものは海松の、位もたかき松山に、橋立ならぬ松島や、三保のまつばら吹く風が、琴のねさそふうたかたや、花にさきだち紅葉におくれ、月にやどかすおばしま、葉かへぬ松の世々にさかえて。
- 俗語 松の二葉はあやかりしよ、青葉はまして落葉さへ、妹背かはらぬちぎりとは、うれしからうであるまいか。
- 同 君とわかれて松原ゆけば、松の露やら涙やら。
- 同 いやとおしやるも頼あり、青柳よりも髪折の松。
- 同 松は一寸にして棟梁の性あり。
- 俚諺 松の實は木の白になるまで。
- 同 清部衆木綿茶券。傳道孤松最出。群。名接。天庭。多。景色。氣連。宮。關。借。氣。賦。懸。池。的。々。停。華。露。重。々。拂。瑞。雲。不。惜。流。寄。助。仙。鼎。願。將。積。幹。捧。明。君。張。説。青松在東園。衆草没。奇姿。凝霜。參。異。

「まつかぜ」松風

- 松嶺。松濤。颯々。蕭々。寂寥。
- 懷舊。斷腸。催涙。
- 松ふく風。松の風。松風落つる。
- ときはの聲。松のひびき。
- 同 ことや、法輪は程近ければ、月の光に誘はれて、参り給へることもやと、そなたへ向きてぞあこがれける。龜山のあたり近く、松のある方に隣に琴をささぐえける。峯の風か松風か、尋ねる人の琴の音か、おぼつかなくは思へども、胸をはやめてゆく程に、片折月したる内に、琴をささぐすまされたる。
- 平家物語 しの、せちにいぶせきかりは、かきならし侍りぬるを、あやうまねぶしの、侍るこそ、じねんにかのせんだいけうの御手にかよひて侍れ。山ぶしひがみ、に、松風をきくわたしたはべるにやあらん。いかで、これのびて、きこしめさせてしがなと聞ゆるまゝに、おちわなきて、涙おとすべかり。
- 紫式部 いたくふけゆくまゝに、松風すしうて、

- 引馬野は早くより濱松ともいふなり。げに濱へに松どしのおほく生ひたりしが、風にふかれてさよとなるおとの、いみじうめでたく聞ゆ。人のかしづくむこきみなどの酒のみたちで、濱松のおとはをのこども、のうたふは、この所よりのことならんかし。
- 長伯 濱松に風ふく夜はことさらに大君さませいざふたりねん。

●もしやと思ひてこゝかしこに、駒をかけよせ〜て、ひか〜開けども、琴弾く人は無かりけり。月にやあくがれ出で給ふと、法輪に参れば、琴こそ聞え来にけれ。峯の嵐か松風か、それがあらぬか、尋ねる人の琴の音か、樂は何ぞと聞きたれば、夫を恨ひて戀ふる名の、恨夫戀なるぞうれしき。
(謡曲、小督)

●誰をかもし知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、過ぎ来し世々は白雪の、積り積りて老の鶴の、ねぐらに寝る有明の、春の霜夜の起き居に、松風をのみ聞き馴れて、心を友と昔蓮の、思ひを逃ぶるばかりなり。
(謡曲、高砂)

●世の中の、若は色かふる松風の、音も淋しき冬空や、霞交りに降り積る、軒もまばらの離れ家へ、岡崎の宿はづれ、百姓ながら一利風、主は山田幸兵衛と、人も心を奥口の。
(浄瑠璃、伊賀越)

●音響を身に興らす忠言の、鋤鉄止めし山重忠の屋敷には、賓客車馬の道絶えて、雨を疑ふ松の風、糸に亂る、淺みどり、五柳先生意に倚り、七松居士が床に伏す、氣

色を見せて文机に、文武の眼まくばりて悠然としてはします。
(浄瑠璃、鎌倉三代記)

●我ながら思ふか物をとばかりに袖にしぐろ、庭の松風。
(有案)

●琴のねに峯の松風通ふらしいづれのなよりまらべそめけん。
(警宮女御)

●何となく聞けば涙ぞこぼれぬる昔の袂にかよふ松風。
(丹後)

●かげに立て立ちかくるればから衣ぬれぬ雨ふる松の聲哉。
(貫之)

●滋賀の浦の濱より霞むあけぼのに山ふきおる春の松風。
(慈鎮)

●むら雲のうきたつみねの松風は空にしぐれて音ぞはげしき。
(浦蓮)

●君が代は枝をならさぬ風だにも松こそ千代のこゑは聞ゆる。
(成章)

●苦むしろしきていはほにふす松もれぞめやすらんおのが嵐に。
(長流)

●海原や千船よりくる夕風に霞やま松の、みさわぐなり。
(千蔭)

●いつとなきともはね覺の枕にもひる見る庭の松風の音。
(宣長)

●松風を首の開けり呼子鳥。
(言水)

●松風の落葉が水の音涼し。
(芭蕉)

●時雨過ぎて草に落ち來ぬ松の風。
(几董)

●松風は須磨の寢覺を寶舟。
(蓼太)

●虫干や拔身をさます松の風。
(太祇)

●炭の火に峰の松風通ふなり。
(一茶)

●松風に押並びたる柳かな。
(羅城)

●松風に錢こぼしけり春おろし。
(月居)

●長いぞや曾根が松風寒いぞや。
(惟然)

●松風に新酒を澄す山路かな。
(支考)

●はだ寒く身にしむけさの松風を折につめたく思ふ初しも。
(藏吉)

●珍らしき噂もなく山里に聞きふるしたるのきの松風。
(村立)

●我ばかりものうきものと思ひしに峰にも誰を松風のおと。
(跡行)

●行平の賞玩ありし松風を扇なりとも思ふ獨疑。
(卯雲)

●松の風ふき自在なる月見かなはらうて雲はみなつくし琴。
(橘洲)

●入りかはり立ちかはりきてまびしきは軒の松風庭のさなしか。
(千則)

●はる〜と濱松風にもまききて涙にしづむさ〜んぞの聲。
(牛兵衛)

●中々に山の奥にぞ眞柴垣うき世をとんと

のきの松風。
(穴主)

●松風に琴をひかせて神前に舞ふは一葉のたつ田畑かも。
(黒住)

●此峰に千代を下手とし上手とも名はつけられぬ松風の琴。
(村住)

●心がけよしの、峰に琴うたを空に覺ゆる千代の松風。
(物成)

●岩瀬したのまじ松の千代かけて風吹きわたるかつらぎの味。
(葉慶)

●松風へばかり一首の立ちわかれ。(川柳)

●松風のちよで萬余騎吹きさらし。(同)

●身のいたじしのは座敷の松の風。(同)

●松風の音に岩水馬の耳。(同)

●松風がふくと村雨一しづく。(同)

●笛の音に松風さそふ宮神樂。(同)

●陵の管絃虫の音まつ風。(同)

●積る程松風重き夜の雪。(同)

●松風の音はたぎつた蘆屋釜。(同)

●紅谷の折に松風やうすざくら。(同)

●松風の音に仲間駒をとめ。(同)

●こがれこがるよ身のゆくへ、青葉〜とよべどしほまの、濱の松風音ばかり、松風濱の、はまの松風音ばかり。(俗語)

●吹けよ松風、吹かれば山居のまびしき

に。
(同)

●濱の松風音ばかり。
(狸設)

●月好好獨座。雙松在前軒。西南微風來。溜入三枝葉間。蕭瑟發爲聲。半夜明月前。寒山颯々雨。秋琴冷々絃。一聞濕炎暑。再聽破香煩。竟夕達不寐。心體俱惘然。南陌車馬動。西鄰歌吹繁。誰知絃下。滿耳不爲喧。
(白居易)

●高閣松風似有神。驟如秋雨細如春。病餘每愛同遊客。靜裡偏宜獨聽人。已向陶廬誇地遠。更於莊嶺認天真。眼前一片虛空界。童子何知問起因。
(柳實)

●蟬空作風雨。發地鳴鼓吹。口噴四無人。聲在高林際。伊儂兒女語。聲淺市井議。我欲抱七絃。寫此以幸。歲。
(黃山谷)

●琴商吹曲吹烟後。簾瑟罷心學雨辰。
(資忠)

●松風有清音。
(戴表元)

かれゆく。
●風いと冷かに吹きて、松出のなきからしなる聲も、折知りがほなるを、さして思ふことなきだに、聞きすゞしがたげなるに、ましてわりなき御心まどひとしに、中々、ともゆかぬにや。
大方の秋のわかれもかなしきになくねなそへそのべの松虫。
(紫式部)

●野の宮の月も昔や思ふらん、影さびしくも森の下露。一身置きどころもあはれ昔の、庭のたけすまひ、よそにぞかほる、氣色も假なる、小柴垣、露うちはらひ、訪はれし我も、其の人も、唯夢の世とふりゆく跡なるに、誰松虫の音はリン〜として、風茫々たる野の宮のよすがら、なつかしや、こゝはもとより、かたじけなくも神風や、伊勢の内外の鳥居にいである、姿は生死の道を、神はうけずや思ふらんと、また車にうち乗りて、火宅の門をや出でぬらん。
(謡曲、野宮)

●不思議や扱は此世にも、なき影すこし残しつゝ、此程の友人の、名残を暫しとめ給へ。折節秋の暮、松虫も鳴く物を、我をや待つ聲ならん。そも心なき虫の音の、我を

待つ聲とは、誠しからの言葉かな。虫の音も、忍ぶ友を待てばこそ、言の葉にもかゝらぬ。實に思ひ出だしたり。古き歌にも秋の野に、人松虫の聲なり。我か行きて、いざとむらんと、思召すか人々、有難や。是ぞ誠の友を、忍ぶよ松虫の、音に伴なひて歸りけり。虫の音に連れて歸りけり。(謡曲、松虫)

●おもしろや、千草にすだく虫の音の、機おる音のきりはたりちやう、つりさせてふ置鯛、色々の色音の中に、わきて我忍ぶ松虫の聲、りん／＼りん／＼として、夜の聲めい／＼たり。すはや難波の鐘も明方のあさまにもなりぬべし。さらばよ友人名残の袖を、招く尾花のほのかに見えし跡絶えて、草花々たる朝の原に、虫の音ばかりや残らん。(同)

●淺ましの御心や、帝は世を捨草の色香もあらぬ憂衣、恨み妬みは何あらん。心を晴して歸り給へ。愚の事をいふもの哉。正しく今宵弘敷殿、巡り逢ふ夜の長枕、榮花の春に立ち歸り、我のみ獨り秋の野に、松虫の音と諸共に、泣明かせとは曲しなや。あら度立ちやといふより早く、而色變りて大

息つき、玉座を目がけて飛び出る。(淨瑠璃、花山院都賀)

●この人といひし程やすきぬ秋の野に誰まつ虫ぞこゑのかなしき。(後撰)

●かりそめの宿りなれども松虫の千代なならせる聲にもあるかな。(資王内親王)

●今や知るかりねなりつる松虫の一夜にちよをこめて鳴くとほ。(圓融院)

●秋の野に我まつ虫の鳴くといはよをちでねながら花はみてまし。(五條后)

●秋の野に人まつ虫のこゑすなりわれかとゆきていざとぶらはん。(古今)

●ゆふぐれの風におほへる松虫はたがつまごとのねにかよらん。(千隆)

●はてしなきためしにぞきく武藏の千代をあまたの松虫の聲。(枝直)

●たかまどの尾の上の宮の秋はぎなたれきて見よと松虫のこゑ。(長經)

●つゆながららばさでならん月かげにこほしが枝の松虫の聲。(西行)

●山里に秋やちとせのまさらんねのひせし野の松虫の聲。(家隆)

●まつ虫に狐を見れば友もなし。(其角)

●松虫のりんともいはず黒茶碗。(嵐雪)

●松虫に人なつかしや磯の家。(支考)

●松虫の鳴くや夜食の茶碗五器。(許六)

●草枯れて人にはくすの松むしよ。(凡菫)

●松虫の音にも通はず鉢叩。(升六)

●松虫の鳴く音やさゆる銅だらひ。(白雄)

●心細き夜をや松虫海の音。(保吉)

●松虫の待たぬ夜もなし松の露。(北枝)

●色かへぬ音を松むしの軒端哉。(蓼太)

●松虫の顔に飛びつく戸口哉。(其流)

●我御をしてくれかゝる秋の日にかならず後まつむしの聲。(杉門)

●秋の野は神もほとけもわかぬにやそこに鈴虫こゝに松虫。(鼻成)

●秋はたゞ目さびしきに酒のかんちんちんりんと松虫のなく。(形音)

●秋風に尾花の浪をうちよせてねをあらはせる野邊の松虫。(權喜)

●たぎらす茶の湯の爐路の下草にりんりんとなく松虫の聲。(貞徳)

●萩薄生ひしげれどもかくれぬは野中に立てる松虫のこゑ。(簡成)

●蔽入のみやけときけばなつかしやしらぬ在所のまつ虫のこゑ。(梅止)

●長き夜の秋のすまみに松虫の十かへりほ

どしどしかへりて聞く。(綱彦)

●今宵て秋の仲國月さえて蟻賊野にひやく松虫の戀。(朱樂庵)

●つさ山の植木のもとにかくれぬの聲にはりある松虫ぞなく。(常成)

●草履下駄音をしのぶにてる月の雪に折れしかなかぬ松虫。(假馬)

●我名には似ず松蟲は霜に枯れ。(川柳)

●松蟲は野宿の笈の側で鳴き。(同)

●あけがたの枕にさそふ松蟲の、音もたえ／＼にいとよほ、秋風のおとづれも、きくやとまちてわびしきの、涙の露のおきて思ひ、ふして丸腰の袖にかわかん。(俗語)

●つらいつとめの其中に、かあい男をまちかねて、くれ松蟲を思ひだす、蟲のこゑこそあかいし。(同)

●朝がほの、まかりはにくし迎ひ駕、夜は松蟲らん／＼／＼ちりり／＼。(同)

ふ。

●けふは二條院にはなれおはして、祭みにいで給ふ。西の對にわたり給ひて、惟光に車のことおぼせたり。女房いでたつやとの給ひて、姫君のいとつくしげにつくるひたてよおはするを、うちみみてみたまつり給ふ。君はいざたまへ、もろともに見んよとて、御ぐしのつねよりも清らに見ゆるを、かきなで給ひて、ひさしうそぎ給はざるを、けふはよき日ならんかしとて、こよみのほかせめて、時とはせなどし給ふほどに、まづ女房いでねとて、わらはのすがたどものなかしげなるを御らんす。いとらうたげなるかみどものすそ、はなやかにそきわたして、うきもんのうへのはかまにかゝれるほどげさやかに見ゆ。君の御ぐしはわれそがんとて、うたて所せうもあるかな。いかにおひやらんとすらんとそきわづらひ給ふ。いとながきひと、ひたひがみはすこしみじかくぞあるを、むげにおくれたるすぢのなきや、あまり情なからんとてそきはて、ちひろといはひきこえ給ふな、少納言あはれにかたじけなしとみたまつる。

はかりなきちひろのそこのみるぶさのおひゆく末はわれのみぞみん、ときこえ給へば、ちひろともいかにかしらんさだめなくみちひろ鹽のどけからぬに、とものかきつけておはするさま、らう／＼しき物から、わかうをかしきをめでたしとおぼす。けふも所もなくたちこみたり。馬場のおとよのほどにたてわづらひて、上達部の車もおほくて、物さわがしげなるわたりかなとやすらひ給ふに、よろしき女車のいたりのりこぼれたるより、扇をさしいで、人をまねきよせて、こゝにやはたよせ給はぬ、所さりきこえんとときこえたり。いかなるすきものならんとおぼされて、所もげによきわたりなれば、ひきよせさせ給ひて、いかでかえ給へるところぞと、ねたきになんと給へば、よしある扇のつまををりて、はかなしや人のかざるあふひゆふ神のしるしのけふなまらける。しめのうちにはとある、てをおぼしいづれば、かの源内侍のすけなりけり。あまましうふりがたくもいまめくかなとにくまに

はしたなう、

かざしける心ざあだにおもほゆる八十
氏人になべてあふひを。

女はづかしとおもひきこえたり。
くやしきもかざしけるかな名のみして
人だのめなる草葉ばかりを。

ときこゆ。ひとあひのりてすだれをだに
あげ給はぬを。心やましう思ふ人おほか
り。ひと日の御ありさまのうるはしかりし
に、けふはうちみだれてありき給ふかし。
誰ならんの人ならん人、けしうはあらじは
やと、おしはかりきこゆ。いどましからぬ
かざしあらそひかなと、さうくしくおぼ
せど、かやうにいとおもなからぬ人はた
人あひのり給へるにつままれて、はかなき
御いらへし心やすきこえんもまほゆしか
し。(紫式部)

●七月の玉祭は何れの地にもあるが中
に、長崎は誠にすぐれて仰山なり。長崎の
地の墓所は、皆四方の山の半腹にありて、
町よりもよく望み見ゆるに、盆中は各灯籠
をとすことなり。はか一つにてうちん
二つ三つ、富めるものは墓ごとに十、二十の
灯籠をとせり。元來数千萬の墓あるに、

又敬双倍の灯籠なれば、幾千萬といふ数を
しらす。夜に入れば、四方の山皆火と成つ
て、其見事なる事、浪花の天神祭よりも勝
れり。扱十五日、十六日、家ごとに墓祭と
て、人々あらそひて美々數酒肴を携へて墓
の前にいたり、先祖への馳走なりと稱し
て、終日終夜酒宴を設く。魚類はもとより、
三味線尺八のたぐひを携へ行きて舞ひうた
ふ。又隣の墓所にも此通なれば、京地など
にて花見などに行きしごとく、隣家の人と
打混じてたがひに酒を送り、肴を取りかは
して、大酒に興に入る事なり。他國の魂祭
のごとく愁傷の體はさらになし。珍らしと
いふべし。(南翁)

●名古屋に立てる大神の御祭、昨日その日
なりしかど、雨にさへられて、けふなん行
はるゝを、あるじの翁いざと誘はれける
に、かねて、こかしこの寺社などにも詣で
ん心ざしなれば、夜をこめて行きいたりぬ。
祭のさま、まことに目もあやに、言葉も及
び難くなん。引つらなる山は、七寶の光
をかよやかし、ねり出づる人のさうぞく
は、三國のすがたをまじふ。春の林秋の野
の草木も、花を一つ場に匂はしむるは、生

ける御佛の境に入るか疑はれ、神仙の立
來るか怪まる。或はあら海のいかれる魚
の、はたをそばたて、悠揚たる、又は蓬萊
の山のおやしき鳥の、身をなどらしめて蹠
蹠たるなど、總ていひつゞけば、虚言する
罪をぞうくべき。(宣阿)

●有難や、今日早稲の神の祭、年の極めの
御祭といへば、又新玉の年の始めを、祝ふ
心は君がため、春の野に出で、摘む若菜、
生ひ行く末の程もなく、年は暮るれど縁な
る、和布刈の今日の神祭、心を致しさまざ
まに君の恵みを祈るなり。(謡曲、和布刈)
●所から曇らぬ空も興謝の海の、天の橋立
遙々と、影ふむ道に行きかふ人も、けふの
祭の時を得て、夏水無月の半行く、舟の渡
りの障もなき、貴賤群集ぞ有難き。世渡る
業は惜しめども、いざや歩みを運ばん。
(謡曲、九世月)

●有難や、頃は卯月の始とて、賀茂のみあ
れの時既に、夏も來にけり小忌衣、袖白妙
の木綿疊、幣とりんの神祭、御代を守り
の道すぐに、萬歳の末を祈るなり。
(謡曲、代主)

り、む揃ひこむ、てうさようさのたて提
灯、門のそろへは地下てうの、しるしを見
せいよ姿、並ぶ家居の其中に、釣船が三ぶ
がうち、客を内籠積りの、ちもり太夫琴浦
と、結び合うたる磯之丞、見せを揚屋の祭
見に、口説しかけて勤ねわうて、ほむらの
煙管打たき、煙くらべのびんしやんは、
火皿も湯になる計りなり。

- 神まつこと何ぞと千早振かしの祭に
あふひなりけり。(神舟)
- おれ引きにひきつれてこそ千早ふるか
の川波たらわたりけれ。(貫之)
- 幾かへりけふのみあれにあふひ草たのみ
なかけて年のへぬらん。(實定)
- 神とる夏の間路や遠からんゆふかけての
み祭る神かな。(兼昌)
- 神まつる有馬の浦による波のおとやつ
みの名残なるらん。(諸平)
- 神まつるうつきの花のしるたへにゆふと
りして山かつらせり。(家長)
- 玉かしは若葉さしけりすべ神にひもろぎ
まつる時し來ぬれば。(千隆)
- たれしけふも心にももるかづらかけて

や千代と神祭るらん。(春海)
●神まつる祭の露の玉かづらかけて久しき
ためしなりけり。(枝直)- 小車に葵のかづらかけてけり神まつるけ
ふにめぐり來ぬれば。(春海)
- 貞宗も高木から出て祭哉。(許六)
- 草の雨祭の車過ぎて後。(蕪村)
- 唯の暮に隱るゝ祭哉。(太紙)
- 兒あふぐ扇の借も祭かな。(白雄)
- たれこめて祭見る家満す。(几童)
- 君が代や筑摩祭も鍋ひとつ。(越人)
- 船祭のちかづきのない事は。(來山)
- 人留に涼しく渡る祭かな。(旨原)
- さびしさに客人やとふ祭かな。(尙白)
- 祭にも逢はで突き立つ祭かな。(二茶)
- 矢竹のよゝにあふひの祭かな。(清良)
- 上を下へかへす祭の賑ひにかぶりしなべ
のあしもそらなる。(玉成)
- 天満まつりあつさも夏の河筋やひは皆水
の提灯のかけ。(朝省)
- やいとよりあつさ祇園の祭時都の人は山
を見に出る。(雪道)
- 綾にしきかざる祇園のみまつりに酔のこ
んにやくの引の山は。(二丸)

●祇園會や茶屋がまうけし本膳のひきもの
にまた見ゆるかまぼこ。(千櫻亭)- 父母のめぐみに盆は相の山おすぎなされ
たお玉祭り。(俊經)
- いそがしと人もしりけり夷講たすきかけ
なる神を祭れば。(置子丸)
- 山玉の祭のだしやむさし野に風吹きわた
るさるとりの花。(喜來)
- 御馳走の砂こねかへすすまのの神輿か
つぎは汗の上わり。(高丸)
- もみあふて俵こるびもいとほまし稻を荷
へる神の祭は。(秋風)
- 山里は紅葉のにしき折りしきて都まさり
の秋のみまつり。(貞益)
- 祭禮に獅子は毛ぼりの胸が入り。(川柳)
- 難祭これからかうは姉さんの。(同)
- かゝり人まつりがのびてむねがやけ。(同)

- 祭から戻るとつれた子をくばり。(同)
- 御祭がいやさに美濃へ嫁入する。(同)
- 初午は厩で見出す祭なり。(同)
- 外科を祭のなりで呼びに行き。(同)
- 祭禮に天の羽衣二日きて。(同)
- 勘當が村の祭の師匠なり。(同)

●天が下晴れて日吉の御祭禮。(同)
 ●鍋かぶる祭も人が煮えこぼれ。(同)
 ●家内和睡は福神の御祭。(同)
 ●後の祭。(同)
 ●至州之明年、將夏、祝册自京師至。吏以時告、公乃齊戒視册、詳有司曰、册有皇帝之名、乃上所自聖、其文曰、嗣天子某謹遣官某、敬祭。其恭且嚴如是。政有不承、明日香將宿廟下、以供晨事。明日、吏以風雨白、不聽。於是州府文武吏士風百數、交謁更諫、皆掛而退。公遂陞舟、風雨少弛、權大奏功、雲陰解、駁、日光穿漏、伏波不興。省牲之夕、載鳴鼓。將事之夜、天地開除、月星明概、五鼓既作、乘牛正中。公乃盛服執笏以入、醉飽、海之百靈秘怪、恍惚畢出、蜿蜒蛇、來享飲食、闔廟旋燭、祥靈送御、踊躍後先、乾端坤倪、軒轅星露。祀之之歲、風災熄滅、人厭魚蟹、五穀皆熟。明年祀、又度廟宮、而大之、治其庭壇、改作東西兩序、齋庭之房、百用具備。明年某時、公又固往、不懈益虔、歲仍大和、蓋艾欲殊。(同)
 ●肥後元都閉。源高繁祭長、守祿殿具

禮。掌節錄非常。碧瓦初寒外。金堂一氣傍。山河扶二袖戶。日月近三離梁。仙李蟠根大。猗蘭奕葉光。世家遺史。道徳付今主。畫手看前輩。吳生遠擅揚。森羅移地軸。妙絕動宮牆。五聖聯龍。千官列雁行。兔旒俱秀發。旌旆盡飛揚。翠柏深留景。紅梨遍得霜。風聲吹玉柱。露井凍銀床。身退界周室。經傳拱漢皇。谷神如不死。養拙更何鄉。(杜甫)
 ●衣冠寂寞半塵絲。想見江湖獨臥時。道跡虛煩明主詔。感懷猶賦散人詩。釣魚船去雲迷浦。聞鶴閣空草滿池。芳藻一杯誰爲奠。鼓聲只到水神祠。(高啓)
 ●東帶從王事。結綬奉清祀。肅々禁闈內。巖然絕塵軌。我々高堂上。層層對雲起。明發修薦享。矜慄不遺止。暫拆階闈間。悽々嘗靡已。(孔欣)
 ●潔齊謝粉華。寂寞清廟靜。肅穆視牲盛。端服侍嚴省。(張率)
 ●侍侍章姬祭。祖先。爺懷亦已到黃泉。今朝和淚薦。滿地荒苔細滴穿。(星巖)
 ●祭如在。祭神如神在。(論語)
 ●吾不與祭。如不祭。(同)

〔まひ〕舞
 舞樂。舞踏。舞臺。舞曲。鼓舞。宴舞。亂舞。霓裳。羽衣。蹠蹠。回雪。轉旋。
 まひの袖。ひるがへる。をとこ舞。白拍子。獅子まひ。花にまふ。くるひまふ。
 ●ひまゆく駒のあしにまかせて、文水も五年になりぬ。正月廿日本院おはします宮小路殿にて、今上の若宮御いかきこしめす。いみじうきよさを盡さるべし。今年正月に間あり。後の二十日あまりの程に、冷泉院にて舞御覽あり。明けん年一院五十にみたせ給ふべければ、御賀あるべしとて、今より世のいそぎにきこゆ。樂所はじめの儀式は、内裏にてぞありける。試樂廿三日と聞えした、雨降りて明るる日、つとめて人々まわりつどふ。新院はかねてより渡らせ給へり。寢殿の御階の間に一院のおましまうけたり。その西によりて新院の御座をまうく。東は大宮院、東二條院、皆白御務に二つ御衣奉れり。聖護院の法親王、圓満院僧

正など参り給ふ。土御門の中務の宮もまへり給ふ。上達部殿上人あまた御供したまへり。仁和寺御室槐井の法親王なども、すべて残りなくつどひ給ふ。月花門院、花山院准后などは、大宮院のおはします御座に、御几帳おしめて渡らせ給ふ。寢殿の第四の間に、袖口も心こにておし、いださる。大納言の二位殿南の御方などやんことなき上臈は、院のおはします御座の中にひきまがりて候ひ給ふ。いづれも白き袴に二きわなり。東のすみの一間は、大宮院月花門院の女房ども参りつどふ。西の二間に新准后さぶらひ給ふ。御前の童子に關白殿をはじめ、右大臣、内大臣、兵部卿隆親、二條大納言良教、源大納言通成、花山院大納言師範、右大將道隆、權大納言基良、一條中納言公藤、花山院中納言長雅、左衛門督通頼、中宮權大夫隆顯、大炊御門中納言信綱、前原宰相有資、衣笠宰相中將經平、左大辨宰相經德、新宰相中將具氏、別當公孝、堀川三位中將具守、富小路三位中將公雄、皆御階の東につきたまふ。西の第二の間より又前左大臣實雄、二條大納言經輔、前原大納言雅家、中宮大夫雅忠、藤大納言

爲氏、皇后宮大夫定實、四條大納言隆行、帥中納言經任、この外の上達部西東の中門の廊、これより下さま透渡殿打橋などまで若きあまれり。直衣にいろ／＼の衣重ねたまへり。時なりて舞人どもあまる。實冬の中將唐織物のさくらの狩衣、紫のこきうすき、きにて梅櫻をおれり。赤地のにしきのうはぎ、紅のほひの三ぎぬ。おなじひとへまよらの薄色の指貫、人よりはすこしねびたりしあなきよげと見えたり。大炊御門中將冬すけといひしにや、裝束さきのにかはらず、狩衣はひらおりものなり。花山院中將右大將の御子、魚陵の山吹の狩衣柳櫻をぬひものにしたたり。紅のうらぎぬを輝くばかりだみかへして、萌黄のほひの三きぬ、紅の三重のひとへ、浮織物の紫のさしぬきに櫻をぬひものにしたる、めづらしくうつくしく見ゆ。花山院少將たよするは櫻のむすびかりきぬ、白き糸にて水をひまなく結びたるうへに、柳櫻をそれむすびてつけたる、なまめかしくえんなり。赤地のにしきの表着かねの文をおく。紅の二きぬおなじひとへ紫のさしぬき、これも柳櫻をぬひもの、いろ／＼の糸にてしたり。

中宮權亮少將公重、唐織物の櫻萌黄のかりぎぬ、紅のうらぎぬ、紫のほひの三ぎぬ、紅のひとへさしぬき、例の紫に櫻をしろくわひたり。堀川少將基俊、から織物、うら山吹、三重の狩衣、柳たすきを青く織れる中に櫻をいろ／＼におれり。萌黄のうらぎぬ櫻をだみつけにして、わちがへをほそく金の文にして、いろ／＼の玉をつく。ほひつゞじの三ぎぬ、紅の三重のひとへ、これもはくちらす。二條中將經俊、これもから織物の櫻萌黄、紅の衣おなじひとへなり。皇后宮權亮中將實守、これもおなじ色のがば櫻の三ぎぬ、紅梅の三重のひとへ、馬頭たかよし、ろくたいの赤色の狩衣、玉のくよりを入れ、青き魚陵のうはぎ、紅梅の三きぬ、おなじ二重ひとへ、薄色のさしぬき少將實繼松がまれのかりきぬ、紅のうらぎぬ、紫の二ぎぬ、これもいろ／＼のぬひものおきものなど、いとこまかになまめかしくまなしたり。隆王の童に、四條大納言の子、裝束常のまなれど、紫のろくたいのはむまりかねのしん、赤地のにしきの狩衣、青き魚陵のはかま、まやく木のみなえりほね紅の紙にはりて、もちたる用意氣色、い

みじくもつてつてめでたく見え侍りけり。
 笛もちみち、たかやす、笙きんあき、宗賢
 萬葉行、太鼓鼓、鞆鼓あきなり、三の
 つよみのりより、左萬葉樂、右地久、陸王、
 輪盛、青海波、太平樂、入鏡、寅冬、いみ
 じく舞ひすまされたり。右落踏、左春鷹鳴、
 右古鳥蘇、後參賀殿の入やも賀冬まひ給
 ひしにや、暮れかゝる程に何のあやめに見
 えすなりにき。御方々宮たちわかれたまひ
 ぬ。

●いで又院の御賀に、この間白殿陸王、春
 宮太夫殿納蘇利舞はせ給へりしめでたまは
 いか、陸王はいとけだかく、あてに舞は
 せ給ひて、御蘇利はらせ給ひて、まひす
 て、知らぬさまにて入らせ給ひぬる、い
 つくしまめでたまに、ならぶ事あらじと見
 まわらするに、納蘇利のいとかしこく、又か
 うこそはありけりて見えて舞はせ給ふに、
 御蘇利をこれはいとしたまかに、御肩にかけ
 させ給ひて、今ひとかへりえしははず舞は
 せ給へりし、今日は又、かゝるべかりけ
 るわざかなとこそ見え侍りしか。御師の陸
 王は必御蘇利はすませ給ひてぞ、おなじま
 まにせさせ給はん、めなれたるべければ、

(増鏡)

(爲業)

さまかへさせ奉り給へるなりけり。心ばせ
 まさりたりとこそいはれ侍りしか。女院か
 うぶりたまはせしは、太夫殿をいみじくか
 なしがり申させ給へばとぞ、陸王の御師は
 たまはらでいとからかりけり。それにこそ
 北の政所、少しむつからせ給ひけれ。さて
 後にこそ給はすめりしか。かたのやうに舞
 はせ給ふとも、あしかるべき御年の程にも
 おはしませす、わるしと人申すべくも侍ら
 ざりしに、二所ながらこの世の人と見え
 せ給はて、天童などのおりきたるとこそ見
 えさせ給ひしか。

●折から定めなく富士の笠雲登えひろこ
 り、さしも今まで晴れたる天、俄にかきく
 りて一念雨のさよふり来るにぞ。御船を
 三穂の汀にこぎよせ、しばし時間をまち賜
 ふに、やがて雨止み雲をさまりて日もや
 西に斜なり。今の殺風浪に興も嬉きなんと
 す、とくく舞樂を奏すべしと命すれば、左
 中辨義資、權少將雅清、春宮權佐豊光など、
 豫てその伎を嗜める大宮人、管絃の席に臨
 み賜へば、もと天王寺の伶人なりし淺間左
 衛門照行、近ごろ赤松義則につきて、將軍
 家に扈從し奉り、此度の供奉にも召された

るが、太鼓の役に候じける。かくて堂下
 の立部圓雲の袖をひるがへし、繁絃急管の
 聲、一唱三嘆の調、融洩として正始の音に
 叶ひ、箏詠九奏すれば、風舞ひ魚跳り、天
 衆もこゝに來臨し、龍神も納受すべくにな
 る。

なる。南無師命月天子、本地大勢至。東遊
 の舞の曲、或は天つみそらの緑の衣、地に
 は春立つかすみの衣、色香も妙なり乙女の
 裳、左右左。さいふ風々の花をかざし、天
 の羽袖、なびくし返すし舞の袖。

(諸曲、羽衣)

●げにさまざまの舞の、聲しすむなり住
 の江の、松影しうつるなる、青海波とはこ
 れやらん。神と君との道すぐに、都の春に
 ゆくべくは、それぞ浪城樂の舞、さて萬葉
 の小忠衣、さす胸には感覽を拂ひ、なまむ
 る手には壽福をいだき、千秋樂は民を撫
 で、萬葉樂には命を延ぶ、相生の松風、嵐
 々の聲ぞたのしみ。

(諸曲、高砂)

て打かつき、手拍子人にはやませ、扇おつ
 取り鳴るは瀧の水、たえずとたりたえず
 とうたり、落ちくる瀧の、音羽の嵐に地主
 の櫻はちりん。

(後照)

●蝶舞ふや薪一把門ふさげ。(成美)
 ●月今宵あるじの翁舞ひ出でよ。(蘇村)
 ●脱げかけの袖や花みる舞子ども。(召波)
 ●寒聲や哀れ親ある白拍子。(几童)
 ●待宵やおのが酒ぐむ白拍子。(道彦)
 ●梅白し香口かぐす白拍子。(燈扇)
 ●夜神樂や水滸拭ふ舞の袖。(几童)
 ●舞ひそめて大人になりし足拍子。(作者不明)
 ●時宗が聲はり番の富士の嶺に夜討の音も
 ひよく拍子座。(花勝見)
 ●よはひなばのべん薬と菊水も舞ふ狸々の
 酒の蜜折。(春の屋)
 ●すみだ川たち舞ふ人にとよはは袖にも
 色のありやなしや。(六采園)
 ●花やかにうてる鼓も櫻もよしの舞が舞に
 合せて。(豊の屋)
 ●しばらくは舞台の松の蟬時雨袖ぬらじけ
 り鬼のわけがら。(萬久住)
 ●舞ひぶりを枯れにし鳥のかつら帯色なき
 冬の山姥の袖。(梅屋)
 ●風が笛吹けば木の葉が舞をまひ。(川柳)
 ●すつぽんをりやうれば母は舞をまひ。(同)

●白拍子びしや門さんへなどしやれ。(同)
 ●八陣の出口にまよふ白びやうし。(同)
 ●登はらひぢや〜馬ほどに舞をまひ。(同)
 ●船子ども舞を覗いてしかられる。(同)
 ●角兵衛獅子五百が舞で立ちらみ。(同)
 ●かなへ舞を見なさいなと初手はいひ。(同)
 ●猶どのと云はれて公家鼠まひ。(同)
 ●賞檢を見て寐そびれる白びやうし。(同)
 ●よしや世の中、花に戯れ枝に臥し、雄獅子
 子獅子の、あなたへひらり〜なたへひら
 り〜、ひらり〜とまひ遊ぶ。
 八しき九しきの奮迅の亂拍子は、それで我
 々も、心亂れて足たまたらず、漣の音の、
 下は泥梨の白波の、虚空を渡る如くなり。
 (俗語)
 ●月を見ればやといでその頃は、秋のしなか
 の盛りゆひ黄菊さへ、夜は白きくの白拍子、
 口笛ふいて男舞、女の身にしきも情からの、
 匂ひ扇やさし扇、返す〜も舞の袖。(同)
 ●二の舞。(但遊)

●なれ、舞。
 ●人に舞はさる。(同)
 ●椽の下の舞。(同)
 ●我昔元和侍、愚皇、曾陪内宴宴、昭陽、
 千歌百舞不可數、就中最愛霓裳舞、舞
 時寒食春風天、玉鈞欄下香案前、舞者顏
 如玉、不著人家浴衣服、虹裳霞帔步搖
 冠、細腰束素珮珊珊、嬋娟似不勝羅綺、
 顧態樂懸行復止、繁華爭前競擲、
 擊遍遊散、序六奏末、動衣、陽臺宿雲備
 不飛、中序擘騷初入拍、秋竹竿裂春冰
 拆、飄然轉旋迴雪輕、嫣然縱送游龍驚、小
 垂手後柳無力、斜曳裾時雲欲生、煙蛾欲
 暗不勝態、風袖低昂如有情、上元點燈
 招聖錄、王母揮袂別飛瓊、繁音急節十二
 遍、珠璣燦玉何鏗鏘、翔舞舞了却收翅、
 喉曲曲終長引聲、當時乍見驚心目、疑視
 諦聽殊未足、一落人間八九年、耳冷不曾
 聞此曲、淪城但聽山歌謠、巴峽住聞杜鵑
 哭、移領錢塘第二年、始有心情問絲
 竹、玲瓏猶憶謝好琴、陳龍常樂沈平筆、清
 絃脆管纖纖手、教得霓裳一曲成、虛白亭
 前湖水畔、前後祗應三度接、便除庶子拋却
 來、問道如今各星散、今年五月至蘇州、朝

鐘磬角韻、白頭、負春寒、嚴霜侵夜、不聽
 笙歌、直到秋、秋來無事多、問閣、忽憶霓
 裳無處問、聞君部內多、樂徒、問有霓裳
 舞者無、答云十縣十萬戶、無人有、知霓
 裳舞、唯寄長歌與我來、題作霓裳羽衣譜。
 四幅花鈿碧羅裙、霓裳在、其中、千姿萬狀
 分明見、恰與昭陽舞者同、眼前粲然觀
 形質、昔日今朝想如一、疑從魂夢呼
 召來、似者丹青圖寫出、我愛霓裳君合
 知、發於歌詠、形於詩、君不見我歌云
 驚破霓裳羽衣曲、又不見我詩云曲盡霓裳
 未拍時、由來能事皆自有、主、楊氏制、聲君
 造、譜、君言此舞難得、人、須是傾城可憐
 女、吳妖小玉飛作煙、越麗西施化為土。
 嬌花巧笑久寂寞、娃館尋羅空處所、如君
 所言誠有是、君試從容聽我語、若求國
 色、始翻傳、但恐人間廢此舞、妍媸優劣
 相遠、大都只在人擡舉、李娟張態君莫嫌、
 亦擬隨宜且教取。(白居易)
 ●列伎羅傾城、名唱列綺羅、候、歌嬌風
 止、移、扇綵鸞生、扇袖增新態、迴、腰出
 艷情、盼、頭花裏笑、折、體柳前輕、疾、轉含
 通領、歎、低雜、怨、迎、風、塵、纖、欲、舉、雲、輕、出
 多、榮、趙、女、春、借、麗、巴、妃、月、並、盈、楚、女、稱

嘆歎。梁簡賦音成。珠翠參差罷。高堂未
 解。 (黃香曾)
 ●舞袖瀟瀟粉黛。可憐心曲笑中悲。朱
 唇一闌纖絲唱。不補當年尺布裙。
 (曹茶山)
 ●道履散香散。濕衫劍響傳。低級依促管
 受。 (劉孝儀)
 ●嬌情因曲動。弱步逐風吹。懸鏡隨舞
 落。飛袖低鬟垂。 (梁簡文帝)
〔まゆ〕眉
 眉目。柳眉。蛾眉。秀眉。畫眉。
 愁眉。双蛾。粉黛。
 まゆね。柳の眉。月のまゆ。花
 の眉。眉さかだつ。まゆすみ。
 眉に霜おく。眉を開く。
 ●おん顔のやうだい、ほそくもあらず、ふ
 くらにもあらず、まよほどなるが、中少しも
 りたる心ちして、御色の白きは琥珀白玉と
 いふとも、これには優らざりけんと思ゆる
 に、愛敬いみじく匂ひ着りて、眉のよりけ
 だかく見なし給ふに、唇はにといふものゝ
 りたるやうに、いさゝかもしねぢけたる所な

く、あたりまでも匂ひて、髪上げ麗しき御
 さまにて、長閑に泳み出でつゝ琴をひき給
 ふ。
 ●長月の夜、古郷にかへりぬ。北堂の萱草
 し霜枯れはて、今は跡だになし。何事し
 昔にかはりて、はらからの髪白く、眉黛よ
 りて、只命ありてとのみ言ひて、詞はなき
 に、兄の守鏡をほどきて、母の白髮拜め
 よ、浦島が玉手箱、汝が眉もや老いたり
 と暫く泣きて、
 手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜。
 (芭蕉)
 ●すべてつくるふ所あるはわろしとて、眉
 更にぬき給はず、幽黒更にうるさし様しと
 てつけ給はず。いとしるらかに笑みつゝ、
 この處どもを朝夕に愛し給ふ。人々恐ぢわ
 びて逃ぐれば、この御方は、いと怪しくな
 らんのでしりける。かく恐づる人なば、けし
 からず、はうぞくなりとて、いと眉黒にて
 なんん覗み給ひけるに、いと心地なん感ひ
 ける。
 (堤中納言物語)

見えず。花又日かげに随つてしづみ、日は
 嵐山にかたぶきぬ。あだなる世の中に、白
 駒もすぎやすく、金烏も留めがたし。され
 ば何とてしはしが程も、徒としてすこせる
 や。額にはすするに老の涙を重ね、眉には
 霜のつもれるをも辨へずして、はかなき嬰
 兒の父母に、食するごとくにして、むなし
 くはせす。
 (西行)
 ●秋深けれども東籬の菊なく、門狭うして
 五株の柳を見ず。とばかりだにも哀なる
 のうへを、一つ二つにやならんすらん。色
 白く辱くれなぬに、眉秀で居長高く、さか
 やきの迹眞黒に延びたる、髪は鬘の替して
 わけず、後ざまに放ちたるは、彼白河の安
 珍にも似たらんか。
 (馬琴)
 ●嫁姑たる兩髪は秋のせみのはね、婉轉た
 る雙蛾は遠山の色、一たび咲めばしもの、
 びなり、見きく人皆腸をたつ。
 (光行)
 ●げに百萬が姿は、本より長き黒髪を、荆
 棘のごとく亂して、落りたるまほし引かづ
 き、又眉根ぐるき亂髪、うつし心か付鳥、
 蓋かれと人はそひもせで、思はぬ人を尋ね
 れば、親子のちぎり麻衣、眉を結んで袂に

さげ、すそを結びて肩にかけ、延功、菅麿のみだれ心ながら、南無釋迦彌陀佛と、信心をいたすも我子にわはんためなり。

まこと優なる有様の、いつ其ほどにひきかへて、頭には霜蓬をいたよき、嬋妍たりし兩髪は、はだへにかじて髪みだれ、艶々たりし雙蛾も遠山の色を失ふ。

彼昭君の黛は、緑の色に匂ひし、春やくるらん糸柳の、思ひ亂る、折毎に、風もるともに立ち寄りて、木陰の塵を拂はん。

俄に行儀改めて、云ふべき事も跡や先、常々と様のおつしやるには、雙前の國毛谷村の六助といふものこそ、劍術勝れし器量の若者、行末はそらとめ合せ、吉岡の家を相續させんと、音信通じ置きたるぞと、仰を守る此年月、はたの上を越えながら、眉をそのまゝいかなこと、鍛錬も含まぬ耻かしき、推量なされて下さんせ。

二位殿を始めとし、人々耳を驚かし、あきれ果てたる計りなり。教経層に歌をよ

せ。東國北國のそむく上、南海西海盡く敵となり、急なる事肩に火の付く同然、病氣のさはり入道殿へは、沙汰無用、宗盛公へ参上し、一門をあつめ、討手の手分いたさんと、言ひ捨て御所を退出ある。

この髪は誰が結ふた。萬が細工と見たたの。髪がまちつと下つた。額も險で愛想がない。つとの出し様髪つきで、ようも思つも見せるもの。顔の道具相應に、肩が女子の大事の物、前髪もかうで無い、母が直して遣りましょ。

眉根かきはなひもとけてまてりやも、いかも見んとこひこしわれを。

うき身には柳をあめるかひもなしさらぬ人だにまゆをひらくに。

春の口の影そふ池の鏡には柳の眉まづは見えける。

深澤のよまのま嶽の墨をとりて、つま少女は眉つくりせり。

あしや濁る拾ふ子に、ことはん眉ひきたりや紀路の遠山。

萬代を君ともなふときくれば花の眉しとひらくあき哉。

庭の梅はひりの柳ちよふともまひ眉びきふりせざるらん。

さしかざす扇のつまのはつゝに眉のにほひぞこぼれかゝれる。

霞たつ遠山眉のまゆこもりこもれる花はいぶせくもあるか。

行すゑや桃に對する眉長し。

眉ばかり出して雙媛の鬮扇哉。

白太の眉かゝれたる日永かな。

二十とせの小町が眉に落花哉。

寒食や蠅立去らぬ眉の上。

仁和寺や薊の名をも眉作り。

何處やらで眉書かれたる女猫哉。

眉ひらく爲に手向けよかきつばた。

鏡の聲霜をなす夜の眉重き。

埋火や眉焼くばかり小夜更けし。

盛とて眉からも蚊のこぼれけり。

眉毛から陽炎のたつ木間かな。

ゆぶ立はうれしくはれてみどりなる虹もや空のよるこびの眉。

「まよひ」迷

迷妄。迷惑。迷亂。昏迷。沉迷。迷ふ。まよひ。まよひいづ。わけまよふ。

去る程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上をはじめ進ませ、宮々御相雲客、皆歩跳なる體にて、いづくを指すともなく、足に任せて落ち行き給ふ。此人々、始二町が程こそ、主上を扶け進らせて前後に御伴をも申されたりけれ。雨風烈しく道闊くして、敵の鬨の聲此處彼處にきこえければ、次第に別々になりて、後には只藤房季房二人より外は、主上の御手をひき進らする人もなし。悉くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。如何にもして、夜の内には赤阪の城へと、御心ばかりを盡されけれども、假にも未習はせ給はれ御歩行なれば、歩路をたどる御心地して、一足には休み、二足にはたち止まり、晝は道の傍なる、青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は入

宗増 してみゆる朝顔。

なかくに尾花が下の夕風におのが眉毛をぬらす野狐。

たなやめの息の置しかゝるなり鏡にうつる眉の遠山。

御車の牛さへ見えて雲の上星あらはるゝみや人の眉。

蚊のまつ毛集をくふものゝありといふうそには己が眉をわらしつ。

春の色あるたなやめが白粉の雲間にまゐる眉の遠山。

梅姫の顔のけはひのうす霞山のまゆを引きにけるかな。

風あれて心痛なる船人はひそむる眉の涙もたかしな。

片眉毛落とす嫁は手でふまき。

眉毛をば取置にする娘あり。

かく鼻は眉をひそめて言上し。

相毛ぬきながら禿をいぢめてみ。

花六の眉毛めうがの形にはえ。

餅じきに懸し交せて落す眉。

招けど歸らず雙蛾へ入る月の眉。

蛾眉をひそめて産月を嫁案じ。

新世帯背い眉と火吹き竹。

も道は野原の露分け迷はせ給ひて、羅敷の御袖をほしめへず。とかうして夜遊三日に、山城多賀の郡なる有王山の麓まで落ちさせ給ひけり。(太平記)

●徒然わぶる人は、いかなる心ならん。まざるゝかたなく、唯一人あるのみこそよけれ。世に随へば、心外の塵に奪はれて感ひ易く、人に交れば、詞よその間に隨ひて、さながら心にあらず。人に戯れ、物に争ひ、一度は怨み、一度は悦ぶ。その事定まれる事なし。分別妄に起りて、得失やむ時なし。感の上に醉へり。醉の中に夢をなす。走りて忙はしく、惚れて忘れたる事、人皆かくの如し。(兼好)

●かゝればふりにし事を思ふにも、なほさりともし、かてか三皇今上あまたおはします。玉城のいたづらに亡ぶるやうはあらんと、たのもしくこそおぼしに、かくいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世ひとつの事にもあらざらめども、迷のおるかなるまへには、なほいとあやしかりし。(増鏡)

●徒に明しくらす春秋は、たゞ羊の歩なる心地して、末の露、木の葉に、後れ先だつ

例の、はかなき世を且思ひながら、得逢の縁には進まず、皆生々世々に迷ひぬべき人間の八苦なるぞあさましき。(中務内侍)

●是は葛城山に住む女にて候ふ。柴採る道のかへるさに、踏み馴れたる道ひ路をさへ、雪のふりきにかきくれて、家路もさだかにわきまへぬに、ましてや知らぬ旅人の、末いづくにか、雲の山路に迷ひ給ふは、いはしや。見苦しき候へども、わらはが庵にて一夜を御あかし候へ。(謡曲、葛城)

●凡心なき草木、情ある人倫、いづれおはれを遁るべき。かくは思ひ知りながら、ある時は色に染み、貪着の思淺からず。又ある時は聲を聞き、愛執の心いと深き、心に思ひ口にいふ、妄言の縁となる物を、實にや皆人は、六塵の境に迷ひ、六根の罪を作る事と、見る事聞き事に迷ふなるべし。(謡曲、江口)

●武士の、八島に入るや櫻弓の、もとの身ながらまたこゝに、弓箭の道は迷はぬに、迷ひけるぞや生死の海山はなれやうで、歸る八島の恨めしや。(謡曲、八島)

●實にや人の親の心は闇にあらねども、子な思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、

道行人に言づて、ゆくへを何と尋ぬらん。(謡曲、隅田川)

●ゆふべあしたの憂き勤め、花一時の詠めとは、知れども迷ふ數々の、文に染めても破は薄く、思ふ方へと駿河なる、富士も麓の戀の山、我れ踏み分けてわれ迷ふ、夢の中戸の夢枕、月を情みし夜半もあり。(浄瑠璃、夕霧)

●夫婦を二世と聞くなれば、あの世で添はんこなたへと、さいごないそぐ死出の旅、雲かあらぬか無常の煙、あすは二人でいづくの雲、いづくの煙と立ちのぼり、めいどは六つのちまたにて、迷ふまいぞや迷はじと、いそぐ心の細道を、行ては歸り歸りては、菜種の花にむら／＼、むら／＼ばつと蝶々の、露に染しむ我々は早、しのよめの山かづら、明方づぐる聲々の、鳥部山にぞつきにける。(浄瑠璃、忠臣講釋)

●驚の山月を入りぬと見る人はくらきに迷ふ心なりけり。(西行)

●まどひ來て悟りうべくもなかりつる心を知るは心なりけり。(同)

●さとの道迷ふ街とわかれてもおのが、るの外にやはある。(聖光上人)

●散りぬれば後は芥になる花と思ひ知らずし迷ふ蝶かな。(讀人不知)

●人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな。(兼輔)

●むさしのよはてしもしらす紫のひともとゆゑにわけまよひけり。(枝直)

●いづくにか世をばいとほ心こそ野にも山にも感ふべらなれ。(素性)

●生ひ初めしむねの蓮の開けずはしとのうきにや又まどはまし。(蘆庵)

●いつかわがもとの佛の位山まよへる雲のみねにかへらん。(契沖)

●闇の夜や蝶を迷はして鳴く千鳥。(芭蕉)

●存死なば花に迷はん後の闇。(許六)

●朝日さす紙報の中や蚊の迷ひ。(丈草)

●何迷ふ彼岸の入り人たかり。(鬼貫)

●百八のかねで迷ふや闇の梅。(其角)

●山木や鹿の子迷はす鶴のかより。(曉吉)

●落ちしはてす迷ひ廻るや雨の雁。(櫻真)

●道に迷ふ酒癖むじくりなく。(西石)

●迷子も死ぬまい時ぞはこべ吹く。(道彦)

●山寺や子に迷ふ親の衣配。(一茶)

●夏草のゆかりは誰ぞむさし野をはてなく迷ひありくみどり子。(ねつき)

●旅ながら迷ふ心のやみの夜に子よりも親は泣ぞあかさん。(菅調)

●とき給ふのりの力にあらすしてしやうじの迷ひいつかはるべき。(有風)

●尋ね入りて迷ふ道より名所よりきよてうれしき山ほととぎす。(藤家)

●仙人のおのれと道に迷ふかな山の端ふかくきりかゝりては。(白圭)

●唯ひとり戀の山路にまよふ哉我が思ふ人のつれもなければ。(隙也)

●友とても夏野に迷ふなでしこのかはらで居ると親にしらせん。(やすまる)

●月夜かと迷ふもなかし垣根より一寸先はやみの卵の花。(康澄)

●提灯のこゝとみちびく地蔵會や所々のなどりに迷ふちまたな。(繁雅)

●月花にまご／＼迷ふぞおもしろきさとり過ぐれば春秋もなし。(赤良)

●子をつれて必と路頭に迷つて居。(川柳)

●若後家のふしやうぶしやうに子に迷ひ。(同)

●氣の迷ひさと取りかへる鬮賣。(同)

●寺参り道なわすれて後家迷ひ。(同)

●六あみだ此世の道に敵迷ひ。(同)

●六波羅の和尚も迷ふ生佛。(同)

●應樂の幽靈僞筆かと迷つてる。(同)

●人道も匂ひに迷ふ佛店。(同)

●妖狐より人の毛ものに皆迷ひ。(同)

●梟の側へ僧正迷うて出。(同)

●かねてより、うかるゝ浪や鴨川の、ながれの里の夕げしき、しらぶる糸の音にひかれ、かよひくるわもなきの道に、踏みはたどらじ迷はじと、おしひながらあぢきなや。(俗説)

●いとまさを、おもへば影にそふものを、まよふが中の迷とは、千々にものこそやるせなや。(同)

●花に蝶々はさて氣がもめる、來てはちら／＼迷はせる。(同)

●子故に闇に迷ふ。(同)

●迷はんよりは問へ。(同)

●計人之所知、不若其所不知。其生之時、不若其未生。以其至小、求窮其至大之域、是故迷亂而不能自得也。(莊子)

●黄帝將見大隗于具茨之山、方明爲御、昌寓驂乘、張若謫明、前馬昆闕、滑稽後車、至於襄城之野、七聖皆迷、無所問途。

- 光影所照。至目眩不得見。音響所來。至耳亂不得聽。百骸六藏。悖而不凝。意迷精喪。(列子)
- 善人者。不善人之師。不善人者。善人之資。不貴其師。不愛其資。雖智大迷。(老子)
- 津橋東北斗亭西。到此使三人詩思迷。(白居易)
- 洞中履屐香分攜。不是花迷客自迷。(李商隱)
- 雲涯一里千萬曲。直是瀛壖行也迷。(陸龜蒙)
- 竹寒沙碧澗花溪。橋刺藤梢咫尺迷。(杜甫)
- 傾欲乘風登日觀。蒼茫海色使人迷。(徐中行)
- 沒々愁寒起。蒼々別路迷。(江總)
- 雁寒秋聲遠。龍沙雲路迷。(張正見)
- 盤從石上起。客到花間迷。(李白)
- 短棹晚烟迷。(戴叔倫)

身ノ部

〔身〕身。身體。身後。身命。立身。修身。獻身。化身。忘身。謹身。隱身。つゆの身。うき身。身の上。あだなる身。身をすつる。身の程。

●そのあとにしも携はりて、三人の男兒どし。百千の歌の古反古どもを、いかなる縁にかありけん、預りもたることもあれど、道を助けよ、子をはぐりめ、後の世を吊へとて、深き契をむすびおかれし細川の流も、故なくせきとめられしかば、跡とふ法の燈火も、道を守り、家を助けん親子の命ももるともに、消を争ふ年月をへて、危く心細きものから、何としてつれなく、今日まではながらふらん。惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子と思ふ心の間は、猶しのびがたく、道をかへり見る恨はやらんかたなく、さてもなほ、あづまの鏡の鏡にうつさば、くもり影もやあらは

るよとせめておもひあまりて、萬のよかりを忘れ、身を益なきものになしはて、ゆくりもなく、いさよふ月にさそはれ出でなんとぞ思ひなりぬる。(阿佛尼)

●草木の色さへ、見しまよにもあらずなりもてゆく。まぐれん程の久しきも、まだきに覺ゆるに、風に心苦しげにうちなびきたるには、只今も消えぬべき露のわが身、あやしう草葉につけて悲しきまよに、奥にも入らで、やがて端に臥したれば、つゆ年経べくもあらず。(和泉式部)

●もし又我を慕ふ魂の、かへり來りてかたりつるものか。思ひしことの露だがはざりしよと、更に涙さへ出でず。我身一つは故の身にして、あゆみ廻るに、むかし團房にてありし所の簫子をばらひ、土をつみて端とし、雨露をふせぐまうけもあり。夜の雲はこよもよりやと恐しくも且なつかし。(秋成)

●昔男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京にはならじ。東の方にすむべき所求めにとて往きけり。(伊勢物語)

●我草木の花に心を染め、梢に遊ぶ身にし

- あれども、深き空みのある身なり。などやらん昔より、梅の盛に逢ひもせて、來る春毎に悲の、涙し色し紅の、梅花に縁なき此身なり。(謠曲、胡蝶)
- 百千鳥、花になれゆくあだし身は、はかなき程にうらやまれて、うはの空の心なれや、うはの空のこころなれや。(謠曲、右近)
- 人の國までとぶらひの、哀を知れば常ならで、なき世を思ひのかす、に、餘りわりのなき戀心、身をくだきて、いやましの、戀草のみだれなりとかや。(謠曲、小督)
- 夫身を觀すれば、岸の顔に根を離れたる草、命を論ずれば、江のほとりに繁がさる舟。(謠曲、大原御幸)
- 捨つる身を捨てぬほくしは子ゆゑのやみ、空しあやなき曉の、髪し形も背のまよ、世のうさつら悲しさを、いはぬ色なる山吹御前、月さへ四に落人の、桂の里のなんぎより、しるべの方に一夜二夜、あかしくらせど忍ぶ身は、都ぢかくしものうしと、けふ思ひ立つ俄旅、人目をはづる取りなりは、身にはよもなき麻衣の、木曾路をさして行く道の、あゆみくるしく眞砂地を、よむ計りなる桂川。(淨瑠璃、盛衰記)

●いたづらにとしなふるえのうき中はみをつくしてしかひやならん。(宣長)

●をしも共惜まれぬべき此世かは身をすてふこそ身をばたすけめ。(西行)

●頼みにし我心にすてられて世にさすらふる身をいとふ哉。(家隆)

●うしとのみいとふさへこそ哀なれあるものとやは身を思ふべき。(寂蓮)

●おとなしの瀧を心にせくよりは岩うつなみにくだくはや身を。(契沖)

●うれしきはとにも人のいふめれどうきななげくは身一つにして。(たみ子)

●よしや身は世のありさまにまかせなん心のおくなかくれがにして。(藤原)

●まつかひもなくていくよか明けぬれば身はあさかげとなりまさりける。(諸島)

●身をつみて思ひやしると心見になが爲つらき人もあらん。(雅兼)

●こひわぶる心は空にうきぬれど涙の底に身は沈む哉。(實房)

●今は身を水に任すや秋の歌。(几童)

●野ざらしを心に風のしむ身哉。(芭蕉)

●身に入るや横川の衣をすまず時。(蘇村)

●一時に散る身で梅の座論哉。(來山)

●ふとる身の植まおくれたる早苗哉。(魚目)

●裸身や紙帳の中の薄月夜。(車府)

●冷たさの身にさし通す冬の月。(杉風)

●旅の身に添ふや數寝の駕蒲團。(太禰)

●爪に頭巾忘れて憂き身哉。(召波)

●月影に身を狂しけり鉢叩。(存養)

●親もなし子もなし跡に淺しなからだ計りはからりちんなり。(成安)

●いたづらにぞれ歌よみとなりけり身にはをかきふしもなくして。(橋洲)

●何一つ覺えし事のあらぬ身は忘るよせわのなきぞ樂なる。(龜人)

●こよも一夜かしの一夜さう鳴きの身はうぐひすと飛びありくなる。(はね戻)

●借鏡も病もちよとあるものを物もたぬ身と誰かいふらん。(貞徳)

●から猫の三すぢの糸につながれて何の因果にばちあたる身ぞ。(杵原仙女)

●筆とりてかくもやつる、髮髯の山路をふみそめし身は。(陸起)

●ゆたかなる代にすみなから煤掃きの今日身一つ置所なき。(有也)

●忘らるゝ我身は露ときえもせん枕につも

る塵芥川。(文斗)
 ●野雲隱身ながれんと前へ出る。(川柳)
 ●なまきずはがき大将の御身のうへ。(同)
 ●有明の月と詠めても配慮の身。(同)
 ●同行は身ながれんと前へ引。(同)
 ●尼寺へ行つて我身にして歸り。(同)
 ●老はれの鏡照り除に身をやつし。(同)
 ●兼てなき身とおもつてゐる外科の脈。(同)
 ●井戸端で身ぶりが過て下女すべり。(同)
 ●北州の千年つかひ過ぎたる身。(同)
 ●おのが身をわなめくよとよぶす。(同)
 ●なりさがる狐で身はなり上り。(同)
 ●よしやわざくれ身は朝顔の、日かげまつまの花のいる、恨みられし、恨みし人も、共にさえゆく野邊のつゆ。(俗語)
 ●わきてつれなき人ゆふ我は、くらすりかげの朝がほか、露は秋におきあまれども、かひも涙の身ぞつらき。(同)
 ●一寸の舌で五尺の身を損す。(俳語)
 ●身にまさる言なし。(同)

●兩方立てれば身が立たず。(同)
 ●身さへ心に任せぬ。(同)
 ●口に三度身を省る。(同)
 ●人を怨むより身を怨め。(同)
 ●不失其身、而能事其親者、吾聞之矣。失其身、而能事其親者、吾未之聞也。(孟子)
 ●聖人後其身、而身先。聖人外其身、而身存。(老子)
 ●誕中界有七千首、不負百年風月身。(陸游)
 ●嗟唱一聲驚夢斷。始知身在釣魚船。(同)
 ●忽如劍瘡盡。初起百戰身。(孟郊)
 ●布衣天地秀。皆是天地身。(同)
 ●行李千金贖。衣冠八尺身。(杜甫)
 ●世間難得自由身。(羅隱)
 ●鬢霜時節尚官身。(范成大)
 ●龍蛇之蟄以存身也。(易經)
 ●默得冥時、則保身。(馮川之)
 ●最好身閑真是樂。(放翁)
 ●身閑當貴。(白居易)
 ●治身清素。(申屠嘉)

●五月まぢつたたる花桶の香も、昔の人、ひしう、秋の夕に劣らぬ風にうらむひたるは、なかしうも哀にも思ひ知らるゝを、山郭公も里なれて語らふ。三日月のかけほのかなるは、折から忍びがたくて、例の宮わたりにおとなはほしう思さるれど、かひあらじとうち歎かれて、あるわたりの猶情あまりなるまでと思せど、そなたは物うきなるべし。(堤中納言物語)

●とほ山寺の入相のかけ、時にかへる夕鴉も、いつしか聲しづまりて、むかへる文巻もやう／＼見えすなりゆくに、心ゆくわたりはいとくちをしきものから、しばし打おきて、はしの方にいづれば、くれのこれる梢どもの、ほのかなる山のはに、はつかにあらはれたる三日月のかけこそいとをかしけり。

「みかづき」三日月

けれ。背さぎとかやいふ鳥のあやしき聲に、なきゆくが、あとなくしものさびしげなるを、こんといひつる友はた、くれ過してやとおしふもこゝろもとなきに、ともし火かかげたるこそまづうれしけれ。(廣足)
 ●なご寺にやすらふ頃、日のいりて空も涙も紅にそめたるが、白く三日月のみゆるに、くろく富士の高根のそびえたるにぞ、うかりし事しわすれにける。歌よみしもまた忘れぬ。(定信)
 ●青陽の春の始には、霞む夕の遠山、蕉の色に三日月の、影を舟にも誓へたり。又水中の遊魚は、釣と疑ふ、雲上の飛鳥は、弓の影とも驚く。一輪も降らず、萬水も外らず。(播磨、麻)
 ●往昔旅行天皇、鹿島詣での浦遊び、世の中の女の心、この蛤の貝の如く、いくらよせても一對の、外に合はずあらまほしと、御殿の勅諭より、今の世に至る迄、貝合せと名づけ、兩夫に見えぬ教訓の女の手業、今引分けて互のかたみ、三日月なりの影薄き、契は回り合ふまでと、渡すも涙かとり、思ひし事は皆ぐりはま、甲斐なき貝の眼見か、かつばと代して泣き給ふ。

●咄に紛れてすつぷりと、日が暮れてあるに氣がつかなんだ。三日月様が上つてござる。宵月夜で行程も入らぬ。御あかしを御にして辻堂の雨舎り、お客様ももうお休み、足延ばすと壁につかへる奥座敷、緩りとちよかまつて御寝なりました。(浄瑠璃、伊賀越)
 ●はつ割のふりすまいたる雲間よりながむかひある三日月のかけ。(慈蓮)
 ●三日月もおくらぬ宿にいかにして存をむかふるよはの埋火。(寂蓮)
 ●部よりたづねいくの、花薄ほのかにてらす三日月のそら。(定家)
 ●袖のうへの露をたづねて三日月のかけばかりだにほのめかしてよ。(千隆)
 ●あはずしてけふ三日月の眉引を妹がおもはにみんよしもがな。(同)
 ●ほのかだにあひ見ぬほどは三日月のわれやまめやはかたこひにして。(たみ子)
 ●三日月のほのかに見てしかげゆるに入ろさの山もこえんとぞ思ふ。(保宣)
 ●わすれぬもうしや雲るに三日月のほのかなりつる人のおもかけ。(兼隆)

●初秋の梢をわたるかざの上にとらるかと思ゆる三日月のかけ。(言道)
 ●おぼつかな塵ばかりなる浮雲にかくれば、てたる三日月のかけ。(景樹)
 ●おぼつかかな木間に見ゆる三日月のちるばかりなる木枯の風。(同)
 ●淡路島沙干はくれて三日月。(許六)
 ●芋もや、實の入る程に三日月。(鬼貫)
 ●駒曳の木竹や出づらん三日月。(去来)
 ●三日月の舟行く方や西の海。(太紙)
 ●蜀黍の葉かげしうし三日月。(曉台)
 ●蜻蛉や狂ひ静まる三日月。(其角)
 ●あだ草も穂に穂が咲いて三日月。(一茶)
 ●三日月や風にくるゝ尾長鳥。(乙二)
 ●三日月の影踏み濁す蛙かな。(几董)
 ●大佛をあすは見る日に三日月。(也有)
 ●青柳のみどりの髪をすきおろす柳は銀むね三日月の影。(釘武)
 ●天の月もよるのしまりのあればこそびんと空鏡おろす三日月。(鬼守)
 ●くひかきしやうななりとて三日月は西山のはにかゝりつるかな。(萬庵)
 ●打よする波にたよふつり舟はさくらを

出づる春の三日月。(廢物)
 ●三日月のかけはさながら久かたの後の海
 の沖の釣舟。(琴足)
 ●御願をばよひにちらりと三日月のそれよ
 り懸の間とこそなれ。(健屋)
 ●つりばりの形と見えてあま小舟初瀬の山
 にかゝる三日月。(乗安)
 ●三日月のかまのは山にかゝる頃かりとる
 夏の草むらの鹿。(千種庵)
 ●三日月の影と光をくらべたし登尺貳寸村
 のむら長の霞。(百餘齋)
 ●うつるやとすかして影を三日月のほそく
 流るゝ清水涼しき。(誦道堂)
 ●すゝまかゝる鎌三日月の見えがくれ。(川柳)
 ●三日月はやせて出る筈やみあがり。(同)
 ●切りおとし背い三日月ぶつゝける。(同)
 ●三日月に蛙一句しいてばこそ。(同)
 ●刻み午房は三日月に身をひねり。(同)
 ●口斗り三日月なりに蛙あき。(同)
 ●木隠れの釣花活に三日月。(同)
 ●曲水の跡へ流れる三日月。(同)

●村芝居三日月の時録を出し。(同)
 ●三日月ですべてつて轉ぶ夕涼。(同)
 ●辻君の絶えぬ流の思川、戀にはほそる柳
 かげ、しばしとめたき三日月の月、師のむね
 さへ小夜風に、さらりと解けし洗髪、結ん
 で清き水の音。(俗語)
 ●庭の白菊やちよの露の、間へも入らぬ三
 日月の月、びんとすねては袖から袖へ。つい
 風かよふ神ならで。(同)
 ●主は三夜の三日月様よ。背にちらりと出
 たばかり。(同)
 ●入夜天四見。蛾眉冷。紫光。潭魚驚。釣
 落。雲雁怯。弓張。隱々。珠箔。微々。上
 粉。更。三。五。夕。仙。桂。滿。輪。芳。(方干)
 ●既從碧雲上。復傍綺窗移。願得長
 如此。教人學畫眉。(裴凱)
 ●禁鼓初聞第一敲。臥看新月出林梢。誰
 家寶鏡初磨出。阿小參差豈不交。(羅隱)
 ●廣捲西風。小院門。玉階涼。動近。黃昏。
 蛾眉一曲橫。天半。疑嬌娥指爪痕。(莊紫聲)
 ●太液池邊看月時。好風吹動萬年枝。誰
 家玉匣開。新鏡。露出清光照子兒。(盧多遜)

「みそぎ」禊

齊戒。沐浴。禊齊。幣帛。威儀。
 みなつき祓。なごしのはらひ。
 人がた。川やしろ。ゆふかけて。
 みそぎ川。麻のゆふしで。すつ
 る茅の輪。みわするまつる。
 ●さて車かけて、そのまきにさしいたり、
 車引き添へて祓しにゆくまゝに見れば、風
 うちふきつゝ、涙たかくなる。行き交ふ舟
 ども、帆をひき上げつゝゆく。濱づらに男
 子ども集り居て、歌仕うまつりてまかれと
 いへば、いふかひなき聲ひきいで、うた
 ひてゆく。祓のほどにぞ、たいになりぬべ
 く、半來るいとほど狭きまきにて、下の方
 は水際に車たてたり。皆おろしたれば、波
 によせて、なごりにはなしと、いひふるし
 たるかひもありけり。後なる人々は、落ちぬ
 ばがりのさきてうちあらずほど、天下に見
 えぬものども、取りあげ交せて騒ぐめり。
 若き男子も、ほどさし放れて、並み居てさ
 々なみや、志賀の唐崎など、例のかみ落ぶ
 り出したるも、いとをかしう聞えたり。風

はしみじう吹けども、木かげなければいと
 あつし。いづらか清水にと思ふ。未ばかり
 にはてればかへる。(道綱母)
 ●やよひのついでにいできたるみのひ、
 けふなんかくおぼすことある人は、みそぎ
 し給ふべきと、なまさかしき人の聞ゆれ
 ば、海づらもゆかしくて出でたまふ。いと
 おるそかに、せんじやうばかりを引きめぐ
 らして、この國にかよひける陰陽師めし
 て、はらへさせ給ふ。舟にことごとくしき
 人がたのせてながすをみ給ふにも、よそへ
 られて、
 ●しらざりしおほ海のはらにながされて
 ひとかたにやはしのはかなしき、
 とてふたまへるさま、さるはれいにいで、
 いふよしなく見えたまふ。(紫式部)
 ●大祓とて百官ことごとく、朱雀門に集ひ
 て、いかめしう行はせける事は、今は絶え
 果てにけれど、猶そのかた片田舎に残り
 て、里社の御前に人形を作り茅の輪をく
 り、又川邊にいで、い申立て渡し、麻の
 葉を切り流しなどするわざ、げに犯し
 けん罪咎も失せつべうおぼえて、いともし
 とも清々しけれ。川づらを見やりて、

上つてにい申をたて、下津瀬にみそぐ
 さまこそ神代聖ゆれ。
 とくちすさぶ程に、はや秋津姫の神やうけ
 ましけん、浪間よりさとふき来る夕風、身
 にしむばかり涼しうて。(徳綱)
 ●行く水に数書くよりもはかなきは、思は
 れ人を思ひ夫の、跡を慕ひてのぼり瀬の、
 清き流や中賀茂の、御手洗川につどふ君。
 今日の名越の祓して、此輪越えさせ給へと
 よ。懐かしや人は何とも白波の、木綿しで
 かくる御蔵川、懸路をたす神ならば、な
 どか逢瀬のなかるべき。實にや数ならぬ、
 身にもたとへは在原の、跡は昔に業平の、
 此河波に懸せじと、かけし御祓も大祓の、
 引く手あまたの人心、細むかひなきかれご
 とかな。とは思へども我は又、浮寐に明す
 水鳥の、賀茂の河原に御祓して逢瀬をいざ
 や祈らん。(謡曲、水無月祓)
 ●水無月の、名越の祓する人は、千年の命
 のぶとこそ聞け。輪は越えたり。御祓の此
 輪をは越えたり。真如の月の輪の謂を、知
 らで人な笑ひそよ。もし無しきならば、
 祓ひのけて交へし。身に祓ひのけて交へし。
 輪越えさせ給へや。此輪越えさせ給へや。

名を得てこそ賀茂の宮に、参らせ給はよ、
 御祓河の波よりし。此輪をまつ越えて、身
 を清めおはしませ。(同)
 ●雲こそかゝれ木綿屋の、神代今の世おし
 なべて、今日の名越の、祓ひなごりしづめ
 て、心ぞ清き御祓河の、波の白和幣、麻の
 葉の青和幣、何れも流し捨衣の、身を清め
 心すぐに、本性になりすまして、いざや神
 に参らん。此賀茂の神に参らん。(同)
 ●頃しも宇治の夕景色、秋の螢の一與と、
 色めく君が心ばや。胸の色も咲き分くる、
 弘徽殿藤室に、こぼれ引かるゝ諸袂、花桶
 と蒸り行く、風そよぐ、ならの小川にせし
 みそぎ、夫は水無月なごしの祓、是は眞言祓
 密の法、願は何としらゆふに、しめゆひ廻
 し五十串たて、棚かき渡す川社、水音さや
 にすめる代も、濁る心に任せねば、猶身を
 宇治の川下に、修法に疲れし行人の、岩根
 枕高いびき、悠々として伏し居たり。(浄瑠璃、花山院都罪)
 ●水上もあらぶる心あらしがしなみもなご
 しのみそぎしつれば。(伊勢大輔)
 ●みそぎする袂にふるゝ大ぬさの引手あま

たになびく川風。 (土御門院)
 ●天の下のどけかるべし難波波たみのし
 まに御被しつれば。 (國經)
 ●みそぎするならの小川の川風にいのりぞ
 わたる下にたえじと。 (八代女王)
 ●風そよぐならの小川の夕ぐれはみそぎぞ
 夏のしるしなりける。 (家隆)
 ●みそぎせし身をこそうらめ今更にかけて
 いのらん神もなければ。 (たみ子)
 ●みそぎすとおりたつ袖も霞むらしなごや
 かにふくあらふ松風。 (諸平)
 ●うきことしうれしき瀬にやははららんあ
 すかの川にみそぎしつれば。 (千座)
 ●火渡の浦にながせるすて衣伊勢をのあま
 やみそぎしつらん。 (長流)
 ●あすか川いつかおほひの瀬ならでうれし
 き瀬にもみそぎしてまし。 (實隆)
 ●つくばうた禰宜で事すむ御被哉。 (藤村)
 ●夏御師の宿札たづねけり。 (其角)
 ●四の宮の禰宜も出らるゝ御被哉。 (許六)
 ●夏被目のつく方や淡路島。 (風雲)
 ●白帯のはや西を吹く御被哉。 (召波)
 ●旅人の脚中ひたすや御被川。 (道彦)
 ●草の戸や疊かへたる夏被。 (太紙)

●昔からこんな風かよ夕被。 (一茶)
 ●夕虹もきえて御被の流かな。 (陶吏)
 ●人去つて誠見えけり御被川。 (蘇太)
 ●御被川心ねぢけし人もみず。 (成美)
 ●みそぎ川こゝにいぐしを立つるよりたち
 所にて罪や流さん。 (稻丸)
 ●御被とて奈真の小川の夕風にすゞしくさ
 らす麻のゆふしで。 (村松)
 ●小鼠のちよる／＼はしる小流をみそぎの
 ちのわねけつくりつ。 (里近)
 ●夏の日のけふさるといふ人まねにこへい
 かつぎやちのわくよらん。 (下道)
 ●御被する茅のわをふいとわげがけに來て
 驚かす秋の初風。 (杉村)
 ●みそぎ川うちよる浪にわれんかと裾をま
 くれる風の涼しき。 (村人)
 ●涼しきは夏から秋へわけ参りぬけるうの
 輪にいせのかみ風。 (如羊)
 ●麻衣干すまほ川にみそぎして袖を通せる
 風のすゞしき。 (津々丸)
 ●けふはとてなごむる神の請狀に形代を、
 そ人主とせめ。 (雷道)
 ●肥ゆるほど川風すゞし秋もはや憐となれ
 る其大みそぎは。 (伊志丸)

●みそぎぞ夏のこゝちよきこり取場。 (川柳)
 ●東帯でかばやきをする御被川。 (同)
 ●被川夏の印も晦日ぎり。 (同)
 ●みそぎが來ると程なく盆が來る。 (同)
 ●六月の晦日神主いゝはらひ。 (同)
 ●加茂川へわけがらの輪を流す也。 (同)
 ●櫓の小川の夕風に、しらゆふかゝる浪の
 音、神のこゝろをすゞしめ、御被ぞ夏の
 しるしなる。 (俗語)
 ●なれにし人を松が技に、そよとばかりの
 風そよぐ、ならの小川の夕ぐれに、みそぎ
 ぞ君がかたみなるらん。 (同)

〔みち〕道
 道路。道程。街道。四衢。九陌。
 屈曲。迢遙。多岐。羊腸。坦々。
 平々。
 おほち。せきち。うまやち。と
 ほつ道。道もせ。道もり。岡邊
 のみち。野邊の細道。道のはは
 て。岩の細道。道ゆきぶり。道
 のながて。あせの細道。ひなの

長路。一筋の道。
 ●清津川を涉り、やがて麓にいたれり。峻
 道をふみ、嶺路に登るに、樹樹森列して日
 を遮り、山藁生ひ茂りて徑を塞ぐ。枯れた
 る老樹折れて路に横はりたる踰ゆるは、臥
 龍を踏むが如し。一條の溪河を涉り、嶺登
 ること半里許、右に折れてすゞむ。左に曲
 りてのぼる。奇木怪石千態萬狀、筆を以て
 いひ難し。己に中途に至れば、鳥の聲をも
 さかす、殆、東西を辨じ難く道なきが如
 し。案内者はよく知りて、先へすゞみ山篠
 を押しわけ幣をさゞげて道を示す。藤屋笠
 にまとい、藁竹身をかくし、石高くして徑
 狭く、一步も平坦の道なふまず。 (牧之)
 ●行き／＼と駿河の國に至りぬ。うつの山
 に至りて、我入んとする道は、いとくろ
 う細きに、葛藟冠木は茂り、物心細くすゞ
 るなるめを見る事と思ふに、修行者逢ひた
 り。かゝる道はいかでかいますといふを
 見れば、見し人なりけり。京に其人の許に
 とて文かきてつく。 (伊勢物語)
 ●風も思ふあへずうつろふ人の心の花にな
 れにし年月を思へば、哀とさゞし首のはこ
 とにわすれぬ物から、我世の外になりゆく

ならひこそ、亡き人の別よりもまさりて悲
 しき物なれ。されば白き糸の染まんことを
 悲しみ、道のちまたのわかれんことをなげ
 く人もありけんかし。 (兼好)
 ●あくれば八月十三日、秋霧いよ／＼深く
 して、道もさだかに見えわかず。馬にまか
 せてゆくに、長井の庄にもつきぬ。まこと
 や、若紫の巻に、かゝる朝霧をわけ入らん
 とあるし是なるべし。 (氏廉)
 ●春前に雨あつて花の開くる事早し。秋後
 に霜なうして落葉運し。山外に山有つて山
 盡さず。路中に道おほうして道きはまりな
 し。 (謡曲、熊野)
 ●げにや守の末すゞに、頼む命は白玉の、
 愛宕の寺もうちすゞぬ。六道の辻とかや。
 實におそろしや此道は、冥途に通ふなるも
 のを、心ばそ鳥部山、煙のすえもうちすゞ
 む。 (同)
 ●頼みを懸けて費船川、早く歩みを運ば
 ん。道ひなれたる道の末、夜も糺のかはら
 ぬは、思ひに沈むみぞる池、生けるかひな
 き愛き身の、消えん程とや草深き、市原野
 邊の露分けて、月遅き夜の鞍馬川、橋を過
 ぐれば程もなく、費船の宮に着きにけり。

●嵯峨の山、御幸絶えにし芹川の、千代の
 古道跡ふりて、行方正しき天雲の、大井の
 入江跡めて、上は風の山風の、聲も道ひ
 て松の尾の、神の宮居につきにけり。 (謡曲、松尾)
 ●忍ぶ山、道はさま／＼多けれど、費きし
 ゆき賤しきも、皆まよひ道戀の道、忍び車
 の我ながら、我ともいざや鳥羽玉の、牛に
 ひかる／＼片手綱、宿願重虎物ごと、御心
 しりと附き参らせ、玉藻が宿へ通ひ路の、
 野邊の草々おおく露を、鞭ふりあげて打ち拂
 ひ、うち拂ひ行くありさまは、光源氏の
 よもぎふの、宿問ひわびし古を、繪に書く
 やうな景色なり。 (浄瑠璃、殺生石)
 ●さかの山みゆき絶えにしせり川の千代の
 古道跡はありけり。 (行平)
 ●大江山いくのゝ道の遠ければまだふみも
 みず天の橋立。 (小式部)
 ●行きやらの心や何ぞ秋の野の道は千里も
 あらじと思ふな。 (躬恒)
 ●妹がりとなわが道路のしの薄われし道は
 なびけ篠原。 (萬葉)
 ●ふみわけて更にやこえんうつの山うつろ

ふつたのいはのほそ道。(家隆)
 ●さみだれのあめにや星のおちつらん石はかりにもなれる道哉。(鉄樹)
 ●いにしへの奈其の御代よりふみわけし木曾の坂路のなれずもあるかな。(真淵)
 ●いそのかみいそがわわざに世々のふみ見んとて年をふるの中道。(春海)
 ●とぢれたありとてたれかふみわけん宿は群の中の通路。(同)
 ●初かくる八十とものなを行きならしつかへならさん大路なるかも。(千隆)
 ●うめが香も春こそしるべくらぶ山道たどくしあらぬ夜こえに。(契沖)
 ●日の道や葵傾く五月雨。(芭蕉)
 ●釣瓶から水飲む人や道の端。(太祇)
 ●古道や松にかけたる蓑笠干。(升六)
 ●筋松過ぎてうれしや終の道。(杉風)
 ●眞砂路や陽炎を道ふ波がしら。(几童)
 ●七草や梅の下道松の丘。(長豊)
 ●蟬の聲絶えては續く岩の道。(野坡)
 ●惜ふむ道や寂莫たるあらし。(支考)
 ●道細く追はれぬ澤のほたるかな。(齊江)
 ●柳から日の暮れかゝる野道哉。(蕪村)
 ●松が香に迷はぬ道のちまた哉。(史草)

●空を飛ぶ雁にみとれて片足はわれもふみかく峠の細道。(貞久)
 ●ゆづりあふ一筋みちは糸に似て片よるもありもどるのもあり。(春芳)
 ●むかしよりしるすまるべのふみ見すてなとよこ道に人まよふらん。(吳龍)
 ●岩ねこねふみならされて奥山も道ある御代となりけるかな。(錦根)
 ●世渡りの道にふたつの道分やたからの山に借錢の山。(めし盛)
 ●道ならぬ道に迷ふな道の街の花の色にうかれて。(安筆)
 ●新道は嗤しの中の人どほり。(川柳)
 ●刻限を聞きく角行の道をつぎ。(同)
 ●商人の道にかしこきわらひやう。(同)
 ●ふみつかひ道など聞いておびき出し。(同)
 ●たいそな道さとあんまもんでゐる。(同)
 ●通さぬは通さうための道ぶしん。(同)
 ●道分はまたなをひろげて道を開き。(同)
 ●笑ふたもあとからこけるすべり道。(同)
 ●近道なまものしりて山をこし。(同)

●通りぬけ無用で通りぬけが知れ。(同)
 ●ぬかる道飛ばれるだけは飛んで行き。(同)
 ●雨はふるとも雲ふるなき、しのぶ細道の征のたわむに。(俗語)
 ●忍んだりやな、しのべれたりやな、雲の細道小敷から。(同)
 ●逢はでかへれば心の闇よ、月はさゆれど道見えす。(同)
 ●一時三里人の道。(俚語)
 ●逃るもの道を擲ます。(同)
 ●日暮れ道道し。(同)
 ●千里の道も一歩より始まる。(同)
 ●いそがばまはれ。(同)
 ●習い僻厭平阡。岐道入三篠。管足不三背回。承拂堅初往。稍進不見天。竹葉大輪掌。隨處迷烟雲。日脚不落項。直躬礙。枝發。漸風安得仰。兩袖頭翅張。胃。練先用。穎。導者未識誰。後趾蹶前納。人厭盡無音。但聞碎響響。三里幸出叢。日光久隱障。始見樵子行。寸心翻惚恍。(李鄴廟)
 ●行路難。難於山險於水。不獨人間夫與妻。近代君臣亦如此。君不見左納

百右納史。朝水恩賜死。行路難。不在水不在山。只在人情反覆間。(白居易)

●天冷日不光。太行峰蒼莽。昔聞此中險。今我方獨往。馬蹄凍且滑。羊腸不可上。若比世路難。猶自平於掌。(同)
 ●湘中老人讀黃卷。手按紫雲坐碧牀。春至不知湘水深。日暮忘却巴陵道。(高駟)
 ●午日晴烘懸細澗。綠陰路盡有殘碑。惜將困眼看山水。先借僧林睡半時。(竹外)

●大道直如髮。春日佳氣多。五陵貴公子。雙雙鳴玉珂。(儲光義)

〔みづ〕水

水色。水光。水深。遠水。流水。春水。秋水。匝岸。歸海。就下。流濕。負舟。浮天。載地。穿沙。倒峽。滔々。泯々。湛々。渺々。しみづ。わか水。さざれ水。やり水。埋れ水。たまり水。水の

こゝろ。水のしらべ。岩きりとほる。水の白糸。水の白波。

●心のどかに暮す日、はかなき事いひくのはてに、我も人もあしういひなりて、うち怨じて、出づるになりぬ。端の方にあゆみ出で、幼き人をよび出で、我は今はこじとすなどいひ置きて、出でにける。即ち道ひ入りて、おどろくしうなく。こはなぞくといへど、答もせず、論なうさやうにぞあらんと推しはかるれど、人の聞かんもうたて、物狂はしければ、とひさして、とかうこしらへてあるに、五六日はかりになりぬるに、音もせず。例ならぬほどになりぬれば、あな物狂し、戯ぶれ事とこそ我は思ひしか。果なき申なれば、かくて止むやうもありなかしと思へば、心細うて眺むる程に出でし日、つかひしゆするづきの水はさながらありけり。上に座ゐてあり。かくまでとあましましう。絶えぬるか影だに見えばとふべきをたみの水は水草かにけり。など思ひし日も見えたり。例の事にて止みにけり。(道綱母)

●岩もる水のはのかなるを、竹のひして、すのこのもとにまかせやりつゝ、あやしき水ぶねにたゞへたるが、よるひるとなくしたる音の、いみじう心すみて、うき世のちりもきようすゞきはてぬる心地す。おきふしやすきひとすみには、山の鳥ども、いたうなれて、朝ゆふに此水のはとりにおりきつゝ、はね打そゞぎなどするも、またなき友とおもひ、むつばれてなん。(廣足)

●水は固より方圓の鉢に従ひ、鉢は只圭の物好によるべし。見すや、此の水の四時にたえずして、而も朝毎に元の水にあらず。萬理これにこもれるが中にも、風雅のことに水に似て世々に盡きず。水に似て時々新なるも汲みて知らばこゝに明なるべきな。(也有)

●月花は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかすめでたけれ。沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲にとよまることしばらくもせずといへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。(兼好)

にあらす。流れにうかぶうたかたは、かつ消え、かつ残りて暫くも止らず。(長明)
 ●山路の奥の水にては、何れの人か養ひし、彭祖が菊の水、したる露の養ひに、仙徳を受けしより、七百歳を経る事し、薬の水と聞く物を、げにや薬と菊の水、其養ひの露のまに、千年を経るや天地の、ひらけし種の草木まで、花咲き實なることわり、其折々と云ひながら、唯これ雨露のめぐみにて、養ひ得ては、花の父母たる雨露の、翁も養はれて、此水に馴衣の、袖ひちて結ぶ手の、影さへ見ゆる山の井の、實にし薬と思ふより、老の姿も若水と、見るこそ嬉しかりけれ。(謡曲、養老)
 ●水になりたやヤレサテ、化粧の水に、諸國姫のヤレサテ、手に渡る。弟子と久三を懸持に、一荷を担ふ吉助が、濡より濡るゝ濡仕事、相違打つたり水汲んだり、水火の賣ぢやと、つぶやき即す擔ひ桶、水も洩らさぬ親と子の、咄しまうて娘のおさん、心しよぎ〜いそ〜と。(浄瑠璃、新浄瑠璃)
 ●影も輝く蠟燭の、しん清水は暫とて、やがてやすらふ坂の、關の清水を汲あげ

つ、手にむすびあげ口すゞぎ、無明の酒の酔さます。(浄瑠璃、曾根崎心中)
 ●はやく瀬の水の心をせきとめて波のころあるうじのあじろぎ。(爲兼)
 ●ゆくへなし山のしづくの露ばかりながるゝ水のすゑの白波。(定家)
 ●色のみぞまざるべらなるいその松かげ見る水もみどりなりけり。(貫之)
 ●くみてこそ心すむらめしづのめはいたゞく水にやどる月かげ。(西行)
 ●五月雨のふるからなのゝ忘れ水みなぬまえてわたる瀬もなし。(俊賴)
 ●いかにして身のうき事を忘れ水わすれはてつゝ世にはすまなん。(春滿)
 ●うれしきもうきもわきいづる水のごとともにながれてとまらざりけり。(暹庵)
 ●跡たれし神の心ぞくまれぬるかもとたすの川あひの水。(成章)
 ●いぶき山神のいぶきの霧はれてあさめの水のかげさやけき。(土満)
 ●苦つたふ山のしづくの岩ね水にぐるせしらでひとりいづらん。(契沖)
 ●古池や蛙とび込む水の音。(芭蕉)
 ●水打つや蟬も宿も満るゝ程。(其角)

●鴨おるす水に筋あり昆陽の池。(支考)
 ●はしりこむ笠の中や谷の水。(丈草)
 ●苗代の水に散りうくさくら哉。(許六)
 ●喰物もみな水くさし魂まつり。(嵐雲)
 ●田の水のありたけ水る且かな。(凡兆)
 ●仰向に水に浮きけり落椿。(千影)
 ●うめが香の岩にしむ時水の音。(蓼太)
 ●出しおく振廻水の心ざしあつき日なればくみてこそめ。(蛙面房)
 ●まはり道せよと田面に此頃ほほりて通さぬ苗代の水。(秀成)
 ●うつはものにまたがふのみかみつれば酔にも酒にも水は成りけり。(龍吟社)
 ●たまりなばにこりもやせん夜に晝にながれて清き清流の水。(白樺)
 ●もち米をひやせし桶の水すみてあすの鏡なうつす月影。(稻村)
 ●きれ〜の錦ながるゝよしの川木の葉衣やと〜の水。(橋洲)
 ●高野山大師のをしへたえずしていろはを流す玉川の水。(有朝)
 ●さげがたき暑は秋へ持ち越して再水ののぞむ此の頃。(石季)
 ●うばがやどへちまの水の御用聞き。

●あやすきにくとと辻ばん水をうち。(川柳)
 ●死水をとつたは今井ばかりなり。(同)
 ●とし忘れと〜一人水をあび。(同)
 ●新らしい物は敷寄屋に水ばかり。(同)
 ●命なりけり小衣更けて水の味。(同)
 ●大水は器しものにはしたがはず。(同)
 ●たよりもりも師走はひとひ水をあび。(同)
 ●さうらうの水で豆腐やあらつてる。(同)
 ●提灯をのゝ字にまはす水溜。(同)
 ●富士の白雪は旭でとける。解けて流れて三島へおちる。三島女郎衆の假粧の水。(俗語)
 ●五月雨程こひ忍ばれて、今はあさまの落し水。(同)
 ●若い夫婦は苗代水の水も濁さぬ濁さぬ水の、中に小桶がほしゆござる。(同)
 ●岩のはさまにな、やれたまり水、獨すませといふ事か。(同)
 ●思ふて来たのに水かけられて、わしが思な水にする。(同)

●水は方圓の器にしたがふ。(圓説)
 ●水清ければ魚すます。(同)
 ●水入て垢落ちず。(同)
 ●上手の手から水がもる。(同)
 ●水に濁りが如し。(同)
 ●低き處に水溜る。(同)
 ●美哉仲選之畫水也、畫水之變焉。近者遠者、深者淺者、爲泉、爲瀑、爲淵、爲澗、來者澄々、去者悠々、急者如逐、漫者如待、懸者如崩、瀉者如逃、激石者、洞底者、湯々者、澗々者、隱見起伏、脈理互通、源委相承、數尺絹素々上、無一息々停、波而混々乎晝夜矣。仲選之畫水也、美哉、水之神乎。(栗山)
 ●其行則水者自高下、石錯出其間、如林立、如士騎、滿野千里、下上不見、其首尾、水行其隙間、或衝縮、或逆走、旁射、其狀若翻結、若蟲蟻、其旋若輪、其激若矢、舟沿者、投便利、失恐分、輒破溺。雖其土長川居之人、非生而習、水事者、不致以舟楫、自在也。(曾蒙)
 ●清者、水之德也。弗清則失其爲水。水而失其爲水、所以取濯足之侮也。然徒善不足、以爲政、潤不及物、雖清

亦何益。易云潤萬物、莫潤於水。夫唯有所潤、而後水之德可言。潤之德大矣哉。(二洲)
 ●水信無分、於東西、無分於上下、平。人性之善也、猶水之就下也。人無有不善、水無有不平。今天水被而離之、可使過類、激而行之、可使在山、是豈水之性哉。其勢則然也。人之可使爲不善、其性亦猶是也。(孟子)
 ●滄浪之水清兮、可以濯吾纓。滄浪之水濁兮、可以濯吾足。(屈平)
 ●遠別秦城萬里游。亂山高下入商州。關門不鎖寒溪水。一夜潺湲送客愁。(李涉)
 ●知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽。(論語)
 ●上善若水。水利萬物而不爭。(老子)
 ●臨野水、看浮雲。(王敬美)
 ●欸乃一聲山水綠。(子厚)
 ●淵水松風伴獨吟。(許恕)
 ●近水簾櫳探借秋。(放翁)
 ●〔みづらみ〕湖
 漁火。客船。扁舟。巨浪。積水。

平波。極目。洞庭。西湖。水鑑
 浄。玉盞清。
 ささ波。鹽ならぬ海。近江がた。
 鴉のうみ。ひらの山風。いぶき
 おろし。朝妻ふね。

●杉のしたみちおる、所より、ふと見えたるみづらみ、まづめおどろかされて、かばかりたかき山の上に、いかでかうはたへ人とおぼゆ。神にしませば、打すつと開て、喚ぶたひの道をゆくほど、うらよする浪のおと、入江のたふすまひなど、おもしろやきわぬべく見ゆるを、行きかふ舟のひとつもなきぞ、なほことうみにことなりける。箱根の御やしるにまうづとて、なほのぼり行くかたより、かへり見したるは、えいはずをかしう、そこひもしらぬ青やかなる水の、山のひま、行きまぐりたるさま、なにかしの瀬戸おぼえて、いみじうこゝろすこきには、はれゆく雲の上より、いとしろうあらはれたるふじのねの、水のおしてまやかに、うつりたるは、またたぐひなくこそは見ゆれ。

(寄足)

●凡、湖水は、これまで予が目にふる、所の佳景なり。就中白川の峰より、これを望み見れば、左に若州の諸山、遙にそびえ、むかふに伊勢、近江の山々、波濤のごとく、足下に、から峰を見おろし。左に三井、大津、粟津、石山等見ゆ。矢走、片田の邊、晴れたる日は、かすかに、浮御堂も見るべし。満くとも、筆に及びがたく、述ぶるとも詞に盡すことあたはず。湖は湛静にして、席を布くが如く、船は帆をあげて、一葉の水に浮ぶが如し。山水の奇絶、こゝに於いて、むなく口をとど。

(馬琴)

●處は海の上、國は近江の江にちかき、山々の春なれや、花はさながら白雪の、ふるか残るか時しらぬ、山は都の宮土なれや、なほさかかへる春の日に、比良の嶺おろし吹くとも、沖こ船はよも盡きじ。旅のならひの思はずも、雲井のよそに見し人も、同じ船に馴れ衣、浦をへだて、行く程に、竹生島も見えたりや。緑樹かげ沈んで、魚樹にのぼるけしきあり。月海上に浮んで、魚も波を走るか。おもしろの島のけしきや。

(詩曲、竹生島)

●雪ならば幾度袖を拂はまし、花の雪吹と

誄じけん志賀の山越うち過ぎて、誄めの末は湖の、にほてる比叡の山高み、上見ぬ鶯の御山とやらんを、今日の前に拜む事よ、あら有り難の御事や。

(詩曲、三井寺)

●おもしるや、孤島そばだつて波悠々たるよそほひ、誠に湖水の波の上、三千世界は眼の前に盡きの、十二因縁は心の裏にむなし。げにおもしろきけしきかな。

(詩曲、鷺)

●春の色、棚引く雲の朝ぼらけ、長閑けき風の音羽山、今朝越え来れば是ぞ此、名に負ふ志賀の山越や、湖遠き誄めかな。

(詩曲、志賀)

●誠や當國諏訪明神は、狐を以てつかはしめと聞きつるが、明神の神體に等しき兜なれば、八百八狐付き添ひて、守護する奇瑞に疑なし。チ、それと思ひ出したり、湖水張り詰むれば、渡り初する神の狐、其足跡をふるべにて、心安う行きかふ人馬、狐渡らぬ其先に渡れば水に溺るとは、人も知つたる諏訪の湖、たとひ狐は渡らずとも、夫を思ふ念方に、神の力の加はる兜、勝頼様に返へせとある、諏訪明神の御教へ、ハア、恭なや、有難や。

(淨瑠璃、廿四孝)

める近江八景。

●みわたせば鳩の朝なき空はれてはるかにかすむ沖つし山。(爲家)
 ●あとしなき我うつ袖に松ふりてながめ涼しきにほの水海。(定家)
 ●まがの海白ゆふ花の浪の上に霞をわけてうら風ぞふく。(家隆)
 ●しがのうみの袖ふきかへす山風にまだき秋たつ鳩の水海。(貞經)
 ●まよなみのひら山かざのうみふけば釣するわよの袖かへる見ゆ。(萬葉)
 ●さよ浪の明けゆく米に松見えて船路はるけしふかのからさき。(正明)
 ●さよ浪の立ちあふるほとも静にてあふみの海の手ゆる御代哉。(常良)
 ●名にしおふ花の都に近き江は月と雲とのみなとなるべし。(斎藤)
 ●くれわたる八十のみなとのいづこともわかすほのめくいさり火のかけ。(同)
 ●雲のふる嶺のしづくのいくよへて箱根の湖はたへたるらん。(千陸)
 ●稲妻や湖の面をひらめかす。(芭蕉)
 ●夕涼妬しや湖のあり所。(首水)
 ●なつかしき湖水の隅や藤の花。(召波)
 ●近江にも立つや湖水の春霞。(見貫)

●湖を屋根から見せん村しぐれ。(尙白)
 ●湖も東風に揺れらてぬるみけり。(君峰)
 ●湖や氷の上の春の雨。(奇湖)
 ●湖の水まさりけり五月雨。(去來)
 ●静かさや湖水にうつる雲の峯。(覆東)
 ●冬ごもり湖水の音や地侍。(許六)
 ●杜鵑啼くや湖水のさゝ濁り。(丈草)
 ●ひき下駄で琵琶湖のあたりあゆむにやはらんくと雨ぞ降り出す。(木端)
 ●わけてゆくふじのかたみに残せしはた一面の琵琶の水海。(雀次)
 ●冬来れば人も狐のかは衣来てぞわたれるすはのみづ海。(年春)
 ●仙葉を不意にとられてさよ波の磯のよりたるびはの湖づら。(虎成)
 ●さよ波や近江おもての朝なきに聲を敷いたやうな水うみ。(米人)
 ●この頃は人も遊ばぬ諏訪の海を霞ばかりぞたちわたりける。(鴨路)
 ●わき出でし富士のかたちは鹽尻の鹽わけのしたあとは水海。(由躬)
 ●扇なりのふじはわけしが船の給と松の要はのこる水海。(植雄)
 ●いかばかりたちてゆたけき春霞袖につゝ

●洞庭九州間。厥大誰與讓。南瀛群崖水。北注何奔放。積爲七百里。吞納各殊狀。自古澄不清。環混無歸向。炎風日搜撥。幽怪多冗長。軒然大波起。宇宙隘而妨。越巖拔萬華。騰躍較健壯。聲音一何宏。轟轟陸車萬兩。猶疑帝軒轅。張樂就空曠。蛟螭震符箓。綺練吹組纜。鬼神非人世。節髮顛跌蕩。陽施見春麗。陰閉成悽愴。

朝暹宣休口。極地缺。陸障。夜機世陸州。
遺萬機可傍。星河遠湖沐。時仰迷下上。
餘雨思不已。喧語鳴。明登。岳陽樓。
輝煥朝日亮。飛塵散。其威。清安息。鐘樂。
泓澄滿。凝綠。物影巧相況。江豚時出戲。
驚波忽為旋。

(韓愈)

湖上春來似畫圖。亂峰圍繞水平鋪。松
排。山面。千重翠。月點。波心。一顆珠。碧
線頭抽。早稻。青羅裙帶展。新蒲。未。能。拋
得。杭州。去。一。半。勾。留。是。此。湖。

(白居易)

波光柳色碧瀼瀼。曲渚斜橋畫閣通。更遠
更佳唯恐盡。漸深漸密似無窮。綺羅香裏
留。佳客。絃管聲來颯。晚風。半醉迴舟迷。向
背。樓臺高下夕陽中。

(歐陽修)

湖光秋月兩相和。潭面無風鏡未磨。遙
望。瀾。山。水。翠。白。銀。盤。裡。一。青。螺。(劉禹錫)

「みづとり」水鳥

水禽。泛。渚。瀟。瀟。飛。翔。出。沒。
浮。遊。沒。水。隨。潮。眠。沙。
うきとり。あじむら。かもめ。か
づく。つらゝの床。うさね。羽
毛も氷る。水の村鳥。水のかり

ね。にはのうきす。上毛の霜。

●廿三日の夜に入りて、平家の兵ども、源
氏の陣を見渡せば、伊豆駿河の人民百姓
等、軍に恐れて、或は野に入り山にかく
れ、或は船に取り乗りて、海河に泛びたる
が、營の火の見えけるを、あなむびたし
と、源氏の陣の遠火の多きよ、實にも野も
山も、海も河も、皆武者にてありけり。如
何やせんとぞあされける。其夜の夜半はか
り、富士の沼いくらもありける水鳥ども
が、何かは驚きたりけん。一度にはつと立
ちける羽音の、雷大風などのやうに聞えけ
れば、平家の兵共、あはれ源氏の大勢の向
ひたるは、昨日齋藤別當が申しつるやう
に、甲斐信濃の源氏等、富士の裾より着手
へや廻り候ふらん。敵何十萬騎があるら
ん、取りこめられては叶ふまじ。爰をば落
ちて尾張川墨股を助けやとて、取る物もと
りあへず、我先にくと落ち行きける。

(平家物語)

●夜のまに雪いとおもしろうふりつみて、
庭の草木も花さき、にはかに春來る心地
し、四の山の端もみな白妙になりて、人間
世界、まながら天上の白玉京かとあやまた

る。折しも、あたり近き池の水鳥のこゑ
くになくも、程なればきこゆ。さこそ波
のうきねのさむからめと、それさへ哀をそ
へて、まても心あらん友もがなと、人ゆか
しう思ひし折ふし。

(鶴巢)

●御前に臥してきけば、池の鳥どもの、よ
もすがら聲々羽ぶきまわぐ音のするに目も
覺めて、
我ごとぞ水のうきねにあかしつゝ上毛
の霜を拂ひわびける、
と獨ごちたるを傍に臥したまへる人、きゝ
つけて、
まして思へ水のかりねの程だにも上毛
の霜を拂ひわびける。

(孝標女)

●彼女思ふやう、一人に靡かば一人の恨深
かるべしと、左右なう靡く事もなかりし
が、あの生田川の水鳥をさへ、二人の失先
の諸共に、一つの翅に中りしかば、其時妾
思ふやう、無慙やなきしも契は深みどり、
水鳥までも我故に、さこそ命は驚驚の、番
去りにしあはれさまよ。住みわびつ我身捨て
ゝん津の國の、生田の川は名のみなりけり
と。

(謡曲、求塚)

●鳥、驚く夢の世に、我等が榮こそ現な
き。實にや夢の世の、何かたとへにあらざ
らん。身はうたかたの水鳥の、浮葉定めぬ
波枕、うちなびく秋の田の、種波につれて
浮き沈み、おもしろの鳥の風情や。

(謡曲、鳥追船)

●主上二位殿をはじめ奉り、其外おにいご
の父子、一門皆々舟にとりのり、海上に浮
むよそほひ、唯浴波のうねにうきしづむ水
鳥の如し。

(謡曲、知章)

●鬼の女房に鬼神がなる、生の娘がいとし
がる、聖の命を榮花に答へる、親々の胸愁
心、惨いわいの無情いわいの、此方から久
離きつた、不足音うても恨んでも、取返へ
されぬ此博め、つひ戻せばよいものを、自
らが輪廻深く、いぎたない心から、不覺取
らせた忠信博、こらへてやいの、とかこち
泣き、夫婦離れぬ水鳥の、濡れて乾かぬも
る羽がひ、秋干る間は無りけり。

(浄瑠璃、鎌倉實記)

●又も都を迷ひいで、いつかは廻り逢阪
の、關路をこえて近江路や、美濃尾張さへ
定なく、想しく目に泣き流し、物のあ
いろも水鳥の、陸にさまよふ悲しさは、い

み／部 みづとり

つ。の世いかなる報にて、重ねくの歌きの
敵、憐み玉へと斗りにて、聲を忍びて歎き
ける。

(浄瑠璃、朝顔日記)

●四方に眺めのはてしなく、西に船路の海
深く、波の淡路にきえずも通ふ、沖の汐風
身に染み、なれも無常の煙にむせぶ。色に
憧れて死なうなら、しんぞ此身はなりしだ
い。

(浄瑠璃、曾根崎心中)

●水鳥のは風にさわぐさゝ涙のあやしき迄
もゆる、袖哉。

(師優)

●人ごとにしげみあされば水鳥の鳴のうき
ねの安げくもなし。

(讀人不知)

●風ふけばよどをむつぶる水鳥のうきねを
のみやわがね渡らん。

(同)

●なるみ濁沙路にあそぶ鴨鳥のうきねは我
もおとりやはする。

(公實)

●涙川うきてながら、水鳥のぬれては人に
みえぬ物かは。

(いせ)

●水鳥のうきねわすれてみつる哉むしあけ
の追門の春のあけぼの。

(有功)

●水鳥の玉藻の床の上はあれど下安からぬ
中ぞわりなき。

(道設)

●水鳥のうきねにたてゝなきわべし淵瀬と
もなく物思ふ身は。

(勝微)

●なぞやかうき水鳥のそれだにも青羽の
色はかはらぬものを。

(たみ子)

●もろともにおもひますだの池にすむなし
のつがひをよそにやは見る。

(義殿)

●水鳥は重たく見えて浮きに免。

(鬼貫)

●水鳥や夕日江に入る垣のひま。

(蕪村)

●水さつと鳥はふはくふうはく。

(惟然)

●水鳥の石川島を洲濱哉。

(旨原)

●沖中や鳥の浮葉に夕明り。

(若虬)

●水鳥の寝て流れけり小六月。

(洞二)

●水鳥や霧所の火遠く江にうつる。

(几童)

●水鳥のかたまりに行く草の中。

(鞍風)

●水鳥やかたて郷士の智選び。

(召波)

●水鳥や水鳥の腹くより行く。

(阿久)

●はかなさまやさらでしうまきあぢかものせ
りをうきねの下草にして。

(橘州)

●鹽とりになりもすらんと鴨や鳴く上毛の
霜を拂ひかねては。

(古渡)

●葉を船に逢戸の乗りし声の間にしりをく
さらす池の水鳥。

(文守)

●紅葉ばゝ氷のしたの錦すし上にしつかり
なしのおもひ羽。

(里住)

●芹川の御幸の跡にとなりかと思まがふ斗

りきたる白鳥。(古卜)
 ●水鳥はなみくならぬ契哉みるめの多き中をくよりて。(駒人)
 ●わたる事しならぬ堀江の水とりはあたり魚やはらにかけん。(影師)
 ●せんばくをしがの唐崎まよ浪に又あらはるゝをしの毛ころも。(貞)
 ●いかにして鴨の香とはくらべしものにならぬくらぬをしの冠毛。(常持)
 ●氷りたるかたは寒しとあまさかるひなたにひなのかもし遊べり。(折芳)
 ●水鳥が来て満月をゆり扇し。(川柳)
 ●一羽でも三羽でも鶯鶯ななり。(同)
 ●池のをし月を寄せたり廣げたり。(同)
 ●水鳥は逃げ鶴最後なり。(同)
 ●水鳥も鳩も源氏の月を持ち。(同)
 ●水鳥におぢひよ鳥で目をさまし。(同)
 ●雨々三々泛々谷流。忘。機風鳥共同。借。間眠沙上。來運去。就浴波心。没復淨。海瀾不爲。主相候。田肥應。足。稻梁謀。朝思葉懸神仙令。幾。雙飛。上。帝州。(羅倫)
 ●今日春風泛大江。中流清碧透船窓。舟人指點波濤穩。夾岸眠鷗四五雙。(渡陽傳)

●烟爲行止水爲家。雨々三々睡暖沙。爲謝離鸞兼別鶴。如何禁得向天涯。(吳融)
 ●間立春塘烟淡々。靜眠寒葦雨離々。漁翁歸後沙汀晚。飛下灘頭更自由。(鄭谷)
 ●醉別江樓十二年。酒光灯影夢凄然。豈圖清涼涼風夕。又對兩鷗話舊緣。(船山)
 ●通天秋一色。漫翠山如拭。倚檻俯汀州。水禽皆自得。(蔡溪)
〔みなと〕港
 港口。港灣。良港。水深。船舶。幅濠。
 みなと。いり。みなとで。ちふねもふね。みなと洲。みなとの瀬戸。遠のみなと。
 ●忠顯朝臣。御手を引き御腰をおして、今夜いかにもして、湊邊までと心をやりたまへども、心身共につかれ終て、野徑の露に徘徊す。夜いたく更けにければ、里道からぬ鐘の聲の月に和して聞えけるを、道し

るべに尋ね寄りて、忠顯朝臣或家の門を叩き、千波湊へは、何方へ行くぞと問ひければ、内より怪しげなる男一人出で向ひて、主上の御有様を見進らせけるが、心なき田夫野人なれども、何となく痛はしくや思ひ進らせけん、千波湊へは、是より幾五十町ばかり候へども、道南北へ分れて、如何様御迷ひ候ひぬと存じ候へば、御道しるべ仕候はんとして、主上を軽々と負ひ進らせ、程なく千波湊へぞつきにける。爰にて時うつ鼓の聲をきけば、夜は未五更の初なり。此道の案内者仕りたる男、かひなくしる湊の中を走り廻りて、伯耆の國へ漕ぎもどる商人船のありけるを、とかく語らひて、主上を屋形の内にのせまゐらせ、其後暇申してぞ止りける。此男誠に凡人にあらざりけるにや、君御一統の御時に、尤思賞あるべしとて、國中を尋ねられるに、我こそ其にて候へと申すもの途になかりけり。夜も已に明ければ、船人腰をときて順風に帆をあげ、湊の外に漕ぎ出す。(太平記)

はるく見えわたるに、八十の湊と申し侍るもいづくの浦々をさしてか申し侍らんと覺えて。
 比良の海やわが年浪の七十を八十の湊にかけて見る哉。(雅縁)
 ●毎年にもみち葉流る龍田川。湊や秋のままりなる。山し動せず、海邊し波靜にて樂の秋の色。名こそ龍田の、山風し靜なりけり。(龍田)
 ●船を出しやらば夜深に出しやれ。帆影見るさへ氣にかゝる。長門の秋の夕暮は、歌によむてふ文字が關、下の關とし名に高き、四國一の大湊、北に朝鮮釜山海、西に長崎薩摩海、唐おらんだの代物を、朝な夕なに引うけて、千艘出づれば入り船も、日に千貫の萬貫目、小列走れば銀が飛ぶ、金色世界もかくやらん。(淨瑠璃、博多小女郎)
 ●てる月のながるゝ見ればあまの川いづるみなとはうみにぞありける。(貫之)
 ●なみにゆく心のはてやこれならんはなのみなとのほるのあけぼの。(慈鎮)
 ●人しれねをこそなめまがたの湊の

すとりなみにわれつゝ。
 ●あまざらひひかた吹くらし水ぐきのなかの湊に浪立ちさわぐ。(萬葉)
 ●風さゆる八十の湊のあくるまにいそぎかけて千鳥なくなり。(借實)
 ●沙ならぬうみからくや世わたりに八十のみなとをかよふ舟人。(春滿)
 ●風あらしとさのみなとをこ舟のくるしきものは心なりけり。(爲經)
 ●水ぐきのなかのみなとのなみのうへにかずかすてゝかへるかりがね。(素直)
 ●よもの海の湊はひろし香が國は常世の舟もよるべとおもへば。(久風)
 ●霜けぶる破風や湊の出来分限。(道彦)
 ●初雁や湊の灯籠消えた夜に。(梅室)
 ●秋風や鶴の目あても湊の燈。(淡水)
 ●いななまやみなとの家の小酒盛。(夏桂)
 ●のぼれて行く湊の春や漁船。(廉志)
 ●師走見に舟人上る湊哉。(綺石)
 ●よく泳ぐ湊の犬や春の水。(永守)
 ●いつ入梅のあきの湊に大しけの日数も長うかゝりたる舟。(砂長)
 ●ほととぎすなくにはあかねの如はねを開いて湊にも飛ぶ。(和美住)

●五月雨の日数も長うかゝり舟をやみしなみにゆらの湊は。(芳水)
 ●かざさゆる紙衣のそでの湊にはあし分船の音を立てけり。(龍の舎)
 ●年とりし湊の舟のともづなも春たつけふの風にとくべし。(桂雄)
 ●波をわけ出づるも入るも大船のあしこそ爰にみなとまりつれ。(たる明)
 ●入船のわねて来る帆とわれぬ帆と沖のしぐれを知るみなと口。(眞芳)
 ●湊にはげふ入船の時息数のたはらの八千八こゑ。(池住)
 ●いさぎよく汲むやくらしの油町としの湊によせる金銀。(から盛)
 ●重荷をも積みて走りしつかれにや湊の舟のあしぞおしかる。(白主)
 ●一二本づゝ小湊の霧は晴れ。(川柳)
 ●七福の船光陰の湊入り。(同)
 ●はきものにゆらの湊のしやつびたい。(同)
 ●呼びこんだ所が湊のたから船。(同)
 ●はんじやうさ船にかきらぬ大湊。(同)
 ●さつさおせく下の關までも、押せば港が近くなる。(俗談)

● 瓶が港は源氏が源よ、上り下りが粗朝ちやよ。(同)

● 由良の港は千軒ある、千軒あれば俱ぐひ。(狸遊)

● 道に於て佛老莊佛之學、而欲之聖人之道、猶航斷港絕濱、以望之至於海也。(翰愈)

● 織舟臨斷港、散策陸層嶺。(馬臻)

● 水宿先歸港、朝行暗計程。(釋善住)

● 渡江潮始平、入港濤已落。(陳基)

● 夜泊松潭明月近、晝眠花港綠陰多。(曹文晦)

〔みなみ〕南

南方。南面。南山。南暎。南海。南嶺。湖南。江南。湘南。召南。指南。圖南。

かげとも。

● 七日は方塞がる。八日の日未の時ばかりに、おはしますくとのしる。中門おしあけて、車ごめ引き入るゝを見れば、御前の男子ども、數多長柄につきて、塵卷きあげ、下腹左右におし挟みたる、相もて寄りたれば、下り走りて、紅梅の只今盛なる下

よりさし歩みたるに、似げなうもあるまじ。打ちあげつゝあな面白といひつゝ、歩み上りぬ。さての目を思ひたれば、又南塞りにけり。などかは、さはつげざりしとあれは、と聞えたらましかば、いかよあるべかりけると。ものすれば、違ひこそせまじかとあり。

● この山のこしを南に下りてはるかに見おるせば、背海浪々として白雲沈々たり。海上の眺望は此所に勝れたり。漸く山脚に至れば匿穴の如くに堀り入りたる谷に道あり。身をさげめ、こゝろを呑んで下る。下りはつれば北は韓康獨住の栖花の色、夏の望賢しくて、南は范蠡扁舟の泊、波の聲夕の關に樂ぶ。(光行)

● 或時人のあやしみて、山へ入り給ひけるを、見隠れに見れば、實にふかく分け入りて、水のきよくながれたる河のはさまに、南に向ひてねぶることく合掌してぞ居られたりける。(四行)

● 愛宕山、嶺か原をよそに見て、月に雙の関の松、緑の空も長閑なる、都の山を跡に見て、是も南の都路や、奈良坂越えて三笠山、春日の里に着きにけり。

しえにぞまき。(餅丸)

● 一筋の帯とも見えてはかた沖みなみへまはる天つ雁がね。(笠人)

● えんめいといはふま垣の菊の酒のめげ南の山もちらく。(栗葉)

● ひやうかになるを教ふる指南車の南を指して雁は来にけり。(潘亭主人)

● 南より北に追はれて雁金は残る寒さを引つれてゆく。(齋工)

● 南より春はくるかとさく花のくちびる開く梅にとはや。(主人)

● 虫のねをきるとてすへる茨ほどにあつき日南へ出す虫干。(厚丸)

● 花散るを人のづうにやみわとしらで吹さぬる南がどかな。(鈴成)

● 磁石師も今宵はわれを忘れてぞ南にむかふ月の眞實。(繩丸)

● 南向きいきの親父の捨處。(川柳)

● とんぼうも椿芽し南へ尻を向け。(同)

● 南風今宵難所の鳴戸鯛。(同)

● 南のくめんをやつとして北へゆき。(同)

● 竹竿のあかり吹き消す南風。(同)

● 春たつ今朝は足引の、山路をわけて大伴

● 三笠山、今ぞ榮えん此岸の、南の海にいそがんと、ゆけば程なく津の國の、こや日の木の始なる、淡路のわたり末ちかく、鳴門の沖に音するは、とまりさだめぬ海士小舟。(謡曲、海士)

● 九重の、雲井を出で、行く月の、南に廻る小車の、遊山崎を打過ぎて、昆陽の池水生田川、波こゝもとや須磨の浦、一の谷にも着きにけり。(謡曲、敦盛)

● 廻底に茅の屋根、葺き傳へたる家の風、南をうけて暖かな、富裕のくらし一郡に、二も無き系圖、三左衛門重義といふ郷士ありけるが、何聞からず満る月。(謡曲、敦盛)

● わたつ海その玉もに宿かりて南の空をてらす月かけ。(定家)

● たち上るみなみのはてに雲はあれどてろ口くまなき北のおほ空。(同)

● 堂たてしきしのかひある藤浪のなびきぞ共に思ひやえ哉。(同)

● 玉草をまつらん里の秋風にはるかにむかふはつかりのこゑ。(長經)

● 秋の夜は都のみなみ月ぞすむ鳥羽田のお

もの雲井はるかに。(有家)

● 伊豆の國山の南にいづる湯のはやきは神のしるしなりけり。(賀朝)

● 春日さす南のにはの雲げよりかげらうばかり梅の香ぞする。(諸平)

● 紀の海や南を夏とてる日には海士の手かけゆきやけなん。(長流)

● ゆく雁を共にそむきて山ざくら花は南の枝いそぐなり。(同)

● 葛城の山越え来ればかげとも木の國原ぞむら榮えたる。(千廣)

● 風の香も南に近し最上川。(芭蕉)

● 寒梅や南に如北に山。(秋瓜)

● 菜の花や南は青く日はゆふべ。(晚白)

● 鶯の胸毛をこぼす春みなみ。(白雄)

● 萬歳ものぼれつくばの朝南。(乙二)

● 大宮や南がしらに雁の聲。(召波)

● 南には蔵やながめて菊づくり。(也右)

● 明月は南を得たり佛頂珠。(風雪)

● しぐるゝや南に低き雲の峯。(几童)

● 南から出たかもしらすおぼる月。(蓼太)

● いち時になりなば肩ははる南風の手まめに花もさかす。(太飛成)

● 八方へ風は香りをふきちらす梅は南をさ

みノ部 みなみ

●水田百畝一區宅。歸老城南何日能。
(文同)

●千山落日丹霞北。萬里孤城白水南。
(眞師泰)

●秋山春雨雨吟處。倚榻江南寺々樓。
(杜牧)

●拂衣何處去。高枕南山南。
(孟浩然)

●飢風自南。吹彼棘薪。
(詩經)

〔み〕耳

耳殼。俚耳。里耳。鼎耳。

みゝと。みゝどし。みゝしひ。そらみゝ。ひがみゝ。みゝなる。みゝ遠し。

●帝覽是をきしめして、即勅使をたてられ、御位を譲るべきよしを仰せられけるに、許山遂に勅答を申さず。刺松風流水の清き音をききて、爽なる耳の富貴榮花の眩しき事をききて、汚れたる心地しければ、瀬川の水に耳を洗ぎける程に、同じ山中に身をすて、隱居したりける葉父といふ賢人、牛を引きて此川にて水を飼はんとしけるが、許山が耳を洗ふを見て、何事か今耳

をば洗ふぞと問ひければ、許山帝覽の我に天下を譲らんと、仰せられつるをききて、耳汚れたる心地して候ふ間、洗ふなりとぞ答へける。葉父首をふりて、さればこそ此水例もりも濁りて見えつるを、何故やらんと覺來なく思ひたれば、此事にてありけり。左襟に汚れたる耳を洗ひたる水の流をば、牛にも飲るべき様なしとて、徒に牛を引きてぞかへりける。
(太平記)

●からうじておきて、此處彼處ものにあたり騒ぐ程に、叩きやみて歸りぬるにやあらん。いきたなしと思しぬらんこそ物思はぬさまなれば、同じ心はまだ寢ざりける人かな。誰ならんと思ふ。辛うじて起きても人もなかりけるに、そら耳きよおはさうじて、夜の程だに何とかまどはさる。さわがしの殿の御許達やと、腹立ちてまたねぬ。
(和泉式部)

●大薩摩ばかり耳とき人なし。實に蚊の腫のわけ落つる程も、きよつけ給ひつべくこそありしか。職の御曹司の四おもてに住みしころ、大殿の四位少將と物いふに、側にある人、この少將に、扇の給の事いへとさうめければ、今の君立ち給ひなんにたと、密

にいひ入るゝな、その人だに得きよつけで、何とかと耳をかたぶくるに、手かううて、にくし、さの給はよ、今日はたよじとの給ふこそ、いかで聞き給ひつらんとおさましかりしか。
(清少納言)

●なべてのつかうまつり人こそ、とあるもかゝるも、おのづからたちまじらひて、人の耳をしも目をも、かならずしもとめぬものなれば、心やすかるべかめれ。われたにその人のむすめ、かの人の子などしらるゝきはなれば、おやはらからのおもてぶせなるたぐひおほかめり。
(紫式部)

●喜惡哀樂もみな夢の浮世としれどまださめぬ。烟酒煮賣夜商人、わが爲ならねど兼念佛の鉦の、音さへ何となく、耳あらたまる霜の聲。無常迅速東の間に、千日墓につきにけり。
(馬琴)

●耳なしの山人ならばほととぎす幽なる音はもらさうまし。
(景恒)

●時鳥一聲きよし夕より耳安からぬ身となりにけり。
(有功)

●耳うとき父入道よほととぎす。
(蘇村)

●船頭の耳の遠きよ桃の花。
(支考)

●老が耳時鳥にてなかりしや。
(野坡)

●隙明や蚕の出で行く耳の穴。
(丈草)

●むつかしき猫の耳さへ郭公。
(旨原)

●畑打や耳うとき身誰一人。
(閑更)

●四海波魚のきよ耳あけの春。
(風雲)

●老散るや蒲團被れば耳が鳴る。
(長翠)

●短夜や驛路の鈴の耳につく。
(芭蕉)

●頑に月見るやなほ耳遠し。
(杉風)

●順ふや音無き花も耳の奥。
(鬼貫)

●ほととぎす銀子怪びてすました耳のねは御掛かけたと聞くや一聲。
(走帆)

●郭公目鏡のたまに音づれて鳴音は兩の耳にかけたり。
(組長)

●思はずも寐耳に水とひよきしをあらうてやみん曉のかれ。
(口眞似)

●おさらばといひしことばが耳のそこに残りおほさう曉の空。
(赤良)

●錢金のとりやりきかぬしはすにはめがね

ばかりぞ耳にかゝれる。
(也有)

●餌すり鉢はらふ驚ひと聲をわれらが耳へ早くおまはし。
(定丸)

●髪をれば格別目だつ耳のたぶめでたくのする米の敷かな。
(から丸)

●もつれたるはなしをきくも物うしと耳たぶ洗ふ瀧のしら糸。
(木住)

●めづらしき冥途の鳥のなく方に我もむげんの地獄耳をば。
(一見)

●目はないが耳はそるへてもつてゐる。
(川柳)

●むつとした耳へかすかな上さうり。
(同)

●米相場はなすも耳にかゝり人。
(同)

●梶原は耳を出した元祖なり。
(同)

●御樂だと大きく耳のきはで云ひ。
(同)

●はつ松魚はも左の耳で聞き。
(同)

●お談義のるすには壁に耳もなし。
(同)

●雨親は耳よりの儀とそはへより。
(同)

●月代を剃るとりんきで耳をふき。
(同)

●支宗は泣くく耳のあかをと。
(同)

●くちきりの、ねじめやさしき忍びこま、心はどうかこほろぎの、壁にうき身を立つうき名、知らずしわぶき空耳に、つぶしたい

ほどつぶされて、えゝわしやほんにまりとては。(俗語)

●視のいさみや世のそしり、耳をつきやく入合の、鐘しるしに忍びいで、秋風さむく身にしむし、いまの恨は長堀と、人目をつゝむ、頼かぶり。(同)

●諫言耳に逆ふ。(理諺)

●壁に耳あり。(同)

●耳は懸をつたふ。(同)

●耳をふさぎて鈴を盗む。(同)

●耳學問。(同)

●馬の耳に風。(同)

●感於無感。默々元性。聞於無聞。洋々化源。勿恃己善。不厭人仁。勿矜己能。不敬人文。勿聆鄰聲。其亂乃神。勿信美談。其矯乃身。聽誤多害。聽妄多敗。近賢則聰。近愚則瞶。幾居九重。聽在良耳。故得大拜。授被神器。勿聽他言。察聽乃志。勿聞他言。察聽乃義。慎正今非。慎明古是。捨身何適。古樂而已。(皮日休)

●君子之學也。入乎耳。著乎心。布乎四體。形乎動靜。端而首。顛而動。一可。以爲法則。小人之學也。入乎耳。出乎

口。口耳之間。則四寸耳。曷足以美七尺之軀哉。(荀子)

●生年冠子。歎世鹿皮翁。眼復幾時晴。耳從前月聲。猿鳴秋淚勢。雀喚晚松空。黃落驚山樹。呼兒問朔風。(杜甫)

●惟耳司聽。仁愛是聞。詳察巧言。離辨異群。無迷邪詭。炫惑莫分。(蕭子真)

●聲音清濁調聲奇聲。以耳異。(荀子)

●「みやうにち」明日

明朝。翌日。明日。

あす。あくる日。

●湖生の頃日のうちかななるに、女院の御所の御庭に、散りつもりける花のいと多かりければ、伴のみやつこ召させ給ひて、一所に集めさせ給へば、高さ五尺ばかり程の山の形にありけるを、いと興させ給ひて、吉野の花を移し山なれば、あらし山と名付けさせ給ひて、人々に歌よませ、上にも奏し給ひければ、明日の程に渡らせ給ひてんとたまはせ給ひけるに、其夜風のほげしく吹きて、いひがひなくなりけり。つとめて辨内侍の方へ兵衛佐の局。みよしの花をあつめし山の名も今朝

は嵐の跡にこそあれ、とありけるを、奏し給ひければ、千早振神代もさかす夜の程に山をあらしのふき散らすとは、とのたまはせて、いといたうをしがらせ給ひにけり。(松翁)

●民草の雨風をいとふ餘に、きのふの風にはや葉末しをれぬ。この比の雨にたけものびすぎぬれば、みのりも少なかるべしなどいふは、力ある民草なり。此雨にはいかとあらんと問へど、さしてかはりもあらず。明日さへ晴れば、かへりておひたち早かるべしといふは、心の中は秋のたのみ心にかゝれど、いふもすがに心地あしければ、口にはよきまにいふは民草の力のおとろへしなりけり。(紫翁)

●海嶺々として、雲の波煙の波、いと深き所に、三の神山あり。不死の薬多くありとて、方士をして年々に、薬を取りにつかはし、秦皇漢武も昔語になり、周穆王の入峩の駒にむち打ちて、一世界をかけりし、今何れの所にかある。今日くれ明日すぎて、年月をおくる程に、荒原に日にさらされし、骨も朽ちうせて、たえせぬ名のみ、のこせり。

(西行)

●此日しすでに染竹の、夜の間を待たせ給ふべし。明日も三吉野の山根、立ちくる雲にうちりて、夕陽残る四山や、南のかたに行きけり。(謡曲、嵐山)

●實にや五月雨の、晴れぬ日敷もふり行くに、明日となひいそ飛鳥川の、水田の波線、立ち連れいざや植えうよ。(謡曲、飛鳥川)

●傍に有り合ふ給着、扶んでずつと指出せば、手を出して足を軽く給着、奈いと敷いて喰はんとする、手をじつととらへ、コレ由真之助殿、明日は主君懸谷判官の御命日、取分け遠役が大切と申すが、見事其着貴殿は喰うか。(浄瑠璃、忠臣蔵)

●うき世をばそむかばけふもそむきな入あすもありとは頼むべき身か。(保胤)

●よもぎふにいつかおくれき露の身はけふの夕ぐれあすの曙。(慈圓)

●はかなくも明日の命をたのむかな昨日とすぎし心ならひに。(家隆)

●あすしらぬけふの命のくるまに、このよをのみ先なげく哉。(定家)

●あすしらの我身とおしへどくれぬまのけ

(貫之)

●ふは人こそかなしかりけれ。(貫之)

●あすありと思ふ心のあだ根よはに嵐のふかぬものは。(讀人不知)

●あすしらの世のならひこそ悲しけれ今いつまでとあかしくらさん。(季宗)

●入る月に人のわかれたたぐへなばかならずあすのよなもたのまん。(千隆)

●ゆくゆくにあすをたのまぬ心してひとくくをやくおくらん。(浦蓮)

●しづたまきつひにかくてやくちはてんきのふのあすをあすのきのふに。(契沖)

●あすをまた頼む心のはかなさよすぐればけふの夕ぐれのそら。(廣足)

●あすまではあらじと思ふ花をのみ見てゆく旅になりけるかな。(言道)

●あすか川明日といひてはながしやる月日にかくる櫓ぞなき。(守部)

●講釋のかたきは明日へ逃げのびて。(川柳)

(同)

●人丸を片身おろして明日の朝。(同)

●明日までの遠言を聞く草履とり。(同)

●雨のつれづれ大磯ゆかし、君こひし。われは浮べる雲のうへ、明日をもしらぬうき身ぞと、鬼王をちかづけて、今日は長者の風呂日なり。こひしゆかしきその人と、ふいつふかれつ或はまた、煙くらべん富士波間、のぼりつめたるこひの山。(俗語)

●いとま下され明後日はまたぬ、あすは黒口で日がわるい。(同)

●問はよ問へかし此夕暮を、あすの命も知らぬまに。(同)

●今日か明日か。(俚諺)

●今日は人の上、明日は我身の上。(同)

●明日は明日の神が守る。(同)

●「みやう」都

都府。帝都。都城。京都。京城。帝京。九重。金殿。鳳樓。四通。八達。こゝへの都。玉しきの都。ふるき都。都のてふり。玉のみやこ。

花の都。月の都。

●治承四年の水無月の頃 俄に遷都侍り... いと思の外なりし事なり。大方此京の始をきけば、嵯峨天皇の御時、都と定りにけるより、後既に數百歳をへたり。異なる故なく、たやすく改まるべくもあらねば、是を世の人たやすからず悲ひあへる様理に過ぎたり。されどもとかくいふかひなく、御門よりはじめたてまつりて、大臣公卿ことごとく移り給ひぬ。世につかふる程の人、誰か獨故郷に残り居らん。官位に思をかけ、主君の陸を頼む程の人は、一口なりとも疾く移らんと勵みあへり。時を失ひ世に餘されて、期する所なきものは、悲ひながらとまり居り。軒を争ひし人のすまひ口をへつゝあれゆく。家は毀れて、淀川に浮び、地は目の前に出となる。人の心皆改りて、馬鞍のみ頂くす。牛車を用とす人なし。四南海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。其時自事の便ありて、攝津國、今の京に至れり。所の有様を見るに、其地租狭くて、條里を割るにたらず。北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。波の音常に喧しくして、鹽風殊に

はげしく、内裏は山の中なれば、かの木丸殿もかくやと、中々様變りて、優なる方も侍りき。日々に毀ちて、川もせきあへず運び下す家は、いづくに作れるにかあらん。猶空しき地は多く、造れる屋は少し。古郷は既にあれて、新郷は未ならず。ありとしある人は、皆浮雲の思をなせり。もとより此處に在れる者は、地を失ひて悲ひ、今移り住む人は、土木の煩ある事を歎く。道の邊を見れば、車に乗るべきは馬にのり、衣冠布衣なるべきは、多く直垂をきたり。都のてぶり忽に改まりて、たゞ鄙びたる武士に異ならず。是は世の亂るゝ瑞相とか、聞きおけるもしく、口をへつゝ世の中うき立ちて、人の心もをさまらず。民の愁つひに空しからざりければ、同年の冬、猶此京にかへり給ひにき。されど毀ちわたせりし家どもは、いかになりけるにか。ことごとくしものやうにし、作らず。ほのかに傳へ開くに、古の賢き御代には、機をもて國を治め給ふ。則御殿に芽をふきて、軒をだにもとへのす。煙のとほしきを見給ふ時は、限ある賈物をさへ免されき。是民を慈み世を助け給ふによりてなり。今の世の中の有

様、昔にならずへて知りぬべし。(長明) ●源氏の方には藏人行家、數千騎にて宇治橋を渡りて都へ入り。陸奥の新判官よしやすが子、矢田の判官代義清、大江山をへて、上洛すとも申しあへり。又攝津國河内國の源氏等同心して、同じう都へ亂れ入るよし申しければ、平家の人々、此上は力及ばず、唯一所にていかにも成り給へとて、方々へ向けられたりける討手ども、皆都へ呼び返されけり。帝都名利の地には雞鳴きて安きことなし。治れる世だにもかくの如し。况や亂れたる世に於てをや。(平家物語) ●はこやの山、峯の松もやう／＼枝をたつらねて、千代に八千代をかき、霞の洞の御すまひ、いく春をへても空ゆく月日のかきりしらず、のどけくおはしましめべかりける世を、あり／＼てよしなき一ふしに、今はかゝ花の都をさへたちわかれ、おのがちり／＼にさすらへ、いそのとまやに軒を並べて、おのづからことふものとは、浦につりするあま小舟、鹽焼くけぶりのなびく方を、我ふる里のしるべにかとばかりながめ過させ給ふ。(増鏡)

●おもしろの花の都や、筆に書くとも及ばじ。東には祇園清水、落ちくる瀧の、音羽の嵐に、地主の櫻はちり／＼、西は法輪寺の御寺、廻らば廻れ水車の輪の、りせんせきの川波、川柳は水にもまると、しだり柳は風にもまると、ふくら雀は竹にもまると、都の牛は車にもまると、茶臼は挽木にもまると、げにまこと忘れたりとよ。こきりこは放下にもまると、こきりこは二つの竹の、世々を重ねて、うち治まりたる御代かな。(謡曲 放下僧)

●雁金の花を見捨つる名残まで、故郷思ふ旅心、憂きだに念ぐ此方は、さすがに花の都にて、海山かはる隔てにも、思ふ心の道の邊の、便の櫻夏かけて、鉢めみちかきあたら夜の、花の都に着きにけり。(謡曲 加茂物狂)

●所は九重の、東北の叢地にて、王城の鬼門を守りつゝ、悪鬼を掃ふ雲水の、水上は山陰の鴨河や、すゑ白河の波風も、いさぎよき響きは、常樂の縁をなすとかや。庭には池水をたゝへつゝ、鳥は宿す池中の樹、僧は敲く月下の門、出で入る人跡かす／＼の、袖をつらね菱裾を染めて、色めく有様

みよ部 みやこ

は、げに／＼花の都なり。 謡曲 東北) ●殊に御用繁い、水鏡の奥方、寒空といひ、思ひがけなき御上京、となせ様は免もあれ、小浪御寮さぞ都珍しからう。祇園清水知恩院、大佛様御らうじたか。金開寺拜見あらば、好いつでが有るぞと、心置なき挨拶に、只あい／＼も口の内、帽子まばゆき風情なり。(浄瑠璃 忠臣蔵) ●萬代に見るともわかぬみよしの、おきつかうちの大みやとどろ。(金村) ●こひせめし心はいつぞいそのかみ都のおくの夕ぐれの空。(熱鐘) ●玉ぼこのみちのしばくさうちなびきくるき都に秋風ぞふく。(後鳥羽院) ●いにしへの人にわれわれやさ波のふるき都をみればかなしき。(萬葉) ●さびしともたれかはさかんいづみ川くこのみやこの松のあき風。(葦海) ●のどかなるみやこのほどぞしらねる行さかふ人の袖のままにも。(筑波子) ●うつりゆく世の姿をみみるものは都のひととてぶりなりけり。(春海) ●春の花秋の月にもかけてなほ都の空をよにあふぐらし。(萬葉)

●むらさきもあけしみどりもふる衣ならの都はたれかきて見ん。(契沖) ●おきつなみわれしなにはの都鳥所もとることやとはまし。(同) ●都出で、神も旅疑の日數哉。(芭蕉) ●ある僧のさしひし花の都哉。(凡兆) ●櫻狩よき寺見出す都かな。(關東) ●雨の日や都に遠き桃の宿。(華村) ●みやこにも住まじりけり相撲取。(去來) ●御忌まわり都ぞ都珠數袋。(言水) ●四方の花に心さわがしき都哉。(櫻良) ●花に來て都は暮の盛かな。(其角) ●しんそはをしらぬ都のうつり哉。(許六) ●菜の花のはつ／＼にみる都かな。(曉吉) ●君が代は都のまぢを十かへりの松原どほりつよく千本。(有政) ●大かたのひなの晝ほど都にはゆきよの人よるもにきはふ。(便々齋) ●都にはかれ一升にかふるほどつちのねたかく衣うつなり。(眞友) ●いにしへのさくら八重も九重の花の都と今はほへり。(諸春) ●綾にしきおれる都はこの葉に花やもみぢのありて美し。(藤風軒)

八七五

●大君のふかしめ給ふ都へはたいらに安き
文字をこそかけ。 (市住)

●あや錦おれる都は人みなのがたは柳、
との葉は花。 (拾月庵)

●こゝにます國こそなけれひまありて月雪
花をみつのは。 (福縁亭)

●山を出で、懐かしいやら郭公都の空を忍
びねに鳴く。 (菫)

●都の空に住みもせて御殘念。 (川柳)

●都の地も都となりし小春月。 (同)

●ゆつくりと寝る氣で都、つしなり。 (同)

●新都では海はつかりを諸御ほめ。 (同)

●都の空に雲を引く御神帳。 (同)

●賣れた難十軒店を都がへ。 (同)

●珍らしき都はたつた八草ほど。 (同)

●小人島都大よそ四分四方。 (同)

●都では秋香妻では草をくひ。 (同)

●これは京鹿子、いろもよや、目若手際も
よや若よや、あら都こひしやのう、みや、
のしてたち戀しやのう。 (俗語)

●鳥も道はぬ山なれど、住めば都よ我が里
よ。 (同)

●京にも田舎あり。 (俚諺)

●住めば都。 (同)

●都は日はづかし、田舎は口はづかし。 (同)

●天漢東穿白玉京。日華浮動翠先生。橋邊
遊女瓊環委。波底上陽金碧明。月鎖名園孤
鶴唳。川翻秋夢蟹龍聲。連昌補遺行宮在。
玉斝何時父老迎。 (杜牧)

●五夜綺筵催曉箭。九重春色醉仙桃。旌
旗日暖龍蛇動。宮殿風微燕雀高。朝罷香烟
捧蒲袖。詩成珠玉在揮毫。欲知世掌絲
綸美。池上子今有鳳毛。 (杜甫)

●雲端雙闕古神京。憶昔春風豈覺驚。團
沼已荒柳柳合。衣冠何在堽墳平。一溪煙草
助々鹿。千樹殘花恰々鶯。行盡借香山下
路。流泉鳴咽最關情。 (星巖)

●敲盡清鐘金銀寺。隔水嬌娃桃李街。好
箇紅紅佳麗地。可能容我破世鞋。 (同)

●形勢山河景。目驚。五雲高擁鳳凰城。白
知鸞殿臣材小。不敢抽簪賦帝京。 (同)

●半空湧出兩浮圖。更有伽藍俯九衢。十
二帝陵低不見。黑風白雨滿京都。 (竹外)

●強吳滅分有荆棘。姑蘇臺之露漉漉。暴
秦衰兮無虎狼。咸陽宮之網片々。 (順)

●綠草如今鬢鹿苑。紅花定昔管絃家。 (管三品)

●「みやこどり」都鳥

●なほゆき／＼て武藏の國と下總の國との
中に、いと大なる河あり。それを隅田川と
いふ。その河の邊に群れわて思ひやれば、
限なく遠くも來にけるかなとわびあへる
に、渡守はや船にのれ、日もくれなんとい
ふに、乗りて渡らんとするに、皆人物わび
しくて、京に思ふ人なきにあらず。さる折
しも白き鳥の、喉と足と赤き、鳴の大なる、
水の上に遊びつゝ魚を食ふ。京には見えぬ
鳥なれば、皆人見しらず。渡守にとへば、
これなん都鳥といふとききて、
名にしおはよい言問はんみやこどり
我思ふ人はありやなしやと、
とよめりければ、船こぞりてなきにけり。
(伊勢物語)

●昨日は東園のふもとに鬱をならべて十萬
餘騎、今日は西海の波の上に機をときて七
千餘人、雪海茫茫として、宵天既に暮れなん

とす。孤島に夕霧隔て、月海上に浮べり。
極浦の波をわけ、鹽にひかれてゆく船は
半天の雲に還る。日數ふれば、都は山川程
を隔て、雲井のよそにぞなりにける。遙
々來ぬと思へども、唯つきせぬものは涙な
り。波の上に白き鳥の群れあるを見給ひて
は、彼ならん、在原の何がしの隅田川にて
首とひけん、名も難じき都鳥かなとあはれ
なり。 (平家物語)

●かの千住のほとりまでは、旅ともなく、
まいてうさもつらさしらす、こよなう故
郷こひしくもおもほえずありしが、道のか
くへだよりければ、しきりに思ひしたはれ
て、雲の面影とのみ見し田の面の鷺も、も
しや都鳥にや、ありやなしやの首づてせま
しと思ほゆるにぞ猶心細き。 (樂翁)

●實に／＼都の人こそ、名にし負ひたるや
さしきよ。のう其詞はこなたも耳に留るも
のを、彼榮平も此の渡りにて、名にしおは
よい事とはん都鳥、我思ふ人は有りやな
しやと、のう舟人、あれに白き鳥の見えた
るは都にては見馴ぬ鳥なり。あれをば何と
申し候ふぞ。あれこそ沖の鷗候ふよ。うた
てやな浦にては千鳥とも玉へ鷗とも云へ。

など此の隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは
答へ給はぬ。實に／＼誤り申したり。名
所には住めども心なくて、都鳥とは申さ
で、沖の鷗と夕波の、昔にかへる榮平も、
有りや無しやと事問ひし、鷗の人の思ひ
妻、妻は東に思ひ子の、ゆくへを問ふは同
じ心の、妻を忍び子を尋ねるも、思ひは同
じ戀路なれば、我も又、いざ事とはん都鳥、
我思ひ子は東路に、有りやなしやと、問へ
ども、答へわはうたて都鳥、都鳥と
やいひてまし。實にやふなきは、堀江の
川のみなきは、來居つゝ鳴くは都鳥、そ
れは難波江これ又、隅田川の東まで、思
へば限なく、遠くも來ぬ物かな。さりと
ては渡守、舟こぞりて狭くとも、乗せさせ
給へ渡守、さりとては乗せてたび給へ。
(謡曲、隅田川)

●とつ國や隅田川原の邊りに近き蓬生住、
夫婦も元は都鳥、あるか無きかのかせ世
帯、妻は手づまの貸仕事、小楯取る間も無
けれど、浮世の垢の落ち兼ねて、乗り立
ちしせむ世渡りの、愛身にとんと、筆捨て
て、針手綴りの色紙短冊、歌人に似たる野
草。 (浄瑠璃、双生隅田川)

●ふなきはふほり江の川のみなきはにきぬ
つゝなくはみやこどりがも (萬葉)

●ふねとむる難波ほりえにきぬるなりこれ
はたかつの都鳥かも。 (公朝)

●こしのうかにむれてある共都鳥都の人ぞ
こひしかるべき。 (順)

●やそしまのみやこどりをぞ秋の野にはな
みてかへるたよりに見る。 (好忠)

●古郷をこふるねざめのうら風に聲なつか
しき都鳥哉。 (相模)

●名にしおはよしらじなわたの都鳥心づく
しのかたはとふとも。 (俊賴)

●思ふ人あるにつけても都鳥あはれいまは
とのりのかはなき。 (寂蓮)

●おのがねはたつともなくて角田川舟なか
しむるみやこ鳥哉。 (長流)

●こと問はんはしとあしとはあかざりし我
こし方のみやこどりがも。 (阿佛尼)

●わきも子がうへかたらん都鳥さこそむ
かしの人もとひけれ。 (實定)

●都鳥我を呼ぶかも松の奥。 (曉古)

●都鳥それにも煤を浴びにけり。 (一茶)

●我舟におもて合せよ都鳥。 (几董)

●壘にしてしむるこづてむ都鳥。 (芭蕉)

●秀句うちん梅見もどりに都鳥。(道彦)
 ●いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥。(貞室)
 ●雪解して春ふくれけり都鳥。(成美)
 ●水ゆるし三日遊ばと都鳥。(整太)
 ●枝川へ入るや野分のみやこ鳥。(沙明)
 ●涼しきや何所にくれて都鳥。(一司)
 ●すみだ川月の光を花川戸あれ都鳥あれ都鳥。(橋洲)
 ●名にしおはぬ東のはての都鳥しるさき雪にすみだ川哉。(菅江)
 ●都鳥とてころの人はかもめにてそれなりけりに先すみだ川。(村竹)
 ●隅田川立よれば飛ぶみやこ鳥とよふ人にあきやしつらん。(縫方)
 ●都鳥隅田河原にあしおとのありやなしやにふれる春雨。(梅寸)
 ●有無のこと問へど答へぬ都鳥口はづかしき田舎と思ふ。(未得)
 ●ことよはんまでや笈士都鳥花のあらしにわがおもふひと。(木隆)
 ●隅田川花の錦をかづきにて鳥も都のてぶりなりけり。(捨魚)
 ●影うつる花の錦に織りこめるもやうのやうにかやこ鳥かな。(千廣)

●名にしおはよあづまなまりもなからましすみ田河原になく都鳥。(葉守)
 ●隅田川花の雪にもこよゆらんはしとあしとのあき鳥あり。(舟庭)
 ●すみだ川所の人はかもめなり。(川柳)
 ●都鳥聲こと問へばわたくしは。(同)
 ●知りませんとや答へけん都鳥。(同)
 ●浮草のやうに浪間のみやこ鳥。(同)
 ●隅田の土手雪見の足も都鳥。(同)
 ●築焼の茶碗模も都鳥。(同)
 ●江戸そだちでも都鳥やゆき衣紋。(同)
 ●夕淋しき、秋のなかばの通ひぢ、戀にくちなん袖の涙の捨舟、月はもとより隅田川に流して、いざ音問はん都鳥。(俗語)
 ●故郷を遙々と隔て、此に隅田川、都鳥に音問はん、君はありやなしやと。(同)

「みゆき」行幸

御幸。行啓。車駕。鹵簿。行列。威儀。堂々。扈從。錦旗。鳳輦。龍駕。たえしみゆき。みゆきのあと。
 ●文永三年になりぬ。四月に蓮華王院の供養に御幸あり。一院(後嵯峨)は赤色の表の御衣、新院(後深草)は青色の御袍奉れり。女院(おほみや)の御車に平准后も参り給ふ。人だまひ三輛は編入れる五衣なり。御車の尻に仕うまつられたる、上臈だつ人のにや、あはせの五衣、藤の表衣袖口出せる。御幸には、上達部は皇后宮大夫師繼を上首にて十人、殿上人十二人、御隨身ども藤山吹をつけたり。居御御所人まで世になくきらめきたり。常の見物にすぎたるべく。行幸は當日の午の時ばかりなるに、諸司百官のころなし。左右の大臣薄色蘇芳などなり。右大将通雅花橋の下臈、中納言公藤同じ色、左大将家経蘇芳の下臈、萌黄の上の袴、侍從中納言好氏、權中納言通基、左衛門督通頼、衣笠宰相經平、これらは皆蘇芳の下臈、萌色の上の袴なり。別當高定宰相中納言通持、三位中將實兼、右衛門督師親、殿上人には頭中將具氏、忠秀、この人々は松重の下臈、藤の表の袴、同じ色なる念なしとぞ沙汰ありける。具氏は花橋の下臈を着給へりしと申す人も侍りしは、いづれかまことなりけん。近衛の將曹廿四人、とりく色々に織り盡したるめでたかりけり。(増鏡)

●そのしはすに大原野の行幸とて、世に残る人なくみさわぐな。六條院よりし、御かたしひき出でつみ給ふ。うの時に出てたまひて、朱雀より五條の大路を西ざまになれ給ふ。かつら川のもとまで、物見車置なし。行幸といへど、かならずかうしおらぬを、けふはみこたち、上達部もみな心ことに、御馬鞍をととのへ、隨身うまごひのかたちただち、さうぞくをなさり給ひつゝ、めづらかになかし。左右の大臣、内大臣、納言よりしはた、ましてのこらずつかうまつり給へり。あな色の上のきぬ、えびぞめのしがさねを、殿上人、五位六位まで着たり。雪たゞいさうかうち散りて、道の空さへえんなるに、みこ達上達部など、鷹にかゝづらひ給へるは、めづらしきかりの御よそひどもをまうけたまふ。そふの鷹飼どもは、まして世にめなれぬすり衣をみだれきつゝ、氣色ことなり。めづらしうをかききことに、きはひ出でつゝ、その人ともなく、かすかなるあしよわき車など、輪をおしひしがれあはれげなるもあり。うきはしのもとなどにも、このまじう

たちさまよふよきくるまおほかり。(紫式部)
 ●かゝりし程に法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の小原の閑居の御住居、御覽せましく思召されけれども、二月三月程は風はげしく餘寒も未つきせず、峯の白雪たえやで、谷のつらうも打とけず。かくて春すき夏立ちて、また祭もすぎしかば、法皇夜をこめて、小原の奥へ御幸なる。忍の御幸なりけれども、供奉の人々には、徳大寺、花山の院、土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬道の御幸なりければ、彼清原深養父が、補陀落寺、小野の皇太后の舊跡御覽あつて、それより御輿に召されける。遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜まる。卯月二十日あまりのことなれば、夏草のしげみが末をわけ入らせ給ふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡たえたる程も、思召し知られて哀なり。(玉家物語)

●元徳二年二月四日、行事の辨別常、萬里小路中納言藤原房を召されて、來月八日、東大寺興福寺行幸あるべし、早く供奉の輩に觸れ仰すべしと仰せなされければ、藤原古を尋ね、例を考へて、供奉の行粧路次の行列を定めらる。佐々木備中守延尉になりて橋を渡し、四十八箇所の舞、甲冑を帶し辻々を堅む。三公九卿相從ひ、百司千官列をひき、言語道断の嚴儀なり。東大寺と申すは、聖武天皇の御願、開淨第一の盧舍那佛、興福と申すは、淡海公の御願、藤原尊崇の大伽藍なれば、代々の聖主も、皆結縁の御志は御座せども、一人出で給ふ事容易ならざれば、多年臨幸の儀もなし。此御代に至りて、絶えたるをつき廢れたるを興して、風聲を廻し給ひしかば、衆徒歡喜し聲を合せ、靈佛威徳の光を添ふ。されば春日山の嵐の音も、今日よりは萬歳をよぶかと怪まれ、北の藤波千代かけて、花咲春の陰深し。(太平記)
 ●ひかりの影もあきらけき、玉松が枝に咲きそふや、池の藤波夏かけて、是も御幸を待ちがほに、青葉がくれのおそ根、初花よりめづらかに、中々やうかはる有様を、あはれに寂慮にかけまくも、かたじけなしや此御幸、紫の原のしばしがほども、ある

べき住居なるべしや。思はずも深山の奥の住居して、雲井の月をよそに見んとは。かやうに思ひ出でしに、此山里までの御幸、かへすくもありがたうこそ候へ。

(謡曲、大原御幸)

●處を知るも嵯峨の山、御幸たえにし跡ながら千代のふる道たどりこし、ゆくへも君の蕙ぞと、深き情の色香をも知る人のみぞ花鳥の、音にだにたてよ東屋の、あるじはいざ知らず、調べは隠れよもあらじ。

(謡曲、小督)

●住むべき山は此處なるぞ。汝は歸れと宣へば、車匿承り、思ひ寄らざる仰や候。假の御遊の行幸にも、御供は離れ参らせず。人跡絶えたる山中に、捨て置き歸り明日よりは、御太子とも若君とも、誰をか指して宮仕へ、御願も拜すべき。如何なる深山の奥までも、唯御供と計りにて、聲も惜まらず泣きわたり。

(浄瑠璃、釋迦如来)

●冬深き野邊の御幸の今日しめれ白ふの鷹をすみてける哉。

(菅隆)

●うみをきし昔やかたて契りけんけふのみゆきをまつ風の聲。

(賴意)

●百敷や大内山のさくら花さきてや君のみ

ゆきまつらん。

(光資)

●小倉山みねの紅葉は心あらば今一度のみゆきまたなん。

(貞信公)

●むろの江を連れて渡る雁がねになえし御幸の影をしぞ思ふ。

(諸平)

●とのまもり近きまもりをすゝめがしておほみゆきする道ぞかしこき。

(爲兼)

●とのもりのよるのみゆきにともす火のあきけきよとなりける哉。

(光俊)

●もみちばに昔しのばさかの山御幸のあとも尋ねてを見よ。

(春海)

●もみちばに埋れてこそ立田川ふるきみゆきのおとは見えけれ。

(家隆)

●いはしみつわがふる道やまららんけふの行幸の空ぞのどけき。

(爲家)

●ありま山君がみゆきも年ふりわたのむしるしを神もあらはせ。

(同)

●東にもあとおることしまさくひじりの宮のふかきみゆきは。

(公朝)

●行幸の牛洗ひけり年の暮。

(其角)

●旋覆花や昔御幸のありし跡。

(羽墨)

●ももしきやふるき其名を今もなほみゆきぞ残る御幸町筋。

(春風)

●みゆきまで案のみちばららずにぬ。

(同)

●猿澤の土左衛門見に御幸なり。

(川柳)

●行幸跡紅葉を五位の小倉山。

(同)

●花の外小倉へ秋の御幸なり。

(同)

●關の御幸を無雅がよりおし戻し。

(同)

●鹽風呂も大原御幸に休札。

(同)

●蜘蛛の巣を笏ではらつて御幸也。

(同)

●君がなまきけの忘れられで、捨てぬ扇の秋も更け、かたむく月の夜もすがら、行幸を待つぞはかなき。

(俗謡)

●手染の糸の立田姫、おりだす錦しなんに、その名も高尾小倉山、行幸またなんあすか川。

(同)

●井筒によりて玉の井の、ふかき心の水かよみ、くもらわかげは大君の行幸またなん大原山。

(同)

●御所の御成はずばやく半時。

(俚諺)

●娘殿薛推鬼。仙遊實壯哉。曉雲連霧捲。夜火雜星回。谷暗千旗出。山鳴萬乘來。扈遊良可賦。終乏撥天才。

(宋之間)

●「みるい」 未來

將來。當來。來世。

ゆくへ。ゆく末。のちの世。お

ひ先。

●昔よりして腹黒く、たくめる人の誣言に、罪ならぬ罪をえたまひし、賢き人も多かれど、終にははるゝ雨後の月、光は世々にあらはれて、いまそかりける時にます、例をひくに侍らねど、人の心に減なくて、命をすつる者やは侍る。死しての後にわらわが胸を、裂きしあばきし給はよ、かの疑の解けずやあらん。その折にこそ又もとの、妻と思つて朝夕に、只一遍の唱名も、おん身の回向をうけ侍らば、道徳智識の十念にも、萬巻千寫の讀經にも、まして成佛しはべらん。今より久しき事ながら、おん身の歳百歳の、後をたのみてうてななす、蓮華をわけて俵たんのみ。さらばとばかりいとまごひ、聲はなみだにかきくもる。天さへ秋の雨籠ひ、捨てられぬ世をふりすて、死出の旅路へいそがんと思ひ定めてかへりゆく。

(馬琴)

●かゝらぬ時のわかれたに、行くには跡を願みて、頭を家山の雲に廻らし、留るは末を思ひやりて、泪を天涯の雨にそふ。況や中將は行末とてたのみなき北狄の國に赴き給へば、生きて再び廻りあはん、後の契

もいざ知らず。又内侍は都近き海人の磯屋に身をかくし給ひければ、今もやさがし出されて、憂き名を人に聞かれんすらんと、一方ならずなき給ふ。

(太平記)

●今はいよ、法の道のみもてなさせ給ひつゝ、或時は止観の談義、或時は真言のふかききた、浄土の宗旨なども尋ねさせ給ひつゝ、よろづに御心通ひくらからず物したまへば、何事も前の世よりかしこくおはしませしける程細れて、今行末もけにたのもしくめでたきありさまなり。

(増鏡)

●實にや現在の果を見て、過去未來を知る

と云ふ事、今に知られて身の上に、憂き年月の二月や、下の十月の今日の難を、のがれつるこそ不思議なれ。

(謡曲、安宅)

●是非も涙に、南無阿彌陀佛と、鉦打ち納め、撞木と鑿る杖と笠、白太夫は片時も早く、菅壺相の御跡慕ひ、島へ赴く現世の旅立、櫻丸が魂魄は未來へ旅立、この亡きから梅王夫婦を頼むぞと、八重が事途つどつどに、頼む詞の置土産。

(浄瑠璃、菅原傳授)

●誠や佐夜の中山に、地中に埋む無間の鐘、撞けば忽ち現世には富貴を得れど、未

來には八萬地獄へ落つるといふ。ア、愚なる人心や、未來といふは僧法師の、愚者を誦する方便説、地獄極樂今日の、苦樂二ツの外にはない。

(浄瑠璃、傾城無間鐘)

●とほからぬきのふをけふの鏡にて行末さへぞ見るこゝちする。

(契沖)

●行末の今といふ世にめぐるともむかしの

人とたれかならん。

(同)

●めのみへうきだにあるをまだしらぬ行末かねて何なげくらん。

(同)

●年をへてなきにしろきをよき事のあるべ

かしくも思ふ行末。

(言道)

●身のうまは過ぎにし方を思ふにも猶行末

のことぞ悲しき。

(師頼)

●老となる身をばなげかで行末のあらまし

をのみ急ぐはかなき。

(重泰)

●たのむべき身にはあらねど行末のあらましにこそしはしなぐさめ。

(真憲)

●頼ありて今行末をまつ人やすがる月日を

歎かざるらん。

(行遍)

●いかばかり嬉しかりけんさらでだにこん

世のことは知らまほしきを。

(俊成)

- 未来記で見れば高時奇なり。(川柳)
- 賀に林予松の歌にも未来のじ。(同)
- 未来記の大尾慶長十九年。(同)
- 未来にて高尾浮世に禮を言ひ。(同)
- 子を見る親の未来記はよく當り。(同)
- 未来記を見たは現在ばかり事。(同)
- 高輪で化けたで來世牛になり。(同)
- 備正に未來をとへば知りません。(同)
- おもへばうれしそなたの心、ならう、とならながらへて、未來のために夏花つみ、香華とつてたしらわか。(俗語)
- ことよぎなれし戀戀し、千年の後はいらなくに、あかぬ心にまかせつゝ、限りもあら行末。(同)

【むぎ】 麥

むノ部

丘中。桑下。珠粒。金莖。黃穗。白芒。隨雲。岐麥。盈郊。滿野。むぎはた。むぎあき。おほ麥。こ麥。からす麥。おほ麥。冬の夜すが寒しといへども、降りしき雲にあとつけて、行きかふ人の絶ゆる隙なきすのはつれ耳に入りながら、馬黒の夢も問ふ人なく、寢覺がちなる秋雨に、雁がねの高くすぎゆけど、みよしの田面おもふ人稀なり。(馬琴)

● 田畑にむらがりては麥をほせり、大根をつき、曾哲が隠居屋のなつめも、栗栖野の秘藏の柑子も、などいたづらにあらしけん。(也有)

● 道のほとりに、はんの木といへる木の、いくすもとなく、ひだり右におひさかりおたり、向ふのかたはみな夢の青くしげりたるに、菜の花うちはへみゆるもなかし。(樂翁)

● 一夜なれく帯買うてやるぞ。帯ちや名が立つ生で拾れ。ソレく嫁入さしと連長

持買ひに、柱屏が百度出る、晚かあすかの里も賑ふ夢秋の、夢搗歌の鳴揃へ、竹夢雲に腰掛けて、煙管くはへて休みける。暗うくおつう、其方もやがて六十ちや。早う市馬に嫁取つて、なぞ樂をしやらぬぞ。ム、おちやの言やる事わいの。是程に働いて、夢一粒身につかぬ。皆姑御の樂酒にうけ、酒屋へぐわらく。(淨瑠璃、歌軍法)

● 野へはまだ露ちるばかりなられどもほいで初むる夢の初風。(名垂)

● さうなみの衣かけても思ひきや志賀の花ぞの夢を見んとは。(長流)

● 山がつの夢かりかけしはてもなくこきたれてふるさみだれの頃。(同)

● 山畑の夢のはつまき急ぐらんやめにもふるむら時雨哉。(緒平)

● 五月雨のはれまを時とうちむれて小夢かりはす遠の山畑。(忠邦)

● この頃は新夢くる友もあり。(風雲)

● うは風に音なき夢を枕もと。(蕪村)

● 香くや穉夢が中の水車。(同)

● そろくくと夢に取り付く枯野哉。(尙白)

● 土手芝や岸よりつよく夢の花。(八葉)

● 化粧して夢打つやどの女哉。(坡女)

- 夢くうて夢見る宿の更衣。(野坡)
- のどけしや夢まく頃のころも更。(一井)
- 岡の夢渡の夢やなく雲雀。(輪々)
- 夢所より夢見えて雲雀かな。(中阿)
- 夢に種が出向うとすると啼く雲雀。(確領)
- 夢青し初瀬登りの笠ならぶ。(吾東)
- 夢うたや野渡治が袖も交へうつ。(凡造)
- 夢い種もおそく出たり花盛。(計六)
- いざとくに種夢くらはん草枕。(芭蕉)
- 山吹や水にひたせるままし夢。(惟然)
- 夢跡や妹が湯を待つ煩かぶり。(鬼貫)
- 石臼のまはりあはせも夜仕事に引わりてほす夢の出来秋。(千松堂)
- むら長が知り、む庭に夏なりもすまし顔なる夢の出来秋。(菊人)
- 別れ路にまねくとすれど夢の種のうちむいてたゞ物もいはれず。(面高)
- 鬼毛なる夢もなままる世にあへば穉はしかや歌に和らぐ。(香折)
- ひのしとに取りをさめたる大夢のからは下手につくぞめでたき。(ほから)
- 幾日も立ちつきたる出来夢のまづき春しはみえぬ世の中。(手廣)

● 蛇につくる其夢わらのほも未だ見えぬに雄子のけんとなくなり。(下吉)

● わけたのとわけぬがおよぐ夢ばたけ。(川柳)

● 右々と夢から顔を出して云ひ。(同)

● 優曇花を小夢の花と覺えてぬ。(同)

● 夢めしの味もわすれた長い公事。(同)

● 川止の間大夫も夢をつき。(同)

● 夢の宵葉に風あほる村出合。(同)

● 夢の陸などいりりへ書いて見せ。(同)

● 養生に斗り江戸つ子割を喰ひ。(同)

● 終へたくよ此夢やなへた、棟は神樂にまひあがる。(俗語)

● かやもうりたしむきかりとりて、羽織したてゝ親も子も。(同)

● 夢飯にて鯛を釣る。(俚諺)

● 夢としうとめは踏むがよい。(同)

● 夢は百日の播期に三日の刈旬。(同)

● 夢の出櫃には火をふらせ。(同)

● 田家少間月。五月人倍忙。夜來南風起。小夢覆 離黄。婦姑荷 蠶食。童穉搥 蓬葉。相隨 田去。丁壯在 南岡。足蒸暑土氣。背灼炎天光。力盡不知熱。但惜夏日長。

復有貧婦人。抱子在其傍。右手秉遺穗。左臂懸敝筐。聽其相顧言。聞者爲悲傷。家田輸稅盡。拾此充饑腸。今我何功德。曾不事農桑。吏徒三百石。歲晏有餘糧。念此私自愧。盡日不能忘。(白居易)

● 高田二夢接山背。傍水低田綠未耕。桃杏滿村春似錦。踏歌推鼓過清明。(范成大)

● 無邊綠錦織雲機。全幅青羅作地衣。個是農家真富貴。雪花消盡麥苗肥。(楊萬里)

● 黃雲割盡幾層蹄。紫玉炊香一飯肥。却破麥田秋晚稻。未教水牯臥斜暉。(同)

● 安石榴花猩血鮮。涼荷高葉碧田田。鯽魚入市河豚罷。已破江南打麥天。(陳造)

● 穉籬芳樓近。樵家。麥龍背背一逕斜。寂寞遊人寒食後。夜來風雨送梨花。(溫庭筠)

● 夢從風裡熟。梅逐雨中黃。(庾信)

● 郊原浮夢氣。池沼發荷英。(張華)

● 暖風催夢早。晴晷轉花遲。(載)

● 暖風抽宿夢。渾雨捲歸旗。(韓愈)

● 我行其野。芄芄其麥。(詩經)

〔むし〕虫

腐化。草根。床下。泣露。飲露。吟風。吸風。すたく。聲しきる。草がくれ。よはのむしのね。むしのやどり。露を命。かべになく。枕とひよる。

●宮の若人など、何宮或は内の宮の御言にて、内野、鳥部野、栗柄野などにて、くまの蟲獵と申して、それかかかなど奉るに、形おどろくしうも、聲の限をつくしをかしきもあり。又形は美しく、玉蟲などいひていみじけれど、蟋蟀、促織、絡繹にさへ劣りて、聲立てぬもあれど、この蟲がやんごとなき幸あるものにて、宮の曹にて何くれの御局にも、御御節の中なる白粉の中にもろびて、該は人なまへ、野邊にすてためるならひなるに、十年廿年の後までも、御物の中に包ませ置かせ給ふことよ。かうやうの物等、蟹井にまうのぼる、音聲き人も草を耕して、位にのぼりしなまへ、珍らしうありがたき事に物するに、殊にこ

れはやうかはれり。又淺茅が原の露深きあり、妹が門さしこめて語らふ頃、薄など生ふべき限になき出でたる、昔物語めきて、おはれ限なかるべし。(長明) ●蝶めづる姫君の住みたまふ傍に、按察使の大納言の御女、心にてなべてならぬさまに、親たちかしづき給ふ事限なし。この姫君のたまふ事、人々の花や蝶やとりづるこそはかなうあやしけれ。人は實なり本地尋ねたるこそ、心ばへなかしけれとて、萬の蟲の恐しげなるを取りあつめて、これが成らんさまを見んとて、さまざまなる籠箱どもに入れさせ給ふ。中にも鳥毛蟲の、心深きまじたるこそ心にうけれとて、明暮はみよはさみをして、手のうらにそへ伏せてまほり給ふ。若き人々は恐ぢ感ひければ、男の童の物をちせず、いふかひなきを召しよせて、箱の蟲ども取らせ、名をとひき、今新しきには名をつけて與し給へば、すべてつくろふ所あるはわろしとて、眉更にぬきたまはず。齒黒め更にうるまし様しとてつけ給はず。いとしろらかに笑みつゝ、この蟲どもを朝夕に愛し給ふ。(堤中納言物語)

●月は入りがたの空清うすみ渡れるに、風いと涼しく吹きて、草村の虫の聲々催しがほなるも、いと立ちはなれがたき草のものとなり。(紫式部) ●陸奥の忍ぶもじり誰故に、亂れそめにし我がこと、藻に住む虫の音に泣きて、壁生草のいつかまで思を乾さん衣手の、森の下露起きしせず、寐もせて夜半を明かしては、春の詠めも如何ならん。(謡曲、錦木) ●いざざらば琴のねに、立てよも忍ぶ此思ひ、せめてや暫し慰むと、かきなす琴のおのづから、秋風にたぐへば、なく虫の聲もかなしみの、秋や恨むる戀や憂き、何かかぬる女郎花、我もうき世のさかの身ぞ、人にかたるな此有様もはづかしや。(謡曲、小督) ●あら笑止や、いまだ火が消えず候ふは如何に。思ひ出したる事の候ふ。何の爲にか夏虫の、身を魚がすべき火を取らんと、明り障子に飛びつきたり。これこそ消すべき便りなれと、障子を細目に明ければ、虫はよるこび内に入り、すは火はばつと消えたるは、燈とも敵の命、いままこそ消えて失すべけれ。(謡曲、壇風)

●太郎は二人を取つて投げ、車に向ふ蟻螂めら、おのれら殺すは易けれど、今は是見上壁切虫、法師の身なれば助けるとの、慈悲を知らぬは虫同然、やらぬくときりぎりす、切り込む刀しぎ取つて、胸打はたはた機織虫、丁々稻子の舌をいはず、太郎は敵を追うて行く。(淨瑠璃、小栗判官) ●待つときかは忍ぶ夜の、雨も厭はぬ蟹虫や、胸の焔の螢火に、闇道も急ぐ小介山、小倉の野邊の一本蒲、何時か穂に出で、みだれく、逢ふ夜は玉虫や、幾夜の關も越え行かん、矢竹心の鏡虫、音も種々候と面白うこそ賣りにける。(同) ●艸の若芽も春過ぎて、おくれ咲なる菜種や粟粟の、露に憐るゝ夏の虫、おのが斐戀ひやましやすしや。あちへ飛びつれこちへ飛びつれ、あちやこち風ひたたく、羽とくをわはせの袖の、染めた模様を花かとして、肩に留ればおのづから、故に上羽のてうせん寺。(浄瑠璃、曾根崎心中) ●露ふかしのばかりみつるあまも原くられば蟲のこゑもみちる。(貞經) ●露なまむしづくもあまる秋草になきこぼれたる虫のこゑかな。(信實)

●むしのねを月のともしにぞながめつる野原の露をそでにまかせて。(慈鎮) ●あち山夕日がくれのあまも原色づきぬとや虫のなくらん。(家隆) ●年しへわあまが原の虫のねにむすば、れたるやどに見ながら。(寂述) ●霜またで草のたもと色づきぬよな、わぶる虫のなみだに。(枝直) ●露やとさおもひやしげき夕されば草れのむしのみだれてぞなく。(蘆庵) ●ほのかなるすゑの月になく虫はいつだにくさの枕をかよふ。(春海) ●秋の野はくれゆく花の下葉よりなくも千ぐさのむしのこゑ。(宣長) ●夕づくよほのかに虫のなく聲を秋のあはれのはじめとぞきく。(土滴) ●みのむしの音を聞きに來よ草の庵。(芭蕉) ●淺ましやむしなく中に花ひとり。(言水) ●虫賣のかがとがましき朝寢哉。(蕪村) ●長き夜やいろく聞く虫の聲。(許六) ●虫の聲艸のふところはなれたり。(凡童) ●行水の捨所なし虫のこゑ。(鬼貫) ●哀れさや石をまくらに夏のむし。(桃隣)

●六かしや蟋蟀にも置かず虫の聲。(尙白) ●虫よむし啼いて因果が盡きるなら。(乙洲) ●ふしはいづれの蟲も仕る。(去來) ●虫の音の中に咳出す寢覺哉。(丈草) ●とよまらぬ秋とし蟲のしりて、こそいつか鳴きやむ野邊のさびしさ。(照入) ●草毎に置く白露の玉だれや蟲も榮華にくらす秋の野。(霞子) ●門の月もねげもさまで待つ夜半にさせと鳴くてふ蟲もうらめし。(松風) ●垣壁にとりつく蟲のあはれさよいかにしにたうもなく聲のして。(猶影) ●夜なくはめづらしからず露の野へ蟲のねごとをきくにこそゆけ。(卯雲) ●秋の夜の長きにはらのさびしきはたゞうくと虫のねぞする。(赤良) ●いくつぶもほにおく露は丸薬かはら一同にきく虫の聲。(稻色) ●やことなき人やしひのびでおはすらんよるのおとよにくつは虫の音。(時成) ●段でなげどつこへそつこへやるまいぞなんだ辨慶じさしの蟲。(讀人不知) ●りんくくと鳴音いかにと駒とめて立ち聽

すれば弊蟲哉。(行重)
 ●沙汰なしといふ虫も病む長つばね。(川柳)
 ●ばた餅も獅子身中の虫をやみ。(同)
 ●来る人を虫が知らせる草の庵。(同)
 ●一寸のむしんに五分のたまし有り。(同)
 ●葉櫻や毛だらけなものをぶら下り。(同)
 ●蟲干に小袖着たがる頑は無き。(同)
 ●蟲持にしたのは逃げた乳母のせい。(同)
 ●御りんじう二月に虫の聲をきき。(同)
 ●とき立つた月にはむしがさびてなき。(同)
 ●色には仇な八つ橋も、江戸紫のゆかりとて、引手あまたの花菖蒲、かきつに似たる荷ひ賣、その取成も拍子よく、氣轉も菊の上手者、打かたげてそ賣り来る、商ふ虫の數々は、千轉に叩く武藏野の、籠にあらぬ物虫、いなご鈴虫こがね虫、馬道虫の道畑たや、我は及ばぬ蟹虫なれど、父よと鳴かて戀に身を、産れ果たるきりくす、かやも思ひのかたつむり、一人焦るゝ螢火の、濡れなんものと松虫の、仇に日暮し啼き明す、長

きその夜にあきつ虫、蓬ふ瀬もあらば天の川。(俗語)
 ●夫は錦木とりもちて、鎖いたる門をたゞけども、内に答ふる虫のねの、思ひ切らやれ戀のみち、きりはたりちやうく。(同)
 ●手すりによりて假粧の水を、どこにすてよか虫の聲。(同)
 ●一寸の蟲にも五分の魂。(俚諺)
 ●獅子も蟲のうち。(同)
 ●夢喰ふ虫も好き好き。(同)
 ●小の虫を殺して大の虫を助ける。(同)
 ●夏虫は水を知らず。(同)
 ●獅子身中の蟲。(同)
 ●君不見水馬兒、歩々逆流水。大江東流日千里。此虫種々長在此。又不見、濫堆、決起衝衝風。隨風一去宿何許。逆風還落蓬蒿中。二虫愚智俱莫測。江邊一笑無人識。(蘇東坡)
 ●八百八街雪月明。秋風處處賣蟲聲。貴人不解籠間語。總是西郊風露情。(杏坪)
 ●帶露幽花鹿背間。滿襟涼味曉忘還。殘陽杳杳松陰轉。一路蟲聲欲戀山。(秋村)

●庭草秋深接薛蘿。陰虫鳴盡月婆娑。遊人獨醉聲々恨。寒入客衣今夜多。(二州)
 ●切々暗窓下。唳々深草裏。秋天思婦心。兩似幽人耳。(白居易)
 ●霜草欲枯虫思苦。風枝未定鳥栖難。(同)
 ●山館雨時鳴白晝。野亭風處織猶寒。(直幹)
 ●叢邊怨遠風聲暗。壁底吟幽月色寒。(順)
 ●時禽鳴於庭柳。節虫吟於戶堂。(蘇彥)
 ●夜々濕蛩占雨。時々老木送秋聲。(放翁)
 ●夜蛩挾砌響。輕蛾逐燭飛。(陽休之)
 ●壁空殘月曙。門掩候虫秋。(子厚)
 ●雁陣迷秦塞。蛩聲助越吟。(曹文暉)
 「むじやう」無常
 悲風。有爲。必滅。夢幻。塵世。風葉。草露。不定。轉變。迅速。はかなき。つゆの身。さえずりき命。あすをまたぬ。こけの下。くさの原。夢の世。ながき世の

夢。かりのやどり。うつせみの世。かげろふの世。おくれさきだつ。

●一に無常輪といふは、この世のなかの、さだめなく、はかなきありさまなり。大經に、このことわりをときて、あるひは愛欲榮華つねにたしつべからず、みなまきに別離すべしといひ、或は處年壽命よりいくばくもなしといへり。つら／＼おもんみれば、輪王高貴の位、七寶つひに、身に從ふことなく、釋天寶象の遊四苑ながく眼に隔つる期あり。あふいで六欲四難をわもふに、三界のうちにはうらやましかるべきところなし。ふして三惡四趣をうかよふに、六道の間、さながら皆悲みてまねかるべきところにあらず。人間南淨のわづかなる命、粟散邊園のいやしき果報、なんぞ著樂をなすべきや。不死の藥を求めし秦皇漢武も、むなく去りぬ。たゞ悲風の隴山杜陵のふもとにむせぶあり。武勇のはかりごとと長ぜし樊噲報其し名をのみのこせり。未還嬰有爲のあだなふせぐ弓箭あることをきかず。荷羅の三千もそらにおいたり。漢李唐揚の

たをやかなりしすがたも一聚のちりとなりぬ。付法藏の賢聖も、悉かくれぬ。有智高行の聖人もかたさならは無常の殺鬼なり。老少不定のさかひなれば、盛なる人もおほくゆく。生者必滅のことわりなれば、老いぬる人は、ましてとよまらず。鳥部山のけぶり、峯にもものぼり、龍にもたつ。われもいつかその數に入らん。あだし野の露、朝にもきえ、夕にもおつ。たれとともよふにやとおもふべき。後鳥羽の禪定上皇の遠島の行宮にして、宸襟をいたましめ、浮世を觀じまし／＼ける御くらすさまじ、つくらせたまひける無常講の式こそ、さしあたりたることわり。耳かかて、世にあはれにきこえ侍るめれ。その勅藻を見れば、あるひは昨日既に埋んで涙を塚の下に拭ふもの、或は今宵おくらんとして別を棺の前になく人あり。おほよそ、はかなきものは、人の始中終、まぼろしのごとくなるは、一期のすぐる程なり。三界無常なり。いにしへより、まだ萬歳の人身あることをさかず。一生すぎやすし、いまにありて、たれか百年の形體をたもつべきや。われや先、八や先、けふともしらす、あすともし

らす。後れさきだつ人は、もとのしづく末の露よりも繁しといへり。また近比、智行名だかくさこゆる、笠置の解脫聖人のかゝれたる詞も、世にやさしく肝にそみて覺ゆ。そのことばには、風葉の身、たもちがたく、草露の命、さえずりし。南隣にも哭し、北里にも哭す。人をおくる涙未つきず。山下にもそひ、原上にもそふ。骨をうづむ土、かわくことなし。いたましきかな。まのあたり、ことばを交へし芝蘭の友、いきとまりければ、遠くおくり、あはれなるかな。まさしく契をむすびし断金のむつび、たましひさりぬれば、獨かなしむといへり。かやうのことわりは、目のまへに見ゆれば、人ごとにしりがほなれども、欲塵に著し、境界にほださるゝならひなれば、凡夫としておどろかさる、まことにはかなかるべし。(存覺)
 ●濁世煩惱、色欲界誰か炎塵の火宅を脱れん。祇園精舎の鐘の聲は、諸行無常の響あれども、飽くまで色を好むものは、きぬくの別を惜むが故に、只是をしも譬とし惜めり。沙羅雙樹の花の色は、盛者必衰の理を顯せども、徒に香を愛するものは、風

雨の過なからんことを妬むが故に、偏に延年の春を契れり。観ずれば夢の世、観ぜざるも亦夢の世に、孰か幻ならざりける。

●大體人を見るに、すこし心ある際は、昔このあらしにてぞ一期はすめぬ。近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身を助けんとなれば耻なしかへり見ず、財をすて去るぞかし。命は人をまつものかは、無常の來ることは、水火の攻むるより速に、遺れがたき物をその時老いたる親、いとけなき子、君の恩、人の情、すてがたしとすてざらんや。

●月はかげする木々の中なれども、はれくもる光は一方ならで、もの哀なるを、木の葉がくれにゆく風の、かれ野の薄によわりて、そよめき渡る世を秋風のはげしくて、涙にそむる紅葉の、もろく散るさまなどにも、無常思ひしられて哀なるぞや。

●風紋野に收つて煙條直し。雲岸頭に定まつて月桂圓かなり。朝に紅顔あつて世路に樂しむと雖、夕べには白骨となつて郊原に朽ちぬ。有爲の有様無常のまこと、誰か生

死の理を論ぜざる。いつを限る習ぞや。老少といつば分別なし。變るを以て期とせり。誰か必滅を期せざらん。誰かは是を期せざらん。

●悲しきかなや。形なるといへば、昔底が朽骨、見ゆるもの今は更になし。さて其聲を尋めれば、草徑が亡骨となつて、答ふるものも更になし。三世十方の佛陀の聖衆も、あはれむ心あるならば、亡魂幽靈も、さこそうれしとおもふべき。

●死の縁の、所もあひに背棄の、跡のしるしか草の陰の、音野が原は名のみにして、古葉のみの春草は、さながら秋の淺茅原、萩の燒原の跡までし、げに北邙の夕煙、一片の雲となり消えし、空は色も形も、なき跡ぞあはれなりける。

●短りても、かひ有るべきは空しくて、有るはかひなきはよき木の、見えつかれつ面影の、定めなき世の習ひ、人間うれへの花盛、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲おほへり。實に目の前の浮世かな。

●是見や小春、此髪のある中は、紙屋治兵衛といふおさんが犬、髪切つたれば出家の

身、三界の家を出で、妻子珍寶不隨者の法師、おさんといふ女房なれば、おぬしが立てる義理もなしと、涙ながら投げ出す。ア、嬉しうござんすと、小春も脇差取り上げ、洗ひつ漉いつ撫で付けし、むごや惜しげも投げ島田、はらりと切つて投げ捨てる、枯れ野の芒夜半の霜、俱に亂るゝあはれさよ。浮世をのがれし尼法師、夫婦の義理とは俗の昔、連もの事にさつぱりと、死に場を替へて山と川、此體の上を山と准へ和女が最期場、我は又此流れにて首絞る。最期は同じ時ながら、捨身の品も所も替へて、おさんに立て抜く心の道、其抱へ帶此方へと、若紫の色も香も、無常の風に縮縮の、此世彼世の二重まはり。

●くれぬまの身をば思はで人の世の哀をしるぞかつははかなき。

●思ひいでゝもしも尋ねる人もあらば有りとなひいそ定なき世に。

●世の中はとてまかくても同じこと宮もわらもはてしなれば。

●あるはなくなきは數そふ世の中にあはれいつれの日まで散かん。

●世の中は何かつねなるあすか川きのふのふちはげふはせになる。

●さげばちりみつればかくる春秋の花と月とぞひとの世の中。

●人の世のたぐいとぞ見る水のうへにふるとはすれど消ゆる白雪。

●さとりえておどろかぬにはあらのみみの世の常なきにならひしもうき。

●けふこそあれあすは飛鳥の川千鳥たちをかかねてたれか定めん。

●花もみぢさそふ色香を惜むまに身の春秋もつひの夕風。

●はかなしやたものしづく草の露いつまでとてかおくれはつべき。

●守町や猫と涅槃の戀無常。

●風と出て風と消やすき世の人は吹きしやばんのあはれはかなき。

●経師風の次第にかよむこしほりはいつか此世をのりばなれせん。

●養生も相叶はずといふ文をそのまゝかほにおしめてゝなく。

●おくやみを申し上げんとぞんすれど涙が邪覓でものはいはれず。

●露のみの風待ちいづる舟岡は老も若きも

のり合にして。

●非時酒をうけてなみだのこぼるゝをなき上戸とや人のみるらん。

●門口にもの申さうといひながら申し上ぐべきことの葉もなし。

●あゆみ行く彌陀のみ國は西の海さらりと婆娑のやく拂ひして。

●こゝろから鬼も佛も出づるなり無常の風のふき矢からくり。

●日の風にしへかたぶく夕べにはきも引き入るゝいり相のかれ。

●わたれたむ草は月日の鼠米一日々々にくひへらすなり。

●人といふものはしれぬと大一坐。

●若いとてどうせう不定世のならひ。

●むかしからしれぬで人のいのちなり。

●無常の風にこそはれて大一坐。

●上下をわぐと無常も戀になり。

●酒中花を重氏は見て世を捨てる。

●打数は花にあらしの總もやう。

●すげ笠にある名で頓死呼びかへし。

●犬藝の心よく道ふ無常門。

●無常の風になびかれる糸柳。

●戀ぢやせくまい浮世は車、廻る月日もふるやふるゝ、雪も霜も散もきてたまたま、諸行無常のことわりを、告げてや鐘も響くらん。

●それ三界は夢なれや、三の車に法の道、火宅の門をや出でぬらん。月は東の山より出で、西の山の端にかくれつゝ、世上の無常はかくの如し。

●無常迅速。

●洛陽北門北邙道。喪車轎々入ニ秋草。車前齊唱離露歌。高墳新起日哦々。朝々暮々人送葬。洛陽城中人更多。千金立碑高百尺。終作誰家柱下石。山頭松柏半無主。地下白骨多於土。寒食家家送紙錢。烏糞爲作寒街上樹。人居朝市未解愁。請君暫向北邙遊。

●人間總々營業務。不覺年命日夜去。如燈風中滅難期。忙々六道無定趣。未得解脫出苦海。云何安然不驚懼。各聞強健有力時。自斃自勵求常住。

●人生無百歲。百歲復如何。古來英雄士。各已歸山河。

●生者必滅。釋尊未。免。檀之烟。樂盡哀
米。天人猶逢。五寶之日。 (後江相公)

●雖。製。秋月波中影。未。道春花夢裡名。 (同)

●親身岸離。棋草。論。命江頭不。擊舟。 (羅維)

●年々歳々花相似。歳々年々人不。同。 (宋之間)

●蝸牛角上争。何事。石火光中寄。此身。 (白居易)

●朝有。紅顏。誇。世路。暮爲。白骨。朽。郊
原。 (義孝)

【むほん】謀叛

●隱謀。反逆。反徒。逆徒。賊徒。賊黨。

●そむく。まつろはぬ。

●故相模入道の舍弟四郎左近太夫入道は、
元弘の鎌倉合戦の時、自害したる真似をし
て、潜に鎌倉をおちて、暫は奥州にありけ
るが、人に見知られしが爲に、還俗して京
都に上り、西園寺殿をたのみ奉りて、田舎
侍の始めて召し仕はるゝ體にてぞ居たりけ
る。是も承久の合戦の時、西園寺の太政大

臣公經公、關東へ内通の旨ありしに依り
て、義時其日の合戦に利を得たりし間、千
孫七代まで、西園寺殿をたのみ申すべしと
いひ置きたりしかば、今に至るまで武家他
に異に思をなせり。依之代々の立后も、多
く此家より出で、國々の拜任も、半に其
族にあり。然れば官太政大臣に至り、位一
品の極位をきはめずといふ事なし。偏に是
關東眞の厚恩なりと思はれるにや、如
何にもして此相模入道が一族をとり立て
、再、天下の權を取らせ、我身公家の執
政として、四海を掌に握らばやと思はれけ
れば、此四郎左近太夫入道を還俗せさせ、刑
部少輔時興と名を替へて、明聲は只謀叛の
計略をぞ廻らされる。或夜政所の入道、
大納言殿の前に來りて申しけるは、國の興
亡を見んには、政の善悪を見るにしかず。
政の善悪を見んには、賢の川捨を見るに
如かず。されば微子去りて殷の代傾き、范
增罪せられて楚王滅びたり。今の朝家には
只藤原一人のみにて候ひつるが、未然に凶
を盤みて、隱遁の身となり候ふ事、朝廷の
大凶、當家の御運とこそ覺えて候へ。急ぎ
思召し立たせ給ひ候はば、前代の餘類十方

より馳せ参りて、天下を覆さんこと、一日
を出づべからずとぞ勧め申しける。公宗卿
げにもと思はれければ、時興を京都の大將
として、畿内近國の勢を催され、其甥相模
次郎時行をば關東の大將として、甲斐、信
濃、武藏、相模の勢をつけらる。名越太郎
時兼をば、北國の大將として越中、能登、加
賀の勢をぞ集められける。如此諸方の相圖
を同時に定めて後、西の京より番匠數多召
し寄せて、俄に温泉をぞ作られける。其裏
場を板を一間踏めば、落つる様に構へて、
其下に刀の簞をうゑられたり。是は主上御
遊のために、臨幸なりたらんする時、華清
宮の温泉に准へて、浴室の宴を勧め申し
て、君を此下へ陥入れ奉らん爲の企なり。
かやうに様々の謀を定め兵を調べて、北山
の紅葉御覽のために、臨幸なり候へど申さ
れければ、則日を定められ、行幸の儀式を
ぞ調べられける。已に明日午の刻に可有臨
幸山、相觸れられたりける其夜、主上且く
御目睡ありける御夢に、赤き袴の鈍色の二
つ衣着たる女一人來て、前には虎狼の怒る
あり、後には熊鷹の猛きあり、明日の行幸
をば、思召し留らせ給ふべしとぞ申しけ

る。主上御夢の中に、汝はいづくより來れ
る者ぞと御尋ねありければ、神泉苑の邊
に、多年住み侍るものなりと答へ申して、
立ちかへりぬと御覽せらる。御夢は程なく
さめにけり。主上怪しき夢の告なりと思召
しながら、是まで事定りぬる臨幸、期に臨
みては如何停めらるべしと思召されけれ
ば、遂に風聲を促さる。乍去夢の告怪しけ
ればとて、先、神泉苑に幸なりて、龍神の
御手向ありけるに、池水俄に變じて、風吹
かざるに白浪岸を打つ事頻なり。主上是を
御覽せられ、細夢の告怪しく思召されけれ
ば、且く風聲を留めて、御思案ありける處
に、竹林院の中納言公重卿、馳せ参じて申
されけるは、西園寺大納言公宗卿、隱謀の企
ありて、臨幸を勧め申すよし、只今或方よ
り告げ示し候。是より急に還幸なりて、橋
本中將俊季、並春衡、文衡入道を召され
て、仔細を御尋ね候ふべしと申されければ、
君去んぬる夜の夢の告、今日の池水の變ず
るわざ、げにも様ありと思召し合せて、總
て還幸になりけり。則、中院の中將定平
に、結城判官親光、伯耆守長年をさし副へ
て、西園寺の大納言公宗卿、橋本中將俊季

井に文衡を召しとりて参れどぞ仰せ下され
ける。勅宣の御使、其勢二千餘騎、追手摺
手へり押しよせて、北山殿の四方を七重八
重にぞ取りまきける。大納言殿早此間の隱
謀顯れけりと思ひ給ふ。されば中々騒ぎた
る氣色もなし。事の様をもし知りぬ。北の御
方女房達侍共は、こは如何なる事ぞやと周
章ふためき逃げ倒る。御弟俊朝臣は官軍
の向ひけるを見て、心早き人なりければ、
只一人抽で、後の山より何地ともなく落
ち給ひにけり。定平朝臣先大納言殿に對面
ありて、穩に事の子細を宣べられければ、
大納言殿涙か押へて宣ひけるは、公宗不肖
の身なりといへども、故中宮の御好に依り
て、官祿共に人に下らず、これ偏に明王慈
惠の恩幸なれば、いかでか居陰折枝、波
流濁源志を存じ候ふべき。侍事の様を案
するに、當家散代の間、官爵人にこそ、恩
祿に餘れる間、或は清花の家是を妬み或は
名家の置是を猜みて、如何様無々謗言を構
へ、様々の虚説をなして、當家を失はんと仕
るかこそ覺えて候へ。乍去天真を鑑みば、
虚名いつまでか上聞を掠むべきにて候ふ
なれば、先、召しに隨ひて薄下に参し、犯否

の御糾明を仰ぎ給ふべし。但、俊季に於て
は、今朝已に逐電候ひぬる間、召具するに
及ばずとぞ宣ひける。官軍ども是なきま
て、さては橋本中將殿を隠し申さるゝにて
こそあれ。御所中を能々見奉れとて、數千
の兵殿中に亂れ入りて、天井塗籠打破り、
翠簾几帳を引き落して、無殘處殺しけり。
依之只今まで紅葉の御賀あるべしとて、樂
絃を調べつる伶人、裝束をもわがず、東西
に逃げ逃ひ、見物の爲とて群をなせる僧俗
男女、怪しきものかとて、多く召捕られ、不
慮に刑戮にあひけり。其邊の山奥岩のはざ
まゝで、若しやと猶さがしけれども、俊季朝
臣逐に見え給にざりければ、官軍力なく、
公宗卿と文衡入道を召捕り奉りて、夜中
に京へぞかへりける。大納言殿をば定平朝
臣の宿所に、一間なる所を政能の如くに拵
へて押しこめ奉る。文衡入道をば結城判官
に預けられ、夜盡三日まで、上げつ下しつ
拷問せられけるに、無所殘白狀しけれ
ば、則六條河原へひき出して首を刎ねられ
けり。公宗をば伯耆守長年に仰付けられ、
出雲の國へ流さるべしと、公議已に定りに
けり。 (太平記)

●大かた己一身は愚にほころとも、萬人の恨を殖すべき事をばなどか願ざらん。君は萬姓の主にてましませば、限ある地をもちて、限なき人に分たせたまはん事は推し量り奉るべし。若し一國づゝを望まば、六十人にて皆ふさがりなん。一郡づゝといふと、日本は五百九十四郡とある。五百九十四人は悦ぶとも、千萬人の人は悦ばじ。況や日本の半を志し、皆ながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して詞にもし、面にはづる色のなきを、謀叛の始といふべきなり。昔の將門は比叡山に登りて、大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝる類にや侍りけん。昔は人の正しくて自將門に見も、さゝもこり侍りけん。今は人の心のかくのみなりにければ、この世は能く衰へぬるにや。
 ●げに／＼是も心得たり。某が敵人謀叛人と申し上げ、御前に召し出され、頭を刎ねられん爲めな。よし／＼それも力なし。
 ●いかに鬼神もたしかにきけ、昔もさるためしあり。千方といひし逆臣に仕へし鬼

も、王位をそむく天罰にて、千方をすつれば忽ちびうせしぞかし。
 ●抑も治水の夏の頃、よしなき御謀叛をすめ申し、名も高倉の宮の内、雲井のよそに有明の、月の部を忍びいで、憂き時しに近江路や、三井寺さして落ち給ふ。
 ●法就寺の御所を焼討し、高位高官の人々を苦め、是が謀反朝敵ではあるまいかと、以の外の御景色、巴浪をばら／＼と流し、されば夫こそ木曾殿の深き御思案、謀叛でない物語、唯みゆる人々も聞いてたゞ。既に木曾殿並利迦羅藤原の合戦に打勝ち、都へ攻め登り給ふと聞えしかば、平家一門の人々三種の神器を守り奉り、西國へ落ち下る。木曾殿に入りかはつて御所を守護し給へば、法皇御感納ならず、雲の末海の果迄も追詰め、平家を討亡し、三種の神器を事故なく、都へうつし参らせよとの宣旨、畏つて御請申させ給へ共、安からぬ一大事、三種の神器をとり返へさんと、ひた攻に攻るならば、身の置所ない儘に、唐高麗へも逃げ渡らば、勿体なや神より傳はる三種の御寶、ながく異國の物とならん

は、日本の木の國の耻、若又海底に沈め失はせ、世は常闇とやせんかくやと御思案あり。義仲朝敵謀反人の名をとらば平家心故して一致せんは必定。
 ●きねんの明智はつらい息の骨むほん起して別れかめ聞。
 ●叡山の謀叛は信濃坂下り。
 ●にむほんをすゝめたる染物屋。
 ●武藏守與世王、兇險喜亂、往就將門、關東八州、沃饒而四葉、可據以制天下。夫取三州、取三州、亦取一耳。願公安所決。將門大悅、延爲謀主、遂攻下野上總武藏相模、悉下之。弟將平諫曰、帝王有命、不可妄冀、願熱圖之。將門曰、天縱我以武、吾取帝位、孰能拒之。乃建僞宮於下總猿島、置文武百官。初將門與藤原純友者、友善。嘗同登比叡山、俯敵皇城、曰壯哉、大丈夫不當宅、此邪、遂與謀反。謂純友曰、他日得志、吾王族、當爲天子、公藤原氏能爲我關白乎。至是純友爲伊豫、任滿不還、據海島爲盜、遂應將門。
 ●檢非違使不可獲。吾爲天皇汝關白。警報東西來如箭。懸賞朱紫不復情。嗟

乎朝廷處置英雄。不獨新皇迎靈太。握手拾飯笑呷呷。
 ●天下六分吾居一。百計無如背叛言。汝真天子吾真汝。有底軍風吾真應。勿懼兩世不用戈。將軍生處在戊戌。借問幕中誰謀主。禪榻呼起老阿父。
 ●終南山を立ち出で、野草の露をわけ行けば、遠村に煙霧ち、人屋しるき眺望の、海路遙に過ぐれば、釣の小舟もかへる波、寄るほどもなき眺かな。
 ●ヤレ人殺し来て下され。在所の衆と呼び猛る、聲に駈けよる一村在所、與茂作を殺しやつたは薩七様か。お代官でも滅多に人を殺しては濟みませぬ。此子の加勢を村中一統、サア元のやうにして返しや。何で殺した譯聞かう。どうぢや／＼と田舎育ちの高調子、聞き付け駈け来る七郎兵衛、争ふ中へ割つて入り、マ、マ、マ、村の衆、俺か来るからは悪うはせぬ。
 ●うたふらし世を治まれといはへこの村のもろ人もろこゝにして。

【むら】村

稼穡。耕耘。桑麻。禾黍。牧兒。夜織。荒村。村落。雞豚。孤村。野水。柴門。
 ●もとの里。遠の一村。さとうわ。ふもとの里。にやまの里。田づらの里。里遠き。賤が家々。
 ●もと此邊の道は、いとさみしき庭のよしいふ。梅田の里といへど、花のおもかげもなく、竹塚の里を過ぐれど、たゞすぐなる道にして、させるをかしき所も見え侍らず。湖畔の色のほとりこそ、富士淺間のはるかにかみゆる所のあるよし、さうつたへて居しか。珍しくみなれぬ賤が家などあるにぞ、かれを見、これに心をうつして見侍らず。遠近人のみやはとがめぬとよみし、かのこま

だらに雲のふらんとよみし、此邊にてこそ、はるかにも見侍らんなど、思ひしに、行きすぎ侍りしぞ、いと本意なけれ。
 ●この浦にむかひて一村見えたる所を草ねはれば、しほつとなん申す。露のうちもはる／＼とけぶりて見え侍り。
 ●雲は野原の草に隠れて、露に臥す鴉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻にイタ、人を尤むる里の犬に御心を悩され。
 ●終南山を立ち出で、野草の露をわけ行けば、遠村に煙霧ち、人屋しるき眺望の、海路遙に過ぐれば、釣の小舟もかへる波、寄るほどもなき眺かな。
 ●ヤレ人殺し来て下され。在所の衆と呼び猛る、聲に駈けよる一村在所、與茂作を殺しやつたは薩七様か。お代官でも滅多に人を殺しては濟みませぬ。此子の加勢を村中一統、サア元のやうにして返しや。何で殺した譯聞かう。どうぢや／＼と田舎育ちの高調子、聞き付け駈け来る七郎兵衛、争ふ中へ割つて入り、マ、マ、マ、村の衆、俺か来るからは悪うはせぬ。
 ●うたふらし世を治まれといはへこの村のもろ人もろこゝにして。

●さと遠かたどるす野の夕ぐれにしるべうれしくたつけむり哉。
 ●たえ／＼にけぶりぞなびく山もとのさといかならん家ぬしられて。
 ●むさしもの時しきぬればにひばりの田つらの里ぞにぎはひにける。
 ●君が代は民の心のひとかたになびきて見ゆる寄柳の村。
 ●わが君につかへまつらん若ふかきいはねの村の萬代までに。
 ●つくば山は山の里にたつけぶりがすみしげし春の夕暮。
 ●ほととぎすときはの里にすむ人はいつとわきてかはつね待つらん。
 ●あふことのとほちの里はやまと川おもしの中にありとこそきけ。
 ●春あさみすまのまがきに風さきてまだ雲さえぬしがらきの里。
 ●桃咲くや村を背負ひし村つよき。
 ●寒ければ漁村の柳枯れにけり。
 ●風上げてゆるりとしたる小村かな。
 ●一村は門徒かたまる印地かな。
 ●此村の人は猿なり冬木立。

- 沙焼の孤村にかへる秋の暮。(保吉)
- 此村に長生多き岡見哉。(召波)
- 村深し燕ふるむ門むしろ。(几董)
- 此村に一えだ咲きぬ梅のはな。(也有)
- 一村は佛光寺にてうめの花。(許六)
- 螢火や村中に取り溜の水。(丈草)
- 枝こりて柴にひまげば柳すらす女とみえぬ八瀬の一村。(守近)
- 花すまほほにこそ出づれ秋風の手孕村の昔がたり。(橋洲)
- はしかまに隣村へ来てみてもいづくもおなじ秋のくれ。(木端)
- 冬のさししらせを今日は村々へ村時雨してふれる雲足。(浪丸)
- よい種をたんとまくはの瓜づるに黄金花さき實なる一村。(高彦)
- 田植どき管の小笠のひとむれを雨の雲田の村にみる哉。(宇都音)
- 是も又いつものやはり初鳴やとなり村からおくる夕だち。(千湯)
- 春雨に祖父がなかしし嘘すりや寝殿もお茶をわかすへそ村。(枝丸)
- 宿ありと見えにけらしな、な野には宿の煙がたつた稻村。(歩丸)

- 堤から村見くらべるくわいらし。(川柳)
- とんだもの産んで一村名がかり。(同)
- 大根種ありは村での能い手なり。(同)
- 二た村をわけがらにして公事をする。(同)
- つばめが来ると一畝は常の村。(同)
- 機所田植も男勝ちの村。(同)
- 村の者しをえりぬいて門に寒せ。(同)
- 三度笠行一番の書手なり。(同)
- 此村の名醫で箱をかつかせる。(同)
- 霜月は村から村へ入り替り。(同)
- 東山のな、お月でやる、中でつかりしよ、なだしよ、けたくよ。(同)
- お月隠す奴は、ろくど奴は隠さねば、月を便のらしどりの、野越え山越え峠道越えて、がつくりそつくりそのまよの、在所音と見えにけり。(俗語)
- 折りそへて秋の眺や花紅葉、我も思のあればこそ、君故ほんに八瀬の里、さかや芦生の野邊の色、股が横なる股しき身にも、朝な夕なに物思ひ。(同)
- 風角村には緯なけれ。(俚諺)

- 十室の色にも忠臣あり。(同)
- 寺から里へ。(同)
- 天淡雨初晴。遊人恨不勝。亂山啼蜀魂。孤棹宿巴陵。影暗村橋柳。光寒水寺燈。罷吟思故國。窗外有流螢。(姚揆)
- 高樹陸柴扉。青苔照落暉。荷鋤山月上。尋徑野烟微。老叟扶童望。羸牛帶帽歸。燈前飯何有。白蕪露中肥。(梅堯臣)
- 寒林月上晚窺園。曲巷人行犬吠門。野穀有聲符欲半。風燈明滅隔溪村。(撲齋)
- 綠桑高下映平川。賽罷田神笑語喧。林外鳴鳩春雨歇。屋頭初日杏花繁。(歐陽修)
- 水自潺湲日自斜。盡無雞犬有鳴鴉。千村萬落如寒食。不見人烟空見花。(韓偓)
- 高田二春接山背。傍水低田綠未耕。桃杏滿村春似錦。踏歌誰鼓過清明。(范成大)
- 香然別是一乾坤。豈轉溪回果得村。曾見城西漁隱說。梅花亦自有仙源。(星巖)
- 山重水複疑無路。柳暗花明又一村。(放翁)
- 守家一犬迎人吠。放野群牛引犢休。(真香)

- 所集村風吹。箭處。荒涼降月掛衣襟。(高相如)
- 野田多傍水。深柳自爲村。(王阮亭)
- 村情山趣。(段成式)
- 山村雨過暮烟青。(張崑南)

- 中宮權亮少將公重。唐織物の模前賣のかりぎぬ、紅のうらぎぬ、紫のほひの三きぬ、紅のひとへさしぬき、例の紫に櫻をしるくぬひたり。(増鏡)
- いでくさらば舞はんとて、本より其名も紫の、色めづらしき薄衣の、日も紅の扇を持ち、耻づかしながら舞々と、あはれ胡蝶の一遊び、夢の内なる舞の袖、現に返へす由もがな。花染衣の色重、紫匂ふ袂かな。(謡曲、源氏供養)
- 扱石山に参りつゝ、余願をつとめ事終り、夜も深け方の鐘の聲、心も澄める折節に、有りつる源氏の物語、誠しからぬ事なれども、供養をのべて紫式部の、菩提を深く吊ふべきなり、とは思へどもあだし世の、夢にうつるふ紫の、色ある花も一時の、あだにも消えし古への、光る源氏の物語、聞くにつけても其まこと、頼み少なき心かな。(同)
- 名をば埋まぬ昔の下、石山寺に立つ雲の、紫式部にましますな、聴づかしの色に出づるか紫の、色に出づるか紫の、雲も其方が夕日影、さしてそれとも名乗り得ず、

- かき消すやうに失せにけり。(同)
- 春日野の若紫のすり衣、しのぶの亂れ、限りしらすもと詠せしに、陸奥の忍ぶもぢすり誰故、亂れんと思ふ我ならなくにとよみしも紫の、色に染み香にめでしなり。(謡曲、小鏡)
- さつと吹きくる春風と、名に負ふ名馬に打ち乗つて、かけ立て躍立つる馬煙、生れ付いたる大力に、馬上も勝れし巴御前、色なゆかりの紫おどし、鐘かかげの女武者、長刀かひ込み、鞭うちたて、馳せ付く門前ひらりとおり。(浄瑠璃、盛衰記)
- むらさきもあけの衣もはえはあれど清き神路の山あゐの袖。(春海)
- もとゆひの若紫はあせて今よもぎのかみに霜をさえせぬ。(同)
- もとゆひの霜はあやしなこむらさきむすびそめつる時しりな。(春海)
- 年ふりしわがもとゆひのこむらさきいつより霜にむすびかへけん。(同)
- 武藏野の若紫の衣手はゆかりまでこそうれしかりけれ。(重家)
- ゆひそむるはつもとゆひのこ紫ころもの色にうつれと思ふ。(能宣)

- 二紫たなびく雲をしろるべにて位の山の峰をたづねん。(元輔)
- 紫の雲のかげとも思ひきや春の霞になしてみんとは。(朝光)
- 君こそばねやへも入らじこ紫わかもとゆひに霜はおくと。(古今)
- 春日野の若紫のすり衣忍ぶのみだれかきり知られず。(伊勢物語)
- 雪はまうさす先紫の筑波山。(風雲)
- 曙のむらさきの暮やはるの風。(蘇村)
- 紫の曙さめて遠柳。(剛更)
- 早殿の紫さめる小雨哉。(柳社)
- 見あたれば紫紫の重哉。(呂川)
- 紫に野はあけかよふ春の海。(几重)
- 紫になつて暮れゆく枯野かな。(若虬)
- かすみこめて薄むらさきの匂ひ哉。(曉壺)
- 紫の蜘蛛ありけり燕子花。(其角)
- 組へあやし冠のひものいと萩やふささきさたる花のむらさき。(喜月)
- 紫にかすめるそらは海はらの藍に入口の紅させばなり。(母也)
- むらさきの霞のいとをあやどりて月は蛇の川の余やめすらん。(尚紫)

- 武蔵野の草といへど丹度か色にはさかで紫にさく。(貞徳)
- 駒ならではや行く春のしりがひは花紫の藤の厚房。(文斗)
- 松の木のままにかふるは紫に染むした帯のさがり藤哉。(田道)
- 山の端に見えし霞のたちかへり紫匂ふ杉一しと。(昌保)
- むらさきの庭を根として朝がすみ都の空へ春や立つらん。(東雲)
- 紫の苔よりよびて紫の庭にしばくかほ橋。(同)
- 紫のかすみのきめのうちらかに朝日のもみみえてうつくし。(満前)
- むらさきや一とかたならぬうそをつき。(川柳)
- 紫のけんくわも合はぬ京の水。(同)
- 紫に不相懸なるゆかりあり。(同)
- 江戸の水あかりなたて紫や。(同)
- むらさきを見ては京でもあきれべい。(同)
- むらさきのむらさきを奪ひしん桔梗。(同)
- 稻妻は紫色で光るなり。(同)

- 紫は江戸でゆるすと知つた風。(同)
- 紫は奪ひ紺屋朱に染め。(同)
- 伊勢の柿田のまん中程で、深き思のやれ紫ぼうし。ほんにくどくか、そりや真実か、五智の如來も蕙もあると、こひの重荷をのりかけ馬に、はなれがたなき我思。(俗語)
- ながれよるせなたづきにて、かけし月日に指もたゆく、しんき、しんき心の初紫の、色にもいづな、出でじゆめにもうづに。(同)
- 此鉢巻はすぎし頭、ゆかりの色紫や、初もとゆひのまきぞめや。(同)
- 思ひそめたるこき紫の、袖は干しほの我源。(同)
- 江戸紫に京緋色。(假諺)
- 紫は朱をうばふ。(同)
- 紫はさめ易し。(同)
- 智者舉事、因禍爲福、轉敗爲功、齊紫敗紫也、而買十倍。(史記)
- 竹破雁起天爲馬、桐柏煙橫山半紫。(蘇載)
- 東風染得干紅紫、曾有西風半點香。(楊萬里)
- 深水盡而寒潭清、煙光凝而翠山紫。

めノ部

〔め〕目

- 天眼。眼目。眉目。心眼。十目。比目。高目。側目。刮目。瞶目。
- めぢ。まなこ。めだつ。めなる。めぢむ。めつむ。
- 宮の御さまなどいとめでたし。御直衣に

て、えならすめでたき御衣、出掛にしたまへる、いとあらまほしげに見ゆる目さへ、あだ／＼しきにやとまで覺ゆ。(和泉式部)

●かしこにて召しつかひけす御調度何くれはかなき御手箱やうのものを、都へ人のまゐらせたりける中に、たまさかに通ひける際岐よりの御文、女院の御消息などをひとつにとりまたゝめられたる、いみじうおはれにて、御目もきりふたがる心地したまふ。(増鏡)

●天もし人を尊からしめんとて、二つの鼻をあたへ、目を三つ四つも付けたらば、因果物語にのせられて、開張芝居のみせ物となるべし。これ天の長物をとらざる所なり。(也右)

●天もあけば狐にはめなんくだかけの、まだきにないてせなをやりつゝ、それはこひせし草枕、これは旅行くいもせのわかれ、難もなはずば天もあけじ、あけずば人の目もさめじ、恨めしのとりのねや。(馬琴)

●女子をおぼしたてん事よ。いとかたかるべきわざなりけり。宿世などいふらんものは、眼に見えぬわざにて、親心にまかせがたし。(紫式部)

●われは目のあきらかなるにや、はるかなるもの、かすかなるものといへども、のがすことなしといふものは、かならず目にやまひを生ず。今日ばかりいたみ、きのふはむねのあたりふたがりぬと、口ごといふものは、大なるやまひをうることもまれなり。(紫翁)

●まよへる時は目をふさぎて我身をだにも見ず、さるときは眼を開きて、人の跡を見る。(光行)

●親は空にて血の涙を、降らせば濡れじと菅蓑や、空を傾けこゝかしこの、便を求めて隠笠、隠蓑にもあらざれば、猶ふりかゝる血の涙に、目も紅に染み渡るは、紅葉の橋の鴉か。(謡曲、善知鳥)

●一味の人数四十余人、首尾よく敵討おうせば、一人も残らず皆道腹、其元逆も其通り、亡き跡の間ひ吊ひ、此平吉が飢ゑの様に、ソレ御内証まつかりと御受納あれと、勇氣たゆまぬ目の内にも、恩愛の別れ思ひやり、ほろりとこぼす一雫、夫婦目と目を見合はして、残る方なき御厚風、有がた涙身に餘り、はつと大地に倒れ伏し、只伏拜む計りなり。(浄瑠璃、忠臣講釋)

- 名月の望のあゆみの日は空に。(凡童)
- 白露や角に目をしつ蝸牛。(風雲)
- 白魚や黒き目をあく法の綱。(芭蕉)
- 我目には師走八日の空寒し。(杉風)
- 啼き腫れて目さしもうとし鹿の形。(丈草)
- 梅柳初春の眼たしかなり。(白雄)
- 目もあはずぬ夜目をし時鳥おのが初音をまつげよまれて。(弘重)
- 蚊と蛭にゆふべも肌をせうられておいどはまだら目はふたがれず。(石燕)
- 目ばかりすみ足腰よわくなるみよのあかほども世に思ひ出せなき。(月丸)
- 玉章を消してかきくどくには墨よりも先目こそするなれ。(正安)
- 夕部もまたすたく蛙にいねられず目をばち／＼と明方の空。(種廣)
- 五月雨の其さがりめもあがりめも猫の目ほどに出づる月哉。(里住)
- からやまと文の八千巻とりあつめみる目の玉は神寶也。(紫雲)
- 春の夜の寝足らぬまに朝霞先つ我目より引き初めにけり。(披戸女)
- 足曳の山も細工をするが路や目を驚かす

- 三年患眼今年較。免典風光恒隨生。昨日韓家後園裡。香花猶自未分明。(張籍)
- 綠樹重陰蓋四隣。青苔日厚自無塵。科頭箕踞長松下。白眼看他世上人。(王維)
- 氣之清明。雙眸善識。惟道是視。瞻彼正直。(謝惠連)
- 古之人目短於自見。故以鏡觀面。(韓非子)
- 柳色獨奇眼。梅花同素心。(黃庚)
- 美目盼兮。好笑倩兮。(詩經)
- 榻之外目不見也。(荀子)
- 目不兩視而明。(同)
- 眼高四海空無人。(東坡)
- 眼到心到身到。(汪新)

- のこぎりがだけ。(笑)
- 風の手にまくり上げたる白萩は人の目にさへ月のよからず。(丹青齋)
- 輪をふくの稽古で禿目を廻し。(川柳)
- 氣があれば目も口ほどにものをいひ。(同)
- 人間に尻目といへる飛道具。(同)
- 御たん生髪をにらめる目をあらひ。(同)
- 本玉のまなこでにらむ嫁のかげ。(同)
- 釜よりはおやぢ良夜に目をぬかれ。(同)
- 人様が来るとまゝ子を目へ入れる。(同)
- 泣きながら眼を配るかたみ分け。(同)
- おれが目をねむつたらばと名何なり。(同)
- 兩眼くわつと見開いて親父待て。(同)
- 産み出すと眼のある子かと座頭開き。(同)
- 御日と目と目を見合せて、離れがたなのそのおもかげを、夢にも見せせず、現になりとも逢はせてたもれ。あはねば心がだ／＼と、思つたねやあこがるゝ身を何とせ

- そつと吹きこみ吹きこむことを、耳に口、見かはず顔の目しとが舌の返事して、すかな心か知るわいな。(同)
- いとし殿御の目元のしほを、入れてもちたや鼻紙に。(同)
- 目の寄る所へ玉が寄る。(俚諺)
- 目し口程に物を云ふ。(同)
- 生馬の目を抜く。(同)
- 目の上の癩。(同)
- 日の正月。(同)
- 閉目先黄連。深窓坐兀然。未忘應鳥興。暫絶看花綠。閑女知機日。嘆奴畏燈燭。願因無見處。得證定心禪。(高啓)
- 夫目察秋毫之末。耳不聞雷遠之聲。耳聞玉石之擊。目不見泰山之高。何則小有所志。而大有所忘也。(淮南子)
- 笑噴在禁外。聞事念。乃持鐵扇。入到堂。々衛止。々直撞入立。帳下。眼目而視。皆皆出血。(史記)
- 孔子往見。盜跖。跖者入通。盜跖聞之大怒。目如明星。突劍。日。聲如乳虎。(莊子)

- 三年患眼今年較。免典風光恒隨生。昨日韓家後園裡。香花猶自未分明。(張籍)
- 綠樹重陰蓋四隣。青苔日厚自無塵。科頭箕踞長松下。白眼看他世上人。(王維)
- 氣之清明。雙眸善識。惟道是視。瞻彼正直。(謝惠連)
- 古之人目短於自見。故以鏡觀面。(韓非子)
- 柳色獨奇眼。梅花同素心。(黃庚)
- 美目盼兮。好笑倩兮。(詩經)
- 榻之外目不見也。(荀子)
- 目不兩視而明。(同)
- 眼高四海空無人。(東坡)
- 眼到心到身到。(汪新)

曇らぬ、うら／＼けきには、敵ならぬ垣ねのうらだに、雪間の草わかやかに色づきそめ、いつしかと景色たつ置に、木の芽もうちけぶり、おのづから人の心も、のびらかにぞ見ゆるかし。(紫式部)

● さる程にその年はくれて、岸の小草や、もこいで、谷の木の芽も翠をます頃、ある日、伏姫は硯に水を滴がんとて出で、清水を掬びたまふに、横走せしたまり水に、うつろが影を見たまへば、その體は人にして、頭は正しく犬なりけり。(馬琴)

● 風の芽の紅なるに、かしの芽の白きを見て、かならず草木の葉は緑なるものとみはいはじとはいはじ。温泉を見て、水の冷なるのみにあらじとはいはじ。さるに何くれと、人の五のみちをそなへて生るゝことはさなり、人はよくもあしくも、うまれたるなど、さまざま疑へることなど、かしこしといふ人さへもいふとか、いといぶかし。(染翁)

● 情なや我君、彼が美色に惑はされ、政道廢れ給ふ故、今出奔の御身にも、思ひ知られぬ態さよ。譬へば養ふ竹の芽の、簀子を破る其の如く、寵愛程を過ぎぬれば、却て

過来るもの、色香を飾る女め一人を、天下に思ひ換へ給ふ事、不仁とやせん未練とや育はん。
 ●置たち木の芽し春のゆきふれば花なきとも花ざりける。
 ●むさしの春のけしきししられけり垣根にめぐむ草のゆかりに。
 ●あかねさす朝日にさゆる野間よりさしやすらん野邊の若草。
 ●春風のふくにつけてぞおもひいづるつぐむ萩のゆくすゑの秋。
 ●難波江のあしもまこもしらすげも角くむほどはえこそ見わかぬ。
 ●木の芽かはわかぬめぐみの春さめのもりの下にもあなむ若草。
 ●みなみらの江をこえゆくは青柳の芽も春風にほふ梅が香。
 ●なには江にしげき蘆のあしかびのけふぞ今年のさざしなりける。
 ●なには江や水ながる朝ごとのつぐむあしのかずざしらる。
 ●古川にこびて芽をばる柳かな。
 ●骨葉の刈られながら木芽哉。
 ●木々の芽や桑宮湯治立わかぬ。

●また石に成そこなうて木の芽哉。
 ●木の芽立つ中に山の匂哉。
 ●大原や木の芽すり行く牛の頰。
 ●野鳥の巢に叩へ行く木のめ哉。
 ●けしき立つ谷の木の芽の曇哉。
 ●十年の石置れて行く木芽かな。
 ●田樂の木の芽に腹も春の野や霞の帯をゆるめてぞくふ。
 ●春の日に寝ぶけのさめぬ若草は目をひらきつゝ延びやしつらん。
 ●野も山も春の寒さに頭巾きて草の目ばかり見ゆるこの頃。
 ●春の野の道にそろくで虫の角のやうにぞ芽だつ若草。
 ●布ならで何反といふ田のあざに芽を出したるよしの若草。
 ●十露盤のたまの春とて若草もちりのうちより芽をや出すらん。
 ●芽を出せし蓬の色や深草野餅にしよとてつめる小娘。
 ●そろく木木の芽にはへる春風の空にたこやらいかであへもの。
 ●四海の戰場までも木の芽つけ。

●立白に芽の出たやうな松がざり。
 ●こわそうにさいかちの芽を摘んで居る。
 ●春來ぬと芽で時を知る猫柳。
 ●芽をふいて疵を求めぬ杓お山椒。
 ●埋れ木の世に芽を出すも時に頼り。
 ●初原如意の芽ばえと寺小性。
 ●蘇鉄に芽が出宗門に葉が茂り。
 ●石近の橋能い種で芽を出し。
 ●枯柳燒盡有根在。春雨一洗皆萌芽。
 ●冰洲乍通寒洞碧。蘭葢新放露芽紅。
 ●蝦蟇如毒新蟾滿。門外沙平草芽短。
 ●紫芽嫩若利枝摘。朱橋香包數瓣分。
 ●細嚼花鬚味亦長。新芽一粟葉間藏。
 ●江源半卷葉。石炭乍舒芽。
 ●冰根亂吐小紅芽。

「めいしよ」名所

名勝。勝地。舊蹟。古跡。勝景。景色。佳景。著名。名どころ。名をえしところ。名高き。名きこゆる。いちじるき。
 ●清見がせきをみれば、西南は天と海と、高低ひとつにまなこなまどはし、東北は山と磯と、喧嘩おなじく足をつまだつ。勢の下には波の花風にひらく春のさだめなく、みねのうへには松のいろみどりを含みて秋をおそれず。浮天の波は雲を汀にて、月のみふね夜出てこぎ、沈陸の磯は磐を道にて、風の使脚あしたにふきてすぐ。名を得たる所、かならずしも興を得ず、耳に就る所、かならずしも目にふけらず、耳目の感ふたつながら得るは此浦にあり。
 ●それ天地は萬物の間屋敷にして、光陰は百はたこの旅人なりとは沈香亭にもてあつかひし、生酔の名言なるべし。いづれ旅ほどおもしろきはなし。朝の雲助長櫃の長々と、姫路をとりやると唄ひつれ、夕邊の月頼鏡蓋にかたむき向ひて、晩におじやれの約をなす。木宿よりあひの宿賑に、名所よりは名もなき所に山のたすまひ、

水の流と人のゆくへのはてしなき、松原東短なる棒ばなに筆をとる。
 ●又見えたりたるは昔名所にてぞ候ふらん、御教へ候へ。さん候ふ、昔名所にて候ふ。御尋ね候へ、教へ申し候ふべし。まづ南に當つて塔邊の見えて候ふは、いかなる所にて候ふぞ。あれこそ歌の中山清閑寺、今熊野まで見えて候へ。また北に當つて入相の聞え候ふは、如何なる御寺にて候ふぞ。あれは上見の鷲の尾の寺や、御覽候へ、音羽の山の嶺より、いでたる月のかよきて、この地主の標にうつる景色、まづこれこそ御覽じごとなれ。
 ●尋ね見る都に近き名所は、まづ名も高く聞えける、雲の林の夕日影、うつるふ方は秋草の、花紫の野を分けて、賀茂の御社ふし拜み、糺の森も打ち過ぎて、歸る宿りは在原の、月やあらぬとかこちける。五條あたりのあばらやの、主も知らぬ所まで、尋ね訪ひてぞ尋しける。
 ●名にも似ず、月こそ出づれ朝日山、山吹の瀬に影見えて、雪さし下す島小舟、山も川もおぼろくとして、是非をわかぬけしきかな。げにや名にしおふ、都にちかき字

治の里、聞きしにまさる名所かな。
 ●玉の御殿も獨寝はいやよ、椽と葛屋の忍び兼に、見て明かしたや須磨の月、鄙も名所の一節は、心有磯の海端に、霞籠ひの茶屋が軒、道行く人が一様に、暫し立寄る足休め。
 ●都路は花の名所かぞふるもおよびを折るにひまなかりけり。
 ●折らずに置くと名所にはならぬなり。
 ●見る人のないが紅葉の名所なり。
 ●平等院もうけのやうな古跡あり。
 ●星うつり月の名所も花となり。
 ●人がひのむだばね江戸の名所なり。
 ●月の名所で雨風を御籠愛。
 ●名所より我家をほむる旅路り。
 ●大佛の眼に箱庭の京名所。
 ●現在の極樂紫衣の名所なり。
 ●杜若それ指折の名所なり。
 ●似氣なきは花の名所に嵐山。
 ●須磨と明石は、どれが月やら名所やら、どふやらかうやら、わきていろわかちな

く、どれが月やら名所やち。どふやちかう
わらわきて、 (俗語)

●宇治の橋には名所がござる、隨て水波む
これ名所。 (同)

●歌人は居ながら名所を知る。 (俚語)

【めくら】盲

盲目。盲眼。偏盲。青盲。心盲。
闇盲。昏盲。

めしひ。かため。

●諸賢は東坡が口喩の説を見給へりや。生
れて盲ひたる人あり。口はいかやうなる物
かと思ひてかたへの人にとへば、口はかく
圓なりとて編繩を探らせけるに、編繩をた
いて、さて口は聲ある物と思へり。又
かたへの人いふは、口は光あり、燭の至る
ときには、おのづからあかるきやうにおぼ
えぬべし。そのことしといふなきやうて、編
繩をなで、さて口はほそく長きものと
思へり。今の世俗道理にくらき人多し。た
とひ書をよみて、道理にくらければ、い
ふ人もきく人も、口こそあき候へ、心は盲
ひたるにて侍る。さればその盲ひたる心を
もて、いろくにおもひなぞらへ候はり、

此人の口をはかるやうに、おほきに取れた
がへたることもあるべきぞかし。 (鹿集)

●折しも伊賀路より大和をへて、山坂へ出
づるにやあらん、春に裏の襦もこづま木綿
の、や、破れし袴の笠に竹の杖、木立いぶせ
き山路を、たどり、来る盲人ありけり。
親子と見え、只二人、年まだ七つ八つばか
りなる小娘に手をひかれ、谷より木葉れし
楠の、下をよぎらんとする處に、半六がと
りおとせし斧、かの盲人が笠の上に関きか
り、頂をさつくとときりさかれ、あゝと一
聲叫びあへず、うつぶしに仆れしかば、
娘周章つゝ、爺さまなうとよびいくる涙に
聲もたちつめつ、せんすべもなく見えたり
けり。 (馬琴)

●めしひしもの、人のいひがたき事をも
いふはいろもみえず、けしきにも知らねば
いふなりけり。くらき人はわがあしきも見
えねばよきと心得て、人に恥ぢざるは、め
しひし人のたぐひなり。されば、古よりお
もてにかきするなどもいふめり。 (樂翁)

●およそ三十一金の月胸には、第一義空
の水心にすめり。此故に無始來のねぶりは
ゆめながくさめ、六趣輪の冥は盲眼開けた
り。

り。 (光宣)

●夫れ驚愕の袋の下には、立ち去る思ひを
悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁
ひあり。現や心あり頗なる、人間有爲の身
となりて、薨き年月の流れては、妹背の山
の中に落つる、吉野の川のよしや世と、思
もはてめかな。あさましや前世に誰をか
厭ひけん、今又人の譏言により、不孝の罪
に沈む故、思の涙かき曇り、盲目とさへな
りはて、生をも替へぬ此世より、中有の
道に迷ふなり。元來も心の闇は有りぬべ
し。傳へ聞く、彼一行の果羅の旅、閑穴道
の巻にも、九曜の曼陀羅の光明、赫奕とし
て行末を、照し給ひけるとかや。今も末世
と云ひながら、さすが名におふ此寺の、佛
法最初の天王寺の、石の鳥居こゝなれや。

●あらかもしるや、我盲目とならざりし前
は、弱法師が、常に見馴れし境界なれば、
なに疑ひも難波江に、江月照らし松風吹
き、永夜の清響何の爲す所ぞや。住吉の松
のひまより詠むれば、月落ちかゝる淡路島
山と、詠めしは月影の、今は入りや落ちか
ん。 (謡曲、弱法師)

●ろらん。日想観なれば、曇りも波の流路
納島、須磨明石、紀の海までも見えたり見え
たり。満月青山は心にあり、あう見るぞ、
よ。さて難波の浦の致景の数々、南は
さこそと夕波の、住吉の松陰、東の方は時を
得て、春の緑の草香山、北は何處難波なる、
長柄の橋のいたづらに、かたまたまなたと歩
く程に、盲目の悲しさは、貴殿の人に行き
合ひの、まるびたよひ難波江の、足しと
はよるくと、實にも誠の弱法師とて、人
は笑ひ給ふぞや。思へば恥づかしやな。今
は狂ひ候はじ、今よりは更に狂はじ。

●ハッ御推量に違はず、弟は先達て切腹、
責めて五條満足なれば、我なりとし敵討の
御供と、思ふに甲斐なき其代り、幼少より
の盲目を幸、鎌倉に下り、師直が屋敷へ入
り込てお伽座頭、用心厳しく女子供に至る
迄、他所の者は一人も入れねども、盲の一
徳心を許し、奥へ通せば隔々限々、日は叶
はれども忠義の魂、足の歩敷に何間何尺、
飛石の敷迄も、胸に覺えた箱の案内、とは
知らぬ佐平太のうつそり、由真殿の底意を
探る供に連れれば幸究竟、お目に掛つて心

(同)

●折しも伊賀路より大和をへて、山坂へ出
づるにやあらん、春に裏の襦もこづま木綿
の、や、破れし袴の笠に竹の杖、木立いぶせ
き山路を、たどり、来る盲人ありけり。
親子と見え、只二人、年まだ七つ八つばか
りなる小娘に手をひかれ、谷より木葉れし
楠の、下をよぎらんとする處に、半六がと
りおとせし斧、かの盲人が笠の上に関きか
り、頂をさつくとときりさかれ、あゝと一
聲叫びあへず、うつぶしに仆れしかば、
娘周章つゝ、爺さまなうとよびいくる涙に
聲もたちつめつ、せんすべもなく見えたり
けり。 (馬琴)

●底残さず、申し上ぐる我本望と、明りを走
走る座頭が忠義。 (淨瑠璃、蝶方武士達)

●むむんなるかな、秋月の娘深雪は、身に
つもる数きの数の重つて、時失ふ目なし鳥、
杖柱共相みてし、朝香はもろく朝露と、消
え残りたる身一つを、道に捨ても襟先の、
飛石さぐる足元も、危ふき木曾の丸木橋、
渡りぐるしき風情にて、やうく座して手
をつかへ、召しましたは、此お座敷でござ
りませうか。拙いしらべもお笑ひ草、おはも
にさまやと會釋する。 (淨瑠璃、朝顔日記)

●松風を盲の聞けり呼子鳥。 (言水)

●月今宵めくら突當り笑ひけり。 (蘇村)

●盲より啞のかわゆき月見かな。 (去來)

●花見哉世につれだつ盲兒。 (其角)

●夕がほや鼠舞るめくら兒。 (几童)

●あはれさや盲麻列る露の玉。 (拙市)

●それくの色は分かれど替女の身のたよ
うきめのみ見るぞ佗しき。 (日出成)

●いかなればものゝあはれはみえぬ人世を
うきもの身をかこつらん。 (松蔭)

●盲人の眼を杖に引かへて鈴はつて道ある
く夜按摩。 (山登見)

●みえねどもあかねのせし聲なれば風呂

り。 (光宣)

●夫れ驚愕の袋の下には、立ち去る思ひを
悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁
ひあり。現や心あり頗なる、人間有爲の身
となりて、薨き年月の流れては、妹背の山
の中に落つる、吉野の川のよしや世と、思
もはてめかな。あさましや前世に誰をか
厭ひけん、今又人の譏言により、不孝の罪
に沈む故、思の涙かき曇り、盲目とさへな
りはて、生をも替へぬ此世より、中有の
道に迷ふなり。元來も心の闇は有りぬべ
し。傳へ聞く、彼一行の果羅の旅、閑穴道
の巻にも、九曜の曼陀羅の光明、赫奕とし
て行末を、照し給ひけるとかや。今も末世
と云ひながら、さすが名におふ此寺の、佛
法最初の天王寺の、石の鳥居こゝなれや。

●あらかもしるや、我盲目とならざりし前
は、弱法師が、常に見馴れし境界なれば、
なに疑ひも難波江に、江月照らし松風吹
き、永夜の清響何の爲す所ぞや。住吉の松
のひまより詠むれば、月落ちかゝる淡路島
山と、詠めしは月影の、今は入りや落ちか
ん。 (謡曲、弱法師)

●入會我を諷ふ座頭は。 (得右)

●平家をばかたれるものを琵琶法師落る都
へなどのぼらん。 (長樹)

●官上りかねのうなりは是なりと杖の撞木
も挫く座頭等。 (藤成)

●盲人の琴の曲より一段とひきて骨折る雪
の細道。 (朱樂庵)

●檢校の位にのぼる高どのよその涼風を價
千兩。 (米人)

●盲人の手なれし業の針よりも生き返りた
る風の涼しさ。 (一翁)

●白黒のわかちなければ盤面の目さへつづ
る盲人の圍碁。 (花杯亭)

●猫ならばあつとへさがらん盲人は袋かむり
てはらふすはき。 (千登世)

●唱子引きよくみれば盲なり。 (川柳)

●かなひませぬ盲になど初手はい。 (同)

●座頭の坊木馬にのせてみんな逃げ。 (同)

●抜校は手びきがあつて蛇におぢ。 (同)

●座頭の坊せくと淺黄に目を開き。 (同)

●盲目の一つ目になるこゝちよき。 (同)

●人並に座頭のみるは夢ばかり。 (同)

- 檢校になりかねる客人がよし。(同)
- 人を皆めくらに押水の行水し。(同)
- 座頭の目以下の外にゆきにくし。(同)
- わるい日なかつたは甲斐の座頭なり。(同)
- めくらの人魂四やどどく。(同)
- 盲人千人目明千人。(同)
- 盲人波法界。(同)
- 盲人蛇に怖ぢず。(同)
- 盲者の杖を失ふが如し。(同)
- めくらのかきのぞき。(同)
- 退白悲、不幸兩目不見物、無用子天下、胸中雖有知識、家無錢財、寸步不能自致。今去李中丞五千里、何由致其身于其人之側、開口一吐、出胸中之奇乎。因飲泣不能語、既數日、復自誓曰、無所能人、乃宜以盲廢、有所能人、雖盲當廢于俗輩、不當廢于行古人之道者。浙水東七州、戸不下數十萬、不盲者何限。李中丞取人、固當其賢不賢、不當計其盲與不盲也。當今盲于心者皆是、若猶自謂、獨盲于目、其心則能別是非。(餘愈)

● 生而眇者不識日、問之有目者、或告之曰、日之狀如銅鑿、扣鑿而得其聲、他日開鑿以爲日也。或告之曰、日之光如燭、捫燭而得其形、他日搯燭以爲日也。日之與鑿、鑿亦遠矣。而眇者不知其異、以其未嘗見而來之也。(蘇東坡)

● 眇雖去視不分明、跛亦能行易覆傾。萬是非非蛙履足、誰其聖賢察群盲。(紅蘭)

【めん】面

假面。おもて。おもてがた。めんうち。面をかぶる。

● 羯磨乘親はきはめて面打の上手なりけれども、ひととせに一つは打たず。性酒をこのみて、酔ひてまふことを樂む。ある折から老母のいへりけるは、はや米の櫃には蜘蛛の巣をかけたなり。勤めて打つべきにやとせめければ、乘親おどろきて、さあらは今日よりして、解らず打つべきなりとて、籠りけるが、四五日なへて面を打ちて、あつらへたるかたへもちゆき、料をもちかへりて、母にわたしければ、母よるこびていは、多くの金を得しは、面いくつ打ちたるやといふに、八おもて打ちたり。されども心かなはざるが、その中の七面あれば、みな家にのこせりて、取り出し見せたり。鬼女の假面なりければ、見るさへおそろしとて、傍におきけり。その夜盗人入りて親子臥したるを伺うて見て、母かの鬼面をかほにおほひて、眼の穴より見ながら、やよ盗人の入りたるぞ。乘親おきよといひけるを、盗人見て、あとさけびおどろき、いづくともなく逃げうせぬとぞ。(註園)

● いまだ事をはらざるに、かく落路を出せば、君には何する事ぞといひ合せたるに、關白殿忍びて、女車のやうにて御覽じけるが、落路の出づるを奇怪なりとおぼしめし、人を召して、その落路の舞人をかからめよと仰せらる。時に、落路の舞人は多好茂なりけるが、面形を取り去りては、人の見知る事もありとおほひければ、面形をしなから馬に乗りて、四大宮を下りにはせてゆく。中の廻ばかりの事なるに、大路の人、かれを見よ鬼の晝中に馬に乗りてゆくぞといひのこじりて、なきなき者などはおぢまよふて、まことの鬼と思ひけるにや、病み

- つきたるものありけり。(陸園)
- 人目を忍ぶ神同士の、顔と顔とに知らせ合ふ、夫さへあるに大黒舞、面引取れば是はそし、兄の花垣伊織の介、あら慥しや戀しやと、飛び付く程に思へども、若君の爲め比企殿の、身の仇とこそ成るべきと、急ぎ来る胸を押締め。(淨瑠璃、鎌倉三代記)
- 人の面のまこと生ひたるままひ士とも木とおもはれなく。(言遣)
- 年々や猿にさせたる猿の面。(芭蕉)
- 夜神樂や息白し面の内。(其角)
- 面々の蜂を拂ふや花の春。(嵐雪)
- 春雨や鼻うちくぼむ壬生の面。(几世)
- 後しての面や月の瘦男。(同)
- 鼻の面も佛のわかれ哉。(白雄)
- 桶とりや思はいはいで面の内。(雨竹)
- 壬生面や鼻の穴吹くはるの風。(涼秀)
- 被りたる面も麻呂羅の祭哉。(土刀)
- かぐら人がかぶる面や直き木につくれは神のめでし見るらん。(方彦)
- 面ならば作とも見えるしうとほど。(川柳)
- 鬼の面忘れて凄顔になり。(同)
- 高尾以後小ばんで面のはりてなし。(同)

● 我目や口をひんまげて面を彫り。(同)

● 小指の卽智杖具になり面になり。(同)

● 紙の面火繩の蛇の野遊樂。(同)

● 中見せに淺草歌の盤若面。(同)

● めぐる因果はくるりくるり、くるしきこの身、かづきし面はそのまゝに、うまれついたる二つの角、おのれとごごばかりにてわが身もあきれてこはいかに、とるにとられず、わけどもはなれの執着の、めいどうするぞあまましき。(俗語)

もノ部

【も】喪 (死の部参照)

悲哀。勉事。孔悲。致哀。去飾。風樹。專席。倚廬。諒闇。もかり。もぎ。おもひ。

● 人のなきあとはかり、悲しきはなし。申陰の程、山里などにうつろひて、便あしく狭き所に、數多あひ居て、後のわざども營みあへる、心あわたし。日數の早くすぎける程、物にもにぬ。はての口はいとなまけなう、互にいふこともなく、我がしこげに物ひきしたため、ちりんに行きあかれぬ。もとの住家にかへりてぞ、更に悲しきことは多かるべき。しかんくの事はあなかし、跡のたれいむなることぞなどいへるこそ、かばかりの申に何かはと、人の心は猶うたて覺ゆれ。年月経ても、露忘るゝにはあらねど、さる者は日々に疎しといへることなれば、さはいへど、その際ばかりは覺えぬにや、よしなしごとといひて、うちも笑ひぬ。骸はけうとき山の中に葬めて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、ほどなく卒塔婆も苔むし、木のはふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ言問ふ便なりける。思ひいでゝ忍ぶ人あらん程こそあらめ。そも又ほどなくうせ、聞き傳ふるばかりの末々は、哀とや思ふ。さるは跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、心あらん人は哀

と見るべきを、はては風にむせびし松も、
千年をまたで薪にくだかれ、古き墳はすか
れて田となりぬ。そのかたよになくなりぬ
るぞ悲しき。
(兼好)

●限れば例の作法にきめ奉るを、母北
の方、同じ煙にもほりなんと泣きこがれ
給ひて、御おくりの女房の車に、したひ乗
り給ひて、愛宕といふ所に、いと殿しう其
作法したるに、おはしつきたる心地、いか
ばかりかはありけん。空しき御からを見る
ノ、猶おはする物と思ふが、いとかひなけ
れば、灰になり給はんを見奉りて今はなき
人とひたぶるに思ひなりんと、さかしう
の給ひつれど、車よりおちのべう悲ひ給へ
ば、さは思ひつかじと、人々もてわづらひ
聞ゆ。うちより御使あり、三位の位贈り給
ふよし、勅使来て其宣命よむなん、悲しき
事なりける。女御とだにはせすなりぬる
が、あかす口をしう思さるれば、今一きざ
みの位をだにと、贈らせ給ふなりけり。
(紫式部)

●正成を助まし、我れ天皇に頼まれ奉
り、命を戦勢に抱つ事、心有つて男に附ら
ず、今宵ひそかに傳へんと、裏道より歸り

し所、思はずも兩親の御最期、念ぎ御別れ
と思へども、汝此家に忍ぶ事を知つて、わ
ざとひかへし其心は、互に激しき戦見せば
御臨終の妨と、思ひはかつて延引せり。諒
間は天子にかざらず、庶人に及ぶ。眼前二
親最期の場所、此場ですぐに勝負もなるま
じ。時節もあらんとはいはせも立てず、ヤア
なまねるこい一時を待たうか、女房照葉を
入り込ませ、我は下殿に身をやつすも、汝
が首を見ようばかり。
(浄瑠璃 楠昔唄)

●空山寂歴として道心生ず、虚空退還たり
野鳥の聲、浮世離れし山寺の、日のめも見
えぬ夏木立、岩に滴る水の音、最も淋しき
三昧に、見る目いぶせき草の庵、早野勘平
重次は、主君の園を立去つて、一先歸る故
郷の空、母の別を悲しみて、墓所の傍を立
去らず、喪に入る日數假初に、臨目も觸ら
ぬ五十日、奇特といふも思なり。
(浄瑠璃 伊呂波實記)

●思ひかねながめしかども鳥部山はてはけ
ぶりもみえずなりにき。
(四院院)

えはてし跡と忍ばぬ。
(後成女)

●かはるらん月日もしらず歎くまに哀はつ
かもすぎにけるかな。
(匡房)

●諸人の花さく春をよそに見て猶しぐるゝ
は推柴のそで。
(長方)

【むさびる】望月

(月の部参照)

團圓。金餅。銀盤。一輪。水輪。
皎々。

十五夜の月。みつる月かげ。も
ちの夜の月。中空の月。まどか
なる。

●もち月のくまなきを、千里の外までなが
めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたる
が、いと深く宵みたるやうにて、深き山の
杉の梢に見えたる木の間のかげ、うちしぐ
れたるむらぐもがくれの程、又なくあはれ
なり。
(兼好)

【むさびる】望月

(紫式部)

●類なき、名を望月の令符とて、夕を急ぐ
人心、知るも知らぬも諸共に、雲を厭ふや
かれてより、月の名頼む日影かな。
(詠曲 三井寺)

●第一の后は多子の君、第二の后は皇子の
君、二入の細眉三五の顔、一つ違ひ梅櫻、
優り劣らぬ御龍み、中にも皇子の御方には
早五月の岩田帯、神の御種を望月の、天の
日嗣ぞやことなき。
(浄瑠璃 伊賀盛)

●ふち衣やつしなはてそ天がけり守ります
らん身をし思はよ。
(千蔭)

●紫のいろこききめに藤衣かはるたもとを
みるぞ悲しき。
(長流)

●ふち衣わぐてふけふのはてはあれどおつ
る涙のかぎりなきかな。
(土滴)

【むさびる】望月

(兼好)

●秋も秋今宵も今宵月も月所もとこる見る
君も君。
(光源)

●かぞへねど秋のなれば知られぬる今夜
に似たる月しなれば。
(登蓮)

みづの月の涼しさ。(湖鮮集)
 ●よそほひをせぬ娘の女も望の夜の月のか
 とみはのぞく竹竈。(堅文)
 ●くひたらぬうはさしきかす唐大和たつた
 一つの望月の影。(黒人)
 ●桂男は下月か上月かさかづきの影とはみ
 ててし月の望。(白人)
 ●なちかたの鹿の夜なきの哀とてみあぐる
 月も望の中山。(衣太)
 ●丹波の糸瓜の水はわすれても雲の手なき
 る望の夜月。(安成)
 ●座頭金十五夜お月見てをどる。(川柳)
 ●満月を見上げぬものは稻斗り。(同)
 ●中秋はだんご十五の月見也。(同)
 ●満月に後帯しめる新田様。(同)
 ●水鳥のくるひ満月ゆり扇し。(同)
 ●其ささらきの望月に四へ行き。(同)
 ●仲秋三五の月がらとて、いつにすぐれて
 虎御前、身仕舞はやく下着まで、あらた
 めかけて満月の、桂男子や新成を、待ち
 まうけたる大磯の、ところくのけしきま
 で、おなじ月見る人ごころ、思はかはる秋
 なれど、こよひの月に隈もなし。萩やす
 きに露しみぢ、雄鹿雌鹿のありさまは、ふ

すまきながら秋の夜の、月見しどりの小夜
 がらす、なくね更けしと夕がほの、かぶろ
 が目もとよぼく、と、すぐに蚊帳に入り
 にけり。(俗語)
 ●八月望夜天如藍。海色捲。露山收。嵐。
 玉盤元沈龍窟底。忽起萬丈誰能探。初來空
 中光偷渡。嬌嬌寒風。人言一年此最
 好。金精水氣秋相調。小星盡去大星在。芒
 角欲吐政與。天將洗眼。照下土。啖食
 肯饒妖魅食。穿深窠。暗不遺。魍魎
 忌影。影。前年客中憶。見之。家人怨
 別方啼々。荒山不知佳節至。垂首荒。案
 琴香。但怪流輝入。敗月。油燈失。留留
 孤。起行陰林不用炬。別味獨叩。西
 菴。蛇蛇亂踏心。怪影走。石。楓。楓。
 即呼。近人。共載。酒。放舟直下芙蓉潭。翻
 々。驚。樹。吹笛正和鳥飛。南。今年在
 舍反窺。暗室困臥如。乾愁無。端負
 其夜。月固不言我則。人無。賢愚。竟
 費。况我清景性所。忽憶諸君。隔。河。水。
 持。被就宿。高。呼。老。婦。掃。庭。宇。一
 席盤。與。柑。江城重閉萬家寂。樓鼓近
 曉。三。空階。其。覺。虛。疑。疑。
 極。極。三。空階。其。覺。虛。疑。疑。
 極。極。三。空階。其。覺。虛。疑。疑。

●明宵復出已難。似。動別經年嗟何堪。
 際前此月又此客。世所。難。遇心。暗。關
 山幾處未解。兵。擊。不。寐。三。男。南。隣
 歌舞北隣哭。月雖。同。照。異。甘。苦。何。人。爲
 我。天。戈。乾。坤。多。難。俱。平。殿。行。者。得。還。居
 者。樂。清。光。所。及。恩。皆。翠。懸。知。此。願。未。易
 遂。憂。來。舉。盞。從。沈。酣。須。與。衆。散。曉。蟲。急。
 古。桂。吹。落。青。梧。々。(高啓)
 ●湖上風高助。白。蘋。暫。延。清。景。此。邊。巡。
 隔。年。遊。別。成。何。事。半。夜。相。看。似。故。人。蟾
 向。靜。中。於。爪。距。免。復。明。處。弄。精。神。婦
 娥。老。大。慚。懶。獨。倚。蒼。桂。一。輪。(羅隱)
 ●中庭地白樹。獨。零。露。無。聲。濕。桂。花。今
 夜。月。明。人。盡。望。不。知。秋。思。在。誰。家。(王建)
 ●暮雲收盡溢。清。寒。銀。漢。無。聲。轉。玉。盤。
 此。生。此。夜。不。長。好。明。月。明。年。何。處。看。
 (蘇軾)
 ●撲地痴雲欲。萬。重。家。々。塵。帳。護。房。櫺。世
 間。第。一。無。情。物。誰。似。中。秋。雨。與。風。(范成大)
 ●秦。甸。之。一。千。餘。里。凜。凜。冰。鋪。漢。水。之。三。十
 六。宮。澀。々。粉。飾。(公乘德)
 ●十二。中。無。勝。於。此。夕。之。好。千。萬。里。外。皆
 爭。於。吾。家。之。光。(長谷雄)
 ●三五。夜。中。新。月。色。二。千。里。外。故。人。心。

●瑠池便是尋常號。此夜清明玉不知。(白居易)
 ●金膏一滴秋風露。玉匣三更冷漢雲。(淳茂)
 ●(香三品)
 「もみぢ」紅葉
 霜葉。黃葉。錦繡。濕丹。楓樹。
 楓林。深紅。
 わか楓。つたもみぢ。はじめみ
 ぢ。はつしほ。ちしほのもみぢ。
 露の下染。色のちぐさ。もみぢ
 のにしき。うすき梢。波もいろ
 そふ。からにしき。くれなゐの
 むらご。もみぢ重ねの袖。白つ
 ゆのいろどる。木々のにしき。

●十月上の十日は、平野の行幸なりけり。
 此度は紅葉盛にて、はる原、なかしう分
 け入らせ給ふに、山は皆紅なるを見渡させ
 給ふは、北山のおたりほうせん寺、袖ぬら
 ず宰相の通ひ給ひし所などは、なかしかり
 しもおぼし出でらるゝに、こすゑの色も心
 ことに見やらるゝを、煙りともろくにな
 ち、霞をこめたるさりの隔も、たどくし
 きは、なかくいと戀しきことおほく、
 御覽じわたすに、齋院のわたりの紅葉も、
 いみじう盛にて、色々の錦を引ききたるやう
 に見えわたされたるに、蜂の嵐あらくし
 く、ときんふき渡して、ちりまがひたる
 など、繪にかまほしきを、さしも思ふお
 たりならずとも、心ばかりはあくがれぬべ
 きを、いと一方にのみながめ入らせ給へ

●夕風吹きし紅葉のいろ、濃き薄き
 錦を敷きたる波殿のうへ見えまがふ。庭の
 面にかたちをかき童部の、やんごとなき
 家の子どもなどにて、背き赤き白樺蘇芳
 菫染など常のごと、例のみづらに顔ばかり
 のけしきを見せて、短かきものどしをほの
 かまひつゝ、紅葉の陰にくより入るほど、
 日の暮るゝもいとをしげなり。(紫式部)
 ●紅葉こそ、とりくをかきしものにはあ
 なれ。まづ雞冠は、をさな兒が手をひろげ
 たるさまして、色の干入なるをかし。鳥
 は色かへぬ松の秋をしらせて、村邊に見ゆ
 るをかし。櫻はあかざりし春の面影思ひ出
 であれてをかし。山柿は赤うそめ渡したる
 色のみかは、歌の聖の御名にさへ通ひて、
 柞は色おくれたれど、昔のかげなど人の思
 ひよるも哀なり。白蔭、櫛、櫛、櫛など、
 とりくをかし。かくさまくなる中に
 も、かへでなん殊にめでたき。世に紅葉と
 だにいへば、おのづから其木の名と思ふめ
 るも、げにさる事にて、是にたちまざるは
 あらじかし。(弘綱)
 ●かくて我主の坐定まりて、ものがたりひ

の間々に、湖十郎はちこちと頭をめぐらしつゝ、樹々の梢をあふぎ見るに、眞紅なるあり薄紅あり。黄なるあり黄黒なるあり。そが中に、青葱として緑なるは、常葉樹のまじれるなり。彼甘谷に曝すといふ御錦をかけたるにあらずば、すなはちこれ蓬菜五色の雲かと疑ふ。秋色の日に美しく、秋情こゝに閑なり。(馬琴)

●あまりさびしき夕まぐれ、しぐるゝ空をながめつゝ、四方の梢もなつかしさに、伴ひいづる道のべの、草葉の色も日にそひて、下もみぢ、夜のまの露や染めつらん。朝の原はきのふより、色ふかき紅を、分け行くかたの山ふかみ、げにや谷河に、風のかけたるしがらみは、流れもやらの紅葉ばな、わたらば錦な絶えんと、まづ木のもとに立ちよりて、四方の梢をながめて、しばらく休み給へや。(謡曲、紅葉狩)

●先々紅葉の名所々々、彼方此方に多けれども、彼業平の心には、神代も聞かずと云ひ置きし、名にも龍田の紅葉の色、初瀬の山は檜原が木の間に、色流れ出づる村紅葉。又は八鹽の岡の紅葉ば、其外高雄嵐山色々を四方に染めなす秋の日の、朝には雪

としぐれ、夕べには雨とそよぎ、このもかもの草木の、はや下染も時過ぎて、百入千入に薄き浪き、梢の秋はおもしろや。(謡曲、飛雲)

●散り敷く庭の紅葉なれば、みづから其まゝに、暖酒を呑まうよ。面白や秋の日の、影も廻るや盃の、手先づ拍子をとりに、詠へや舞へと夕暮の、月の出で間、いざうちとけて遊ばん。(謡曲、庭紅葉)

●時しし今は長月の、紅葉も四方の景色にて、春見しは、花の部の雲霞、立つや日數も移り来て、今ぞ時なる秋の空、曇らぬ月の都路に、ゆきも繁き諸人の、秋ゆたかなる心かな。(謡曲、松尾)

●八聲の鳥も数々に、鐘も聞ゆる明方の空しきり、散る紅葉ばの月に照り添ひて、韓紅の庭の面、明けなば恥づかし暇申して、歸る山路に行くかと思へば、木の間の月のかげろふ姿となりけり。(謡曲、六浦)

●花のふよよの雪ならで、はらはぬ袖につもりては、五色の雪とふる紅葉、わけつゝ行けば錦着て、家に歸ると人を見るらん、と、朱賀がむかしを讀みし歌の心に似たるぞ

や、それはもろこし會稽山、爰は信州戸隠山、今惟茂が身にたくへ、のぞみなかなへ二度部に歸るべき、しるしを染めてますらなが、やたけ心の梓弓、箭の矢さへ紅葉して、ともにそめ羽とならぬ葉の、帝の御目には龍田川の秋の夕錦とも御覽有り、渡らば中や絶えなんと、なしみ給ひし御製も有り。又は古昔の花をふんではおなじくをしむ花もみぢ、たへず紅葉背背の地、ふまではゆかん方もなし。あら／＼おもしろやな、行くも楓葉戻るも楓葉、こゝろを染むるもみぢ葉、もみぢ葉の影にやどれば、雨にもあらず、雪にもあらず、まして露霜霞にあらず。亂れて吹きおろし、袂にはらり鳥帽子にはらり、はらり／＼はら／＼はつと、風のよせたる朽葉落葉の色も珍らし。(浄瑠璃、世帯鏡本地)

●雲はれてあさまの嶽も秋くればけぶりなわけて紅葉しにけり。(後頼)

●くらま山秋の月夜にみればあかし岸にもみぢやいとよてらん。(好忠)

●立田姫くものはたてにかけておる秋のしきはねきもさだめず。(定家)

●けふみれば嵐の山は大井川紅葉ふきおる

す名にこそありけれ。(俊忠)

●あさまだき嵐の山のまむければ紅葉のしききぬ人ぞなき。(公任)

●夜もすがら風に争ふ音すなりはらへばつしる庭のしみぢ葉。(彦隆)

●染めわたす梢のつたの村もみぢ葉は松さへいろになりつゝ。(春海)

●そめ／＼し色も千しほの隈とやけさはきのふのまゝの紅葉ば。(宜長)

●いつのまにめぐりはてけん村時雨染めのこしたる山のはもなし。(景樹)

●色はみなむなしとささる山寺の軒にもそめつ秋のしみぢば。(有功)

●紅葉折りに冷たい水を渡りけり。(晴山)

●宮守が女かくれぬ夕紅葉。(素卿)

●むかし底の色に見えつゝ花紅葉。(鬼貫)

●吹き寄りし木の葉より出す紅葉哉。(杉風)

●小原女の足の早さよ夕もみぢ。(蘇村)

●紅楓深し南し西す水の隈。(凡菫)

●船頭も米つく磯の紅葉哉。(支考)

●秋しはや岩に時雨れてはつ紅葉。(許六)

●杉の上に馬ぞ見えくる村紅葉。(其角)

●肌寒し竹切る山のうす紅葉。(凡光)

●御持参の土産の味や紅葉狩。(太紙)

●年月の立田の川や又けふのひもなけれゆく紅葉ばのかけ。(常帶)

●山づとの枝さし出してかくばかりまづかく／＼とはなす紅葉見。(英賀)

●通天の紅葉の橋の渡り物これ正真のからにしきなり。(騎雄)

●一しほのながめなど、は埒もなし百しほしみし色の紅葉ば。(盛住)

●ちと御酒は過ぎせ給へ龍田姫いろに出でよもまゝの紅葉は。(雀女)

●てる月の鏡にむかふ立田姫もみぢ色、こ山のくちべに。(皮種)

●紅葉する山みな酔へりその中に獨りさめたる松はずねもの。(田鶴丸)

●紅葉ばの名こそ高雄はことりや文覚さまし元は色から。(貞柳)

●朱をさいたやうなるるしの紅葉ばにまけじと共にくるで色よき。(湖松)

●時は今さるのしりとや紅葉ばのまつかいあんじてりまざるらん。(鬼守)

●見渡せば皆紅葉する山姫にあかの他人は松ばかりなり。(橘洲)

●たちねはね紅葉衣をむら時雨たがはれき

とがさらす山姫。(同)

●けつちやくをして紅葉をすてるなり。(川柳)

●夜ッぴと紅葉見るだと内義云ひ。(同)

●なまふひのとかくしくじる紅葉がり。(同)

●もみぢ見にいきやせうかと舌を出し。(同)

●うそもつきあへず紅葉でくらはされ。(同)

●御幸まで峯の紅葉ちらすにぬ。(同)

●奥州の土にはあはぬ紅葉あり。(同)

●紅葉がりとつちへ出ても窟所ばかり。(同)

●山に色つけては風に聲がはり。(同)

●六だんめ趣向いぶかし紅葉がり。(同)

●紅葉がり今は遊女がたぶらかし。(同)

●落日に紅葉みる氣はさらになし。(同)

●うどんより外にしあんのない紅葉。(同)

●山門へ衆酒を許す立田姫。(同)

●紅葉より飯にしやうと海邊寺。(同)

●秋ふくる、深山楓の小夜しぐれ、手染の

赤の立田姫、織りだす錦したんに、その名も高尾小倉山、行幸またなん飛鳥川、かはる心は薄もみぢ、からくれなぬの立田川ながれてとまるしがらみに、紅葉の波のはるかなる、千里の外のからにしき、わが数島の道しるべ、しみぢがさねの名取川、君松が枝の夕ぐれに、月のかげさへ通天の、みちこち人も隨興の、しだれ紅葉や糸もみぢ、よる年波の水かよみ、うつろふ色の二おもて、わすれがたみは朝つゆに、雁の玉草もみぢ、また二月の花よりも、ます紫のひとしほに、酒あたくし唐歌の、むかしなしのぶ須磨の浦、や葉の節のしかもみぢ、つまぐれなるや、青海波、夜のにしきは故郷の、風のためにも神無月、かすは八入か九重に、十二草の赤紅に、薄柿餅金いろく、な、かぞへて幾しほか、秋のなごりをながむならまし。(俗語)

●思ふまいよのやれそれほどに、顔にもみぢの立田山。(同)

●紅葉赤るゝ色とはきけど、末の落葉をたれかしろ。(同)

●あれ見やしやんせ海安寺、まよ立田の高尾でも、及ばないぞへ紅葉狩。(同)

●おうら山吹日陰の紅葉。(偶談)

●紅葉の煤。(同)

●既寒透交被、茅檐雨聲細。道人夜來夢、已落西陵際。鳥藤布行纏。即便定遊計。出城無幾里、野景心相契。殘金菊未涉、烏語媚新霽。微々雲弄姿、稍々山露垂。霜葉遙招人、帶松明復騎。引入溪洲去、萬竹錦綺麗。流泉谷幽吟、杏然了遺世。暮鐘已雙響、迴風墜紅脆。色空理可悟、何須戒定解。諸君且念唱。我詩即金偈。(星巖)

●蕭條楓樹月光多、荒岸吳江夜奈河。爲恐人間曉寒重、霜風織錦纏嬌婦。(綱條)

●遠上寒山石逕斜、白雲生處有人家。停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花。(杜牧)

●地僻門深少送迎、披衣閑坐養幽情。秋庭不掃排藤杖、閑閉梧桐黃葉行。(白居易)

●山明水淨夜來霜、林樹深紅映淺黃。試上高樓清到骨、豈如春色嗾人狂。(劉禹錫)

●黃蘗顯林寒有葉、碧瑤瑤水淨無風。(白居易)

●洞中清淺留瑤水、庭上蕭疎錦繡林。(俚風)

「もん」門

門扉。門牆。門戶。柴門。宮門。山門。衡門。閉門。叩門。かど。杉のかど。葎のかど。草にうもる。くちし門。とぎぬ門。

●大進生昌が家に宮の出でさせ給ふに、東の門は四足になして、これより御輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども陣屋の居ねば、入りなと思ひて、髪つきわるき人も、いたくもつくるはず。よせておるべきものと思ひあなづりたるに、栴檀毛の車などは、門ちいさければ、さはりて得入らねば、例の鐘道しきておるゝに、いとにくく腹だしけれど、いかゞはせん。殿上人地下なるも陣に立ちそひ見るもねたし。御前に参りて、ありつるやう啓すれば、こゝにも人は見るまじくやは。なかはましもうちとけつると笑はせ給ふ。されどそれは皆めなれて侍れば、よくしたて侍らんにし

こそ驚く人も侍らぬ。までもかばかりなる家に車入らぬ門やはあらん。見えは笑はんなどいふ程にしし、これまらせんとて、御観などさしいる。いで、いとわろくこそおはしけれ。などでかその門狭く造りてすみ給ひけるぞといへば、笑ひて家のほど身のほどに合せて侍るなりと笑ふ。されど門の限を高く造りける人も聞ゆるはといへば、あなおそろしと驚きて、それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずは、承り知るべくも侍らざりけり。たまへこの道にまかり入りにければ、かうだに辨へられ侍るといふ。(清少納言)

●げに限なめりとやうく思ひなり給ふに、大貳の北方にはかにきたれり。れいはさしもむつびぬを、さそひたてんの心にて、奉るべき御さうぞくなどてうじて、よき車にのりて、おもちうけしきほこりに、物思ひなげなるさまして、ゆくりもなくはしりきて、かどあけさするより人、わろくまびしきこと限なし。左右の月もよるほひたふれにければ、をのこもたすけて、とかくあけさわぐ。いづれかこのさびしきやどにも、かならずわけたるものとあなるみつの

みちとたどる。(紫式部)

●さるべき御使もなく、明けぬべければ、土御門少將、人も供せずたゞ一人、馬にてゆきぬ。手づから馬の口をひきて、門を叩くに、とみにもあけず。空は明け方になるも、あましくなかし。門をあけぬるに、思ひよらず、あきれたうけんも、ことわりなり。さらぬ情だに折柄物はうれしきに、かしこき御情も深く、色をも香をもと、思しめし出づるも、御使の嬉しさは、げに如何なりけん。(中務内侍)

●承明門院のおはしますなる院はいづくぞと、かの院より立てられたる侍の、いとあやしげなるにしも問ひければ、聞く心地うつつととおぼえず。しかんと申すまゝに、土御門殿へまゐりたれど、門は葎つよくかため、扉もさびつさ、柱根くらてあかざりけるを、耶等どもにとかくせさせて、内に参りて見まはせば、庭には草ふかく青き苔のみむして、松風より外はこたふるものもなく、人の通へるあともなし。(増鏡)

●女は塚の内に入りて、秋の心も細布の、機物を立て、機を織れば、夫は錦木を取り

持ちて、さしたる門をたゞけども、内より答ふる事もなく、ひそかに音するものとは、機物の音秋の虫の音、聞けば夜聲もきりはたりちやうく。(謡曲、錦木)

●祐成は、かくとも知らで時宗が、時移りたり事よきかと、中門をみやりつゝ、早くなたへと招けば、招かれて山のかせぎ、泣くく来りたり。打たれても親の杖、なつかしければ去りやらず。(謡曲、小袖曾我)

●げに人間の一世は岸のひたひの根なし草つなぐ舟のいたづらに、こがるゝも旅、またふも旅、今行くさきも法の旅、浮世を出づる發心門、ひらくる花やさとりの門、いぎやう門行なんぎやう門、くわん念門をうちこえて、天台廿四門あり。(淨瑠璃、時頼記)

●恩を感ずる感涙落涙、うはべは色立つ敵と敵にらむも徳に入るの門、六波羅の大道を、いさめて徳に入るの門、六波羅の大手門、密門樓門冠木門、扉は金石鉄壁の、隙間の風も通さねど、さはらで通る弓矢の情、助くるも道、殺すも道、さらば返れ有王、おいとま申すと禮儀は身の上、廻る根は主君の上。(淨瑠璃、平家女説島)

●あきつしまなまむるかどののどけきをつ

たふる北の藤原のかけ。 (定家)
 ●おなじくばとちこしれかしくはの門名にのみたてよとののへらん。 (光俊)
 ●われはてよわしけれどもつ鐘かけたる門はさすがなりけり。 (家良)
 ●春雨はくる人もなくおとたえぬ柳のかどの軒のいと水。 (俊成)
 ●とはれんとさしてはすま松のかどみはてんための秋の夕ぐれ。 (家隆)
 ●すみわびてなほ山深く跡たえば誰をかこに松たてる門。 (寂蓮)
 ●おく山のさりのたえまの眞木の門いかなる人のすみかならん。 (後鳥羽院)
 ●杉たてるかひこそなけれとはれても門はむぐらにとちはてにけり。 (千隆)
 ●妹が門行きすぎがての笠やどり心ありけるめまそよぎかな。 (同)
 ●おきふしも心のまよとはれぬぞ中々やうき門のあけくれ。 (春滿)
 ●辛柚みて門は葎の若葉かな。 (芭蕉)
 ●初雪や門に橋あり夕まぐれ。 (其角)
 ●嫁入の門も過ぎけり鉢たよき。 (許六)
 ●盆の月れたかと門をたよきけり。 (野坡)
 ●塵々といへど叩くや雲の門。 (去來)

●水打つて露こしらへる門邊かな。 (太紙)
 ●門口に風出たき春の泊りかな。 (几童)
 ●水仙や門を出づれば江の月夜。 (支考)
 ●ほとよぎす何もなき野の門構。 (凡光)
 ●はつ雪や犬になるとも君が門。 (白雄)
 ●門しめて柳の上の月夜かな。 (保吉)
 ●榎までほうしとなりぬ僧正の門にするどき風のかみそり。 (橋洲)
 ●佐保姫がまたわら玉の御出と内さうじして門々にまつ。 (鳥女)
 ●さうがにの糸にや水をもりつらんたくみが門にたてる蚊ばしら。 (琴重)
 ●門ごとにあしたの春をまつかざりたつた一夜のことしなりけり。 (朝鹿)
 ●淺草の市と月日はたつか弓くれゆくとしの矢大臣門。 (下手丸)
 ●門の戸はまづさし置いて下駄の齒をこんくたよくけさの大境。 (霞)
 ●門たよくしほ風寒き小夜中にもらひ千鳥のなく赤子かな。 (持麿)
 ●出づるにも入るにもしのかよみけり軒に杖つく賤が家の門。 (金盛)
 ●火としてかよふ燈はとがめなし御門はくれを限る殿下も。 (素人)

●夕立に大黒をなかる時はにこくとして門にこそいれ。 (宇)
 ●大盤若六百くひんはのこるともあれたる寺に由門もなし。 (初丸)
 ●羅生門胸がねの有るうでを出し。 (川柳)
 ●指折りの門に赤子の聲がする。 (同)
 ●門にぬれて居るに晩まで降ればい。 (同)
 ●組板をたよくと常の門になり。 (同)
 ●徳に入る門へは息子おもむかず。 (同)
 ●雲の門じだんだ踏んでお宿がへ。 (同)
 ●山門へ霞のかよる母の聲。 (同)
 ●諸客床に入るの門なりと別學し。 (同)
 ●どなるやつ雷門をわけて行き。 (同)
 ●花の山鬼の門とは思はれず。 (同)
 ●山門を下から拜む氣の古き。 (同)
 ●帯といて夫婦別あり湯屋の門。 (同)
 ●門にたつたは八もじまか、夜風身の毒うちごされ。 (俗語)
 ●好事門も出です。 (俚諺)
 ●口は禍の門。 (同)
 ●禍福は門なし。 (同)
 ●門を出れば七人の敵あり。 (同)
 ●門に入らば笠を脱げ。 (同)

●小車斑々黄塵晚。犬爲推。婦爲挽。出門何所之。宵々者柳岸。音帆。願得樂土。共啼。風吹。黃蕭。望見。關字。中有。主人。當。阿。汝。叩。門。無。人。室。無。釜。踰。空。窓。淚。如。雨。 (陳子龍)
 ●近來人事頗相乖。獨坐何曾得。好懷。犬吠爲。運。酒。市。雞。鳴。常。傍。讀。書。聲。門。終。待。學。張。家。寒。關。恐。礙。當。會。等。排。惡。客。就。中。多。氣。岸。時。々。下。馬。擊。堂。階。 (李俊民)
 ●春竹寂々掩柴門。夢覺起來步小園。人語歌時山犬吠。月明偏在杏花村。 (月潭)
 ●獨訪山家。歌遺涉。茅屋斜連隔松葉。主人聞。語未開門。遠。蕪。野。菜。飛。黃。蝶。 (佐輔)
 ●重門擊柝。以待暴客。 (易經)
 ●衛門之下可以避風。 (詩經)

【も】桃

●穠花。妖艶。仙姿。綽約。丹唇。
 ●仙果。瓊肌。甘實。顆々。株々。
 ●碧桃。
 ●みちとせ。ひめもよ。八重もよ。
 ●みちよの花。ものいはぬ。もよ

●のにしき。くれなゐ句ふ。
 ●桃は元来いやしき木ぶりにて。梅櫻の物好。風流なる氣色も見えず。たとへば、下司の子の。にはかに化粧し。一時を着飾りて出でたるが如し。潮漫とさきみだれたるに。首筋耳口のあたりに。産毛のふかき所ありていやし。 (許六)
 ●三日になりぬれば、ところんのおぼん節供どもあり。いまめかしき事どもおぼく。西王母がもよのはなし。をりえたるまおもしろく。ところんすきものみえたり。 (榮華物語)
 ●こゆるぎの磯近き宮屋の内にも、ひよなあそびするをとめどもは、桃山吹の花などこちたきまで瓶にさし、けふの日のくるを惜しと思へるさまなり。 (武女)
 ●是は三千年に、花咲き實なる桃花なるが。今此御代に至り花咲く事。たよ此君の御威徳なれば、仰ぎて捧げ参らせ候ふ。そも三千年に花咲くとは、如何さまは聞き及びし。其西王母が、園の桃か中々に、それと今ほ物いはい。さればこそそれぞ殊更名におふ花の。桃李物いはず。春いくばくの年月に逢り迎へて、此の春は三千年に、な

るてふ桃の今年より。花咲く春にあふ事も。唯是れ君の四方の惠、あつき國土の千々の種、桃花色ぞ妙なる。 (謡曲、西王母)
 ●桃の花。咲くや彌生のかの原、わきて流るゝいづみ川、こよは又心長閑けき水の面に、浮ぶ霞の盃の、めぐるもおそき春の日の、影もそなたに圓居して、いざや酒をすゝめん。いざ酒をすゝめん。 (謡曲、三月三日)
 ●春風の、吹けどもなごやさし丹の、とめ洲先にうごきなき、鴨白鷺群れ遊ぶ、浦のひかたぞ面白き。桃の花咲く山遠く、流るゝ瀧も曲水の、やよひの空ぞたぐひなき。 (謡曲、桃海)
 ●何ところうじませ、花は櫻と賞翫致し、桃などは一向賤めども、かく咲き亂れし有様は、梅も櫻も及ばぬ詠め、よい景色でござりませうが。さればい。此桃山の花盛、噂に聞けど見るは初めて、やさしいと首はうか。見る人多き其中に、戀しき花の一枝を、手折らば落花狼藉と、餘所を憚る自が心の内、よもやそなたも合點行くまい。 (淨瑠璃、三日太平記)
 ●三千年に、なるてふ花や桃園の御遊宴、

大常卿頭が、筆にてみし一趣向、名高き美人の繪姿を、数多い枝にかけならべ、花に詩歌の古からず、花やかなりし作意なり。君内官に開帳せられ、木陰の苗に著き給へば、増殖の盛、琥珀の盃、美を盡したる數品の盛饗、大常卿玉座に咫尺し、誠に古人の詞にも、梅はかたく海棠は愁の色ありとて、花といへば桃李に限りてはやせども、それは偏風今の世でとらぬ事。

- 三千年になつてふ桃の今年より花さく春にあひにけるかな。(野恒)
- 山がつかぬうつ野らの境なる桃のわかだち花さきにけり。(久嵐)
- 賤のながそのふの桃の花さかりやぶしもわかぬはるのいるかな。(真淵)
- 今もなほゆきて見れば桃の花さくやみ谷の水のみなみ。(千藤)
- かくながら色もかはらで桃の花百代も千代もよしもがな。(宣長)
- ものいはね花とし知れど木のもとな心ありげにひとごとひける。(春海)
- くらぶ山したる道は三千年にさくなる桃の花にぞありける。(匡房)

●誰か又みてしのぶらんやまがつのそのふの桃のはなのよめな。(俊賴)

●はこつむ三月の月になりぬればひらけぬらしなわがやどの桃。(好忠)

●あまの川さし邊の桃や咲きぬらんそらさく花のいろにふひぬる。(公朝)

●桃の木へ雀吐き出す鬼瓦。(鬼貫)

●煩へば餅こそ喰はね桃のはな。(芭蕉)

●酒によしことぶきによし桃の花。(杉風)

●瑠璃琥珀玉に香はなし桃の花。(野坡)

●喰うて寝て牛にならばや桃の花。(群村)

●餅くはね旅人はなし桃の花。(支考)

●色深し今年より咲く桃の花。(青蘿)

●家あるまで桃の中道ふみ入りぬ。(白雄)

●山里や桃にかけたる鹽肴。(葵太)

●夕鴉桃に照られて居たりけり。(升六)

●桃の奥桃ある雲のうつりかな。(蘭東)

●まつほどの遠いは花のかざり離十二ひとへや七重八重桃。(橘洲)

●物いはねこそとり得なれものゝ花天も十分酔はつくせど。(樂々庵)

●算盤の位ちがうて三千年になるてふ桃の三年に咲く。(葵庭)

●きんげんは耳より枝にさかふとて真薬口

- に出がもゝの花。(苦高)
- 願はくは三千年を経て春死なん玉母が桃の花のもとにて。(光)
- 桃の花こればと人も手打蔭夢うどんげより珍しき哉。(東作)
- 西王母東方さくに油断すなみな見にきた桃の花時。(巴扇堂)
- もよよ〜と數へみん野にみちとせの花の盛を。(里住)
- 牛よりも先はなまばや見ぬ人に桃の林はらう盛ぞと。(實吉)
- 春風の吹き出すをみてさかりにはにが笑するにがもゝの花。(乳蕨)
- 桃の木の下で三人五升のみ。(川柳)
- 薪ほど乳母が里から桃の花。(同)
- 桃の御所鼠に姐妃ほどさきき。(同)
- もゝの木の下で三人智恵を出し。(同)
- 桃色になつて車をやり過し。(同)
- 桃の花下女が迎ひの馬につけ。(同)
- 禿さへ桃色程の虚をつき。(同)
- 丸まげになるてふ桃の里はなれ。(同)
- 蛤の口あく皿へ桃ちりて。(同)
- 桃園に手織筵を敷きならべ。(同)
- 馬印手なり桃でいゝ理風。(同)

●鬼が島子の泣く時に桃を見せ。(同)

●三千年に、なるてふ桃の花のかは、閉くや雲の玉の井に、玉の管さす月かげの、玉しく宮の舞のそで。(俗語)

●山を通れば山桃はしや、身をもなげかけたらば落ちよ。扱もつれなの山桃よ。(同)

●桃栗三年柿八年。(俚語)

●晋太元中、武陵人捕魚爲業、緣溪行。忘路之遠近、忽逢桃花林。夾岸數百步、中無雜樹、芳草鮮美、落英繽紛。漁人甚異之、復前行欲窮其林、林盡水源、便得一山、山有小口、窈窕若有光、便捨船從口入。初極狹、纔通人。復行數十步、豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然、有良田美池桑竹之屬、阡陌交通、雞犬相聞。其中往來種作、男女衣著、悉如外人、黃髮垂髫、並怡然自樂。見漁人、乃大驚、問所從來。具答之。便要還家、設酒殺雞作食。村中聞有此人、咸來問訊。自云先世避秦時亂、率妻子邑人、來此絕境、不復出焉。遂與外人間隔。問今是何世。乃不知有漢、無論魏晉。此人一々爲具言所聞、皆歎惋。餘人各復延至其家、

皆出酒食、停數日辭去。此中人語云、不足爲外人道也。既出、得其船、便扶向路、處處誌之、及郡下、詣太守說如此。太守即遣人隨其往、尋向所誌、遂迷不復得路。南陽劉子驥、高尚士也、聞之欣然往。未果尋病終、後遂無問津者。(陶淵明)

●露井桃開照四隣、數枝濃豔雨餘新。嬌紅媚口花々笑、深綠含烟葉々勻。道士移爲仙觀植、漁翁尋到武陵春。從今結實瑤池上、分與金門待詔人。(鳩巢)

●尋得桃源好避秦、風光又見一年春。花飛莫道隨流水、怕有漁耶來問津。(樹枏得)

●翠微深處幾人家、風颺輕塵兩壓沙。寒勒野桃開較晚、向陽纔有兩三花。(劉鐸)

●逕自一牛鳴處通、滿園爛見晚霞紅。覓來蕪麥休除去、儘傍桃花同動風。(竹外)

●晚日暈々逗水明、春風冉冉鏡中行。叩船高詠調仙句、夾岸桃花錦浪生。(星巖)

●夕陽槐影上巖鉤、一枕清風夢昔遊。夢

見錢塘春去處、碧桃花謝水西流。(范成大)

●夜雨偷濕、曾波之眼新嬌。曉風緩吹、不言之唇先咲。(紀綱言)

●桃之天天。其葉萋々。之子于歸。宜其家人。(詩經)

●烟霞遠近應同月、桃李淺深似動盃。(晉公)

「もり」森

●森林。森々。森茂。蕭森。陰森。凜森。蒼蔚。繁茂。

一むらの森。杜の下道。杜の下草。杜のくちば。杜の木かげ。

●北のひんがしは涼しげなる泉ありて、夏のかげによれり。御前近き前栽、くれ竹、した風涼しかるべく、木だかき森のやうなる木ども、木深く面白く、山里めきて、卵花垣根ことさらにしわたして、昔おほゆる花たちばな、撫子、薔薇、くたになどやうの、花のくさくさをうゑて、春秋の木草、その中にうちまぜたり。(紫式部)

●勝手のはこの近き年焼けるよし、いまはたゞいさかなるかりやにおはします

な、ながみてすきゆく。このやしのとなりに、袖振山とて、こだかき所にちひさき森のありしも、同じ折にやけたりとぞ。御影山といふも、このつとよきに、木しげき森なり。

雲の行くそなたやしるべ極かり、雨は降り来ぬ同じくば、ぬるとも花の陰ならば、いざや宿らん松かげの、ゆくへも見ゆる梢より、北野の森もちかづくや、右近の馬場に着きにけり。

人しれぬ袖の涙やおもふこといはでの森のつゆとおくらん。

林の風におくられて、潤澤のやどをすぎ、はるかに見わたしてゆけば、丘の邊には森あり野原には澤あり、翠にたつ木は枝をうへにさして生ひたれども、水にうつるかげは梢をさかさまにして、東に相違せり。

人の心は花染の、うつらひ易き頃も過ぎ、山陰の加茂の川波亂の、森の緑も夏木立、涼しき色は花なれや。

ひまさらるとりのねもしし。

これより他木さらになく、俗に唐松といふもの、風にたけをのぼさるが、梢は雪霜にや枯らされけん、低き森をなして、こゝかしこにあり。

春秋の、誅めも夏の庭の面、千代の隆有る松が枝に、争ひまじる深緑、茂る森木も常盤なる、御代をあらはす景色かな。

なにはなるいくたの森のいくたが神をかけたつゝ我は誓はん。

是なる森を人に尋ねて候へば、野の宮の舊跡とかや申し候ふ程に、遊縁ながら一見せばやと思ひ候ふ。われ此の森に來て見れば、黒木の鳥居小柴垣、昔にかはらぬ有様なり。こはそも何といひたる事やらん。よし／＼かゝる時節に参りあひて、拜み申すぞ有りがたき。伊勢の神垣隔てなく、法の教への道すぐに、こゝに尋ねて宮所、こゝもぬめぬ夕べかな。

隙耶のお山を馬手に見て、行く道筋も直ならぬ脇の濱邊や喚傳ひ、神戸も跡に湊川流るゝ水の淀ならば、爰も橋かけわたす、舟を守りの神垣や、森もしげみて置く露の、垂水の黒も早過ぎて、行けば程なく上野山、一の谷にぞ着きけるが、しのゝめ近き横雲の、たなびく空も青々と枝葉しげりし松かげにつつくり立つた御影石。

夕立のすは来る音よ森の上。

風渡る森の木陰や弓の音。

放し鳥うれしの森へとんで行き。

響錢も川意頗なり花の森。

呼出して信田の森へ消えて行き。

名川や誰が吹き起す森の鳩。

森の木を一本へらして御立身。

小社と橋と赤し森の中。

夕立が止んで一森時雨ふり。

梅樹なんぢやもんぢやが若葉して一つに茂る森の神垣。

しどり龍淵川端までと鈴ヶ森。

葺ねきてみれどもどちへ雪の日やしのだの森にくすのはしなし。

仰ぎ見よ思ひの森も神樂歌。

時分からあつたの杜にきてみればきねがすゝしり申す廣前。

葺ねてもなかくに、あはでの森の逢はでのみ、つれなき物は命にて、獨胸をやこがすらん。

信太なるしりの木かげをたどればや、こゝぞ時雨るゝ千枝の葉に。

四十雀老翁の森へ飛んで行き。

父ならぬは、その森に風立ちて横しぐれする雲のかへし字。

仰ぎ見よ思ひの森も神樂歌。

やノ部

〔や〕矢 羽箭。鳴鏑。金鏑。雪鏑。白羽。鐵絲。中的。穿楊。如雨。挿羽。

うつば矢。へや。もろ矢。のや。かぶら矢。そや。やごろ。やたばね。矢のね。矢あはせ。矢さけび。

御曹司をきき給ひ、西國の者共には皆手なみの程を見せたれども、東國の兵には今日始の軍なり。征矢をば度々射たりしが、鏑矢にて射ばやと思ひて、目九つ指したる鏑の、めはしらには角をたて、風返し厚くくらせて、金巻に朱差したるが、普通道の菴目ほどなるに、手先六寸しのぎを立て、前一寸にはみねにも刃をぞ附けたりける。鏑より上十五束ありけるを取りて番ひ、ぐさと引きて發たれば、御所中に響きて長鳴し、五六段許に控へたる、大庭平太が左の膝を、片手切にふつと射切り、馬の太腹かけず洞りければ、鏑は碎けて散りにけり。馬は屏風を倒す如くに、かばと倒るれば、主は前へぞあまされける。(保元物語)

かりにて落ちさせ給ふ所を、光明山の鳥居の前にて追ひつき奉り、雨のふる様に射奉りければ、何れが矢とは知らねども、矢一つ来りて、宮の左の御側腹に立ちければ、御馬より落ちさせ給ひて、御頭取られさせ給ひけり。
 ●主上皇も御深更にせきあへず、五月の規夜明けやらで、關の此方も開ければ、杉の木陰に駒を駐めて、暫くやすらはせ給ふ處に、いづくより射るとも知らぬ流矢、主上の左の御腹に立ちにけり。關田備中守急ぎ馬よりとび下りて、矢を抜きて御疵を吸ふに、流るゝ血雲の御膚を染めて、見違はするに目もあてられず。奈くも萬葉の主、卑しき匹夫の矢前に傷けられて、神龍忽に釣者の綱にかゝれること、あさましかりし世中なり。
 ●唐土の事にやありけん、母を惡虎にとられ、其敵をとらんとて、百日虎伏す野邊に出で、われらふ。ある夕暮に、尾上の松の木陰に、虎に似たる大石のありしを敵虎と思ひつがへる矢なれば、よつびいて放つ。此矢すなはち巖に立ち、たちまち血流にけるとなり。是も孝の心深きにより、堅き石にも

矢の立つと申し候へば、只思召し御立ち候へ。
 ●あれを見よ不思議やな、味方の軍兵の旗の上に、千手觀音の、光を放つて虚空に飛行し、千の御手ごとに、大悲の弓には智慧の矢をはめて、一度はなせば千の矢先、雨般とふりかゝつて、鬼神の上に亂れおつれば、ことごとく矢先にかゝつて、鬼神は殘らず討たれにけり。ありがたし〜や。
 ●雨やあられと飛びくる矢さき、あがる矢にはかいくより、さがる矢には飛び上り、向ふて来る矢は小大刀をもつて、切つては落し受けては拂ひ、はらり〜と切り拂ひし、弓の四方の四天王、まげいしゆらが放つ矢を、一度切つて大海に、拂ひ落すが如くに、面を向くる敵もなし。かゝるゆゑしき武士の、運運き弓も矢も折れて、修羅の奴となり給ふ。
 ●空秘矢もへやもおとらじ天のごと鳴かぶら〜そ世にきこえけれ。
 ●おいねれば野矢にさすてふつのかぶら〜うん〜しくぞはやなりにける。
 ●きの國のむかしゆみなのてにもたるなる

やならずわが思ふこと。
 ●人心たのまれがたきつねやはたゞそのまゝにまだおとせぬ。
 ●いまのよや馬の心もあらはれてはなつやすぢのちがはざるらん。
 ●ますらのともやたばさみ立むかひいるまとかたは見るにさやけし。
 ●下野やなす野にしげきしのをとりて東男の子は矢にぞはぐなる。
 ●益真夫がとりおへる鞍にもれる矢のかすも昔の定とはなし。
 ●あづき弓いかにたのまんはなつ矢のとはざかりゆく人のちぎりは。
 ●あづき弓まをはるけみはなつ矢のおよばの中し心やはゆく。
 ●歸る雁蝦夷の矢先にまたるゝな。
 ●三文せぬ矢を雁に案山干かな。
 ●さす敵に矢をとり落す寒さ哉。
 ●那須七騎弓矢に遊ぶ裕哉。
 ●清水へ近き御堂の矢敷かな。
 ●鴨鳴くや弓矢を捨て、十餘年。
 ●矢を負うて鳥流れけり秋の水。
 ●矢の下に母の乳をのむ鹿の子哉。
 ●吹矢ふく鳥霞つたり野路の末。

●ますら雄の梅が香袖に射る矢哉。
 ●成と見し石だにあるを投ぐる矢のおもふ嶽にはたゝわびしき。
 ●よもぎ矢のやちよふまよせよ其弓のよのなかばを取り給ふ君。
 ●的におてし後こそ花の心なれこれや歸れる雁またの征矢。
 ●矢にむげど魂あるが如大空を行く音さへも凄き驚が羽。
 ●殿造りする弓にはさきさきのかつばの征矢もつがふ棟上。
 ●春といひもすゑ十二つき弓をいる年の矢のはじめなりけり。
 ●御狩場の風の射る矢も岩窟の母衣毛にうけてつかれざりけり。
 ●四方山のことばつらば梓弓ひきしほりてぞ矢ははなつべき。
 ●弓張の月に夜鷹のかげみせていちかりまたな一矢まわらす。
 ●人は武士の花とみよしの大矢敷たつる幟も一日千本。
 ●ふせぎ矢は乳母が合點で仕り。
 ●棟梁の矢たねがつきて人はらり。
 ●小便の矢おもてに立つ供女中。

●内陳にゐるで初穂のそれ矢が来。
 ●芝居へややりやしたと母矢とりなり。
 ●きたなし返せと弓張つて矢のつかひ。
 ●人魂の頓死と見えて矢のごとし。
 ●くわんおんの千の矢先に五百うそ。
 ●千の矢に五百つばう鈴鹿山。
 ●流矢の来るは大工の家根ばかり。
 ●身のうきに、人のつらさの猶そひて、忘れもやらぬ我思、せめてしばしはとまれかし。梓の弓にたつ征矢の、それまであらはれきたるぞや。あゝなつかしや今とて、忍車の我姿、踊りくるひり有様は、あはれとも又あまさましや。
 ●とはれて今ははづかしの、もりて浮名の手束弓、さいた白羽の矢はだてすがた、人のめにつくいたづらがみの、なんぼいはれし中なれど、いまは秋田の落し水。
 ●一條の矢は折るべし十條の矢は折り難し。
 ●矢も船もたます。
 ●軍を見て矢をはぐ。

●かへし矢恐るべし。
 ●剛者に矢たす。
 ●二の矢をつがれぬ。
 ●孤矢威天下。在道不在器。君看委山基。執藝遂死藝。空山埋大骨。古塚鶴真馬。荒哉三千年。何堪不平地。射者皆以射。傷人得天恩。喜是楚忠臣。強子有窮罪。四憐古時人。殺伐少奇計。大車走且頭。朴拙累兵氣。戈矛競馳逐。叫跳若遊戯。一鐵偶通神。陸夸戰場利。何如後人巧。額鈴直焚棄。爽朗用火攻。一戰萬人斃。
 ●原頭火燒靜兀々。野雉畏鷹出復沒。將軍欲以巧伏人。盤馬彎弓惜不發。地形漸窄觀者多。雉鷲弓滿勁箭加。衝人決起百餘尺。紅翎白鐵隨傾斜。將軍仰笑軍吏賀。五色離披馬前墜。
 ●淇衛箭鏃飾以金銀錫。雖有薄縞之愴然。猶不能穿也。若假之筋角之力。弓弩之勢。則貫兕甲。而經革盾矣。
 ●一箭曾期定八洲。豈圖失路老荒陬。剽將當日穿楊枝。戈獲琉球葉大州。
 ●送煩射項羽。弓發矢欲到。羽怒目叱矢。矢乃墮地。項亦恐死。

〔やしろ〕社

(神の部参照)

社殿。社格。神社。宗社。鎮守。拜殿。華表。朱門。樓門。森殿。ひろまへ。みしめひく。宮ゐ。いがき。みづがき。あけの玉がき。天のみはしら。くにつ社。かうくし。

●くれゆく野末に、いと木ぐらう見えたる一むらは、神のみやしるにやと思ふに、木の間にほのめく火のひかり、しめ引きはへたるみづがきのさまなど、たどくしきものから、いとかうくしく見えわたるに、あせの細道たどり行きて、とりぬのもとにいたれば、おくのかたより、年おいたる翁のこしかりたりたるが、とうろ引き出て来てたるは、御前の事どもものせしなるべし。近くあゆみよりて、いかなる神におはしますにかとへば、八幡のみやになんと答ふ。又神つかさの名をとふに、しかんくと答ふるは、はやうきしれる人なりけり。(廣足)

●木曾は埴生に陣取りて、四方をきつと見選せば、夏山の峰の緑の木の間に、朱の玉垣ほの見えて、片そぎづくりの社あり。前には鳥居ぞたちたりける。木曾殿國の案内者をめして、おれをば何處と申すぞ、いかなる神を崇め奉りたるぞと宣へば、あれこそ八幡にてわたらせ給ひ候へ。所もやがて、八幡の御領にて候ふと申す。(平家物語)

●伏見街道稻荷の社。此頃造祭成とて、色々飾る作り物、参詣見物群集して、茶店の端香煮賣時、ぶらつき足の大紋日、往來の足も絶間なし。(淨瑠璃、菅原前操) ●清き御國の名の初め、大和の國に鎮座有る。飛鳥の社と聞えしは、いと妙なる靈現の、年月もふる鈴の音に、福宜が鼓のしんくくと、神さび渡るぞ殊勝なる。(淨瑠璃、三輪貴)

●いく代へおいのるしるしもいちはやき國つ社にたつる神杉。(眞淵) ●よとよもに色はかはらじ東なる國つ社にいはふ松がえ。(千蔭) ●葉がへせぬかへの社に幣まつりときはに君が代を祈る哉。(同) ●神まつる黒木の殿のかりそめを松のひと木につくりける哉。(秋成) ●里ちかき野中に立てる神社木深かられどしげりあひにけり。(同) ●涼風の舞き森の宮居かな。(櫻真) ●拍手に魚のよりけり川社。(白尼) ●初午や女もすなる梅百社。(榮太) ●作雨や余さしつれし瀆社。(白雄) ●加茂へ来て持火の沙汰も春の月。(乙二) ●うぐひすの人になれたる宮居哉。(月台) ●小社と椿と赤し森の中。(梅堂) ●みさか木もろがき葉茂れ御還宮。(道彦) ●野社を積かくしたる刈穂かな。(山川) ●蜂の巢にこゝ源八の宮居哉。(几童) ●雨折々ふるの社の静けさにはこりも立たぬ御代ぞめでたき。(糸丸) ●何事のおはしますかは白木にてつくりかざらぬ宮ぞ尊き。(萬象)

●神木の松は大くばしらにて鼠の宮にちとせふるかげ。(一九) ●廣前を恐れみおそるこゝろとや松もふくりなほにつみけり。(道頼) ●宮つこの目にもろくの不浄なく呑むも六根しやうんくの酒。(洞住) ●参詣の人しげと弓矢神さればちん座もつるが岡也。(安成) ●うときにも智恵をかしまの要石神にめけめのなくて尊き。(立川) ●住吉は唯一とさくかみながらなとまんまろくそりし木のはし。(湖鯉鮒) ●日あたりの吉田の宮は夜のみか晝もこりの多き拜殿。(元好) ●國々の神のかんじやうしてみればしめて三千よし田の社。(石季) ●大やしる只の午にはひとりあて。(川柳)

●鉦の手にゆけば寶珠の御社。(同) ●よそにうき名や立田山、三輪の山路をもすその糸の、いとと故郷かすがの、社にしばし此手をば、合せ鏡の底さよく。(俗語) ●御伊勢さまほど大社はないが、なげに宮川橋がない。(同) ●王爲三群姓立社曰大社、王自爲立社曰三社、諸侯爲百姓立社曰國社、諸侯自爲立社曰侯社、大夫以下成群立社曰置社。(禮記) ●九牧土田周制在。爾蕪茅社漢侯同。(羅隱) ●燕趙期洗滌。周秦保宗社。(杜甫) ●枯桑落古社。寒鳥歸孤城。(庾肩吾) ●岸社多奇木。山城足題樓。(庾信) ●用命貧於祖。不用命戮於社。(書經)

〔やど〕宿

宿驛。宿舎。宿泊。旅宿。止宿。淹留。客夢。客思。郷心。幽房。燈下。峠の宿。松の宿。かりの宿。花

の宿。なか宿。かりねの宿。よもぎが宿。とはれぬ宿。むぐらの宿。

●過ぎぬる長月二十日あまりのころ、江口といふ所をすぎ侍りしに、家は南北の川にさしはさまみ、心は旅人の往來の舟をおもふ、遊女のありさま、いとあはれにそはかなきものかなと、見たりし程に、冬をまぢえぬむら時雨の、さしくらし侍りしかば、賤がふせやに立より、晴れ間まつまの宿をかり侍りしに、あるじの遊女、ゆるす気色の見え侍らざりしかば何となく、

世の中をいとふまでこそかたからめかりの宿ををしむ君かな、とよみてはんべりしかば、あるじの遊女うちわらひて、

世をいとふ人とし聞けばかりのやどに心とむなと思ふばかりぞ。と返して、いそぎ内にいれ侍りき、唯時のほどのしほしの宿とせんとこそ思ひ侍りしに、此歌のおもしろきに一夜のふしどし侍りき。このあるじの遊女とは四そぢあまりにもやなり侍らん。みめこととがらさしあて

にやさしく侍りき。終夜なにとなき事どもかたりし中に、此遊女のいふやう、いとけなかりしより、かゝる遊女となり侍りて、年ころそのふるまひをし侍れども、いとほいなくおぼえて侍り、女は殊に罪のふかきとうけたまはるに、このふるまひをさへし侍る事、實に前の世の宿習のほど思ひしられ侍りし。うたてしくおぼえ侍りしか。此二三年は、此心いとふかくなり侍りしうへ、年もたけ侍りぬれば、ふつにそのわざをもし侍らぬなり。同じ野守の鏡なれども、夕は物のかなしくて、そよるになみだにくらされて侍り。此のかりそめのうき世には、いつまでかあらんずらんと、あぢきなく覺ゆ。あかつきには心のすみく、わかれしたふ鳥の音など、實にあはれに侍り。しかあれば夕には此夜過ぎなば、いかにもならんと思ひ、曉には今夜あけなば、さまなかへて思ひとまらんとのみ思ひ侍れども、年をへし思ひなれに世の中とて、雲山の鳥の心ちして、今までつれなくやみぬるかなしさとてしやくりもあへずなくめり。此事きくにあはれに有りがたく覺えて、墨染の袖しぼりかねて侍りき。夜あ

け侍りしかば、名残はおほく侍れども、再會をちぎりて別れ侍りぬ。扱かへる道すがら賢く覺えて、幾度かなみだをもおとしけん。今更心うごかして、草木を見るにつけても、かきくらさるゝ心地し侍り。(同行) ●肥前國大村の御城下を、かなたこなたと見物し終り、それより小船をかり、海に浮んで長江といふ所に渡りぬる船の内より、はや夜に入りぬれば、案内も知らぬ旅の空に、夜に入りて宿を求めんもおぼつかなしといへば、船頭のしるべの家ありとて、川の岸へ送り入れぬ。いと賢しくいぶせきふせ屋なりしかども、一夜の宿り、あるじの妻心よくもてなすに嬉しくて、手洗ひ、足そよぎなどして打くつろぎ、夕の食なども取りしたためて、やすらひたるに、其家南おもてにして、しかも大なる川を前に受け、海づらさへ遠く打のぞめば、風景のおもしろきに、六月二十日頃の月、海上にさし出で、さゝ波のきら／＼しきは、こがねをちらすがごとく、濱風また涼しくて眼なき興に入り居たるに。(南聲) ●ほどなく暮れて、その邊の浦近き里にと

とまりぬ。浦人の所爲にや、隣よりくゆりかゝる烟いとむづかしきにほひなれば、夜の宿なまぐさしと、いひける人の詞も思ひ出でらる。よもすがら風いとあれて、涙たゞ枕のうへに立ちさわぐ。 ならばすに他所にきこし清見海あら いそなみのかゝるねざめは。(阿佛尼)

●げふ足柄山をこめて關の下の宿にとまるべき日暮に、鳥むらがりとんで、林頭に驚ねぐらをあらそへば、山の此方竹の下といふ所にとまる。四方は高山にて一川谷に流れ、嵐落ちて枕をあらふ。聞けばこれ松の音箱さんて袖にあり。はらへばたゞ月のひかり映覚のおもひにたへず。ひとりおきぬて残の夜をあかす。(光行)

●如何に尉殿、はや日の暮れて候へば、一夜の宿を御かし候へ、うたてやな、此花の陰ほどの御宿の候ふべきか、實に／＼是は花の宿なれどもさりながら、誰を主と定むべき。行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならましと、詠めし人は此苦の下、痛はしや我等かやうなる海人だにも、常は立ち寄り吊らひ申すに、御僧達はなど逆縁

ながら吊らひ給はぬ、おろかにまします人々かな。(謡曲、忠度)

●イヤ／＼不自由は仕つけておます。姫御があのかげに、まなつこらしういはいしやるので、どうやら愛に根が生へた。大事なくばいつそ泊めて貰はうかいと、目の輪抜けし商人も、上手な娘のしよてなしに、ころりとなればお枕と、油氣のない眞身の馳走、是も一樹の笠宿り、尋ねる軒の目印あてに内に入り、旦那是にござりますか。サおたぢなされませんか。ホ安兵衛が早かつた。そなたは其荷物持つて、吉原の鍵屋で宿を取ります。日和が知れぬ早う行きや。雨具の用意は吉原の鍵屋をさして急ぎ行く。(淨瑠璃、伊賀越)

●百姓共は口々に、憚ながら殿様を、暫時かくまひ奉り、むぐらの宿のむさくとし、ばや／＼とした蒲むしる、御膝の痛うないやうに、二疊重ねて敷き詰めて、お錦小女郎に蚊を逐はせ、御脊中擦らせ其上は、御忍次第にさすらせて、久作六介八がとよ、太郎八次郎松引連れて、井田の鱒や田の鰻、池の鯉鮒山川の、鮎は勿論つるべ鮒、たてに山椒辛き世も、昔にかへる嬉しさと、悦

び勇み立ちてゆく。(淨瑠璃、忠臣骨紙刀)

●しなが鳥のな野をくれば有間山夕霧たちぬ宿はなくして。(萬葉) ●草枕ゆふ風寒くなりけり衣うつなる宿やからまし。(貫之) ●ひまもなく物思ふときの旅やどりのいかなるまにか月のもるらん。(高遠) ●とまるべき宿をば月にあくがれてあすの道ゆく夜半の旅人。(爲兼) ●うき身をば我心さへふりすてよ山のあなたに宿とむなり。(頼廣) ●煙なす峯の炭やきやどりかせ夕日のおく、にましらなくなり。(諸平) ●宿とへば木柴をりさす熊野人あすはの神のみちやつたへし。(同)

●宿かさで歸せるものをみやびの隣しめつとなど頼みけん。(嵯海) ●家のうちのせまきいぶせきいとほれど宿かしかぬる夷の山里。(言道) ●朝とくと思ひしやどを露のななくねにだしに出でがてにする。(秋成) ●宿貸して名を名のらす時雨哉。(芭蕉) ●嵐雪に蒲團着せたり雪の宿。(蕨村) ●鳥どもに宿かし鳥も時雨れ哉。(乙二)

●宿のない乞食、走る時雨哉。(米山)
 ●宿かさね村出離れし寒き哉。(瑞馬)
 ●年とるは大名とても旅宿哉。(一茶)
 ●綱を切る鈍きはしつや桃の宿。(几童)
 ●冬かれぬ宿や常盤の背燈。(也有)
 ●鉢の木やゆどのに入れし雪の宿。(許六)
 ●仕着せもの背若揃うて春の宿。(杉風)
 ●おとづれてくる秋風のおちつきは浅茅生の宿よもぎふの畑。(則季)
 ●行きくれば宿かし給へ是非ともになさけなかけて旅の衣手。(獨影)
 ●梅ちりて出代り頃の鶯の宿はと問はよいかと答へん。(古渡)
 ●細かにもさざむばかりて葉たばこのしめり程よき春雨の宿。(音成)
 ●匿く露の尻もすわらぬ葉葉は夕風ごとの月の宿替。(雪丸)
 ●かりねせし宿はあしびの畑にて何かなにほの一ふししなし。(久敬)
 ●五條には夕顔らしい宿もなし。(川柳)
 ●楽代に一つひつばぐ他人宿。(同)
 ●若い衆へはなをおかせる宿をとり。(同)
 ●詮義してみれば玉藻は無宿なり。(同)

●時に判禮一分引他人宿。(同)
 ●連れ同士くわくしつになる宿をとり。(同)
 ●投入のひからびてある間の宿。(同)
 ●さちん宿とこやみの秋とはやなりぬ。(同)
 ●宿がいよこのよければ、宿がよければ名もたぬ、佐渡といよこの越後は、佐渡と越後は筋向ひ。(俗語)
 ●かりなる宿に、心とめずは浮世もあらじ、別路も嵐ふく、花よ江葉よ、月雪のふる事も、あらしなやかりの浮世に。(同)
 ●朝咲いて、夜半に萎れるあまがほさへも、露に一夜の宿をかす。(同)
 ●高野ひじりに宿かすな。(俚諺)
 ●宿屋の鳴に狐の魅けたやう。(同)
 ●道傍草屋兩三家。見客拙、麻旋煎茶、漸近中原語音好。不知淮水是天涯。(路德章)
 ●浙々寒流漲、淡沙。月明空活偏、蘆花。行人偶宿孤村下。永夜聞、砧一兩家。(王真白)

●黄昏留宿在茅宇。天上明河淡幾星。穿竹過、曉聲滴瀝。石泉一夜枕邊聽。(高瑗)
 ●曉覺茅簷片月低。依稀鄉國夢中迷。世間何物催人老。半是雞聲半馬蹄。(王九齡)
 ●破窓燈燼雨淒々。誰道家山夢不迷。客枕得、眠能幾許。三更散拆五更眠。(星塵)

【やなぎ】柳
 柳條。柳色。綠絲。眉葉。翠色。絲陰。萬縷。千條。依依。裊々。隋堤。彭澤。あをやぎ。ふし柳。しだりを柳。手染の糸。柳のけぶり。みどりのかげ。糸のみどり。枝の朝風。風になびく。はいりの柳。
 ●柳はひろき庭のほとりなどに、うゑわたしたるはさらなり。門のあたり生ひたてるが、ほのかにひらけたるまゆを、行手に見わたしたる、いみじうなつかしく、すむ人さへゆかしくおぼゆる。むかしは都の大路のたてぬきに、いとおほくうゑられたりとか。げにさくらにこまざたらん春の錦は、またしくもあるまじうこそ。六田の

淀などいふ所は、うたによみなれて、名にさくたにもいとをかし。もろこしの西湖とかいへるところを、繪にかきたるも、此木によりてこそ筆のゆくへも、おもしろくは見ゆれ。龍馬樂に青柳が花とうたへるは、いづれのやなぎにも咲き出づれど、もろこしにて柳絮といへるは、此國にはいとまれしにこそはありけれ。のどかなる朝風に、これが打ちるけしきの、雪のやうにていとをかしきを、うたによめるが見えぬこそくちをしけれ。(廣足)
 ●ささらざばかり、しめやかに口をふる雨には、花の蜜は更なり。なべて木のめのはり渡る中に、柳なん淺緑のぬれ色、いといとつくしくことなりける。細き枝のげに糸のやうなるが、打塵きて、白玉と見ゆる露を、いくらともつらぬきとめたるは、又たぐひあるべくもおぼえず。神代に、おと柳機ゆうながしけん、玉のみすまるも、かうめでたくはあらざらんかし。(高尙)
 ●遙々と霞み渡れる空に、散る櫻あれば、今開けそむるなどいゝ見わたさるゝに、河ぞひ柳の起き伏しなびく水影など、恐ならずをかしきを、見ならひ玉はぬ人は、

いと珍らしみて、見捨てがたしとおぼす。(紫式部)
 ●三月三日うら／＼とのどかに照りたる、桃の花の今咲きはじむる、柳などいとをかしきこそ更なれ。それもまだまゆにこもりたるこそなかしけれ。ひろりたるはにくし。(清少納言)
 ●又かたはらの岸邊には、青柳の絲くりかへして、春風になびくさま、妾がおもひ断絶のなげきにはあらねど、旅の思をさそひて、断絶の情をもよほすも、おはれふかし。(樂翁)
 ●そのかみ洛陽や、清水寺のいにしへ、五色に見えし瀧涙を、翠ねのほりし水上に、金色の光ます、朽木の柳忽に、楊柳觀音とあらはれ、今に絶えせぬあともめて、利生あらたなる、歩みをはこぶ靈地なり。されば都の花盛、大宮人の御遊にも、蹴鞠の庭の面、四本の木陰枝たれて、暮にかすある香の音、細根をこまませて、錦をかざる諸人の、花やかなるや小簾のひま、洩りくる風の匂より、手飼の虎の引綱も、ながき思ひに樹の葉の、其和木の及びなき、戀路もよしなしや。是は老いたる柳色の、狩衣も風

折も、風にたゞよふ足もとの、よわきもしや老木の柳、氣力なうしてよわ／＼と、立ち舞ふも夢人を、現とみるぞはかなき。(謠曲・遊行柳)
 ●柳の曲も舞の菩薩の、舞の袂をかへす／＼も、上人の御法を受け、よるこそ報謝の舞も、是までなりと名残の涙の、玉にもぬける春の柳の、申さんとゆふつげの鳥もなき、別れの曲には柳條をわがぬ、手折るは青柳の、姿もたなやかに、むすぶは老木の、枝もすくなく、今年ばかりの風やいとはんと、たゞよふ足もとも、よる／＼よわ／＼と、倒れ臥柳、かりねの床の、草の枕のひと夜のちぎりも、他生の縁ある上人の御法、西吹く秋の風、ちはらひ、露も木の葉もちり／＼に、夢も木の葉もちり／＼に、なり果て、残る朽木となりけり。(同)
 ●我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生ひ育ち、かやうに夫婦となる事も、二方ならぬ因縁ぞや、今餘所事に言ひなした、唯は皆互の身の上、先の生にて誓ひたる、契を結ばん其爲に、假に女の姿と變じ、柳が木に待ち受けて、夫婦となりしも五とせの、

春や昔の春の比、季仲が感得に、塵の足緒のかかりし時、数多の武士に切り崩され、既に枯れなん其時に、お前が一矢の手柄故、塵を助けて葉柳の、枝に障もアレ〜、又しや爰にちりくる葉は、我を迎ひに来るか、思へばやる方せんかたも、なく〜賢ふ藤の節。 (浄瑠璃、祇園女御)

●春風のふりそめしより青柳の糸の緑ぞ色増りける。 (みつね)

●春風は吹きな亂りそわきも子がかづらにすてふ青柳の糸。 (基俊)

●浅みどり糸よりかけて白露を玉にもわけみ春の柳か。 (通昭)

●高せさす六田の淀の柳はらみどりも深くかすむ春哉。 (公經)

●青柳のいとへだてよみつる哉よりきてはなほまさるみどりな。 (盧度)

●人のすれば我ししてけるさし柳やがて垣ほとなりにける哉。 (魚貫)

●みしま江の玉江の柳風ふけば春さへあしのはなぞ散りける。 (契沖)

●春風のかすみふきとく河づらにはれぬ煙心柳なるらん。 (春海)

●うら〜と枝うちけぶる柳原花にさきた

●春の色哉、うめが枝をさなちほるかに送りすて〜柳にかへる春の川風。 (千隆)

●八九間空に雨ふる柳かな。 (芭蕉)

●風なりに春は雨ふる柳かな。 (其角)

●青柳や我大君の草か木か。 (蕪村)

●西風に東近江の柳かな。 (許六)

●青々と柳のかゝる築地哉。 (蝶夢)

●戀々として柳道のく舟路哉。 (几童)

●何事もなしと過ぎ行く柳哉。 (越人)

●わら青の柳の糸や水の流。 (鬼貫)

●目の前に杖つく鬘や柳かな。 (風雲)

●家根井に束ねられたる柳かな。 (也右)

●五六本よりしてしだる〜柳哉。 (去來)

●寶引の繩ならなくに春風をすつとこせいといなす青柳。 (栗槍)

●黒髪のみだれ柳も春の日は眉をつくりてまてもゆつたか。 (紫庭)

●ゆふべまで風にほぐれしかた糸のけさうら紐にむすぶ青柳。 (内子)

●よりさほる袖に袂にうちなびく柳は道のものにぞありける。 (金塔)

●夕ぐれにくるわの客の長羽織つけよ柳の糸のなだ巻。 (久計女)

●春風のふきよむるに青柳のまたも塵を障頭の枝。 (土蔵)

●ひた〜と寄せ来る浪の走り馬に鞭うつ岸の青柳の枝。 (和光道人)

●しなだれてかゝる柳のめつかひが春のこざつた印とぞ見る。 (玉浦)

●風の手に庭の飛石た〜けるは仙人めきし青柳の糸。 (乗安)

●青柳は拂子の如く枝垂れて風にあらそふ一物もなし。 (笛成)

●未長く目もはも若き青柳のいとよるとしに腰も曲らず。 (古喜)

●風しだいなびきやすげにみえながら見かけによらぬ青柳の糸。 (若人)

●橋詰の床の柳の亂髪雨がきても風がきてそる。 (めしり)

●やめてから出口の柳蛇つごとし。 (川柳)

●御つばねは柳さくらをこき遣ひ。 (同)

●出口のかんばん誰にもなびき候。 (同)

●けふ切りの屋根屋柳を解いて行き。 (同)

●仲の丁根にまけぬ柳ごし。 (同)

●幽篋も手持不沙汰な枯柳。 (同)

●五日目に柳のうごくおだやかさ。 (同)

●あはれなる柳猿澤田川。 (同)

●聖えらびする内柳白になり。 (同)

●つめりたい柳を包む緋のはかま。 (同)

●餅の丸薬を柳へ嫁はつけ。 (同)

●居眠の雨に柳は目を開き。 (同)

●さてもそなたのたすすがた、春の青柳糸さくら、こゝろがたよ〜と。 (俗談)

●なにをくよ〜川端柳、水の流を見て〜らす。 (同)

●柳に雪折なし。 (俚語)

●柳は緑花は紅。 (同)

●柳に戯れ。 (同)

●隋堤柳。歳久年深蘆衰朽。風飄飄兮雨蕭蕭。三株兩株汴河口。老枝病葉愁殺人。曾經大業年中春。大業年中楊天子。種柳成行夾流水。西自黄河。東至淮。綠陰一千三百里。大業末年春暮月。柳色如烟絮如雪。南幸江都。恣快遊。歷將此柳擊龍舟。紫雲郎將隨錦纜。香插御史直迷樓。海内財力此時竭。舟中歌笑何日休。上荒下困勢不久。宗社之危如覆碗。楊天子。自宵福祥長無窮。豈知皇子封鄴公。龍舟未過彭城關。義旗已入長安宮。蕭牆禍生人事變。晏駕不得歸秦中。土墳數尺何

●處舞。吳公臺下多悲風。二百年來汴河路。沙草和煙朝復暮。後王何以鑒前王。請看隋堤亡國樹。 (白居易)

●紅板紅橋青酒旗。館娃宮暖日斜時。可憐兩歇東風定。萬樹千條各自垂。 (同)

●敬樹新開翠影齊。倚風情態被春迷。依依故國樊川恨。半掩村橋半拂溪。 (杜牧)

●館娃宮外鄴地西。遠映征帆近拂堤。繫得王孫歸思切。不關春草綠萋萋。 (溫庭筠)

●枝々交影銷長門。嫩色曾留雨露恩。風聲不來春欲盡。空留鶯語到黃昏。 (段成式)

●江雨霏々江草齊。六朝如夢鳥空啼。無情最是垂楊柳。依舊煙籠十里堤。 (韋莊)

●可憐一樹一千條。盡日無人看舞腰。何似栽栽鴨河岸。古旗風颯木蘭橋。 (竹外)

●今年手自栽。問我何年去。他年我復來。搖落傷人思。 (蘇東坡)

●漸欲拂他騎馬客。未多遮得上樓人。 (白居易)

●雙學紅鏡扶桑日。春樹黃球柳柳風。 (田邊音)

●密宅迎晴庭月暗。陸池逐日本烟深。 (後中書王)

【やなぎ】山

●余幼より山水を好み、他邦の人にあへば、必名山大川を問ふに、皆各其國々の山川を自賛して、天下第一といふ。甚信じ難し。既に天下をめぐりて、公心を以て是を論ずるに、山の高きもの富士を第一とす。又餘論なし。其次は加賀の白山なるべし。其次は越中の立山、其次日向の霧島山、肥前の雲仙嶽、信濃の駒ヶ嶽、出羽の鳥海山、奥州の岩城山、岩鷲山也。是に次いで豊前の彦山、肥後の阿蘇山、同國久住山、豊後の姥ヶ嶽、薩摩の海門嶽、伊豫の高峯、美

渡の那那嶽、御嶽、近江の伊吹山、越後の妙高山、信濃の戸隠山、甲斐の地蔵嶽、常陸の筑波山、奥州の幸田山、御駒嶽等也。其餘は殊に論ずるに不足。伯耆の大山、上野の妙義山は余いまだ是を見ず。其高低を知らず。出羽の羽黒山のごとき、其名高けれど其山甚低し。都の鞍馬山程には及びがたし。湯殿山も飯山よりは低かるべくみゆ。其は佛神垂跡の地ゆゑに、参詣の者多きによりて、其名高き也。山の姿峨々として峻嶒のごとくなるは、越中立山の飯峯に勝れるものなし。立山は登る事十八里。彼國の人は富士よりも高しといふ。然れども越中に入りて初めて立山を望むに、甚高きを覺えず。數月見て漸々に高きを知る。是は連峯委差たるゆゑなり。最高く聳え、たがひに相争ふ程なる峯五つあり。飯峯も其一なり。其外にも峯々甚多く連り、波濤のごとく連る、皆立山なり。此ゆゑにたとへば都の北山を望むが如し。遠くより見るに何れを鞍馬山とも稱しがたきが如し。是を見ても人多能なるものは、反て其名を失ふと憤むべし。白山はたゞ一峯にて、根根も大に、殊に雲四時ありて、白玉を削れる

がごとく、見るより目覚むる心地す。又山の姿のよきは鳥海山、月山、岩城山、岩鷲山、彦山、海門嶽なり。皆甚富士に似て、一峯秀出畫けるが如し。又景色無双なるは薩摩の櫻島山也。若海の真中に只一つはなれて獨立し、最峻峻なるに、日光映すれば、山の色彩に見え、絶頂より白雲をむすが如く、烟霧にたちのぼる。たとへば骨盤の上に、香爐をおきたるが如し。大抵海内の名山是等に留るべし。其山内の奇絶は又別に書あり。今此所には仰ぎ望む所を論ずるのみ。
(南嶺)

●山は小倉山、三笠山、このくれ山、わすれ山、いりた山、鹿脊山、ひはの山、かたさり山こそ、誰に所置きけるかとをかしけれ。いつはた山、のちせの山、笠取山、比真の山、この山は我名洩すなど、帝のよませ給ひけんいとをかし。伊吹山、朝倉山こそ、よそに見るらんいとをかしき。石田山、大比禮山もをかし。手向山、三輪の山はいとをかし。音羽山、待かれ山、玉さか山、耳なし山、末の松山、葛城山、美濃の御山、梓山、位山、吉備の中山、嵐山、更科山、磯捨山、をしほ山、淺間山、かた

め山、歸山、妹背山。
(清少納言)

●此處は里遠き山ふところにして、雲近く峯は翠に、水暗かり。向上れば、奇壁刀して削れる如く、直下せば碧潭鑿もて穿るに似たり。目に視る佳景なきにあられど、物思ふ身は心もとまらず、颯々たる松風は追ひ来る鳥の聲かと疑ひ、啼々たる鳥語は、憂を慰む友としならず。とかくする程に、山路より山道に、今日もかきくらしつゝ、十七日の月の影山の端に昇る比、樹垣ふかく締造したる白屋の邊に來にけれ。(馬琴)

●此亭のむかふ所、立ちつゞく西の山々にして、高低の容淡濃の色、よく眼を悦ばしむ。されば山を愛するに品々あり。仁者の樂むといひけんは、理屈なればこゝに論ぜず。深く吉野の奥を尋ねて、身の隠れ家を求むる者は、偏に山の世に遠き寂寞を愛する者なり。笏を拄へ藤を挑けて、雪の朝雲の夕を憐むは、山の風景を愛する者にして、必しも巖壁が展に烟霞を攀ちて、山の寂寞を問ふにあらず。
(也有)

●あるじの云ふにたがはず、高山森々として、一鳥聲きかず。木の下闇茂りあひて、よる行くがごとし。雲端につちふる心地し

て、襟の中踏み分け、水をわたり、岩に臥て、肌につめたき汗を流して、最上の莊に出づ。
(芭蕉)

●たが爲めの、錦なればか秋霧の、佐保の山邊を立ちかくすらんと、詠めけるも此山の、妙なる秋のけしきなり。かやうに治まる四つの時、いく年々を送りけん。花の春、紅葉の秋の夕時雨、古きを守るためしまでも、あふぐや音によし、奈良の代々ぞ久しき。殊更此山は、春の日影もよそならで、慈悲萬行の神徳の、弘き誓ひの海山も、皆安全の國とかや。そも、蘆原の國つ神、代々に普き誓にも、御名はこゝに久堅の、天の兒根の其かみ、此秋津洲の主として、皇孫をいつき給ひしより、八島に治まる時の風、四海にたゞむ波の聲、萬歳をよばふ三笠山、御影もさすや竹川の、佐保の山邊の春の色、萬山ものどかなりけり。
(芭蕉)

●扱も我氣紫彦山に登り、七つの年天狗に、とられて行きし山々を、思ひやるこそ悲しけれ。まづ筑紫には彦の山、深き思ひを四王寺、隈岐には松山、降り積む雪の白嶺、さて伯耆には大山、丹後丹波の境な

る、鬼が城と聞きは、天狗よりもおそろしや。さて京近き山々、愛宕の山の太郎坊、平野の峰の次郎坊、名高き比叡の大嶽に、すこし心のすみしこそ、月の横川の流なれ。日頃はよそにのみ、見てや止みなんとながめ、に、葛城や高間の山、山上大峰釋迦の嶽、富士の高嶺にあがりつゝ、雲に起き臥す時もあり。
(詩曲、花月)

●東路とて東山、せめて其方のなつかしや。春前に雨あつて花の開くる事早し。秋後に霜なうして落葉遅し。山外に山有つて山盡きず。路中に道おはうして道きはまりなし。山青く山白くして雲來去す。
(詩曲、熊野)

●雲霧とたな引きし、摩耶が嶽とて津の國と、掃磨にまたがる高山あり。峰高うして雲に沖り、谷深うして奈落に通ず。苦滯かなる嶺道の巖は、鑿に削るが如く、常になれたる山殿し、足踏迷ふ嶮嶮なり。かゝる深山の懐に自然なる岩窟も、いつか住家となし初めて、住み馴らしたる岩壘、岩の屏風に道ひからむ、鳥の紅葉はさながらに、嵩きなしたる如くにて、しほらしく亦物法し。
(淨瑠璃、朝顔話)

●道遠き難足山の三つの峰、岬々たる岩根踏み分けて、帝釋天の窟まで、其間十由旬、常に參詣稀なれば、道は棘に閉ぢられて、諸木茂つて日影を隠し、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなく、麓の當原真葛原、所得させじ虎狼、槍に巢をくふ鷲鷹、人を威せば自然ら、人跡絶えて物わびし。
(淨瑠璃、釋迦如來)

●抑筑前の國天拜山は九州一の高山、廢峙つて鋭き嶽の如く、道めがつて羊の腸に似たり。峰には老松枝聲えて、朝一片の雲にむせび、谷には瀑川石流れて、夜孤林の月を碎く。空飛ぶ鳥木傳ふ猿の聲もなければ、まして樵夫柴人の行き通ふべき道もなく、平地を離るゝこと遠く、天に近き心地なれば、天拜山とは名附けたり。
(淨瑠璃、天神記)

●くれかゝる遠山すがたあはれなり雲のたぢなすまゝにのみして。
(爲兼)

●しら雲の八重たつ奥に入らねども心の山の身をかへす哉。
(自空)

●河あひの横のすそ山いして、そま人にかにすしかりらん。
(西行)

●朝日さす末野の山の峯つゞき空行く人

- 風ふく雲のはたてのゆきをうすみむらさきえわたる布引の山。(長明)
- 下野や神のしづめし二荒山ふたよびとだに御代はうごかじ。(眞淵)
- なにか世に積れる事のむなしからん塵ひちとて山となるもの。(春滿)
- はてしなく立かまなりて青海の波のすがたにつよく山々。(蘆庵)
- 神代よりあらそひたてる耳なしやうねびの山のいづれたかけん。(土滿)
- あしがらの神のみ坂をこえてしも猶ふじのねはくもなりけり。(千陸)
- 旅人のゆきと手向くるゆふの山たがこえそめて名にはおひけん。(春海)
- 名月や清間が岳も静なり。(許六)
- 稲妻のわけて落つるや山のうへ。(丈草)
- 爪先に入るや外山の雲の半。(野坡)
- 花ざかり山は日ごろ朝ぼらけ。(芭蕉)
- あの山もけふの曇の行方かな。(鬼貫)
- 重なるや雲のある山たよの山。(凡兆)
- 光り合ふふたつの山の茂かな。(去來)
- 初汐や山のうへには鳥が啼く。(静齋)
- としなへて又こゆべしと思ひきや御用な
- りけりまやの中山。(卯雲)
- たつぷりと春の日足の長勢足柄山のすそに餘りて。(眞影)
- 山々もみな白砂の丸結はどちへよめりてゆきのつもりか。(申也)
- ひとしきり風の手にひく薄紅葉々さへ此頃ふるふ山々。(好秋)
- みよし野はさくらも櫻歌人のことばの花も山をなす山。(花盛)
- 火打石きり出す影と見るまでに鞍馬の山へかよふ稲妻。(萩丸)
- 分け入りてなづむ高野の初登山かすもいはの四十八谷。(橋洲)
- 春秋に宮むさぶらひの山なればいつもはたちの心地こそすれ。(赤良)
- かまくらは海も近くて勝手向地合よろしき衣はりの山。(無撰)
- 手遊びの達磨も飯に飢えぬらんのはなれする片岡の山。(明輔)
- 鈴鹿山ひやうだくと初手はいひ。(川柳)
- 佛縁のうすむ時の坊主もち。(同)
- 大名の過去は野にふし山にふし。(同)
- 笠のひの針は山また山めぐり。(同)
- 吉野山十七文字でほめ足らず。(同)
- 引つ張ると隣の出来る花の山。(同)
- 錦着たやまは裸になる下地。(同)
- 辨慶は山で育つて川で果て。(同)
- 狩人の山を見る日はあぶれ也。(同)
- 山に色つけては風に聲があり。(同)
- 入込みへ山と川とのやくそくで。(同)
- 金札も大師につれて山めぐり。(同)
- 素見物たからの山に入りながら。(同)
- どふであはれぬ浮世なら、深山のおくの其の奥の、すつとの奥に住居して、人目おもはで物思ひたや。(俗語)
- 月もるともに時鳥、ないて入るまの山のは、見ればはやみじか夜もあけわたる。(同)
- 高い山には霞ががさる、わしはそなたにめにかがさる。(同)
- 山高きが故に貴からず、木有るを以て貴しとす。(俚諺)
- 枯木も山の賑ひ。(同)
- 坐して食へば山も空し。(同)
- 人跡繁ければ山も凹む。(同)
- 塵積りて山となる。(同)
- 鹿を追ふ獵師山を見ず。(同)
- 勝地本来無定主。大都山風愛山人。(賀蘭進)
- 執扇抛來背蕪露。羅帷卷却翠屏明。(後中書王)
- 卷箔吟銷永日。移牀坐對千峰。(李中)
- 戶外一峰秀。階前衆壑深。(孟浩然)
- 醉來臥空山。天地即衾枕。(李白)
- 卷簾惟白水。隱几亦青山。(馬戴)
- 萬壑青山兩展雲。(朱心池)
- 青山一半不知名。(顧星橋)
- 塵光高捲一山烟。(袁香亭)
- 一丘一壑自足。(王岱)
- 山峰染月寒。(簡文帝)
- 仁者樂山。(論語)

- 再左轉上舍利塔。爲井霞絕頂。大抵此山從斗母閣而望。則可盡山之前面。從紫玉臺而望。則可盡山之左面。從雪巖而望。則可盡山之右面。背而爲。惟此絕頂周遠遠眺。杳無窮極。而百千峰巒高下怪奇。簇擁並峙。蓋山水之巨觀也。隨下運北。渡虹橋。嶺長如虹。故名。登嶺觀折。至片鱗巖已倦而疲。僧爲炊食。山中諸巖多面。西。惟此巖南向。軒殿而高。爲此山之最勝者。予周行審視。覺前雪巖所見諸峰。至此又成異觀。蓋峰有定形。特人行高低遠近莫定。而峰形亦隨之而變。况朝暮煙山風變幻不一。而人之心目亦爲其所眩。不復能自作主而遊者。反以此而取快焉。此惟善遊山者能知之。去此又有朝陽陽出石室。狀如勝。以路險難行且將暮。遂返。至水簾巖。明季賀康年。曾翠家避。雜隱此。游覽烟壑猶存。再折一巖西向。時已薄暮。西方霞起。烟若五彩。光射巖內。林木閃爍。巖名晚秀。眞爲此巖高閣也。急下山。至海山門。俯首下視。神爲之戰。去鐘尙一二尺。側身得扶。鍊而下。似上易而下難者。蓋上可
- 再左轉上舍利塔。爲井霞絕頂。大抵此山從斗母閣而望。則可盡山之前面。從紫玉臺而望。則可盡山之左面。從雪巖而望。則可盡山之右面。背而爲。惟此絕頂周遠遠眺。杳無窮極。而百千峰巒高下怪奇。簇擁並峙。蓋山水之巨觀也。隨下運北。渡虹橋。嶺長如虹。故名。登嶺觀折。至片鱗巖已倦而疲。僧爲炊食。山中諸巖多面。西。惟此巖南向。軒殿而高。爲此山之最勝者。予周行審視。覺前雪巖所見諸峰。至此又成異觀。蓋峰有定形。特人行高低遠近莫定。而峰形亦隨之而變。况朝暮煙山風變幻不一。而人之心目亦爲其所眩。不復能自作主而遊者。反以此而取快焉。此惟善遊山者能知之。去此又有朝陽陽出石室。狀如勝。以路險難行且將暮。遂返。至水簾巖。明季賀康年。曾翠家避。雜隱此。游覽烟壑猶存。再折一巖西向。時已薄暮。西方霞起。烟若五彩。光射巖內。林木閃爍。巖名晚秀。眞爲此巖高閣也。急下山。至海山門。俯首下視。神爲之戰。去鐘尙一二尺。側身得扶。鍊而下。似上易而下難者。蓋上可
- 面壁故無懼。而下則不得不外望。俯而扶。鍊故也。蔡子曰。此路宜略闊寬以便遊履。予曰。不然。此山之奇。在嶮。非是則無以見其奇。且遊山者豈厭奇險耶。南至蔚巖。天忽大雨。同遊且驚且喜。凭欄看山中雨歇。雲氣忽從欄外擁入。一時對面不能見物。衣履欲濕。予亦幾飄々欲乘雲飛去矣。須臾忽霽。(袁崇舟)
- 一贊功盈尺。三峰意出群。望中疑在野。幽處欲生雲。慈竹伴陰覆。香爐曉勢分。維南將獻壽。佳氣日風風。(杜甫)
- 霜落荆門江樹空。布帆無恙掛秋風。此行不爲鱸魚膾。自愛名山入剡中。(李白)
- 山靈盤薄意難測。欲出巖巖誇與人。香倒碧香欄不住。峰々忽作亂紫城。(星巖)
- 山色無邊近。看山終日行。峰巒隨處改。行客不知名。(歐陽修)
- 天末蓮峰灣。踏禽遠樹間。暮雲凝不動。添出幾層山。(長齋)
- 茶殘香亦燼。客去午窓閑。甚局好爲枕。臥見雨後山。(佛山)
- 秋色遍臨蒼海上。泉聲遙落白雲中。
- 勝地本來無定主。大都山風愛山人。(賀蘭進)
- 執扇抛來背蕪露。羅帷卷却翠屏明。(後中書王)
- 卷箔吟銷永日。移牀坐對千峰。(李中)
- 戶外一峰秀。階前衆壑深。(孟浩然)
- 醉來臥空山。天地即衾枕。(李白)
- 卷簾惟白水。隱几亦青山。(馬戴)
- 萬壑青山兩展雲。(朱心池)
- 青山一半不知名。(顧星橋)
- 塵光高捲一山烟。(袁香亭)
- 一丘一壑自足。(王岱)
- 山峰染月寒。(簡文帝)
- 仁者樂山。(論語)

【やまごころ】山里

地僻。人稀。雲氣。水聲。石徑。柴門。溪流。白雲。幽靜。閑靜。柴のいほ。ちりの外。雲のときし。山かげのには。かくれが。世ばなる。苔の通路。人とはぬ。

或はつばなを抜き、いはなしを探る。またぬかごをもち、芹つむ。或はすその田井に至りて、落穂を拾ひてほぐみをつくる。もし口うらまかなれば、嶺に攀ぢ上りて、遙に故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なれば、心を慰むるさほりなし。あゆみ煩ひなく、志遠くいたる時は、これより峰つゞき炭山をこえ、笠取を過ぎて、岩間にもうて、石山をながむ。もしはまた栗津の原を分け、蟬丸翁が跡をとぶらひ、田上川をわたりに、猿丸大夫が墓をたづね、歸るさには、なりにつけつゝ、櫻をかり、紅葉をもとめ、巖を折り、木の實を拾ひて、且は佛に奉り且は家づとにす。もし夜静なれば、窓の月に古人を忍び、猿の聲に袖をうるほす。叢の聲は、遠く真木島の篝火にまがひ、曉の雨は、おのづから木のは吹く嵐に似たり。山鳥のほろ／＼となくを聞きて、父か母かと疑ひ、峰のかせぎの近く馴れたるにつけても、世にとほざかる程を知る。或は埋火をかきおこして、老の睡覚の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景氣、折につけてつくる

ことなし。いはんや深く思ひ、深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず。大方この所にすみ初めし時は、白地とおもひしかど、今までに五年をへたり。假の庵もやふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苦むせり。(長明)

●上野國甘樂郡荒茅村の龍村に、おとねといふ微賤の老女ありけり。年の齡は五十あまり、二三にもなりぬべし。原は武藏のものなりしを、故ありて去年の夏、この山里に世を避けしより、熟れぬ手技に傍姿、素樸片木の薪煮る、鎌倉遠きわび住居、かくて月日なる郷の、空なつかしき三芳野の、田面の雁はまだ來ねど、秋としなれば念がるゝ、冬を禦がんと洗衣、縫させとぞなく虫に、驚かされて今宵より、夜なべのうみそ暇なき、現世わたりの苦しきを、今思ひしる浮世の中に、老の技と頼みてし、二人の子共はいぬる比、主の供して戦場に、赴きしより死せりと、生けりともまだ音信聞えず。家にのこるは二人のよめのみ。兄が妻を曳手と名づけ、又弟婦を單節と呼べり。年は二十と十八との、松の操に常盤の竹の、子をし産ませて見まほしき、姉妹な

がらに玉匣、ふたとせ近く遠離れども、よに隔なきおによめの、まさらず劣らず姉に、朝夕つくす孝行の、徳は孤ならで隣へは、いと遠き山もとの、ひとつやなれば人しらす、親族もなく友もなく、住みえしまゝの別世界、ことふものは八重葎、軒端にかよふ松風と、絶えぬかけの音はずれど、女子世帯の水入らず、三人よすれば敷しと、よむてふ文字は我うへならで、せとの秋蟬なきくらしたる。七月六日のよひすきて、かへらぬ人をまつわびしき、門戸はまださゞりけり。(馬琴)

●五月ばかり山里にありく、いみじくながし。澤水もげにたゞいと青く見えわたるに、うへはつれなく草おひ茂りたるを、ながんとたゞまにゆけば、下はえならざりける水の、深うはあらねど、人のあゆむにつけて、とほしりあげたるいとながし。左右にある垣の枝などの、かゝりて車の屋かたに入るも、急きてとらへて折らんと思ふに、ふとはづれて、過ぎぬるも口惜し。蓬の車におしひしがれたるが、輪のまひたちたるに、おきあがりて近うかへたる香もいとながし。(清少納言)

●山里は物のさびしき事こそあれ、世の憂きよりは中々に、住みよかりける柴の扉都の方の音信は、間遠に結べるまじ垣や、憂きふし繁き竹柱、立居につけて物思へど、人日なきこそ安かりけれ。(謡曲、大原御幸)

●折々に、心なけれど訪ふ物は、暇が妻木の芹の音、梢の風聲の聲、これらの音ならでは、正木のかづら昔つゞら、来る人まれになりはて、草履淵が巻に、しげき思ひの行方とて、雨原蕨が扉とも、うるほふ袖の涙かな。(同)

●秋寒窓の内、軒の松風うちしぐれ、木の葉かきしく庭の面、門は葎やとちつらん、下樋の水音も、苔に開えて静なる、此山住ぞ淋しき。(謡曲、三輪)

●思はずも、花見がてらの道すがら、是まで來ぬる旅衣、今日露の聲なくば、まだ露消えぬ山里の、春ゆく事を知るべしや。(謡曲、鼓漉)

●古歌を名所の案内者、其所よこよと指先の、巡るそなたに朝日山、さすや小舟の棹ばかり、のぼれば晴るゝ川霧に、顯れ渡る山々も、まだ織り足らぬ錦ぞと、見えて紅葉の薄く濃く、秋さへ清き秋の水、わや

きにかゝる白浪は、たと桶の小島が崎、されば昔も桶の、小島は色も變らじを、此浮船ぞ行衛知れぬと、彼浮船の心の中、互の思ひ色深く、山吹のせに影とめて、差わけ行くや柴小舟、揺られ廻れる水車、岸にうづまく槇の島、洒す細布引はへて、見むる戸山とほの見ゆる、里のあげまき尼法師、田火は鐵に手を放し、柴ふるい人しみ祭え、生きた王様拜まんと、悦びどよむぞ賑はしき。弘敷殿も藤室も、常に目なれぬ山里に、川の流れの涼しさを、今日の御幸のけふならで、又見る事はたまさかの、短き秋の日暮しも、やよ長かれとめかれせず、一入興にぞ入り給ふ。(淨瑠璃、花山院部異)

●を鹿ふすしげみにはへる葛のはのうらまびしげに見ゆる山里。(能宣)

●山里は物のさびしきことこそあれ世のうきよりは住みよかりけり。(古今)

●山里は世のうきよもすみわびぬことの外なる嶺の風。(丹後)

●山里のいなばのかげに寐さめしてよぶかく鹿の聲をきく哉。(師忠)

●山里は松の聲のみきよなれて風ふかぬ日

はさびしかりけり。(蓮月)

●世中にうらやましきは山里のことなし草のいほりなりけり。(愚秋)

●山里はかけひにうくる谷水の心ほそくも年をこそふれ。(春海)

●大方はあるじはなぐて山里はとなりだのみ引たて戸かな。(言通)

●山里のあき木の柱あまよひにたつとはすれど細きけぶりや。(諸平)

●山里も世のうきふしはのがれしをよそめこひしき竹の下かけ。(廣名)

●山里は萬歳進しうめのはな。(芭蕉)

●水音も鈴さびけりな山里は。(嵐雲)

●小屏風に山里すゝし腹の上。(丈草)

●山里や井戸のはたなる梅の花。(鬼貫)

●山里の名もなつかしや侘うど。(其角)

●山里の蚊は晝中に喰ひけり。(去來)

●山里や馬渡に雉子の歩みよる。(白雄)

●山里やたらひの中に鳴く蛙。(關六)

●山里や桃にかけたる鬨音。(蓼太)

●山里や芽もわかぬ間に獨活を掘る。(蓼太)

●卯の花にいつも月夜のこゝちして降日知らずくらす山里。(得々)

●山里はいまだ朝茶も出来の間にけぶりふくめる軒の松がえ。(菅江)
 ●屏さへなき山里もあらしには二百十日のあてやあるらん。(時成)
 ●ともし灯はいつもあらしに吹きけしてさてくらしよき松の下隆。(菅江)
 ●山里のとしし油のへらす口すめば都といふもさなり。(明朝)
 ●三輪の山いとよりほそき燈火を一筋道の目あてにぞ行く。(原成)
 ●山里はあすの蕪におく霜のしめりかより一窓の燈灯。(水笠)
 ●葦子にも何つながれん山住はうき世をさるのほなしがひにて。(堅丸)
 ●山住も馬を鹿とはみざれども只狼をうしとおへる。(湖經餅)
 ●世のうはさみゆもさかぬいはれのもしらにまじる山のおく住。(占方)
 ●輪にたらぬ片山里の盆をどり。(川柳)
 ●山家々々とおしげにいやる、色のよい花山にさく。(俗語)
 ●身名幸自謝、籠裏、白首爲、農暮不、説。
 傾住山中一知、鹿性、數行、樹下、一、禽音、由、車、毎、許、一、借、青、峽、閑、同、道、士、翻、醉

後漸看松月上、滿村雞犬寂無喧。(順之)
 ●閑道白雲居、窺窺青蓮宇、岩泉萬丈流、樹石千年古、林臥對軒窓、山陰滿庭戶、方釋塵中事、從君幾闌杜。(陳子昂)
 ●竹雞茅屋逐溪斜、春入山村處處花、舞象太平還石象、孤烟起家是人家。(蘇軾)
 ●問、余何意栖碧山、笑而不答心自閑、桃花流水杳然去、別有天地非人間。(李白)
 ●展閣無泥竹葉輕、碎音拂滑夜難行、獨開石室松門裏、月照前山空水聲。(馬戴)
 ●山路日暮、滿耳者、樵歌牧笛之聲、湖戶鳥歸、遮眼者、竹烟松霧之色。(齊名)
 ●晴後青山臨、隔近、雨初白水入、門流。(長香)
 ●關、石卷壁生、枕上、唧、峰曉、月出、窓中、(直幹)

「やまとだましひ」 大和魂

●高き家の子として官位心に叶ひ、世の中さかりに参りならひぬれば、學問などに身を苦しめん事は、いと遠くなんおぼゆべかめる。たはぶれあそびを好みて、心のまよなる官爵にのぼりぬれば、時に従ふ世の人の、したには目まじろきをしつゝ道従し、けしき取りつゝまたがふ程は、おのづから人とおぼえて、やんごとなきやうなれど、時うつりさるべき人に立ちおかれて、世おとるふる末には、人に輕めおなづらるゝに、かゝり所なき事になん侍る。猶才をもととしてこそ、やまと魂の世に用ゐらるゝ方もつよう侍らめ。さしあたりでは、心もとなきやうに侍りしも、つひの世のおもしろなるべき心おきてならひなば、侍らずなりなん後も、うしろやすかるべきによりなん。(紫式部)
 ●その時猪平聲ふりたて、理なれどもよめ御達、事の始終を見かへらで、死なんと早るはいと淺き、女子心の迷なり。力二郎尺八等は、虚見つ大和魂の、人にすぐれしものならずば、死しての後も主を思ひ、親を慕ふて姿を見せんや。さりとしておのゝこの妻の命を早く断たんとて、いかでか獲をあらはすべき。これらのよしを思はずに、天を恨み、世を憤りて生を輕くし、死を樂むは只是愚痴の患ぞかし。(馬琴)

●かの國におはしましよほど、刀伊國のも越えきたりけるに、筑紫にはかねての用意もなく、大貳殿弓矢の木末をもしり給はねば、いかよとおぼしけれど、やまと心かしくおはする人にて、筑後、肥前、肥後、九國の人をおささせ給ふなばさるものにて、府の内につかうまつる人をさへおしとりて、たゞかはしめ給ひければ、かやつが方のものどもいと多く死にけるに、さはいへど、家たかくおはしますに、いづじかりし事平給へりし殿ぞかし。(爲業)
 ●かくあさましき悪事を、申し行ひ給へりし罪により、この大臣の御末はおはせぬなり。さるはやまとだましひなどは、いみじくおはしたるものを。(同)
 ●かの小納言からの文をもしろく學び大和心もかしこかりけるにや、天文などいふ事をさへならひて、さえある人になん侍りける。よほひさまでふるき人にてはべらざりしに、今のよにもいかにめでたく侍らまし。(續世繼)
 ●なに故にくだきし身ぞと人とはよそれとこたへん大和魂。(士清)

●數島の大和心を人とは朝日にほふ山櫻花。(宣長)
 ●さもあらばあれ大和心しかしくはほそちにつけてあらずばかりぞ。(赤染衛門)
 ●からくにのものをしるしのくまぐまをやまと心にともしとや見ん。(同)
 ●はじめからやまと心はせむくともなはりまでやはかく見ゆべき。(同)
 ●唐よりも天然よりも露のうたをよむとは大和たましひ。(深藪)
 ●二腰の大和魂さすもむべよし野の花にたぐふものよふ。(魚彦)
 ●みよし野の花にたぐへし武士はむべ國の名のやまとだましひ。(松經舍)
 ●謎のよしの花どものよふの唐にはあらぬやまとだましひ。(義種)
 ●百までといはふ心の貫浦太刀さすも三子のやまと魂。(春秋庵)

●六月廿日のことぞかし。内は例さまにも思しめされざりし御氣色、ともすればうち臥しがちにて、これを人は憐むとはいふなど、人々は目も見たてぬと、仰せられて、世を恨めしげに、思したりしものを、事重らせ給はざりしなり御祈をじ、遂にありける御事をも、譲り参らせらるゝと、我またに及ばぬ事さへぞ覺ゆる。かくて七月六日より、御心ち大事に重らせ給ひぬれば、誰れ月頃とても例さまに、思し召したりつる事は、難きやうなりつれども、これかやうに、苦しげに、見参らす事はなくて、過させ給ひつる。かくおはしませば、いかならんするにかと、胸潰れて、思ひあひたり。その頃しも、上臈途障ありて侍はれず。或は子産み、或は母の暇、今一人は疾うより籠りゐて、この二三年参られず。御乳母だち、藤三位ぬるみ心ち煩ひて、まゐらす。辨三位は、東宮の母もおはしまさで、生ひ立たせ給へば、心のまよに、侍はるべくもなきに、あはせて、それもこの頃痛心に煩ひて、たゞ大貳三位を具して、三人ぞ侍ふ。されば、只惟し人の、煩ふだに、人のいと参りしたしく、扱ふ人おほくほし

きに、これはまして。同じ口のくるま、ま、堪へがたげにおぼしめしたれば、院にかくと案内申さず。驚かせ給ひて、近く御幸ありてと奏す。かく苦しうおぼしめしたれば、大殿油例より近く参らせなどするほどに、たゞ消えに消え入らせ給ひぬ。あなみじとなきあひて、内大臣、関白殿まわりて、つと侍はせ給ふ。大かた罵りあひたり。増養正、頼基律師、増養律師など、召しにやりつゝ、頼基律師、即ち参りて、経讀み佛くどきまわらせらるゝほどに、暫ばかりありて、打身じるぎせさせ給ふに、今少しのしりあひぬ。経讀まらるゝを聞かせ給ひて、今は益あらじ。唯かりうつせよと仰せられ出でたれば、物つく者などめして、かて参り移さるゝ。おびたしきは、押し並るべし。移りてその事とはいはで、かはめきのしるさま、いと怖し。御病など、参らせれば、めしなどすれば、嬉しさは何にかは似たる。大臣はあるかと問はせ給へば、大殿入らせ給ひて、侍ふよし申し給へば、御幸はなりぬるかと問はせ給へば、参りて申しかなり侍ひぬと申させ給へば、参りて申

せ。今は何事も待侍はじ。立てさせ給ふ尊勝寺にて、九壇の禱摩と、儀法とさふらふべきなり。また侍はす事はなに事も今暫侍ふべきぞ。明日明後日、さふらふべき心地侍らすと、仰せらるれば、あまり護摩こそ難しく侍へと申し給へば、こはいかにいふぞ。かばかりになりたる事をばと、仰せらるれば、御直衣の袖を顔におしあて、立ち給ひぬ。それを聞かん御乳母だちも、いかばかり覺えん。(讀岐典侍)

●病は、胸、物崇、脚氣、唯そ、はかとなくものくはぬ、十八九ばかりの人の、髪いと麗しくて、長ばかりすそふまやかなるが、いとよく肥えて、いみじう色白う、顔あいきやうづき、よしと見ゆるが齒をいみじく病みまどひて頼基もとよに泣きぬらし、髪の亂れかけるも知らず、而赤くて押へわたるこそなかしけれ。八月ばかり、白き單衣、なよらかなる袴よきほどにて、紫苑の衣の、いと鮮明なるを引きかけて、胸いみじう病めば、友達の女房達などかはるゝみじう病めば、いとくほしきわがかな。例もかくや惱み給ふなど、事なしびにとふ人もあり。心がけたる人は、誠にいみじと思

ひ歎き、人知れぬ中などは、まして人目思ひて寄るにも、近くもた寄らず、思ひ歎きたるこそなかしけれ。いと麗しく長き髪を引きひびて、物つくとして起きあがりたる氣色も、いと心苦しうたげなり。うへにも聞し召して、御讀經の僧の聲よき給はせれば、訪人どもあまた見來て、經聞きなどするもかかれなきに、目をくぼりつゝ讀み居たるこそ、罪や得らんとおぼゆれ。(清少納言)

●一日左門同じ里の何某が計に訪ひて、いにしへ今の物がたりして興ある時に、壁を隔てゝ人の痛む聲、いとあはれに聞えければ、主に尋ねるに、あるじ答ふ、これより西の國の人と見ゆるが、伴なひに後れしよしにて、一宿を求めらるゝに、土家の風ありて卑しからぬと見しまゝに、返めまらせしに、其夜邪熱劇しく、起臥も自はまかせられぬをいとほしきに、三日四日を過しぬれど、何地の人ともさだかならぬに、主も思ひがけぬ過し出でこゝろ感ひ侍りぬといふ。左門さうて、かなしき物語にこそ。あるじの心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人はいしるべなき旅の空に、此疾を發

へ給ふに、わきて胸弱しくおぼすべし。其やうなも君ばやといふな。あるじとよめて病は人を過つ物と聞ゆるから、家童らもあへてかしくに行かしめず。立よりて身を苦し給ふことなけれ。左門突うていふ、死生命あり、何の病か人に傳ふべき。これらは愚俗のことばにて吾們はとらずとて、戸を推して入りつゝ、其人を見るに、あるじがかたりしに遠はで、偷の人にはあらじな、病深きと見えて、面は黄に、肌黒く瘦せ、古き釜のうへに聞え臥す。人なつかしげに左門を見て、湯ひとつ恵み給へといふ。左門ちかくよりて、土憂ひ給ふことなけれ。必救ひまわらすべしとて、あるじと計りて、藥をえらみ、自方を案し、自煮てわたへつゝ、猶病をすゝめて病を看ると、同胞の如く、まことに捨てがたきありまなり。(秋成)

●四五月ばかりよりわかもかきといふ事いで來て、世の人やむなどきこゆる。六七月許になりてはいみじうやみまきて、のこりなくきこゆ。五十三年にいできたれば、老たるわかきとなく、おや子もわかす一たびにやみたれば、おきたる人すくなくありけ

る。六七十の人は人の、いとすくなくければ、いとみじくなありける。(榮華物語)

●昨日より心もわり身も苦みて、今は期を待つばかり、いや／＼それは苦しからず。病ふは苦しき習ながら、瘡治によりてなほる事の、ためしは多き世の中に、思ひもすてす様々に、色をつくして夜盡の、境もしらぬ有様の、時のうつるをも、おぼえぬほどの心かな。げにや心を轉せず、其まゝに思ひ沈む身の、胸の苦しむる心となるぞ悲しき。(論曲、土蜘蛛)

●思はじと思ふ心も弱るかな。聲も枯野の虫の音の、亂るゝ草の花心、風狂じたる心地して、病の床に伏し沈み、つひにむなしくなりけり。(論曲、碓)

●おく山のくまかくれなるはたつもしられぬこひにやまふ頃哉。(後頼)

●とかりするさつなのゆづるうちたえてあたらぬこひにやまふ頃哉。(同)

●われこそや見ぬ人こふるやまひすれあふひならではやむくすりなし。(拾遺)

●世の人のこひの病のくすりとや七くりの湯のわかかへらん。(常陸)

●この葉におもひわづらふ病をもおこたらしませなむやくしづつ。(藍葎)

●足引の病にやせぬ下の帯の一重ゆひしし。三重ゆふ迄に。(春嶺)

●いさや川かをさかのぼる浮舟のゆられて寒しとこの山風。(諸平)

●花咲いて死ともないが病かな。(來山)

●病む中のはなしに背む櫻かな。(野坡)

●病人の駕籠の繩追ふ曇哉。(蕪村)

●病んで死ぬ人を感ずる曇かな。(太祇)

●淺ましや足袋に足袋はく虚勢病。(召波)

●旅に病んで夢は枯野を駆け廻る。(芭蕉)

●海老焼いて病に遊ぶ寒の中。(櫻長)

●爐ふさいで非といふ病うつりけり。(几童)

●病人と撞木に寐たる夜寒かな。(文章)

●水ばなのたれかはせきをせかざらん關はもとよりつよき谷風。(菅江)

●庭鳥の空音にあらぬ背鳴は病と福をとつげこしやう。(白駒)

●戀病としらばくすしも藥より人にもらすなかゝるうき身を。(知可住)

●一寸のび二寸のびつゝまぢし夜のつもりてしやくとなれる戀病。(且平)

- 余なきと隙のなきとにかへてまし病ある身と苦勞ある身な。(岡持)
- 迷歌師のさりさひなくくひし物うち、してより病病とやなる。(定庵)
- 抱病をするがふじの山たかくけふみづうみのはじめなりけり。(義人)
- 引風の邪鬼追ひはらふしやうきさんたよ一服でげん宗の夢。(酒船)
- 思ひさやわがしやくせんやしやくならでむきしやうもんにははるべしとは。(赤真)
- 富貴なる草津にはつか湯あかせん貧の病のししいゆるやと。(純々亭)
- はたらくは違者にまめで目出たけれ病人なれば臥して苦しむ。(羅地)
- 口きくしに引立ちらるゝ病上り。(川柳)
- 病人も顔出しさせる儘じまひ。(同)
- 作病は法性ばうが元祖なり。(同)
- 寮所へ道人のかゝる病み上り。(同)
- 生置はわたりがついて看病し。(同)
- 作病を入れると四百五病なり。(同)
- 神良はたび／＼腹しくだして見。(同)
- 大年のやまひは常の不養生。(同)
- わづらつて人並にくふしなもの。(同)

- 病氣までおごりがましい火のやまひ。(同)
- 厚紙をへがす様なは假病なり。(同)
- 花嫁は其頃といふ病なり。(同)
- うならずに居るが車力の病氣なり。(同)
- 御醫者さんでも有馬の湯でも、戀の病はなほりやせぬ。(俗語)
- 同氣相求め、同病相恤む。(同)
- 風邪は百病の原。(同)
- 病は口より入る。(同)
- 三年病後強退朝。又擁重門臥寂寥。夢繞千山心不定。枕欹雙臂力全消。籠燈月暗疑無影。聞雪風稀未滿條。睡起忽然忘握髮。不勝雲髮晚飄飄。(李東陽)
- 夜夜無眠魂驚。隔窓語喚愁生。中年兄弟多離別。四海文章喪老成。扇影隨階秋一葉。琵琶到枕雨三更。病懷從此逢搖落。白露西風不勝情。(樸齋)
- 風雨暗江天。幽窗起復眠。忍窮安晚境。留病壓災年。客助修琴料。僧分買藥錢。餘生均逆旅。未死且陶然。(陸放翁)
- 自知氣發每因情。情在何由氣得平。若

- 問病根深與淺。此身應與病齊生。(白居易)
 - 升天入地總無奇。幾卷方書萬古疑。二十九年生不易。肯將性命付庸醫。(張船山)
 - 官居寥落禁門東。秋滿長安一夜風。老病不眠成癡轉。五更鐘鼓雨聲中。(李昭元)
 - 燈在黃花一夜欲分。明朝去賜信州雲。一壺酒竭姑休起。垂死病中遺別君。(山陽)
 - 桃紅李白覺春歸。強步閑庭力尚微。從困不扶羸藤杖。恐驚花裏早鶯飛。(陸暢)
 - 衰年病肺惟高枕。絕塞愁時早閉門。(杜甫)
 - 病多偏穉睡工夫。(曹廷樞)
 - 因病翻添數首詩。(尹似村)
- 「やまひ」 山彦
- 反響。木精。山靈。
- ものにおそはるゝ心地して、おどろき給へれば、火もきえにけり。うたておぼさるれば、太刀をひきぬきてうち隠し給ひて。

- 右近をおこし給ふ。これもおそろしと思ひたるさまにて参りよれり。わた殿なるとのか人おこして、しそくさしてまわれといへとのたまへば、いかでかまからん、くらうてといへば、あなわがくしとうちわらひたまひて、手をたゞまき給へば、山彦のこたふるこゝろとまじ。(紫式部)
- 其後三千餘騎、手綱かいくり霞隠んばり、手を握り目をふさぎ、馬に任せ人に随つて劣らじ／＼と落しけるに、然るべき八幡菩薩の御はからひにやと申しながら、馬も人も損せざりけるこそ不思議なれ。落しとはてず白旗三十流嵐と拵げ、三千餘騎同時に時を造り、山彦答へておびたし。(源平盛衰記)
- 夫れ山といつば、塵泥より起つて、天雲かゝる千丈の峰、海は昔の露より滴りて、波濤をたのみ萬水たり。一洞空しき谷の聲、梢に響く山彦の、無聲音を聞くたよりのなり。聲にひびかぬ谷しがなと、望みししげにかくやあらん。(謡曲、山姥)
- 傳へ聞く佛在世の、淨穢淨眼の如くに、其高さ七多羅樹、虚空に上りては座せしめ、地に入つては火燭を放して、水を踏む

- 事障地の如くに、さら／＼と走り去つて、形はさながら山彦の聲ばかりして失せにけり。(謡曲、鐘植)
- 夕の霞も冷ましく、嵐はげしき高嶺より、らうせいのかうしやうにて、歸れといへば、谷嶺も、響き渡れる山彦の、呼べば答へて失せにけり。(謡曲、葛城天狗)
- 岩根に腰打ち、暫四方をうちながめ、都にめなれぬ風景や、山あり川あり谷みねに、梢のあらし猿の聲、伐木丁々山彦も、絶えてまびしきつら折り、野はかうかうと果しなき、旅のあはれさ面白さ、どうとも言はれぬ景色かな。(淨瑠璃、殺生石)
- 山彦は君にも似たる心哉我、ひせれば音づれもせず。(拾遺)
- 逢事の山彦にしてよはならば人めもわれはよかぞ有らまし。(貫之)
- 山彦の聲のまに／＼尋ねゆかばいづれともなくわれやまどはん。(同)
- ほととぎす尋ねぞわぶる山彦のあらぬみに、こなたへせしより。(千陸)
- 山彦のこたへぬ山に分け入りてなげきこるとも入しるらめや。(長流)
- にふの袖くだすひぐれの山彦はわがなげ

- きよりこたへそめてき。(同)
- よしやわれきゝえたりとも山彦の空しき聲をたれにこたへん。(景樹)
- 足柄の山のやまびことよむなりいづれの峰に舟木さるらん。(春海)
- 春くれてながき口さびし山彦も獨りこたにけふはせよかし。(言道)
- こたへする聲おもしろみ山彦をかぎりもなしによぶわらは哉。(同)
- 七草に不二の山彦うたふなり。(大江丸)
- 山彦は餘所の事なりわかなつみ。(千代女)
- 山彦も歸らずなりぬ月の叢。(若丸)
- 山彦の雨はいづち春のくれ。(蕪村)
- 山彦の湖水に落つるやなぎかな。(東鏡)
- 子規さくや山彦の愛かしこ。(省吾)
- 山彦の加茂川越すや夏の月。(黙庵)
- 山彦も聲のうちなりほととぎす。(夢園)
- 山彦と啼く子規夢を伐る芹。(翠堂)
- 鳩吹くや山彦かへす其中に。(乙二)
- の相手なきひとり仕事に山彦を木こりはおのが友と打きく。(舍風)
- ひとり居の様ひさしなへなき庵にかよへるものは山彦の聲。(菊葉亭)

●人とはひの葉の庵にし友はあり我がかげほ
うしては山彦。(折芳)
●もる共に戀の山彦うたがひをばらせとい
へばはらせよといふ。(花盛)
●さゝがにの糸のしらべも音高く雲井にひ
やく山彦の聲。(似足)
●山彦の聲のひびきもひきがたり向ふへう
つす積古三味線。(寶市亭)
●舟をもち袖が薪をくたくおともわれしふ
たこの山の山彦。(商人)
●尋ね来し人もあるかと出てみれば我しは
ぶきをかへす山彦。(百年)
●山彦のこたへに人を呼子鳥さるにてもま
た山彦さびしき。(景野)
●三井寺のかねのひびきも眞二つにわた
やうなる谷の山彦。(浮丸)
●夕ぐれをあはれと獨なげくだにふたり前
なる山彦の聲。(橋樹園)
●山彦となりてひくは野にあまる思を雄
子や聲に立つらん。(鏡信)
●山彦にひよく野がけの河原原。(川柳)
●野がけの江戸ぶし山彦が跡を引く。(同)
●山彦に一萬六千十六こ。(同)

●足拍子よむ山彦の能舞臺。(同)
●くもる雨夜に寝なく、みねにこだまや打
つ鈴の、おとは妻木をこりすまの、海士の
鹽釜げぶりたつ、来し方を思ひ出に、ひと
りかたしく塵蓮。(俗語)
【やまぶき】山吹
桃棠。山振。
こがねの色。八重山吹。實なら
ぬ。井山の玉川。くちなしの色。
水にうつろふ。
●例ならず仰言などもなくて、日頃になれ
ば、心細くてうながむる程に、長女文を
もて来り、御前より左京の君して、忍びて
給はせたりつるといひて、此處にてきて引
忍ぶしあまりなり。人傳の仰言にてあらぬ
なめりと胸潰れておけたれば、紙にはもの
もかゝせ給はず、山吹の花びらを只一つ包
ませ給へり。それには思ふごとくかゝせ
給へるを見るもいみじう、日頃のたえま思
ひなげかれつる心も慰みて嬉しきに、まづ
知るさまを、長女も折まもりて、御前には
いかに物のなり毎に、思し出で聞えさせ給

ふなるものをとて、誰も怪しき御長居との
みこそ侍るめれ。などが参らせ給はぬなど
いひて、此處なる所に、あからさまに糺り
て参らんといひて、去ぬる後に、御返事か
きて参らせんとするに、此歌の本更に忘れ
たり。いと怪し。同じ古こといひながら
ら、知らぬ人やはある。こゝもとに覚えな
がら、いひ出でられぬは、いかにぞやなど
いふを聞きて、小さき童の、前におたるが
下行水のとこそ申せといひたる。などてか
く忘れつるならん。これに教へらるゝもな
かし。(清少納言)
●櫻に雨をいとひ、紅葉にくれを惜むは、常
の習ながら、山吹のきよげなるぞ、色中和
にして、七寶の上に類せらるゝ。されや千
早振伊勢の神垣には、太々神樂の福宜が鼓
も、かたが色にぞ鯛の似めでたく、西方淨
土の御佛も、此色にぞ尊くまし／＼けん。
井手の玉川には下組のめぐりあふえにしあ
れば、青樓の銀燭碧翠の舞も、これが爲に
ぞ映をましめる。無常の迅速も、しばらく
此光に花をさかせ、おそろしき地獄の沙汰
も、黄なる色にぞ獄卒もしもとを置き、鬼
一口の除夜の闇も、かの光にぞ春待つ宿と

はなりぬる。實や唐よりこのかた、世人牡
丹を愛すとは、富貴の二字にや唐人の傾き
けん。我も此色のうるはしきを弄びて、掛
硯に筆をとりぬ。(魚汝)
●やへ山吹のさきみだれたる夕ばえを見お
たるほどに、小雨のそゞぎ出でたれば、し
ばしは玉なす露を、なかしとちながむる
に、いみじうふりまさりければ、かくては
夜の間にしなれなんと心おかるゝに、たゞ
ひとつしたる露を、太田の何がしにかしつ
れば、何をかおほはんと、とへど答へず。
口なしの色なるを、いかにかはせん。(徳綱)
●對の前の山吹こそ、猶世に見えぬ花のさ
まなれ。房の大ききなどよ。しななかうなど
はおきてざりける花にやあらん、花やかに
眼はしきかたは、いとおもしろきもの
なんありける。(紫式部)
●實に／＼父のおほせの如く、今こそかく
とも見青野の、岸の山吹風吹けば、底なる
影も散れば散り、なびけばなびく秋冬の、
影をわやまつはかなきよ。子ながらし是ほ
ど母に似けるよと、わが影がらなつかし
や。(謡曲、松山鏡)

●池の浮草波にゆられて、錦をさらすかと
疑はる。岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の
絶間より、山時鳥の一聲も、君の御幸を待
ち顔なり。(謡曲、大原御幸)
●定めなき世と云ひながら、官位も除高
き、光る源氏のいにしへも、胡蝶の舞人色
々の、御舟に飾る金銀の、瓶にさす山吹の、
裳の衣を懸け給ふ。(謡曲、胡蝶)
●歌人の言葉の種は山のみか、名所多き宇
治の里、川の流れるを若見に、たしなみ咲き
し山吹の、盛りは餘所も及びなき。(浄瑠璃、菊水の巻)
●七重八重花はさげども山吹の實のひとつ
だになきぞ悲しき。(兼明親玉)
●駒とめて猶水かはん山ぶきの花の露そふ
井出の玉河。(俊成)
●玉もかる井提のしがらみ春かけて咲くや
河瀬の山吹の花。(實朝)
●今もかもさき何らん橋のこじまのさき
の山ぶきの花。(古今)
●ゆく春もやどりとるべく夕つゆにしなぶ
まがきの山吹の花。(千蔭)
●山ぶきは下行く水も花なるを心してさせ
春のかはふれ。(眞淵)

●春雨は七日ふれども山吹のやへさく色に
あせずぞありける。(春海)
●妹とわががさしばかりはゆるされて二枝
なりぬ山吹の花。(右功)
●棹ふれし筏は一瀬よぎながらなほかげな
びく山ぶきのほな。(諸平)
●山吹の一重にさくかめでながら八重なる
見ればやへぞまされる。(言造)
●山吹や笠にさすべき枝の形。(芭蕉)
●月雪に山吹花の鬚顔よし。(其角)
●山吹や井手を流るゝ鮑層。(鷲行)
●山吹に奈真見ゆる日の夕哉。(蓬太)
●山吹は咲かで蛙は水の底。(惟然)
●山吹や水にひたせるえまし夢。(泉貫)
●山吹は咲かで蛙は水の底。(野水)
●松明に山吹うすき夜の影。(骨羅)
●山吹や池をへだてゝ夕日さす。(也有)
●山吹や水は流れてもとの影。(乙二)
●山吹やこぼれし土に上乾き。(北枝)
●ながめにはあかぬものから山吹の花のい
るとしきをながくもて。(吳服堂)
●わらんべの道ひかけてくる胡蝶さへみと
よめがたき山吹の花。(廣住)
●昔よりいひつくせども山吹の花はやつば

- リこがねいるなり。(折芳)
- 梅し散まらちりて力なきを引たてる山ぶきの花。(朝起)
- 小ずきかすいはねいろとは申せどもましらとはなき山吹の花。(英月)
- 其いろはこがねにしても他人むきみにはならざる山吹のはな。(蜂満)
- さくらともかたをならぶるきなれどもかをもつことをしらぬ山吹。(仲住)
- 黄金のはだへとみても三尊のみだにならざる秋冬の花。(耳頼)
- 香にめでし山吹のさく岸かけは聲もさいらな蛙なくなり。(彰成)
- 人ならばさつぱりとした男ぶりさでもつ庭の山吹の花。(居安)
- 山吹の色は實のあるかたみななり。(川柳)
- 袋一つあるとやさしい名は立たず。(同)
- お返事に出ず山吹は無言なり。(同)
- 山吹のあとにはわれまじものとよみ。(同)
- 殿心あつて山吹見せるなり。(同)
- 山吹をみせずとわる年の暮。(同)
- むら山吹は文と武とに手をとらせ。(同)

- 松はわらさず山吹はずぶぬらし。(同)
- 山吹はどの道かまの色と見え。(同)
- 簀より山吹のないつらい事。(同)
- 山吹へ濡れて駈込む桔梗笠。(同)
- よしやたのまじあだ人心一重ばかりか入取山吹の、たんとなじみの聲もあるに、移りやすき花色ごころも、問へど答へぬ口なしわらや、我は木幡のからほだし。(俗語)
- さまとわしとは山吹さだち、花はさけども實はのらぬ。(同)
- こひの山吹情の富浦、秋の枯草萎れ草。(同)
- おうら山吹日陰の紅葉。(狸諺)
- 點着雖黄天有意、秋冬誤綻暮春風。(實頼)
- 書窓有卷相收拾、詔紙無文未奉行。(保胤)

みのおつと。やみの世。さつきやみ。

● 折から荒芽の山下風、窓より嵐とふき入れて、燈火赤とうちけしたり。莊助これに迷惑して、つけぎやあるとかうぐれども、今來しまゝに案内を知らねば、欲する物は手にあたらで、思はず茶碗をはりたふし、又紡車につまづくのみ、ほと／＼困じて果は又、ぬるりの縁をなでまはしつゝ、火袋をとりて掻きおこす、燈ばかりの埋火に、刈草あまたうちきせて、顔さし入れてひたすらに、焼きつけんとしたれども、なまかれの草多ければ、吹けどもとみには燃えず。こゝろ類に催だつたまゝに、火吹管はあらずとて、なほこりすまにさぐれども、こゝその所にあたらねば、せんすべつて聞きやに手を返きて呆れてなり。(馬琴)

● かうやうの折は、御あそびなどせさせ給ひしに、心こなる物のねをかきならし、はかなくさこえ出づることのはも、人よりはことなりしけはひかたちの、おもかげにつとそひておぼさるゝも、闇のおつとにはなほおとりけり。命婦かしこにまかでつきて、かどひきいるゝより、けはひあはれな

- リ。やもめすみなれど、人ひとりの御かしづきにと、ちかくつくろひたて、ゆやすきほどにてすやし給へるを、やみにくれてふし沈み給へるほどに、くさしたかくなり、野分にいとあれたる心地して、月かげばかりぞ、やへむぐらにもさはらずさし入りたる。(紫式部)
- これを見よ有王よ。この子が文のかき様のはかなさよ。おのれを伴にて急ぎ上れと、書きたることの恨めしさよ。俊寛が心に任せたるうき身ならば、いかでか此島にて、三年の春秋をば送るべき。今年は十二になると覺ゆるが、これ程にはかなくて、は、いかでか人にも見え、宮仕をもして、身をもたすくべきかとて、泣かされるにぞ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひしられけれ。(平家物語)
- さる程に、鎌倉の前右兵衛佐頼朝、木曾が狼藉鎮めんとて、籠坂義經に六萬餘騎を相添へて、指上せられけるが、都には軍出で来て、御所内裏皆焼き拂ひ、天下闇黒となりたる由聞えしかば、左右なう上りて爪すべきやうもなしとて、足張の國熱田の

- 邊なる所にぞましくける。(同)
- 星の光だに見えず暗きに、うちしぐれつゝ木葉にかゝる音のをかききき、中々に體になかき影かな。月のまなくあかゝらんも、はしたなくまばゆかりゆべかりけり。(孝徳女)
- さしも黒雲吹きふきかり、闇の夜は如くなる内裏、俄に晴れて明々とあり。さればこそ何程の事の有るべきぞと、油断しける處に、不思議や虚空に黒雲おほひ、稻妻四方にひらめき渡つて、内裏は紅蓮の闇の如く、山もくづれ、内裏は虚空に逆のぼるかど、震動ひまなく叫神の、雷の姿は顯はれたり。(謡曲、留電)
- 今の雲の上人も、月なき夜半をこそ悲しめ給ふに、我はそれに引かへて、月の夜頃をいとひ、闇になる夜をよるべば、鶴舟に燈す筆火の、消えて闇こそ悲しけれ。(謡曲、鶴舟)
- いづくいかなる國の果、山の奥にも身を忍び、どうぞ遊れて下りませ。娘が心に耻ぢ入つて、天にも地にもかけがへのない、可愛我子を心中に、合点してやる親心、爰の道理を聞き分けて、これ拜みます頼み

ますと、手を合せたる世親の、子故に迷ふ闇の間、二人は何と詞さへ涙に涙結ぼるゝ。(淨瑠璃、河原の逢引)

● 雲ふかき山月の月のでしより闇しらし世となりけらしも。(有功)

● 人の親の心はやみにあらねども子を思ふみちにまよひぬるかな。(兼輔)

● 梅の花にほふ春べはくらぶ山暗にこゆれどしるくぞ有りける。(實之)

● 月のゆく山に心を送りいれて闇なる跡の身をいかにせん。(西行)

● なす事しやみのうつとにまどろむほいやはかなにも夜はいはじな。(春満)

● かきつくる跡に光のかやればくらき道にも闇ははるらん。(高辨)

● 月かげの入りぬる後に思ふかなまよはん闇の行末の空。(慈圓)

● このよだに月まつ程はくるしきに哀いかなる闇にまどはん。(顯仲)

● みのうさも月を見れば慰みき闇こそ夜はわびしかりけれ。(蘆庵)

● せきはていづこもわかぬ闇暗に窓をしりてもうつ時雨哉。(音道)

● 闇の香を手折れば白し梅の花。(也有)

- 闇の夜、闇を吹きけり秋の風。(朝更)
- 十六夜は闇のあたりも月夜哉。(士朗)
- 年の闇月に雨夜の掛念はん。(藝太)
- うの花の絶間た、かん闇の門。(去來)
- 闇の夜や葉をまどはして鳴く。(芭蕉)
- 蚊帳捜す夢は甲斐なし親の闇。(野坡)
- 闇の夜や子供泣き出す螢ぶね。(凡兆)
- 寝ぐるしき窓の細目や闇の梅。(乙州)
- 寒食やまだ下京は闇の門。(月居)
- 闇の中光る蛸のかしら哉。(丁水)
- 闇を鳴く沖の千鳥や飛ぶは星。(几董)
- 花を見ぬ跡を故郷へ隠すとや闇にまぎれて歸る雁がね。(江戸住)
- さみだれのまくらき沖の時鳥聲は晦日の闇となげかじ。(松成)
- すてられし子供ごころも暗のよや七光りてふ親のそはねば。(度水)
- ひるふ神あれとや祈る親心子ゆゑの闇の夜には捨つれば。(清巴)
- あやしなき闇の一夜のかけたかと九月みそかになくほとよぎす。(如蘭)
- よし原は闇のよつでに出でぬれど早曉なつぐるとり越。(咽人)
- 此世から戀路の闇にまよふとも二人夜明

- けぬ園にすみたや。(壽住)
- 春過ぎて木々の花さへ散りぬればかのかくれがとなりし下やみ。(讀人不知)
- 葉根にてうらんの名はとくきこえて木下闇となりける哉。(筑波山人)
- 夕日さす野への雉子も子に迷ふ心のやみはあやなからまし。(千箱庵)
- やみとなり雲と成りたるおもしろさ。(川柳)
- 闇仕合ひそこの様な手つきなし。(同)
- 拾はるゝ親は闇から手を合せ。(同)
- くらやみの浴衣後添ぞつとする。(同)
- 行燈の油をさしつかきたてつ。(同)
- 闇の夜は何が鳴いたかほとよぎす。(同)
- 月夜より闇に景ある宇治の夏。(同)
- 闇に絞あつて娘の螢狩り。(同)
- 銀杏の蔭で闇に成る星月夜。(同)
- つまづいて足袋屋の門を闇に知り。(同)
- とぼしかけ貫ふた國は闇になり。(同)
- さてもよき螢の虫や、忍ぶ暇の暗路をてらす、人の心も情われ。(俗語)

- 月夜うたてや闇ならよかる、また闇に來て門にたつ。(同)
- こなた思へばてる日かくもる、浮きた月夜が闇となる。(同)
- 子ゆゑの闇に迷ふ。(俚諺)
- 間ふに答の闇あらね。(同)
- 一寸先は闇の夜。(同)
- 吾道如、虚暗。夫虚明者、不見闇中一物、而虚暗者、能見明中虚事。(關尹子)
- 十里曉鳥關樹暗。一行寒雁亂雲愁。(温庭筠)
- 朝明夕暗已足嘆。况乃滿地成、權傾。(韓愈)
- 城間側草道。郵關雨雲廻。(李商隱)
- 秋窓餘照盡。入、關早螢來。(楊綰)

ゆノ部 勇氣

勇猛。勇敢。剛勇。沈勇。義勇。武勇。大勇。真勇。

いさましき。たけき。をらしき。

● 既に明日二日巳の刻に押し寄せて、矢合あるべしと定めたりける其前日。高橋又四郎拔懸して、一人高名に備へんとや思ひけん、織に一族の勢三百餘騎を率して、笠置の陣へぞ寄せたりける。城に籠る所の官軍は、さまで大勢ならずといへども、勇氣未だならず、天下の機を呑みて、回天の力を出さんと思へる者共なれば、織の小勢を見て、なじかは打つてかゝらざらん、其勢三千餘騎、木津河の邊におりあひて、高橋が勢をとりこめて、一人も餘さじと責め戦ふ。高橋始の勢にも似ず、敵の大勢を見て、一返しかへさず、捨鞭をうちて引きける間、木津河の逆巻く水におひ浸され、討たる者其數若干なり。僅に命ばかりを扶かる者も、馬和具をすて、赤裸になり、白旗に京都へ逃げ上る、見苦しかりし有様なり。(太平記)

● 信時は雲とも懸議せず。しらすや義賢、けふわがこゝに來りしは、なま／＼軍議の

爲なれど、謀は密なるをよしとす。はじめ面を見る列主に、かる／＼しく何を告げん。われ／＼が勇ありや、なしやをみつから知らんとならば、まづこの刃に問へかしと、いさましきながら反うちかへす、刀の柄に手をかくれば、さらでも油断せざりける、兵元も真行も、主のほとりにつとよつて、八方へ眼をくれば、麻呂が從者、これを見て、振り拳をさすりあへず、顔に膝をすゝめたり。(馬琴)

● かの織田北條武田上杉の主將も、知謀勇略は世にすぐれけれども、專に己が威力をほこり、下の勇氣をひしげを以て手柄とせし程に、一旦は盛なるやうなれども、上一人の威勢ばかりにて、下の義氣おとろへては久しくはつよかぬものなり。さればこそいづれもついに亡びしぞかし。(旭葉)

● 父母あひ見下して長くわかれて、悲はあまりありといへども、まねびつかうまつるいさみはなし。(宇都保物語)

● 義經打物取り直し給ひ、隙間もあらせず暇ひ給へば、静し諸共に切り拂ひ切り拂ふ。正尊叶はじと引き立ちけるを、辨慶追つ詰め戦ひけるが、押しならべむんと組

み、えいやと投げ伏せ。大勢取り込め繩うち懸けて、喜び勇み四人を引かせ、御門の内に入給ふ。(謡曲、正尊)

● かくて黒雲竹林におほひ、おほひかゝると見えつるが、竹林の岩洞にこもれる虎の、眼はれ出づれば、岩屋の内より、無風を吹き出し、一方に雲を吹き返し、敵を追手にいきほひ勇む、恐ろしかりける氣色かな。(謡曲、龍虎)

● 陸には舞樂に乗じつゝ名残おしる海面遠く、なりゆくまゝに、招くも追風船には舞の、袖の羽風も追風とやならん。帆を引きつれて舟子どもは、悦び勇みて、唐土さして急ぎける。(謡曲、唐船)

● 公綱すかさず弓とりのべて、はつしと打つ。引つばづしつたと蹴落し、くわつとねめたる眼の光、元より猛き宇都の宮、たゞ一つかみとかけ寄りしが、天性備はる正成が、勇氣に思はず進みかね、五臟六腑をもみ上げて、にらみかへしねめ戻し、龍に羽ある勢なせば、虎に角ある勇氣を顯はし、互にほつとつく息は、鯨の汐吹くごとくなり。(浄瑠璃、楠普請)

● 鳥がなく東をのこは、いでむかひかへり

- 見せて、勇みたるたけいきと、ねぎたまひまけのまに、たらねの世がめかれて、わかき妻をしまかす。(萬葉)
- 秋近くなりしてゆけば虫のねいさむ聲々あるかとぞきく。(頼朝)
- 櫻や咲き狂鐘出で、勇む駒。(杉風)
- 羅刹荷の駒の勇みや鈴の聲。(音原)
- 勇み立つ鷹引すゆる風哉。(里圃)
- 勇むらしよらばけはやの勢にかたづなみの宿願かたにし。(たか久)
- たゆたはで勇む心の駒にこそいつの關しやすくこえけれ。(玉清堂)
- 雄々しがる神の心ともの、ふの八十の氏子しいさむけふかな。(清梅園)
- 品川へちよきは血氣の勇でのり。(川柳)
- 信支の武勇に道喜相しとめ。(同)
- 制札にまでも勇氣を武蔵坊。(同)
- 茶にされぬ勇氣は宇治の上林。(同)
- お妾は匹夫の勇で腹も食ひ。(同)
- 新造は血氣の勇でうでをほり。(同)
- 如意輪の堂に勇氣の筆の跡。(同)
- 鎗の穂の血を雪でふき勇み立ち。(同)
- 老武者の勇氣の字の赤ら染。(同)
- 佐倉からほどなく駒の勇の原。(同)

- 御大勇それで中身を抜いて見よ。(同)
- 勇をふるつて敵陣を粉にくだき。(同)
- 大勇は勇ならず。(假諺)
- 勇士は骨の音に目を覺す。(同)
- 凡人言語正到、快意時、便然能收歎得。意氣正到、發揚時、便然能收歎得。憤怒嗜欲正到、騰沸時、便然能消化得。此非天下之大勇者不能也。(王守仁)
- 昔嘗聞大勇於夫子矣。自反而不縮、雖獨覽博、吾不懼焉。自反而縮、雖千萬人吾往矣。(孟子)
- 暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也。必也臨事而懼、好謀而成者也。(論語)
- 由也、好勇過我、無所取材。(同)

〔ゆき〕雪

- 柳絮。鷺毛。鶴鬢。瓊林。素花。玉屑。六出。玲瓏。隨風。撲簾。集衣。呈瑞。
- しらゆき。うすゆき。雲の白ゆふ。木毎の花。雪の光。たもとにかゝる。笠おもげなる。ふみわけしあと。うづみはてたる。

雪の下いほ。竹の下折。ゆきの通ひち。

● 雪の光りあひたる空こそ、怪しう色なきもの、身にしみて、この世の外の手まで思ひ流され、おもしろさも哀さも残らぬなりなれ。すさまじき例に言ひ置きけん、人の心あさよとて、御簾巻きあげさせ給ふ。月は隈なくさし出で、ひとつ色に見え渡されたるに、しほれたる前裁のかげ心苦しう、遣水もいといたうむせびて、池の氷もえもいはすすこきに、童部おろして、雪まろばしさせ給ふ。おかしげなる姿かしらづきども、月にはえて、おほきやかになれたるが、さまぐの粕亂れ着、帯しどけなき宿直姿なまめいたるに、こよなう餘れる髪のみ、白き庭には、ましてはやしたる、いとけさやかなり。小きは童けて、喜びはしるに肩なども落ちて、うちとけ顔をかしげなり。いと多うまるばさんとふくつけがれど、えも押し動かさでわぶめり。

● 御前珍しう思して御覽すれば、暮るゝまで、御傍に侍ふにも、雪の降りたる、つとめて、またおほとのもりたりしに、雪高

く降りたるよしを、聞しめして、その夜御傍に侍ひしかば、諸共に具しまらせて見しつとめてぞかし。いつも雪をめでたしと思ふ中に、こにめでたかりしかば、惟しの殿家だに、それにつけて、見所こそはあるに、まいて、玉鏡よと、作り置かれたる百敷のうちにて、諸ともに御覽せしありさまなど、繪かく身ならましかば、露途へず香きて、人にも見せまほしかりしかど。おしわけさせ給へりしかば、誠に降り積りたりしさま、繪あらん所は、いづれを梅と分さがたげなりし。仁壽殿の前なる、竹の莖折れぬと見ゆるまでたわみたり。御前の火焼屋も埋れたるさまして、今もかきくらし降るさまこちたげなり。(讃岐典侍)

● 例の山寺の鐘もききすいづ、なごやが下はなれがてなるに、雀のちよとなきて、やうくひましろなりゆけば、はしためのしづくにおき出でたるが、つぶとあけさして、あはやとよばるは、雪のふりたるなりけり。しどけなきねまきよぬながら、とばかり見出すに、松竹のうへはさらにいふべくもあらず。池のつらのはくしん、岩のはさまの藪根など、名もかたらしふつ

ゝかに、口ごうとましかりしも、けふはさまことに見なざるゝに、はしちかきたちばなの、こちたくなりたるが、白き中よりひかり出でたるこそ、見所ありてはおほゆれ。(幸文)

● 月は更けゆくまにさえたるに、日敷へて、ふりつきたる雪に、かつ降りそふ氣色、池の中島、松の梢、木々の梢、かよきたるも、庭火のかけに、束帯の黒きが上に、ふりかゝる雪は、うちほらふもなりから殊にすみ、神さびたる氣色限なし。雪おびたしく、所作の人、堪ふべくもなければ、はしなとりて、中門の下にてあり。(中務内侍)

● 雪のいと高く降りたるを、例ならず御格子まわらせて、すびつに火おこして、もの語などしてあつまり侍らふに、少納言よ、香燈峰の雪はいかならんと仰せられければ、み格すあげさせて、み麓高く捲きあげたれば、笑はせ給ふ。人々も憎まる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。猶此宮の人にはさるべきなめりといふ。(清少納言)

● 抑天のうるほひに、雨露霜雪の四つを立

て、同じく雪月花の、三つの徳を讀むるにも、雪こそ殊にすぐれたれ。先づ春は梅櫻、咲くより散るまでも、雪を忘るゝ色はなし。夏は五月雨の、古屋の軒端暮れながら、庭は曇らぬ卯の花の、垣根や雪にまがふらん。夜寒忘れて待つ月の、山の端白き影までも、ふらぬ雪かと疑はれ、冬野に残る菊までも、すは初雪と面白きに、山路のうきや忘らん。(謡曲、雪)

● あゝ降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候ふらん。それ雪は鶴毛に似て飛んで散亂し、人は鶴鬢を着て立つて徘徊すにかはらねども、我は鶴鬢を着て立つて徘徊すべき、秋も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥の、今日の寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。(謡曲、鉢木)

● さらば御供申さんと、夕の山の常陸より、さらでも喰しき唄つたひを、道しるべする山人の、笠は重し奥山の雪、靴は香ばし楚地の花、肩上の笠には、無影の月をかたづけ、擔頭の柴には、不香の花を手折りつゝ、歸る姿や山人の、笠も薪もうづもれて、雪こそくだれ谷の道を、たどりく

降りきて。業のいほりに着きにけり。
 (謡曲、葛城)

●しもとゆふ、葛城山にふる雪は、問なく
 時なく、おもほゆるかなとよむ歌の、昔の
 葉そへて大和舞の、袖の雪も古き世の、よ
 そにのみ、見し白雪や高間山の、嶺の柴屋
 の夕煙、松が枝そへて焼かうよ。
 (謡曲、同)

●實にや花ならば、咲かぬ柿しまじりな
 ん。なべてふりにし白雪の、跡を何にた
 とへまし。
 (謡曲、戀松原)

●はや暮過ぐる風につれ、折から頻に降る
 雪に、身はわれ狐の蘆理や、中を隔つる白
 妙し、天道様のお憎しみ、うけし此身は眼
 はれど、様十開かねばなんぼでも、いなぬ
 く)と泣く聲も、嵐と雪にうづもれて、聞
 えぬ父と俱泣、大第(くに)に降りつもる、寒
 氣に肌も冷え切れば、持病の瘧のさしこん
 で、かつばと轉べはお君はる(く)、さす
 る背中も釘氷、涙片手に我着物、一重をぬ
 いで母親に、着せてしよんぼり白雪を、す
 くうて口に含まする。(淨瑠璃、安達原)

●蝶の翼の白粉を、草にこぼして梢には、
 鶴の霜毛を脱ぎ懸くる、雪は花より花多き

木曾の三坂の谷風は、吹けども袖に寒から
 で、名も妬ましき風越の、峰の吹雪を身に
 は染む。
 (淨瑠璃、百人上臈)

●朝ぼらけ在明の月と見るまで、に吉野の里
 にふれる白雪。
 (是則)

●雪ふれば嶺のまさき木埋れて月にみかけ
 ら天のかぐ山。
 (後成)

●ふりそむるけさだに人のまたれつるみ山
 の里の雪の夕ぐれ。
 (寂蓮)

●駒とめて袖うちらはらふかけもなし佐野の
 渡の雪の夕ぐれ。
 (定家)

●何となくくるる雪の音までもゆき哀なる
 深草の里。
 (西行)

●はしだてのくらはし山に雲さけひ高市國
 原ゆきふりにけり。
 (眞淵)

●竹なれば境のまがきなれふして野邊より
 つよく庭の白ゆき。
 (魚貫)

●てる月のかげのちりくる心地してよるゆ
 く袖にたまる雪哉。
 (京樹)

●きゆるまでたよひとり見る山果の雪の深
 さをみる人はなし。
 (延之)

●箱根山はつ雪白し部には、いま御狩のつ
 かひたつらん。
 (枝直)

●其儘に折らばや折れん松の雪。
 (芭蕉)

●雪中に雪を投げ込むおそびかな。(愚雪)
 ●一二十降りてもゆくや雪千里。(雪村)
 ●初雪や四五里隔てし比良の嶽。(去來)
 ●朱の鞍や佐野の渡の雪の胸。(北枝)
 ●松の笠を出て見む春の雪。(支考)
 ●熊の巢に初雪白し丘の松。(許六)
 ●降りかくす小家は雪の姿かな。(杉風)
 ●山雲の餘りをやれば京の雪。(文章)
 ●雪で富士が富士にて雪かぶりの雪。(鬼貫)

●雪つもるかひのねがたを足引の山本かん
 助かんじきはくみゆ。(持麿)
 ●山々もひな白妙の丸綿はどちへよめりて
 ゆきのつもりか。(曳也)
 ●ふみこんであとのつかめぞ面白き火燒な
 がら雪のあけぼの。(橘洲)
 ●一富士の山にたかとも見るまでふらで
 夢ほどつる初雪。(有文)
 ●雪の日はせんきにつけて思ひやるこしぢ
 はさぞないたく降らん。(茶)
 ●吳竹は横にねかせてけしきをばはね起き
 てみる雪のあけぼの。(淺人)
 ●こしぢほどふればやまもなふしきさ
 か竹かと思ふ雪折。(常則)

●狐としようたがふ越の片田舎雪の穴からあ
 なへよめいり。(辰巳)

●仙人になりやしつらん山がつもうき世の
 道なわする大ゆき。(喜樂)

●木に白く柏を雪のつむむなりかくふるか
 らの小野のたかむら。(納丸)

●初雪をほめぬむすこがものになり。(川柳)

●はつ雪やツキは酒屋へ申し付。(同)

●ばかめらと雪見の跡に飲んでゐる。(同)

●もえ杭へもへろくと雪がふり。(同)

●初雪に死んだ女郎のうはさが出。(同)

●雪女郎買に旦那は出られやす。(同)

●雪かきて七里つばいよせ付けず。(同)

●さむ雪だ出たくなつたと女房云ひ。(同)

●雪くつて土手を行くのがむかひなり。(同)

●八月の二日賀屋へ雪がふり。(同)

●雀形たいて雪の御ちうしん。(同)

●六一加賀さん八一は尿の雪。(同)

●淡雪と消る此の身の思ひ疑に、浮名を厭

ふ戀のなか、亂れしまゝの髪つきや。義理
 と云ふ字は是非もなく、夢か現かあき鴨。
 (俗語)

●丹波雪國越らぬ先に、つれておでやれう
 すゆきに。(同)

●雪の翌日は蝶虫の洗濯。(俚諺)

●雪は数年の頁。(同)

●雪は犬の伯母。(同)

●夜來三尺壓寒村。人遠終朝無履痕。便
 欲綠錢買野興。何堪白戰慄吟魂。豐年
 須信老農卜。糞理實荷新政恩。開說遠境今
 滅跡。塵緣清氣洗乾坤。(六如)

●一醉昏昏萬不知。黃昏促席夜深歸。明
 朝唯見家人說。昨夜歸時雪滿衣。(孔平仲)

●凍雲寒樹曉橫。水上樓臺似畫圖。紅
 袖誰家乘小艇。捲簾香雪過西湖。(王柳登)

●石泉凍合竹無風。夜色沈々萬境空。試
 向靜中閑側耳。隔窓猶似撲飛蟲。(蘇軾)

●月黑雁飛高。單于遠道逃。欲將輕騎
 逐。大雪滿弓刀。(幽州)

●終南陰嶺秀。積雪浮雲端。林表明霽色

城中增暮寒。
 (祖詠)

●或逐風不返。如振群鷗之毛。亦當晴
 猶殘。疑殺衆狐之腋。(紀納言)

●曉入梁王之苑。雪滿群山。夜登庚公
 之樓。月明千里。(謝觀)

●雪似鷗毛飛散亂。人被鷗鷺立徘徊。
 (白居易)

●立於庭上一頭爲鷗。坐在爐邊一手不
 能。(管公)

●傾耳無希聲。在目皓已潔。(陶淵明)

●雪簷落月半窓。(凌樹屏)

●晚過千山雪氣寒。(趙嘏)

●六出表豐年。(張正見)

●雪擁山腰洞口。(朱子)

●掃雪開松逕。(皇甫曾)

●紫雪曉凝華。(徐幹)

〔ゆび〕指
 指頭。玉指。織指。食指。拇指。
 斷指。染指。
 および。指をりかぞふ。指をく
 ひさる。
 ●資忠今は止むべき人なければ、則打出で

先上宮太子の御前に参り、今生の榮耀は、今日をかぎりの命なれば、祈る所におらず、唯大悲の弘誓の誠あらば、父にて候ふも、の討死仕り候ひし、戦場の同じ苦の下に埋れて、九品安養の同寮に生るゝ身となさせ給へと、泣々祈念を凝して、泪と共に立出でけり。石の鳥居を過ぐると見れば、我一人と共に討死しける、人見四郎入道がかきつりたる歌あり。是ぞ誠に後世までの物語に、留むべきことと思ひければ、右の小指を食ひきりて、其血を以て一首を側にかきそへて、赤坂の城へぞ向ひける。
(太平記)

●女死にしそと仰せ侍りしは、千歳の命堪ふまじき心地なんし侍る。手を折り侍るは、および三つばかりはいとようふしおきし侍ると、思ひやりのほるかに侍れば、つれづれと過し侍らん月日を、宿直ばかりを賣の端わたり、許され侍りなんやと、いととしへなく、けざやかにいへば、それに従ひたる。
(道綱母)

●かたみにそむきぬべきさきみになんあると、ねたげにいふ時に、はらたしくなりて、にくげなること共をいひはげまし侍る。

に、女もえなまめぬすぢにて、および一つをひきよせてくひて侍りしを、おどろしくかこちて、かゝるきすまへつきぬれば、いよ／＼まじらひをすべきにもあらず、はづかしめ給ふめる、つかさ位、いとしくなにつけてかはんめかん。世をそむきぬべき身なりなどいひおどして、さらばけふこそかぎりなめれと、此およびをかよめてまかぬ。
(紫式部)

●又まかりたりしに、小野宮殿おはしましうが、ことさらに怪しき姿をつくりて、下臈の中に遠く居させ給へりしを、多かりし人のうへよりのびあがり見奉りて、およびをさして物を申しよかば、何事ならんと思ひ給へしを、後にうけたまはりしかば、貴臣よと申しけるなり。
(爲業)

●わが日本は柔和理と、あなになやのうま事から、二柱の親指が、國々の小指を生み給ひしより、二千年來御神輿をすゑた若生、唐天竺にけりんほども、引をたらぬ太平樂。
(蜀山人)

●我には見ええたらちねの、親の個ふ蠶の眉すみの、いと細し誰をかも、戀ひ瘦せ顔ぞ見ても泣く、涙かすみの悲しやな。そこより曇ります鏡、あれこそ母よ御覽せよと、我影に指をさす、實におはれなりさればこそ、幼き身の心なれ。
(謡曲、松山鏡)

●暫く目を塞いで往事を思へば、舊友昔亡ず。指を折つて故人をかぞふれば、親疎多くかくれぬ。時移り事去つて、今なんぞ渺茫たらんや。人とよまり我行く。誰か又常ならん。
(謡曲、歌古)

●平家は八島の浪にたよひ、源氏は花の盛を見る。中に勝れて熊谷が、陣所は須磨に一構、要路に遊茂木の、中に若木の花盛、八重九重も及びなき、それからあらぬか人ごとに、熊谷櫻といふぞかし。花をらせじとの制札を、讀んで行く人讀めぬ人、一つ所に立集り、扱も咲いたり、花より見事な此制札、辨慶殿の筆ぢやげな。扱も見事一つと讀めぬ。チ、あれはの義経様か此花を惜み、一枝きらは指一本切るべしとの法度書、ヤア花の代りに指きるとは首切下地、チ、こはや。見て居る内も、虎の尾を踏む心地する、皆ござれと、花に嵐の

健病風、ちり／＼にこそ別れ行く。

(淨瑠璃、一の谷)

●すぐしこし年をいくらとかぞふればゆびいとなくも老いにけるかな。
(朝恒)

●山のおくにおよびを折りてかぞふればあすより春もめぐり來にけり。
(詠人不知)

●秋の野にさきたる花をおよびをりかきかぞふれば七くさの花。
(憶真)

●大原涼し禪師の指のさし所。
(其角)

●指折のこれや家中の初ざくら。
(許六)

●指をらじ梅は折るとも年忘。
(也有)

●指に入る風はや寒しけふの菊。
(風雲)

●指うちてしばらくとやむ碓かな。
(几童)

●めぐる日や指の染むまで厭折。
(白雄)

●牙爪も老いにけらしな指の肝。
(升六)

●老武者と指やさくれん玉露。
(去來)

●しら魚や十はた三十と指折らん。
(葵太)

●草かりのわらべけんくわのはて／＼は指きりやせんすまき一むら。
(里近)

●花のかずかぞふる指のいつ／＼にもならぬ先からひらく朝がほ。
(鐘守)

●いにしへは指を切るてふ枝に今腕木をそへし難波津の梅。
(三陀羅法師)

●後指さくれまじとて身代にかまける姿が

いぶす蚊道火。
(古吉)

●君はこで鐘を數ふる指ばかりつれなくねます待つ宵の床。
(只麿)

●けんの外無理いふ度にひねらるゝ其親指ぞ子らが虫なる。
(年積)

●戀の淵深き思の誓には渦巻く指も切るゝとぞきけ。
(綾文)

●辨慶の梅のひと枝にくらべしむむや五つに開く指先。
(二葉雄)

●指をればもはやすまひの前頭けふどつゝ、いと思ひたつ旅。
(すは子)

●都路は花の名所をかぞふるもおよびを折るにいまなかりけり。
(芍薬亭)

●指さして座頭を教へわらはれる。
(川柳)

●まアうんといへと無盡の指を折り。
(同)

●指二本額へあてゝ下女は逃げ。
(同)

●ひどい風田植の笠に指のあと。
(同)

●塗桶で書いて口説けば指で消し。
(同)

●指切るも實は苦肉のはかりごと。
(同)

●口へ指さして妾の噂なり。
(同)

●指を切る事も辨慶一度かき。
(同)

●此梅がそだとこわ／＼指をさし。
(同)

●切る指と折る指梅とかきつばた。
(同)

●料理人小ゆびほどた、切つてくれ。
(同)

●二世や三世とことばでいへど、水のうたかたそりや空言よ。うそにも指が切らりよ。うか。いかい御世話のわるじやれおいて、爪の代りに織のはし、それをたよりのうきつとよ。
(俗語)

●指を切らうというたは嘘よ。金がないなら手を切らう。
(同)

●一指痛んで身安からず。
(俚諺)

●一指前に敵へば泰山も見えず。
(同)

●惟爾之指。風伸由己。勿執亂權。勿樹賊子。勿乘非道。勿持非理。勿擗孤危。勿援姦究。慎握香操。俾直于矢。慎杖吾心。俾平如砥。勿惡如草。鷹如糞。爲而不矜。作而不恃。智如工。勿爲小。機如。勿爲奇。伎。身高道端。壽直國史。敬之戒之。俟爲天吏。
(皮日體)

●織々頼玉削春葱。長在香羅翠袖中。昨日琵琶聲上。分明滿甲染猩紅。
(趙鸞々)

●融。橙月々候春風。和得豚鬚味不窮。
(趙鸞々)

縁指空開黄玉顆。愛他香露翠春窓。

(山陽)

●以指喻指之非指、不若以非指喻指之非指也。

(莊子)

「ゆふがほ」夕顔

紫嵐。長瓠。懸瓠。瓠瓜。匏瓜。まゆひらく。賤がかさね。垣ほにしほび。むすぶ白露。たそがれいそぐ。やどりゆかしき。かさねすしよ。

●むつかしげなる大路の橋を見渡し給へるに、此家の傍に楡垣といふもの新しうして、上は半部四五間ばかりわげ渡して廉なともいと白う涼しげなるに、なかしき顔つき透影敷多見えて覗く。立ちまよふらんしもつ方思ひ遣るに、あながちにたけ高さ心地ぞする。いかなる者の集へるならんと、やうかはりて思さる。御車もいたうやつし給へり。さきもおはせ給はず。誰と知らんと打解け給ひて少しさし覗き給へれば、門は蕪のやうなるを押しあげたる、見これのほどなく物はかなきすまひを、哀に

いづこかましてと思ほしなせば、玉の臺も同じ事なり。きりかたつ物にいと青やかなる葛の、心地よげに蔓ひかゝれるに、白き花ぞおのれ獨ふみの眉開けたる、遠方人に物申すと獨ごちたまふを、御隨身ついで、彼白くさけるをなん、夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲き侍りけると申す。げにいと小家がらにむつかしげなるわたりの、このもかのもあやしう打よるほびて、むねくしからぬ軒のつまごに、はひまつはれたるを、口惜の花のちぎりや。一ふさ折れてまわれとのたまへば、此おしあけある門に入りて折る。さすがにされたるやり戸口に、黄なるすよしのひとへ、唇長く着なしたる童の、なかしげなる出でて打まねく。白き扇のいたうこがしたるを、それにおきて参らせよ。枝もなまげなめる花をとてとらせたれば、門あけて惟光の朝臣のいできたるしてたてまつらす。

(紫式部)

しげなる小家のつまにはひまつはりて、ぶみの眉ひらけたる夕顔の、白く見ゆるこそげにあはれなれ。我もひとふさ折りてとこはまほしきを、馬のはしりゆくはた、くちをしくて。

(弘綱)

(清少納言)

●ものあやめも見ぬあたりの、小家がなる軒のつまに、咲きかゝりたる花の名も、えならず見えし夕顔の、なり過ぎじとあだ人の、心の色は白顔の、情おきける言の葉の、未をわはれど尋ね見し、聞の扇の色葉に、たがひに秋の契とは、なまよりし東雲の、道の迷の言の葉も、此の世はかくばかり、はかなかりける蜻蛉の、命懸けたる程もなく、秋の口やすぐ暮れば、さき、番の間過ぐる故郷の、松のひびきにもおそろしく、風にあたまく燈の、消ゆと思ふ心地して、あたりを見ればうば玉の、闇の現の人もなく、如何にせんとか思河、うたかた人は息

消えて、歸らぬ水の泡とのみ、散りはてし夕顔の、花は再び吹かめやと、夢に來りて申すとて、有りつる女も、かき消すやうに失せにけり。

(謡曲、夕顔)

●面白の氣色やな。そよる浮き立つ我心、波も玉散る白露の、夕顔の花の色、五條の橋の橋板を、とよろくと踏み鳴らし、音も静に更くる夜に、通る人をぞ待ち居たる。

(謡曲、橋辨慶)

●とり出せば、なりふし黄昏に、ほのく見れば夕顔の、花をかきたる扇なり。此上は惟光にしそくめて、ありつる扇御覽せよ。たがひにそれぞと知られ白扇の、扇のつまのかたみこそ、いもせの中の情なれ。

(謡曲、班女)

●御法の聲も聞きし、尼が崎の片邊り、誰住家と夕がほし、おのが儘なる軒のつま、あたり近所の百姓共、茶胸片手に高唱し、(中略)樂みは夕顔閣の下涼み、捨つべきものは弓矢ぞと、云放したる老女の一徹、跡は解し無かりけり。(淨瑠璃、太功肥) ●片山の垣根の目かげほの見えて露にぞうつる花のゆふがほ。(貞經) ●世の中をうしろになせる山里にまづさし

むかふゆふ顔の花。(頼政) ●わたりする遠方人の袖かともみづのに白き夕顔の花。(定家) ●あさでほす賤がはつきなたよりにてまはれてさく夕がほの花。(西行) ●此ころは賤がはひりやまよふらんとなりもおなじゆふがほの花。(契沖) ●枕つくつまの軒にかゝれるはまがきにあまる夕顔の花。(枝直) ●とはでしもそれはしるし遠方のかやがのきばの夕顔のはな。(千蔭) ●いにしへのひまごかけんすまひさへ思ひやらるゝ夕がほのはな。(景樹) ●久方の天のよまづら花さきてふせやの窓のつきにかゝれり。(有功) ●住の江の浦のとまやの垣根には波とぞ見ゆる夕がほの花。(幸文) ●夕がほや白き鶴垣根より。(其角) ●夕顔や一挺残る夏豆腐。(許六) ●夕顔や何某の院の裏借屋。(岷青) ●夕顔や黄に咲いたるもあるべかり。(釋村) ●夕顔のまともも足らぬ垣根哉。(太祇) ●夕顔や似氣なき人の里わたり。(剛更)

●夕顔や秋は色々の瓢かな。(芭蕉) ●夕顔に雑炊あつき露屋かな。(越人) ●夕顔や寂しう凄き葉の並び。(惟然) ●夕顔やくれと呼ばるゝ油賣。(几黄) ●夕顔や月の鏡もまたでさく。(也右) ●夕顔もはやからくとなりひまごなるほど冬の風はかまし。(下道) ●物申と夕がほみればとひきたる人はいづこのたそがれの頃。(三曾良) ●たそがれにほのくみゆる夕がほはかきのもとなる花の白妙。(棍人) ●ふり袖のむかしもやうかうすかきに白あかりなる夕がほの花。(正子) ●賤が家のけぶりふすべる夕暮に花のかしなき垣の夕がほ。(三笑) ●咲くからに雪か氷かしら獄かさておもしろき夕顔のはな。(常持) ●五條あたり小家のかやも五六月つるにかゝれる夕がほの花。(嘉利種) ●行末を思ひしりてや花だにもみなみをもきて咲ける夕顔。(仲照) ●涼しきは賤がはだかのあばらやにむれまてまよふ夕顔の花。(澄丸) ●白はたとみし賤が家の軒に咲く木曾にゆ

- かりの夕顔の花。 (竹代風)
- 五條には夕がほらしい宿なし。(川柳)
- 夕がほの中へかぼちやはまかなくに。(同)
- 夕顔の夜露でてうら二布ぬれ。(同)
- 五條の橋へ夕顔の足駄がけ。(同)
- 夕顔見た西施も今朝は無鹽君。(同)
- 離につんと夕顔が咲き揃ひ。(同)
- 夕顔を枕にてうらひつばし。(同)
- 夕顔の裏に挨拶はならぬ。(俚諺)

「ゆふだち」夕立

驟雨。俄爾。沛然。電影。黒雲。濼々。送涼。倒海。傾河。雲すぐる。はせわたる。かさやどり。音にちかづく。山めぐりする。残の露。かたへはれゆく。にごる谷川。入日をうつつ。里わきてゆく。

● 殿へまわりたれば、夏によりたる道水、清う流らせて、石のたてかた、かどある縁よしある梢どし、色をふかめて、ちり残りたる卵の花垣も哀おほゆるを、かたへには

くたに、しもつけ、さ百合、撫子今を盛と色をまじへて、露涼しげなる、とりんぐいはん方なきに、夕立ひとしきりして、光のれたる月影、浪にうかべるに、釣殿のもとにて、水雞の打たふきたるが、耳にさしあてたるやうなるぞ、昔物語のこゝちして、いと艶におほえけるかし。(濱臣)

● 村雲のまよひも、唯ならぬ空の氣色は、待ち渡りし夕立の、降りくるにやあらんと嬉しき物から、今日しもまりがたき事の有りて物に行かんの心なれば、ふるとしとく晴れれかしと思ふに、山風吹き出で、一しきり降り来る雨、いと涼しう、文机の上の反古どもを吹き散したるが、かつくぬるゝは、佗しき物から、例のをかしうなん。(尊澄)

● 俄に立ち出づるむら雲のけしき、いとあやにくにて、おどろくしうふりくる雨にそひて、さと吹く風にとるも吹きまどはして、空くらさ心地す。(紫式部)

● 朝日さす高嶺の深雲空晴れて、野は夕立の富士嵐、雲とおたりたつ田子の浦に、船さしとめて天少女の、通ひなれたる磯の姿、よるべ何くと定むらん。げに心なき海士な

れども、所からとて面白きよ。松風の音づれのみ身に知るや、住む蘆の屋の窓の雨打よする駿河の海は名のみにて、波しづかなる朝なきに、雲は浮島が原なれど、風は夏野の深緑、湖水にうつる雲までも、妙なる山の御影かな。(謡曲、富士山)

● 皆とよ様のお蔭故、私共迄思はぬ立身、お前も嗟かし嬉しかる。ヲ嬉しい段か。あんまりで夢ではないかと思はるゝ、人の果報のつく時と、夏の日の夕立は、何時であらうも知れぬと、睡まじげなる其ひまに、五斗は返辭かき認め。(浄瑠璃、腰越状)

● 露すがる庭の玉さ、打なびき一村過ぎの夕立の雲。(公經)

● 十市には夕立すらし久堅の天のかぐ山雲がくれゆく。(後頼)

● 川上に夕立すらしみるくづせくやなせのさなみ立さわぐなり。(好忠)

● 片岡のおふちなみより吹く風にかつぐそぐ夕立の雨。(後鳥羽院)

● よられたる野もせの草のかげろひて涼しく盛る夕立の空。(西行)

- わへゆふだちの空。(契沖)
- 鳴神の音羽の山はくもはれて關の、こなたなすぐる夕立。(枝直)
- みるがうちに雨きほい来て夕立のくもにかくる、嶺の松原。(蘆庵)
- ふた千山みねに北行雲見えてゆふだちすなりあしの海づら。(春海)
- 筑波ねに雲見えそめて時のまにすみだ河原をすぐる夕立。(千蔭)
- 夕立や雲ちひさき草の原。(其角)
- 夕立に種ながしけり大根島。(許六)
- 撫子を打つ夕立やさもあらしき。(杉風)
- 君王の夕立ほめる盛かな。(召波)
- 夕立や日は奈其坂の片おもて。(夢水)
- 夕立にふと木犀の匂ひけり。(升六)
- 夕立や東ねすたる藍の花。(乙二)
- 夕立や門脇どのゝ人だまり。(蕪村)
- 夕立や鐘聞きはすすの夕。(史邦)
- 夕立の又や何處に下駄はかん。(鬼貫)
- 夕立のはれゆく空のひとふりはくも切丸といふべかりける。(はね俵)
- 夕立の雨に追はれてにげ水の雲を霞が關の旅人。(物染)
- 船の帆のはらめる風に夕立の雲のはやめ

やふり出しけん。(赤真)

● 天に口ありとしきけばあつさにてのみたる水をはくか夕立。(只取)

● 薄曇のふならぬ雲のあしばやにゆきよの人もかける夕立。(孫彦)

● 男なら出て見よ雷にいなびかり横にとぶ火の野邊の夕立。(東作)

● 夕立は夏と秋との引越にやとはれてふるはこび雨かも。(文斗)

● 立寄りてしのげば軒のつまちかき柳もすそをさしほる夕立。(築丸)

● 幼きをつれてぬれじと其親もこまかぶり行く夕立の雨。(月成)

● ぬれまじといそぐ八里の峠よりみかしまにかゝる夕立の雲。(琴成)

● 夕立やふるきたためしもありの穴つゝみなくづせ天の川水。(馬蹄)

● 夕立にふげんばさつは徒で行き。(川柳)

● 夕だちの匂にあやまつたいなりさま。(同)

● 夕立に五所紋をみなくはれ。(同)

● 夕立のしりかへを食ふ長つ尻。(同)

● 夕立や草履で行ける所まで。(同)

● 夕立にいざり抜手を切つてかけ。(同)

● 夕立は急がぬ人の先をふり。(同)

● 雨やどりはるか向ふは蟬の聲。(同)

● 夕立にこまつて下戸も十二文。(同)

● 十徳と十二ひとへでいゝしめり。(同)

● 夕立の雨、一降り馬の背や、わけて涼しき川岸の、柳の枝に寄り添へて、何時しか色に鳴る雷の、音さへ遠き筑波ごち、残る暑を川水に、流す上手の歸り船、草の葉に宿りし月も小夜風に、情や溢れてばらばら、露が華か華か露が、濡れて色ます野邊の色、意氣なお方に釣合はぬ、野暮のやの字の屋敷者、十の年から、お小性を、勤め徹してお側役、二十は越せど色戀も、提きびしく白玉の、露にも濡れしことはない。跡は應答も長づきの、油香りてなまめかし。惚れだお方に手を取られ、飛び立つほどの嬉しさは、蚊帳より胸に涙うちて、剛さう寫る顔の色、また一陣降る雨の、中を結ぶの雷や、恐きに抱き大河の、深き梁りぞ結びける。(俗諺)

● 白雨やさつと降り来る寝屋の戸に、ピカピカ、オ、怖わ、雷さんは怖けれど、妾の爲には出雲より、結んだ縁の蚊帳のひし、情くや晴れゆく夏の空。(同)

●夕立は馬の背を分ける。(狸跡)
 ●奇雲挟雨至。道以千里風。乾坤白浩々。萬里噴空中。我居寶嶽巖。譬彼冥與龍。陰氣動破壁。霹靂青深々。自傾一壺酒。魂歸離錦錦。夢中觀海日。意氣始得雄。(張船山)
 ●驟雨飛神霄。迴風萬馬強。跳珠千瓦碎。止水一庭方。幻影飄心現。空華許坐忘。怒雷開頃刻。林杪露斜陽。(同)
 ●黑雲翻墨未遮山。白雨跳珠亂入船。卷地風來忽吹散。望湖樓下水如天。(蘇東坡)
 ●橫風吹雨入樓斜。壯觀應須好句誇。雨過湖平江海碧。電光時掣紫金蛇。(同)
 ●中空湧出兩浮圖。更有伽藍俯九衢。十二帝陵低不見。黑風白雨滿南都。(竹外)
 ●白雨映寒山。森々似銀竹。(李白)
 ●驟雨落河魚。(杜甫)

〔ゆふひ〕夕日

夕陽。落日。斜陽。餘輝。西沈。返照。落景。歸舟。宿鳥。晚照。のころ日。夕まぐれ。入りあひ。夕づく日。

●其春、世中いみじう騒がしうて、まづ星のわたりの月影、あはれに見し乳母も三月朔日になくなりぬ。せんかたなく思ひ歎くに、物語のゆかしさも覺えずなりぬ。いみじく沈暮して見出したれば、夕日のいと花やかにさしたるに、櫻の花残りなく散りみだる。(孝標女)
 ●此間いと遠くして、ゆけども向は同じ道のみ見え、とるゝに、あやしき股のやの二つ二つほど見ゆるもさびしく、行くほどに、日もはやかたむきたれど、名煙の色雲にのこりてあかう、あるは紫に棚引くぞ、あすこそ猶空晴れなん、旅の道すから、雨をしらで行きてんなど、はやつきぬ願を起すも、はかなし。(定信)
 ●あなたの庭より覚して、曲流水盤などへ水を沃するは、夏を宗とすればにや。四目笹にくさ芳宜の時知りかほなる、御影石による小松の、挿頭がほなる、夕日を抱く寒蟬は、いづれの梢ぞ。朝露に消ゆるほたるは、かしの草なり。(馬琴)
 ●十二日の朝、江尻の宿を出づ。たれも旅なれば、府中とて、心とまらず。あべ川とやらんも過ぎ、まり、川にのぞめば、夕

日や錦、かの水鳥や鴨、覆けあげて渡るや、葛粉のすそわねてうらみながらに、うつの山にかゝる。(澤庵)
 ●秋は夕ぐれ夕日花やかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。(清少納言)
 ●夕ぐれのほどに忠海につく。夕日はなやかにして、林樹夕麗をわかつとひとりことす。(蜀山人)
 ●樓門より遙にのぞめば、南風に襟をひらき、平原のかた遠く目を極むれば、夕陽に眉をしがむ。(惟中)
 ●尋ね見る都に近き名所は、まづ名も高く聞えける、雲の林の夕日影、うつるふ方は秋草の、花紫の野を分けて、賀茂の御社ふし拜み、糺の森も打過ぎて、歸る宿りは在原の、月やあらねとがこちける、五條あたりのあはみやの、主も知らぬ所まで、暮れ訪ひてぞ暮しける。(諸曲、夕顔)
 ●げにや胸は富士、袖は清見が關なれや、烟も浪も立たぬ口も、なしとよみしことわりや。かくて夕陽たえど、雲のけ富士おろしの、音もはやくればはとり、あやじ

き人と見えつるが、其まゝやがて祐成の、葦所に立ち寄り草むらの、露消えんとなりはて、ゆくへと見えたりにけり。(論曲、伏木曾我)
 ●夕日西に絶え残つて、鳥の聲かすかに、群鳥の末はほのかなる、山は富士、浦はおりたつ田子の海、浮島がはらひかたたる草の露、しげみが原の狩衣、秋すよしき氣色かな。(同)
 ●世々の歌人も、心を染めてもみち葉の、龍田の山の朝霞、春は紅葉にあらねども、たゞ紅色にめで給へば、今朝よりは、龍田の櫻色ぞ遺き、夕日や花の時雨なるらんと、讀みしも紅に、心を染めし妹歌なり。(諸曲、龍田)
 ●橋のけしきを見渡せば、雲にそびゆる粧の、たとへば夕陽の雨の後に、虹をなせる姿、又弓を引ける形なり。(諸曲、石橋)
 ●主人の敵討たん爲、鑿々城を明け渡す、是非もなき世の有様と、思へば裂り裂く胸の中、一味の諸士も一同に、昨日迄も今朝迄も、旭に輝き夕日に映する、御殿々々の結構も、今を限りの見納めと、名残惜しげに視返り、涙ながらに出で、行く、世

の盛衰をぞあぢきなき。(淨瑠璃、伊呂波實記)
 ●まだしらぬはら野の末の夕づく日はしなくれを慮さすまで。(信實)
 ●みなかみや雨のなごりの山みえて夕日にうかぶうぢの川舟。(春滿)
 ●雨はれて夕日うつらふ山本に一すぢむかふをちのかはみづ。(浦蓮)
 ●見るもかなし木すゑの紅葉もろくちりて夕日すくなき秋風の山。(實文)
 ●さまざまに春のなればあはれなる西の山のはかすむ夕日に。(定家)
 ●夕づく日やまのあなたに成るまゝにひかりのこれるやまのはのそら。(順徳院)
 ●夕日さす外山のすゑに見し雪はやがて軒ばのしぐれなりけり。(枝直)
 ●この葉ちる山路こゆればしぐれゆくあとより匂ふ夕づく日哉。(千蔭)
 ●木がらしのしもみぢも雲もしぐれ来て翠の入口の影ものこらず。(宣長)
 ●勢も夕日にうごくさくら哉。(許六)
 ●花に氣のとろけて戻る夕日哉。(杉風)
 ●屏の棟の夢や穂に出て夕日影。(文章)
 ●發行くや夕日江に入る水の文。(几董)

●馬は濡れ牛は夕日の村時雨。(杜園)
 ●松島や松の夕日を初時雨。(雅愷)
 ●さゝ鳴や夕日の透る葦の中。(里丸)
 ●鶺鴒や夕日の残る杉のうら。(也有)
 ●夏山や杉に夕日の一里塚。(芭蕉)
 ●竹の葉やひらつく冬の夕日影。(惟然)
 ●やぶ入りの二日になりし夕日哉。(大江丸)
 ●萬歳の鳥帽子さげ行く夕日哉。(關更)
 ●わか星のやがてみえなん村雲のたつ山の端に夕日うつづく。(茂葉)
 ●ちりちりと鳥居にのこる日のかげのなほもあつたの夏の夕ぐれ。(天樂)
 ●とりいれぬ人ぞうらめし妹が門夕日の残る庭の錦木。(樂聖庵)
 ●名にめでさきくと申すもことわりやの、人の花のあとおさへには。(地入陽)
 ●舞姫のかへす扇は生酔の顔の夕日を招くとやみん。(稜成)
 ●都鳥すむ川岸にもえ出づるあしも夕日に赤く見えけり。(永俊)
 ●蘇命路の山は夕日で色を増し。(川柳)
 ●瀬田の橋様に夕日さす縫箔や。(同)
 ●虹の橋夕日の渡る片時雨。(同)

●竹風呼ぶ顔は夕日にさくら色。(同)
 ●木曾山朝日栗津は夕日なり。(同)
 ●兵庫の築出し夕日には花が咲き。(同)
 ●コイツへんちさ福るくの夕日影。(同)
 ●夕日はまねけど朝日にさえる也。(同)
 ●木曾殿も栗津が原は夕日なり。(同)
 ●矢の如し夕日の野を朝日當て。(同)
 ●げに有難き法の庭、笙笛きんく、夕日の雲に輝きて、菩薩も愛に來迎のよそほひは、目前の奇特たへなりや。(俗語)
 ●晴るゝ嵐に誘はれて、飾磨に歸る帆はちら／＼と、夕日斜に高砂の、松は千歳のいろなほふかく、引く人多き手柄山。(同)
 ●夕陽秋更好。激々蕪關中。極浦明。殘雨。長天念。遠鴻。僧留留。中樹。漁網透。疎蓬。莫恨清光盡。寒蟬即照空。(郊谷)
 ●向夕江天迥。微々接。水平。帶帆歸。極浦。隨客上。荒城。雲外僧看落。山西鳥過明。何人對。幽景。再々敗沙井。(宇照)
 ●出關愁。暮一沾裳。滿野蓬生古戰場。孤村樹色昏。殘雨。遠寺鐘聲帶。夕陽。(嵐繪)
 ●門前不改舊山河。破。殘僧輕馬伏波。今日獨。歌舞地。古槐疎冷夕陽多。(禮賢)

●絲楊連。水水連。天。週日清遊不繫船。醉後更期。清夜月。雷機移入夕陽烟。(虛二)
 ●孤村流水傍。曲運入。僧房。修竹重陰合。清幽到。夕陽。(丈山)
〔ゆみ〕弓
 青檀。黑幹。六鈞。桑弓。勢曲。まゆみ。つきゆみ。あづさ弓。しらまゆみ。あたゝらま弓。天のかご弓。ゆづる。ゆする。みとらし。
 ●舟の中より熊手難鎌をもちて、判官の甲のまゝるにかり／＼と、打かけ／＼二三度しけれども、味方の兵ども、太刀長刀の先にて、打拂ひ／＼攻め戦ふ。されども如何はし給ひたりけん、判官弓を取り落されぬ。うつぶし鞭をもちて振り寄せ、取らん／＼とし給へば、味方の兵共、弓捨てさせ給へ／＼と申しけれども、遂に取りて、笑ひて返られる。老どもは皆爪はじきをして、縦令千疋萬疋にかへさせ給ふべき、御とら

しなりと申すとも、いかでか御命には替へさせ給ふべきかと申しければ、判官弓の惜しきにもとらばこそ、義経が弓といはゞ、二人しても張り、もしは三人しても張り、叔父爲朝などが弓のやうならば、わざと落ちて取らすべし。庭弱たる弓を敵の取り持ちて、これこそ源氏の大將軍九郎義経が弓よなど、嘲哂せられんが口惜しさに、命に替へて取りたるぞかしと宣へば、皆又是をぞ感じける。(平家物語)
 ●義朝重ねて、さては途の弟ごさんなれ。汝兄にむかひて弓引かん事、冥加なきにあらずや。且は宣旨の御使なり。禮儀を存せざば、弓をふせて降参仕れとぞ申されける。爲朝の兄に向ひて弓引かんが冥加なしとは理なり。正しく院宣を蒙りたる父に向ひて、弓引き給ふは如何と申されければ、義朝道理にや語られけん、其後は音もせず。(保元物語)
 ●顯信召に隨ひて、將軍の御前に参りたり。將軍本間が矢を取り出して、此矢本の矢所へ射返され候へと仰せられければ、顯信畏りて、叶ひ難きよしをぞ、再三辭し申しける。將軍強ひて仰せられける間、辭す

るに遠くして、巳が船に立かへり、大威鏡に照らしたる背の緒なしめ、銀のつく打ちたる弓の、反高なるを帆柱に當て、さりと推し張り、船の舳崎に立ちあらはれて、弓の弦くひしめしたる有様、誠に射つべくぞ見えたりける。(太平記)
 ●桑の弓蓬の矢の政、まことにめでたかりけり。あら有りがたや／＼。いさや我等も、けいやうが射術を傳へけん、弓張月のやましくも、雲の上まで名を上げる、弓矢の家を守らん。武士の八十氏川の流まで、水上清しや弓張月、あはれめでたかりける、治る御代の時とかや。釋尊は、大悲の弓に智慧の矢をつまよつて、三どくのねむりを驚かし、愛染明王は弓矢を以て、陰陽の姿をあらはせり。されば五大明王の、文珠は養由と現じて、れいなとつて弓を作りあんせいなあらはして矢をなせり。又我朝の神功皇后は、四土の逆臣をまりぞげ、民衆舞と榮えたり。應神天皇八幡大菩薩、水上清き石清水、流の末こそ久しけれ。(謡曲、弓矢立合)
 ●鶯の花踏み散らす細腰は、大長刀もあらばこそ、花月が身に敵のなければ、太刀か

たなはしたず、弓は射んがため、又かゝる落花狼籍の小鳥をも、射て落さんが爲ぞかし。異國の養由は、百歩に柳の葉を垂れて、桃に百矢を射るにはづさす。我は又花の楯の爲を、射ておとさんと思ふ心は、その養由にも劣るまじ。あら面白や。それは柳これは櫻、それは雁これは鶯、それは養由これは花月、名こそ替るとも、弓に隔はよもあらじ。いで見物せん驚とて、履いたる足駄をふんぬいで、大口のそばを高くとり、狩衣の袖をうつつ肩ぬいで、花の木陰にねらひ寄りて、よつびきひやうと、射ばやと思へども、佛の戒め給ふ、殺生戒をば破るまじ。(謡曲、花月)
 ●夫れ弓と申すは本末に、烏兎の姿を像り、日月を爰に顯はし、淨穢不二の秘法を表す。されば愛染明王も、神通の弓を張り、方便の矢を爪よつて、四覽の軍を破り給ふ。されば我等も之を持ちて、引かぬ弓はなまぬ矢にて射る時は、當らずしかしはづまよりけりと、かやうによむ歌もあり。(謡曲、放下僧)
 ●それ弓矢といふは神武不殺の威徳を表し、物に疵付け殺さねども、弦音斗りにて

化生變性を亡す事、たとへば佛神の札守にて、惡魔を拂ふに異ならず。かたじけなくも天照太神。天のかご弓羽々矢をもつて、惡神をしづめおはします。此理をさとして、神道の箭矢と號し、佛道にては大慈悲の弓、智慧の矢ともさるとなり。凡大將たる身の弓は袋劍を箱に治めながら、東南西北の敵を鎮め退くる。一張弓の理に至るを、精兵の射手とも、又は文武兩道の弓取とも是を名付けたり。見よ／＼こよひの變性、惟茂矢さきの疵は付かず、只一矢に射て落し、那等に切りとめさせたる、惟茂の心底を察するに、射殺すは易けれど、御殿の棟に矢を射付け、血をあやす恐を存じ、矢の根はそつとゆき捨てたると覺えたり。(淨瑠璃、紅葉狩劍本地)
 ●うちやましあだちのみねのそりま弓そりはてましたひきかへすらん。(倭成)
 ●わかれにしたつかの弓のしらとりなきのかはゆすりこひぬぞなき。(信賴)
 ●いかでかはあづさのま弓つるきれておとせぬ人をうらみざるべき。(光後)
 ●いかにせんしなのま弓としをへてなびかほほどの心づゝさな。(家良)

●つるなれぬあらしの弓のそりだかみきて
いたづらにひく人しなし。(知家)

●いつはあれど秋の名におふつき弓はひく
つまおともまやけかりけり。(千陸)

●あづさ弓真弓もあれど機弓のいさをしき
名の神代しぞ思ふ。(春滿)

●なままれる御世のまもりあづさ弓ひき
なゆるべそのよふの道。(春海)

●やしまぐに今もむかし跡とめてゆはず
のみつぎたゆるよもなし。(同)

●このはのあらしのまゆみ木すまもいっ
か心のよるにまかせん。(蘆庵)

●柳寒く弓は昔の懸清也。(其角)

●綿うちやかよしは弓を捨つるころ。(也有)

●秋風やしら木の弓に弦はらん。(去来)

●梅ふるし或は弓に杖のそり。(野坡)

●驚や弓にとまりて法の聲。(風雲)

●袋から出るも目出たし弓始。(昌房)

●弓はじめ胸ほのめく朝日哉。(清好尼)

●弦音に松のひやくや弓始。(羊凡)

●算の時よりしるし弓の竹。(去来)

●つはしのゝ氣ははり弓の陣中にしのびの
つらなみだすかりがね。(船盛)

●よりもこの梓の弓をひきいれて百一升は
高きぼし哉。(白人)

●ひいふつとすいはの征矢の高なりはぶら
さかんなる響なりけり。(すが留)

●花をみるまとはづれて揚弓のあたり静
けき今日の春雨。(石季)

●たしかにも的にあたつたつが弓引しほ
りつゝはなつ矢束は。(影垣)

●給のかたちとしはしなりけり雀の小弓
ひきしほるなり。(打摩)

●めでしれ袋の弓を出ほしにいだせども
猶なまされぬ代は。(北彦)

●宮人もまゆなつくりてならひけり桑の弓
とる春のはじめは。(清輔)

●煤取つて弓は袋になまめたりせめくる老
を何でふせがん。(橋洲)

●遠ばえもならぬと弓の先で赤き。(川柳)

●弓ながす日も鎌くらはふとこころ手。(同)

●弓はぶくみ先三弦をはりかへて。(同)

●一長屋敷わけのしたる梓弓。(同)

●はま弓は一家の義理の丈くらべ。(同)

●弓杖でやれひやつこい。(同)

●辨慶に登木かりで弓をとり。(同)

●年の市弓は手桶になまめたり。(同)

●逃げあしむこ破鏡弓に射とめられ。(同)

●棟上の弓はきやりで引しほり。(同)

●顔を見い見いよつびいで兵と射る。(同)

●勝どきの聲なりやんで弓の式。(同)

●弓でした振舞水は名が高し。(同)

●あまりに山を遠く来て、雲又わが里を埋
む。昔これ人間安執の靈騁の、ひきはかへ
さじ梓弓、安からぬ身の假の世を、思ひす
つるに身こそやすけれ。(俗語)

●君はなげしや、荒木の弓よ、挽手あま
た、蓬瀬のあらは、はつと答へてよんそ振
りよ。(同)

●白眞弓のまゆみの、そるべきはそらい
で、八十の翁の戀に腰をそらいた。(同)

●高鳥死して良弓藏る。(俚諺)

●弓するとも黒鳥を射ず。(同)

●他人の弓は彎くな。(同)

●弓と弦との違ひ。(同)

●養由に弓を音ふ。(同)

●弓折れ矢盡く。(同)

●弓を袋に納む。(同)

●楚有養由基者、善射。去柳葉者百步
而射之、百發百中。左右皆曰善。有一人
過曰、善射、可教射也矣。養由基曰、人
皆曰善、子乃曰可教射、子何不教、我
射之也。客曰、我不能教、子支左風右
夫射、柳葉者、百發百中、而不以善息、少
焉氣力倦、弓撥矢鉤、一發不中、前功盡
矣。(戰國策)

●弓如滿月、向江開。箭掃寒潮、捲浪
迴。水上層巒、深避。我皇元為射蛟來。
(逸頁)

●弓力誰嘲札不穿。南軍落、戰膽先寒。開
收、征月波開影。挂向、身邊、萬葉看。
(山陽)

●霜重鷹膠勁。風高月影圓。鳥飛隨帝、驚
瓜落逐鳴弦。(楊師道)

●天之道、其猶、張弓乎。高者抑之、下者
舉之、有餘者損之、不足者與之。(老子)

●臂強倚壁弓力軟。眼明猶識陣雲高。
(曹翰)

●將軍膽氣雄。臂懸兩石弓。
(杜甫)

●三尺角弓兩斛力。
(同)

●弓鳴箭落。
(李嶠)

●形弓習兮。受言識之。(詩經)

〔ゆめ〕夢

枕上。魂交。南柯。春草。華胥。
槐園。蝶化。神交。熊羆。幽窓。
むすぶ夢。ゆめがたり。ゆめの
ま。うたゝねの夢。ゆめのうさ
橋。おもいねの夢。見はてぬ夢。
五十年の夢。さめてあやしき。
むすびもあへぬ。

●昔漢朝にして富貴を願ふ客あり。楚國の
君、賢才の臣を求め給ふよしを聞きて、恩爵
を食らんとために、則楚國へぞ赴きける。路
々歩みつかれて、邯鄲の旅亭に暫く休みけ
るを、呂洞賓といふ仙術の人、此客の心に
願ふ事暗に悟りて、富貴の夢を見する一の
枕をぞかしたりける。客此枕に寝て、一睡
したる夢に、楚國の侯王より勅使來りて、
客を召さる。其禮其贈物甚厚し。客悦びて
則楚國の侯門に參するに、楚王席を近づけ
て、道を計り武をよひ給ふ。客答ふる度ご
とに、諸卿皆頭を屈して旨を承けければ、
楚王斜ならず是を貴寵して、將相の位に昇

せ給ふ。かくて三十年を経く後、楚王かく
れ給ひける刻、第一の姬宮を客に妻せ給ひ
ければ、從官使令、好衣珍膳、心に叶はず
といふ事なく、目を悦ばしめずといふ事は
なし。座上に客常に滿ち、樽中に酒空しか
らず。樂身にあまり遊日を盡して、五十一年
と申すに、夫人ひとり太子を産み給
ふ。楚王に位を繼ぐべき御子なくして、此
孫子出で來りければ、公卿大臣皆相計り
て、楚國の王になし奉る。變夷率服し、諸
侯の來朝する事、只秦の始皇の六國を併せ、
漢の文惠の九夷を順へしに異ならず。王子
既に三歳になり給ひける時、洞庭の波上
に、三千餘艘の船を浮べ、數百萬人の好客
を集めて、三年三月の遊を給ふ。紫雲の
老將は錦纜をとぎ、青蛾の女御は檀歌を唱
ふ。波をさくや大梵高蓋の月、喜見城宮の
花も見るにたらず、甞ぶべからずと遊び戯
れ舞ひ誇りて、三年三月の歡娛已に終りけ
る時、夫人三歳の太子を懐きて、船に立ち
給ひたるが、踏みはづして、太子夫人諸共
に、海底に落ち入り給ひてけり。數萬の侍
臣あわて一同にあれやくといふ聲に、客
の夢忽にさめてけり。借夢中の樂を計れ

ば、適に天位五十年を経たりといへども、
 覺めて枕の上の睡を思へば、僅に午炊一貫
 葉の間をすぎざりけり。客こゝに人間百年
 の樂も、皆枕頭片時の夢なる事を悟り得て、
 是より楚國へは越えず、忽に身をすて世を
 過ぐる人となりて、遂に名利に繋がるゝ心
 はなかりけり。是を揚龜山が日月を謝する
 詩作りて曰く、

少年力學志須張。得失由來一夢長。

●試問部歌枕客、人間幾度熱黄葉。
 是を部歌の夢とは申すなり。(太平記)

●行々おしへば、すぎ來ぬる此あひだの山
 河は夢に見つるかうつゝにみつるか。きの
 ふとやいはんけふとやいはん。昔を今とお
 もへば、我身老いたり。今を昔と思へば我心
 わかし。古今をへだつるものはわが心の中
 懐なり。生死涅槃猶如昨夢といへるもあは
 れにこそおぼゆれ。昨日すぎにしあとは、
 けふの夢となり、今日此所をすぐる、明日
 いづれの所にして今は昨日といはん。誠に
 これ過ぎぬるかたの歲月を、夢よりゆめに
 うつりぬ。きのふけふの山路は雲より雲に
 入る。(光行)

●節分の夜寶船に一年の幸を待つより、一

富士二鷹の品定め、これらは和朝のならば
 して、唐人の耳には、日本人の寐言なる
 べし。されば夢の得失を思ふに、かの部歌
 の枕は、あまり古ければさらにははず、蝶
 となりて漆間にたはふれ、蟻にひかれて桃
 園にあそぶ。かしこき雲の上人は、うば玉
 の夜の衣をかへしては、銀いらすの戀をも
 たくむらん。あるはかつらぎの神にもかぎ
 らず、晝は見しらの神にも、七日満するあ
 けがたの枕上には、まみえさせ給ふなる。
 かゝるたつとき夢の昔を、佛はいかなれば
 例の世をはかなみて、夢幻泡影のたとへ
 とより、人は現も夢の部に入れて、世中な
 いとふまでこそうたてけれ。とても夢現の
 おなじものならば、夢を現にぞかへ入れ
 て、起きてたのしみれてたのしまば、五十
 年の月日をわたるも、百年算用にはあふべ
 きなや。鬼神に横道なし、傾城にまことな
 し、聖人に夢なしとは、いつの世に誰か定
 めたるぞ。鬼神は聞いてよるこび、傾城は
 聞いて腹たつらむも、聖人ばかりは何とも
 思ひめさす。さるは冷にも熱にもならね
 ば、どちらでもよしとの御こゝろこそ、世
 にありがたけれ。(也有)

●君は夢にだに見ばやと思しわたるに、此
 のほうじ玉ひて、又の夜の外に彼のありし
 院ながら、添ひたりし女のさまも、同じや
 うに見えければ、荒れたりし所に住みけん
 ものゝ、われにか入れけんたよりに、かく
 なりぬることと思し出づるにも、ゆゝしく
 なん。(紫式部)

●女御更衣の聲ときしは、松風の音とな
 り、宮殿樓閣は、たゞ部歌のかりのやど、
 榮花のほどは五十年、さて夢の間は粟飯の、
 一炊の間なり。ふしぎなりやはかりがたし
 や。つら／＼人間の有様を案するに、百年
 の歡樂も、命終れば夢ぞかし。五十年の榮
 花こそ、身の爲には是までなり。榮花の望
 もよはひの長さも、五十年の歡樂も、王位
 になればこれまでなり。げに何事も一すの
 の夢、南無三寶南無三寶、よく／＼思へば
 出離を求むる、知識はこの枕なり。げに有
 難や部歌の、夢の世ぞと悟り得て、望かな
 へて歸りけり。(論曲、部歌)

●待たれし月も遠方の、待たれし月の遠近
 人に、言葉をかはず法の縁も、隔てなき軒
 端の萩の、露うちばらふ風に亂るゝ、蟬の
 諸聲こゝろ／＼に、鶉の音も明け行く空の、

月の小庭敷夢の、風の手枕袖觸れて、月の
 さむしる風の手枕の、夢は覺めてぞ明けに
 ける。(論曲、空蟬)

●賈府の帳箱を、嵐生が枕肝膽を、赤く久
 松思ひ寐の、夢驚かす初夜の鐘、ふつと目
 覺まし、ハア、嬉しや夢であつたか。したが
 めの賈聲が、生玉で見た歌聲文、取りも直さ
 す、こりや正夢、あれもやつぱり善六めが拵
 へて賣らすのか。引捕へて立ち上りし
 が、イヤ／＼、留立てしたら身に覺が
 ある故にと人の口、エ、惜い奴と云ふも、こ
 つちの得手勝手、所詮死ねとの今の夢、人
 なも世をも恨むまいと、又今更に身の覺悟、
 なうこれ久松／＼と、思はず店へ駈出るお
 染、顔見合して、ヤア久松、そなたの身に
 は別條ないか。お前も夢を、ハアはつと斗
 りにめい／＼が最後の夢の夢合せ、幾瀬の
 思ひぞ辛氣なる。(淨瑠璃、妹背の門松)

●あいと答へて氣は張弓、歌はあはれを催
 せる、時の調子も相の山、吉野立田の花もみ
 ぢ、更科越路の月雪し、夢とさめては跡も
 なし。あだし野の露鳥邊野の、煙はたゆる
 時しなき、是が浮世の誠なる。(淨瑠璃、兜軍記)

●うしとみるもうれしと見るも春のゆめさ
 むるまつまの世とはしりにき。(長流)

●うつゝにはおもひたえぬる昔にもかへる
 は夢のたゞぢなりけり。(蘆庵)

●人の世はゆめにもがもな夢ならはさめて
 むかしにたちかへらまし。(春海)

●過ぎ來つる昔のゆめはかひもなし行すゑ
 かせよ手枕のゆめ。(宣長)

●思ふことなきよにふればおもしろき野山
 におそぶ夢のみぞ見る。(千蔭)

●近くてはあはれうつゝに今昔よりとはき
 ゆめみん我ぞわびしき。(貫之)

●しきたへの枕をだにもかさばこそ夢のた
 ましひしたにかよはめ。(素性)

●夢をなごはかなきものにとふらんみよ
 の事までみゆとこそきけ。(俊成)

●ねぬる夜の夢をはかなみまどるめばいや
 はかなにもなりまさるかな。(小町)

●われはなほ夢のなごりもおぼえけり雨の
 ゆふべも雪のあしたも。(真經)

●夢にみし羽織は綿の入りけり。(野水)

●初夢に猫も富士見る寝やう哉。(一茶)

●夢さつて又一匂ひ背の梅。(風蘭)

●花に埋れて夢より直に死なんかな。

●幟立長者の夢や黒牡丹。(越人)

●夕立や添乳をはなす表屋の夢。(野坡)

●夢によく似たる夢かな暮夢。(風雲)

●つぎ木して花咲くと夢見たり鬼。(成美)

●うき夢を見る鳥あらん泊舟。(志竹)

●抱籠や夢に涼むも竹の蔭。(也有)

●猿のすむ野邊ともしら手旅寝してうまさ
 部の夢をくはれき。(眞顔)

●春雨のくり出す絲の後や先さるはゆ夢を
 結ぶうたゝね。(澄丸)

●いとせめて戀しき花や夢にみん衣かへし
 てねぬる夕べは。(綾人)

●三つばかり夢は結べど秋の夜のまだ四つ
 にだにならぬ長さよ。(乘安)

●莊周も猫におはれてうなされん胡蝶とな
 りし春の日の夢。(赤良)

●ねつおきつする間にもはや節分のみめな
 うつゝか夢の世の中。(一圓)

●ねられれば夢も結ばすいつまでもむすん
 だまゝの待つ宵の帯。(三歌)

●櫻狩てふほど花に戯れて夢にくらせし春
 の一日。(柏葉亭)

●ことしより拍子なほらん天からのめぐみ

なえたる銀泊が初夢。(隣越)
 ●木の木の軒に花やちらちらん樽を枕の春の夢介。(坡柳)
 ●夢に見んしたと真赤なうそをつき。(川柳)
 ●添乳してつひせんだくが夢になり。(同)
 ●初夢を二日にするは得手勝手。(同)
 ●夜の中夢を見て置く瓜の番。(同)
 ●葉標になつて折々あぢな夢。(同)
 ●歌の會供は長屋で夢の會。(同)
 ●たこのむと夢見て出来た子が妾。(同)
 ●折ふしは佐藤兵衛の時のゆめ。(同)
 ●富士の夢下女すり鉢をぶっこはし。(同)
 ●夢さめてそこらあたりをさがして見。(同)
 ●うき世は夢よ、消えてはいらぬ、とかひなふとけて、とかいの。(俗語)
 ●夢はへだてず海山を、越えても見ゆる夜なく。(同)
 ●ゆめの浮世か浮世のゆめか、花も紅葉も一さかり。(同)
 ●東京の夢大阪の夢。(假談)

●夢は寝が食ふ。(同)
 ●一生は夢のうち。(同)
 ●邯鄲の夢。(同)
 ●人有夢仙者。夢身升上清。坐乘二白鶴。前引雙紅旌。羽衣忽飄飄。玉鸞俄銜鐘。半空直下視。人世塵冥々。漸失一鄉國。處。幾分山水形。東海一片白。列岳五點青。須臾群仙來。相引朝玉京。安期瀛門輩。列侍如公卿。仰謁玉皇帝。稽首前致誠。帝言汝仙才。努力勿自輕。却後十五年。期汝不死庭。再拜受斯言。既寤喜且驚。秘之不致泄。誓志居巖窟。思愛捨骨肉。飲食斷糲腥。朝欲雲母散。夜汲沈瀟澗。空山三十載。日望輻輳迎。前期過已久。鸞鶴無來聲。齒髮日衰白。耳目減聰明。一朝同物化。身與費壤并。神仙信有之。俗力非可營。荷無金骨相。不列丹蓬名。徒傳辟穀法。虛受燒丹經。只自取勤苦。百年終不成。悲哉夢仙人。一夢喚一生。(白居易)
 ●黃梁欲然且留連。漫道春歸莫恨然。胡蝶豈知夢中事。蓬々飛隨曉花前。(王半山)
 ●柿葉滿庭紅暈秋。薰爐沈水度春籌。松

風夢與故人一遇。自駕飛鴻跨九州。(蘇東坡)
 ●雕鞍送客雙流驛。銀燭看花萬里橋。三十三年真一夢。那堪寒雨夜蕭々。(陸游)
 ●夢作公侯醒作仙。人間願那能全。從知秦漢真天子。不及盧生一飽眠。(風復)
 ●父兄誰我寤寤初。老不成名夢幾疎。紙帳鐵鑿風雲夜。夢中猶誦少時書。(劉克莊)
 ●胡蝶莊周孰是非。枉齊物我費心機。不如此夢終無覺。趁絮穿花隨意飛。(山陽)
 ●酷憐風月爲多情。選到春時別恨生。倚柱尋思倍惆悵。一場春夢不分明。(張廷)
 ●人間有夢何非蝶。物外忘機即是鷗。(毛胡)
 ●一枕烏聲殘夢裡。半窗花影獨吟中。(放翁)
 ●偷餘殘醉在。和夢到揚州。(穆敬起)
 ●一聲孤雁響。殘夢落清淮。(潘南村)
 ●功名槐國夢。身世輞川關。(徐集孫)
 ●硯石詩能秀。山於夢亦清。(方秋崖)
 ●世事雲千變。浮生夢一場。(王庭筠)
 ●塵土不驚幽夢。乾坤自有同人。(楊慎)

●夢中醉臥臥山雲。(廣全)
 ●茶鼎松風午夢回。(范石湖)

〔ゆり〕百合

山丹。卷丹。
 ひめゆり。さゆり。鬼ゆり。く
 るまゆり。さゆり葉。
 ●百合花は品數おほし。笹ゆり、博多百合、鬼百合、色は異なれども、元來一種にして生得いやしき花なり。たとへば輿車にのれる位なれば、かゝり帶つよくからげあげ、上つりに麗たかくあゆみ出でたる女に似たり。(許六)
 ●姫百合は、十三ばかりなる娘の、後に帶うつくしく結ひたるが如し。(同)
 ●花標前に笑んで聲いまだ聞かず、鳥林下に鳴いて涙盡き離し。實にも盡きぬは花の種、色々なれや紅は、いづれ深見百合、深見草、御心寄せにめされ候へとよ。(謡曲、雲雀山)
 ●今は御身も夏草の、茂みに交る姫百合の、知られぬ御身なり。何なか尋ね給ふらん。(同)
 ●わぎも手が宿のさゆりの花かつら永きひ

くらしかけてすまふ。(長經)
 ●しほみたねまのよはまぢのさゆりばしいりぬるいそは涙の下草。(寂蓮)
 ●わかかれし草ふかゆりもありけりと花さきて、そ人もしるらめ。(釋家)
 ●雲雀たつあつたにおふる姫百合のなにくくとまき我身かな。(西行)
 ●今もなほ草のまそでにかくろへてあらはに見えぬ野邊の姫百合。(知家)
 ●百濟野のちがが下の姫百合のねも、る人にしられぬぞうき。(仲實)
 ●心とくなつのよさゆりさかざらば秋はそれともみやはとがめぬ。(契沖)
 ●あつさにはみだれながらもえならすよにほふさゆりの花の姿は。(筑波子)
 ●たゞひとりと秋の干ぐさにあらそはぬさゆりの花ぞあはれなりける。(千蔭)
 ●夏の野にたれなやましと忍ぶらん葉かくれにさくゆりの花。(春海)
 ●蟻螂の小野とはいはじ車百合。(其角)
 ●百合の花ひたものあちら向きたがる。(支考)
 ●假染に早百合生けたり谷の坊。(蕪村)
 ●百合あまた束ねて涼し伏見舟。(召波)

●草臥や百合になぐさむ風來寺。(曉台)
 ●俯向きし百合に雨降る垣根哉。(蘭更)
 ●山百合や商菜の間より一つ咲く。(白雄)
 ●六月のほむら吐くらん百合に花。(藝太)
 ●百合寒し水戀ふる鳥の鳴くなべに。(道彦)
 ●古家や草の中より百合の花。(成美)
 ●百合咲いてかなしび起る夕かな。(几菫)
 ●鬼百合にかすべき角を蝸牛。(也有)
 ●ほどもなく野邊の鬼百合鬼あざが打消す頃や豆の名月。(長入)
 ●物見にや出でんとすらんかたつぶり車はよする姫百合の花。(風風團)
 ●旅人もにげよ安達が原中に花の唇さける鬼百合。(智恵内子)
 ●大江山今も生野の道の邊に姫百合もあり鬼百合もあり。(菊丸)
 ●夕霧を草にむすびて帯ほどの一すぢ道にさくはかた百合。(萬都彦)
 ●七夕のまた來年と契るにぞ手向し花も笑ふ鬼百合。(和禮)
 ●大江山はるか登りて峰づたひ道さまたぐる鬼百合の花。(夏守)
 ●蓮に似し根をばぼだい種として花の當

- 月にさける姫百合。(卯波澄)
- 山のこしはおびたしくもはかたゆり花のしんたでは、ろびやせん。(茂見)
- ひめ百合のいろを紐ふかきみ野に光る盛は玉そろひなり。(干枝麿)
- ひとつ屋のとし火とみんあだち野にさく鬼百合にやどる盛は。(儘成)
- 心にも笠きてくらすみだれに露も上みの姫ゆりの花。(橘洲)
- 姫百合に水を上げて床の花。(川柳)
- はづかしいやぶに咲いてる百合の花。
- 百合の名は鬼も驚る世の風。(同)
- 黒塚の燈さけし百合の花。(同)
- 一ツ家に唇さけし百合の花。(同)
- 百合の根もお竹がむくと散蓮花。(同)
- 鬼百合も根に歸りては佛の座。(同)
- 黒百合の花が御家のしなれ口。(同)
- つばみ同土替中合の百合の花。(同)
- さまのね姿今朝こそ見たれ、五月野にさく百合の花。(俗語)
- 少陵晚晴。託命在黃獨。天隨自寂寞。松嶽只相蜀。古來滄海人。餘醫被草木。我寄溪東城。關曲見未熟。不應關曲鴨。

更忍累口腹。過從首三級。伯仲眉二陸。顏膚分子蓋。雲苗饋萌竹。冥搜到百合。眞使當重肉。軟温甚醇醜。豈淨豈鴻鵠。食之備有助。蓋皆先所服。詩腸貯微潤。若盤爭餘饌。果堪止淚無。欲縱望鄉目。(王右丞)

●芳園移取偏中林。餘地何妨種玉簪。更乞兩叢香百合。老翁七十尙童心。(陸游)

●接葉有多種。開花無異色。含露或低垂。從風時偃仰。(梁宣帝)

「ゆるし」免

赦免。免許。許容。宥免。放免。大赦。免狀。謝免。恩免。ゆるされ。なだめ。

に候ふ。殊更中宮御膳の御事、承り及ぶ如くんば、成親卿が死靈などきこえて候ふ。大納言が死靈を宥めんと、思召さんにつけては、生きて候ふ少將を召しこ歸され候はめ。人の思ひやめさせ給はり、思しめすことも叶ひ、人の願を叶へさせましまは、御願も則成就して、御産平安、皇子御誕生あり、家門の榮花愈盛に候ふべしなど申されければ、入道相國、日頃より事の外に和ぎて、俊寛や、康頼法師が事は如何にと宣へば、それも同じくは召こそ歸され候はめ。若し一人も残されたらんは、申々御業たるべく候ふと申されたりければ、入道相國、康頼法師が事はさることなれども、俊寛は随分入道が口入を以て、人となしたる者ぞかし。それに所しも多かれ、東山鹿の谷我山莊に寄りあひて、奇怪の振舞どしがありけんれば、俊寛が事は思もよらずとぞ宣ひける。大臣歸りて叔父の宰相をよび奉りて、少將は既に赦免あるべきにて候ふぞ、御心安く思召され候へと申されたりければ、宰相さしあへ給はず、泣くく手を合せてぞ悦ばれける。下り候ひし時も是程の事などや申し受けざらんと、思ひた

りげにて、教盛を見候ふ度毎に、涙を流し候ひしが、不意に候ふとぞ申されける。小松殿にこそ思召され候ふらめ。子は誰とて悲しければ、よく申し候はんとて入り給ひぬ。さる程に、鬼界が島の流人どもの、召しかへさるべき事定りしかば、入道相國の教文かきてぞたうでける。御使既に都をたつ。宰相あまりの嬉しさに、御使に私の使を添へて下されける。

●主上の御方心にくも候はず。但見にて候ふ義朝などこそかけ出すらめ。それも眞中差して射通し候ひなん。まして清盛などが、へるく矢、何程の事か候ふべき。錠の袖にて拂ひ、蹴ちらして捨てなん。行幸他所へならば御免を蒙りて、御供のもの、少々射入する程ならば、定めて駕輿丁も御輿をすて、逃げ去り候はんすらん。其時爲朝参りむかひ、行幸を此御所へなし奉り、君を御位につけ送らせん事、掌を返す如くに候ふべし。(保元物語)

●是は相國に仕へ申す者にて候ふ。扱も此度中宮御産の御祈りの爲めに非常の大赦行はるゝにより、國々の流人赦免ある、中に

も鬼界が島の流人の内、丹波の少將成經、平判官康頼二人赦免の御使をば、某承つて候ふ間、唯今鬼界が島へと急ぎ候ふ。

●此上は老人よ、はや助くるぞ歸れとの、御免されにあづかれば、祇王は父を引き立て、悦の道に歸りけり。げに頼みても頼むべきは、是れ觀音の誓なり。(謡曲、籠祇王)

●だまれ妹尾調多し。汝が様なる不實者に問答無益、まよせん俊寛が免し文は、教經密いて渡さん。硯料紙との給へば、イヤ申し我等は少將平判官二人計り御ゆるしに、入道相國殿の御使、外の義は存せず。急ぎの公用おいとまと、すんと立てば、丹左右衛門引とよめ、是々御邊計りがお使か、兩人承る上は萬端相融入魂も有るべき所、いかめしげに先立ち、ひとり擲出で何とする。何事も御産安穩の爲ならずや。祈誓も立願も慈悲心なくて叶ふべきか。別紙に俊寛のゆるし文持参して、使の落度になるとも、御邊に料はかけまい。(浄瑠璃、平家女護島)

●とへとし思はわやへの山吹をゆるすと

ゆゝ部 ゆるし

九六九

- まづ是で御免と辭者三を下げ。(同)
- 換返す干物其手で赦免狀。(同)
- 免狀のつく口は島の大紋なり。(同)
- ゆるしまで爪が二三度わけ替り。(同)
- 出棺の跡螺越の猫救免。(同)
- 赦免狀はいなく塚へ聞かせけり。(同)
- 鳳も出よ優盛花も咲け御救の朝。(同)
- 年に二度半季大紋に行はれ。(同)
- 御年同國土に餘る大紋なり。(同)
- 御免あれ兵庫の者。(俚諺)
- 九月都門凍欲霜。高麗鳳免立驚行。(陸機)
- 元禰謝免開三經。平仲朝歸臥一裘。(薛逢)

〔よ〕夜

よノ部

夜半。夜隠。夜色。暗夜。闇夜。終夜。深更。通宵。參半。沉沉。ほしつきよ。夜ごろ。ぬばたま。ながくし夜。さぬる夜。五百夜。夜もすがら。よるの衣。よるのにしき。やみの夜。

●八月十三日、晝より雨ふりて、しめやかに暮れぬれば、月はなやかにさし出で、小倉の山も劣るまじげなり。夜も更け静りたるに、人たゞ二人ばかり、立ち出で、見れば、御所になりて、しばし御覽せられて入らせおはしましぬれども、二人は猶残りて、昔今なきみ笑ひみ、轉法輪の契、長生殿の心ちして、曉近くなれば、入方の月、山のはに傾きたるは、入日ならねど遅くるゝ心地して、古の小野の山さへゆかしきまで覺ゆるも、入りなん後の心細さを思ふに臥しぬ。(中務内侍)

●御次の市中長く過ぎ行くに、千家いねしづまりて物音もなく、往來の人影もたえてなし。今宵は居待月なれど、まづ名のみにて、傾ぶ影は惜ますや、いとくちをなしとんと深けにけり。(淨瑠璃、鈴の權三)

おもへど、さばれ我も又かゝらましかば、かゝる清光も、いきたなくまらでぞあらまし。大曾根といへるあたりに至れば、家おともくさま劣りて、雞の聲戸々にきこえたり。(也有)

●深夜に立いで見れば、此川のながれ廣く水ふかくして、誠にゆたかなる渡なり。河の石瀬に落つる浪の音は、月の光にこえたり。川邊にすぐる風の響は、夜の色白し。(光行)

●明日こそわたるべき川の多きに、みかさのまさりもぞする。夜をこめてだに、かん原の宿まで、いかでゆかんとて、夕かたより、たちまよふ雲のあしと共にいそぎつゝ、富士川わたるほどには、空はれておもはざるに、月さやかに出でにけり。(眞淵)

●淨衣の袴かいつて、立烏帽子を風折り、狩衣の袖をうちかついで、人目しのぶの通ひ路の、月にも行き暗にも行く。雨の夜も風の夜も、木の葉の時雨雪ふかし。軒の玉水とくくくと、行きてはかへりくはは行き、一夜二夜三夜四夜、七夜八夜九夜、豊の明の節會にも、逢はでぞかよふ庭鳥の、時なと延々曉の、榻のはしがき百夜ま

でと通ひいで、九十九夜になりたり。

- 面白や、風は昨日の夜より聲いよ／＼かはり、人間の水雨に流れ、天上の星北にたんだく、夜は幾夜程ぞ手一つより、丑三つばかりの夜中の空、あらしすこの通ひ路やな。(謡曲、千引)
- 思へば今宵を、限と知れば一夜をも、千夜になさばやと、思へど明る東雲の、飽かぬ中々に、何しに馴れそめて、今更かなしかるらん。(同)
- 守りも堅き夜廻りの、拍子木の音神々たる、一聲の支那空に鳴き、巴峽の秋深し。五夜の真猿、月浮え入りて暗き夜に、眼計り光る兜頭巾、ぶつ裂き羽織立ちつけに、露溜み分くる窺足、前後に心置く霜の、城際近く忍び寄り、ほと／＼叩く大手の門、すは夜討か抜喉か、討ち取つて功名せん。(淨瑠璃、大友真鳥)
- 睡れば跡は門の戸を、さすが數寄屋の庭の面、若葉の木立ものふりて、路次匠の闇き燈籠の、火影やどかるくま笹の、露は燈か蛙の聲のかまびすしく、茅屋が軒に音づれて、まよろ／＼流れ水の音、夜もしんし

●なすこともやみのうつ／＼にまどるむは、やはかなにもよるはいはじな。(春満)

●身のうさも月を見ればなごさみきやみこそ夜はわびしかりけれ。(蘆鹿)

●あつめれば燈ばかりの光なきわがよの更ぞさちにくやしき。(同)

●しのよめのかつき近くなりにけり、ろもでいたくさぬこの夜は。(家真)

●この夜は、まだふけなくに老らくのかたねぶりする灯のとも。(信實)

●歎きつゝ獨りぬる夜をあくるまはいかに久しきものとかはしる。(道綱母)

●きのふけふわくなる鐘の音にだに猶おどるかね長き夜もうし。(爲家)

●夕されば君やきますとまちし夜の名残ぞいまはいわがてにする。(萬葉)

●かたしきの袖ゆく水のうすこほりおもひくだけて幾夜ねらん。(忠定)

●妹が名もわが名もなしと思へこそ夜深く露のおきてしもくれ。(土彌)

●白妙や月の外行くさくら夜の夜。(野坡)

●松明に山吹うすき夜の色。(野水)

●なく蛙神もはじめてなる夜哉。(几董)

●踊子のかへり來ぬ夜や暮。(丈草)

●稻妻のかきまてゆく闇夜かな。(去來)

●不如歸終小情しとおもふ夜や。(曉台)

●傘さして燈の音を聞く夜哉。(盛太)

●酒からき夜が二夜ありほと／＼ぎす。(天涯)

●霧催ひして遠のくや夜の外山。(藍外)

●秋遠し雨氣のとれし夜の空。(谷雄)

●鶴のごと首をのばして仇人を一夜をちよと待ちしくやしき。(早秋)

●わげ玉の夜を晝のごとてらせるは月のかよみの光ならまし。(是心)

●やみの夜もし原斗月夜かと思ひの外にさける卵花。(讀人不知)

●ふくる夜のかねは七つに魂のつちひとつなるしづがさ衣。(持成)

●こよひこそ夜を晝ともわかたれば時計もかけぬ月のまどかさ。(棍人)

●夜もすがら神樂の音にうかれてや我も寝時のひやしうしなふ。(世暮氣)

●夜や寒き衣やうすきたふれもの。(川柳)

●ふけわたるらうかなやりのツさのさ。(同)

●あいさうなやり手へいふ夜みじめなり。(同)

●三五から夜中に出まぬ娘の手。(同)
 ●あつけない夜をけいせいにするらるる。(同)
 ●寐そびれた夜は家を立て寝をたて。(同)
 ●去つた晩餅や砂糖で夜を明し。(同)
 ●蚊帳つツた夜はめづらしく手が遊び。(同)
 ●長い夜をちつとづみみる乳母が夢。(同)
 ●一とせに一夜はうしろ火よだれ。(同)
 ●夜や寒き衣やうすき居候。(同)
 ●夜は御免だと隣へきわたかし。(同)
 ●さちん宿とこよみの夜とはやなりぬ。(同)
 ●こがれんくてもろし舟の、袖にみなの
 のよるくは、そりや逢ふ夜々は、そでに
 港のよるばかり、そりやあふ。(俗語)
 ●思へやこそ来れ思はでよか。千夜萬夜
 はねてこそよけれ。かけてよいのは小竿に
 小袖、かけてわるいは薄情。(同)
 ●一夜けんぎやう。(同)
 ●夜を以て日に綴ぐ。(同)

●口噴成瀾影開。沈々烟霧壓浮埃。刻
 溪雲滿子猷去。漢殿月生王母來。燈掛
 絲。應漸織。風吹燈火不成灰。愁人莫
 道何時旦。自有鐘鳴漏滴催。(徐寅)
 ●山家具難索。夜與故人二期。暫喜逢歡
 會。都忘在亂離。火寒移坐密。燭盡得詩
 遲。莫聽高城角。明朝別又悲。(高啓)
 ●夜如何其。夜未央。庭燎之光。君子至止。
 燧聲將々。(詩經)
 ●閒裡事忙晴晒藥。靜中機動夜爭棋。(石湖)
 ●披襟兩相對。半夜忽白晝。(陸龜蒙)
 ●深林風緒密。遙夜客情懸。(張九齡)
 ●風將夜共靜。空與月俱明。(朱超道)
 ●殘燈多半爲詩留。(惠椿學)
 ●夜靜寒當虎嘯。(張丹祖)
 ●清吟夜煮茶。(郭天錫)

見えぬ。まだ肌寒き。霞もさゆ
 年かへりて一日二日こそ。四方の山べも
 打かすみて、やうく春のけしきに心も
 どけう見たされしが、さえかへりては、
 冬にもまされる山風の、いと身にしみて、雪
 さへなりくうち散りつる、のきばのうめ
 のや、咲き出でたるも、しほめるやうにて
 にほひうせぬるこちするに、小松なども
 てはやすにつけても、野べはるかにぞおも
 ひやられぬる。
 風さむみ引きにいでぬ春野にはくる
 人まつのいるやさびしき。
 あけくれのすきびには、たゞ埋火のみかき
 おこしつゝ、文机にむかふの外なきに、日
 かすへても空のけしきなほらす。いとすき
 まじう吹きある風は、立まよふ雲のいろ
 さへぞ、おどろくしきや。かくのみこも
 りたるもいぶせきを、けふは初午にて、い
 なりまうすべき日なりなどいへば、さほ
 きささぎもたちけるよと、おどろかるゝ
 にも、いとあけなき風のおとになん。(廣足)
 ●かよりし程に、法皇は文治二年の春の

頃、建禮門院の小原の閑居の御住居、御覽
 ぞまほしく思召されけれども、二月三月
 の程は、嵐烈しく餘寒も未盡きず、峰の白
 雪絶えやらで、谷のつらうも打解けず。か
 くて春すぎ、夏立ちて、また祭もすぎしか
 ば、法皇夜をこめて、小原の奥へ御幸な
 る。(平家物語)
 ●空のけしきもはるげにぞ。哀しりがほに
 霞みわたれる。よるになりてはげしうふき
 出づる風の氣色、まだふゆめきていとさむ
 げに、おほとなぶらもきまつゝ、やみはあ
 やなきたどくしきなれど、かたみにさ
 さし給ふべくもあらず。(紫式部)
 ●若菜つむ。生田の小野の朝風に、猶さえ
 かへる秋かな。木の芽も春の淡雪に、森の
 下草なほ寒し。深山には、松の雪だにきえ
 なくに、都は野邊の若菜つむ。頃にも今は
 なりぬらん。(諸曲、求麻)
 ●糸によるものならなくに別路の、心細く
 し夜の道、迷ひ来る身がやつ過ぎて、春ま
 だ寒し雪の下、積る思ひに哀別離苦の、理
 知るき晴や、東光山の鐘の聲、別れを歎く
 人あれば、眠りを覺す法の友、親同胞を遠
 近に、すみれつばなも名のみして、霜の芝

路踏しだく。(淨瑠璃、鐵翁三代記)
 ●雪消えぬ比長山おろしなほさえてかすみ
 に、こほるしがの浦波。(雅經)
 ●春きては岩まの氷とくべきに冬にもこえ
 てさゆる比かな。(仲實)
 ●わかなつむ秋のやけ原猶さえて袖にたま
 るは春の泡雪。(忠良)
 ●山ふかみ猶かげさむし春の月空かきくも
 り雪はふりつゝ。(越前)
 ●よしの山櫻が枝に雪ちりて花おそげなる
 年にもあるかな。(西行)
 ●ともすれば雪氣の餘波猶さえてしぐれに
 かへるきささぎのそら。(長明)
 ●かすみあへず猶ふるゆきにそらとどては
 る物深きうづみ火のもと。(定家)
 ●春きてはさむきをこひの炭焼もとのこ
 ろのなの山風。(契沖)
 ●がりがねのかへるつばさを又やもる曉さ
 むきさささぎのしし。(同)
 ●二月の空さえかへるやまかぜは冬にまさ
 れるこちこそすれ。(眞淵)
 ●なごてかく花おそげにもみえぬらんはる
 ひと月はさても過ぎしを。(千陸)
 ●ともすれば花にまがひてちる雪にうめが

かきむき二月の空。(廣庵)
 ●思ひ出で、薬湯たてる餘寒かな。(召波)
 ●芽柳の遊ぶ鳥まだ寒げなり。(鬼貫)
 ●なきたて、雉子のなくする餘寒哉。(篤老)
 ●黄鳥のきもつぶしたる餘寒哉。(支考)
 ●關の戸の火鉢ちひさき餘寒哉。(無村)
 ●彼岸前寒さも一夜二夜かな。(路通)
 ●沙汰なしに日の長うなる餘寒哉。(乙由)
 ●水に落ちし椿の永る餘寒哉。(几童)
 ●むめひと日くかゆる餘寒哉。(大江丸)
 ●人ひとり来れば忘るゝ餘寒哉。(由誓)
 ●釜子や餘寒の繩を追ひまはし。(整太)
 ●旅籠屋の朝飯黒き余寒かな。(完來)
 ●春ながら寒さに花のかげけ咲かりて火桶
 にいけ田炭哉。(千種)
 ●其儘につくりし雪の佛さへきえもせずし
 て春のさぶけさ。(吉住)
 ●さぶそらに霞の衣うすきて風ひかしや
 るなほるの山ひめ。(千則)
 ●またそらに冬の寒さの餘りものふるは、
 のまな花の山風。(下道)
 ●引きわたす霞は空にみゆれども請取にく

●春のさむけさ。(常持)
 ●鐘の聲氷りつくかと春雨の雪になりたる時のさぶけさ。(藏吉)
 ●春の日のあしはちとづゝ延びながら雪もけもせで残るさむけさ。(耶人)
 ●さかかへる寒さいたみて西施ほど眉をしわめし春の青柳。(乘安)
 ●春といへどまだ口元の寒さにや今朝ははのれも淡雪ぞ降る。(綾耕)
 ●春宵一刻未だ餘寒のつよければ償せんきのおこりこそすれ。(つらね)
 ●袖ひびきてむすびしなかも薄氷、とくと合點はしなからし、まだ春さむき雲行は、たれにあつて武庫山おろし、いたくな吹きそ身は捨小舟。(俗語)
 ●酒天來、澤水、霞瓦、見賜、此敵猶能禦。春寒不可當。(陸游)
 ●高樓望、綠珠、惡客碎、珊瑚、未低、春寒夜、貧翁裏、故舊。(同)
 ●春寒料峭透、紗紗、睡起、晴峰、恰報、衙、怪得曉來風力勁。滿階香雪落、梨花。(黃真)
 ●江上餘寒去却來。影落、微蕪、豆蔻、灰。風笙聲、淡、不成、曲。又倚、春檣、煖、一回。(晁補之)
 ●枕上詩成聊獨吟。豈願、酒熱、且、孤斟。梅花

已好猶備出。爲怕、春寒、帶、故陰。(同)
 ●不、獨、衰、翁、日、臥、牀。無、人、修、禪、作、流、觴。憶、昔、在、洛、春、暄、早。前、月、中、旬、賞、海、棠。(茶山)
 「よく」欲
 欲望。欲心。樂欲。寡欲。貪欲。
 愛欲。
 むさぼる。あくことしらぬ。
 ●抑人は所願を成ぜんが爲に財をも求む。錢をたからとする事は、願をかなふるが故なり。所願あれどもかなへず、終あれども用ぬざらんは、全貧者とおなじ。何をか樂とせん。この世はたゞ人間の望を絶ちて、貧を憂ふべからずときこえたり。欲を成して樂とせんよりは、しかじ財なからんに。癩疽を病むもの、水に洗ひて樂とせんよりは、病まざらんにはしかじ。こゝに至りては、貧富分く所なし。究竟は理即ひとし。大欲は無欲に似たり。(兼好)
 ●折ふしは春の山二月初午の日、泉州に立たせ給ふ水間寺の觀音に、貧賤男女詣でける。皆信心にはあらず、欲の道づればはるかなる。菩薩姫秋萩の燒原をふみわけ、いま

だ花もなき片里に來て、此佛に祈誓かけしは、其分際程に當めるを願へり。此御本尊の身にしても、獨々に返言し給ふもつきず。今此婆姿に掴みどりはなし。我頼むまでもなく、土民は汝にそなはる。夫は田播ちて婦は機織りて朝暮そのいとみすべし。一切の人此の如くと、戸張ごしにあらたなる御告なれども、諸人の耳に入らざる事の淺まし。(西鶴)
 ●わが欲を欲もてふせがんとするは、いとかたし。けふ盃にひとつ酒のまんよりは、あすはこゝろにまかせて、のますべしといふが如し。この世はかりのよなり。かの國にはよき色の鳥、よき色の花よりしてなど教ふるは、その國のおろかなる民ぐさの、はかなきほどもしられぬ。かりの世と此の世をいはず、君と親とのめぐみはなにと人にこたへんとか、よみしもありとかや。(樂翁)
 ●昨日某君に参り、御馬の事を申す處に賜はらず。面目を失ひ罷り歸りしに、折節御馬屋を見てあれば、かひなくしき番の者も無く、唯生食が舍人ばかりなり。某兎角の事をばいはず、腰の刀を抜いて取らせ、此

馬を盗みてくれよ。此度江州に討つて上り高名極むるならば、汝をば高懸に誇らすべしと云ひければ、下臈の身の悲しさは、慾にめでけるか、又其際兎角辭しなば、惡かりけんと思ひけん、千細あらず領學す。(謡曲、佐々木)
 ●神の代七代、すなほに人あつうして、情欲分つ事なし。天地開け始まりしより、舞歌の道こそすなほなれ。(謡曲、蟻通)
 ●抑軍書の本は、六韜三略吳子孫子、其卷々は多けれど、落つる所は智仁勇、三つをつよめてしんぼうに、慾の一つをたしなむが、武士たるものゝ至極とかや。欲は貪欲者の欲、夫れよりは又色欲の、迷に身をば滅ぼすこと、千里が野邊に離れて、虎の餌食に逢ふよりは、速なりとの譬をば、虎の巻とは名付けたり。(淨瑠璃、末廣十二段)
 ●そなたには欲もはなれてあるものを又惑はするあたら市人。(言道)
 ●上を見ぬ目にも欲あり齒かり。(也有)
 ●花に死なんねがひは欲のかよみ哉。(白雄)
 ●着る欲のなくて過ぎける初裕。(孤星)

●萬歳や舞もうたふも欲の事。(梅盛)
 ●世に重きことがね持つ身はこゝろして欲のふかみにのぞますもがな。(道雄)
 ●黄金色に咲く山吹なめにかけてほしがらもげに慾の道哉。(漸水)
 ●蓮池をこけありく露の白がねはひろふ欲だになくて涼しき。(東作)
 ●欲しらでかた山里の隣どしかぞへあふべきたからだになし。(奇童)
 ●千金の春こそ欲にきりあらん日あひも元も皆かすみなり。(思月)
 ●二三本折らばや折らん目の欲にたままどはせる白菊の花。(佐具留)
 ●よはひさへくめば長しときく酒に下戸もよるめく慾のなかしき。(形澄)
 ●欲つらか春の初や燈明をかよげる宿のふくれ神棚。(關陵)
 ●うつくしういはね色でもよく徳の小判沙汰には出づる横すぢ。(方雅)
 ●天狗きつねかみなりはこはげ大黒につけたる殿は欲げなりけり。(木端)
 ●世の欲をすてゝ入りにし山住も年をばたんとひるひぬるかな。(音清)
 ●二三年縫上げておく母の欲。(川柳)

●あの熱で金をかくした人の慾。(同)
 ●おめへがた慾を知りなと慾をいひ。(同)
 ●除夜の巨燈に欲の無い寒頭。(同)
 ●人参に親の秤の慾がはね。(同)
 ●片乳房にぎるが欲の出来はじめ。(同)
 ●羨しい上にも欲をたしなみて。(同)
 ●のぼつても峠をしらぬ欲の道。(同)
 ●大慾か無慾か釣師夢中なり。(同)
 ●猫捨てた無慾直打の知れぬ腹。(同)
 ●只たのめ杯と觀音欲しらず。(同)
 ●小僧の私欲食傷で露顯する。(同)
 ●大丈夫一生切れぬ欲の皮。(同)
 ●年々に田の畔疲る欲の鎌。(同)
 ●ためのよいことあるなれば、何時でもいとまくれといや。欲をはなれたこれ証據。年といふてもわづかなこと、不便な目を見やうかと、案じすこしがせらるゝぞや。(俗語)
 ●惚れた欲目で好く見える。(俚諺)
 ●親の欲目。(同)
 ●大欲は無欲に近し。(同)
 ●欲に目なし。(同)
 ●孔子適間、將問、禮于老子。老子曰、

去、子之驕氣與多欲、慝色與滯志。是皆無益、于子之身。

●身者陰陽之積氣也、性者五行之正性也、情者遊魂之變欲也、神者天地之所、以、取者也。

●子曰、吾未見剛者。或對曰、申極。子曰、極也、焉得剛。

●我好靜而民自正、我無欲而民自樸。

●情勝欲者昌、欲勝情者亡。

●飲食男女、人之天欲存焉。

●養心莫善於寡欲。

●君子以懲忿窒欲。

【よぶこどり】呼子鳥
友よぶこどり。深山のおく。夕ぐれの聲。うらかなし。花のよすが。

●都の花はうりぬれど、山の櫻はまだ盛ならんとて、獨北山にいたりて、鞍馬の奥に分けるに、折しし人呼ぶやうに、聞きなせる鳥の聲するは、呼子鳥なり。我がと行きていざとばらんといふ古こと打すするを、折にあはれど、つきくしと聞く人

なきも、さうくしや。こゝは天狗木魂などの、人よぶ事ありときけば、もしはさる變化の物の、鳥の聲まねびて人よぶにやと思ひよるに、かしろの聲、ふとるこゝちしけり。

●たゞ霧のそこはかとなくこの深き方になくを、かゝる折は呼子鳥こそ、たよりある心地せめと人のいふに、げに人くといふは、ことの外にもあるかななど、よしなし

●こゝはすれど、たづきもしらぬとのみとなへられつゝ、それが中に年有が、

●こゝ方も此行末のおく山のおくにも春の聲ぞなく。

●此山中に覺束なくも呼子鳥の出女の色を置かざるは、是聊の傳授事にして、流離の風を恐れ給へる、我邦昔よりの法令なり。

●所は山陰の松吹く風も涼しくて、まながら夏を忘れ水の、音も絶えく、心耳を澄ます夜もすがら、稱名觀念の床の上、座禪圓月の窓の内、寥々たる折ふしに、一人の老尼の、忽然と來りたすゆり。是は如何なる人やらんと、たづねさせ給ひし

に、老尼答へて宣はく、誰とはなどや愚かなり。呼べばこそ來りたれと、仰せられける程に、中將姫はあきれつゝ、我を誰なかり呼子鳥、たづきも知らぬ山中に、聲立つる事とては、南無阿彌陀佛の稱へならで、又他事もなき物をと、答へさせ給ひしに、それこそ我名なれ。聲をしろべに來れりと。

●遠近の、たづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥の、聲すこき折々に、伐木丁々として山さらに幽なり。

●四相を悟る重忠の御情、ぢいの願を聞き分け給ひ、助けおかるゝ奈なき、誰彼の情も忘れぬ、コレ隨松、と云はずに暇乞、樋口く、樋口さらばと稚子の、誰教へれど呼子鳥、我を名残しをし鳥の、番ひ離るゝうき思ひ、やらんくすとすがり付く。

●忍びの乗物立てさせて、千人に勝れし大名風、骨柄ゆしく門の口、眞柴大領久吉、參上と音なへども、答も蘆屋の呼子鳥、まづぐ通り兩手をつき、親人様御堅跡の御顔を拜し、大悅至極と相述べれば。

●さる人は猿ぞともいひ鹿ぞともしかとは知れぬ呼子鳥かな。

●呼子鳥傳授ものとて歌人も覺束なしとよみてこそおけ。

●呼子鳥おぼつかなしと問ひよればさるか人かとみゆる山すみ。

●山中にすむとはいへどよぶこ鳥聲も形もみざるさかざる。

●よぶこ鳥なく山中は方角のさるかとりかもわからざりけり。

●迷ひ來し昔を鳴くや干見つか母三井寺に聲呼子鳥。

●猿利口では傳授せぬ呼子鳥。

●袖が子の名を猿松と呼子鳥。

●妻月の猿を傳授して呼子鳥。

●曾呂利くと笑はせる呼子鳥。

●うらに出す文を傳授の呼子鳥。

●笛大鼓かねて舞子を呼子鳥。

●傳授せぬ迄は迷子の呼子鳥。

●ほたるの宮のあくがれし。その玉かづらかりにけり、いかなるすぢの糸による、ものならなくに、わかれあふ、戀慕のしらすほのかにも、つくりこゑして呼子鳥、おぼつかなしやかくしきみ。

●つのも松原蔭暗く、暮れぬまきよりまづ暮れて。こやのおしぶき宿もなき、我をば呼ばで誰なかも、あゝ呼子鳥覺束な。

●なちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな。

●東路のなこそせきの呼子鳥なにつくべき我身なるらん。

●思ふこちへにやしげき呼子どりのの森のかたになくなり。

●昔によし奈其の山なる呼子鳥いたくな啼きそ人もこなくに。

●花ちらふ片山林今更にかひなきねにもよぶこどりかな。

●住よしのなごしの岡のよぶこ鳥なによぶべきあまのつりふね。

●はるかなる深山の袖の芹のおとにこたへてもなく呼子鳥哉。

●いづこそやよぶこ山のよぶこ鳥霞がくれのゆふやれのこゑ。

●さうしらぬ身はいかにせん呼子鳥聲はくもわにありとばかりに。

●象山のかすみのおくの呼子鳥むかしの春をこひつゝぞなく。

〔よろこび〕喜

拵。欽嬉。歡喜。欣々。洋々。嬉々。忻々。怡々。

あらぐ。ほゝるむ。うれしなき。

うれしなみだ。眉を開く。

●をばなる人の田舎よりのぼりたる所に渡りたれば、いとつつくしうおひなりにけりなど、おはれがりめづらしがりて、歸るに何をか来らん。まめくしき物はまさなかりなん。ゆかしくし給ふなるものを来らんとて、源氏の五十餘巻、ひつに入りながら、在中將、とほきみ、芹川、ふらふ、あまうづなどいふ物語ども、一巻をとり入て、えて歸る心地の嬉しきぞいみじきや。走るく僅に見つ、心も得ず、心もたなく思ひ、源氏を一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内に打臥して、引出でつゝ見る心地、後の位も何にかはせん。晝は日くらし、夜は目のまめたる隈、火を近くともして、是を見るより外の事なければ、おのづから名などはそらに覺え浮ぶを、いみじき事に思ふに。

(孝徳女)

●木三位の中將重衡の卿、その時は未申宮の莖にておはしけるが、御慶の中よりつと出で御産平安、皇子御誕生候ふぞと、高らかに申ゆれたりければ、法皇を初め参らせて、關白松殿、太政大臣以下の卿相雲客、各所修、陰陽の頭、典藥の頭、數豫の御驗者、すべて堂上堂下一同に、あつと悦びおはれける。聲は門外までもとよみて暫しは静りもやざりけり。入道相國嬉しきのおまりに、聲をあげてぞ泣かれる。悦泣とは是をいふべきにや。

(平家物語)

●是は思ひもよらぬ仰かな。もとより所は天さかる、鄙人なれば人がましやな。名もあらばこそ名のりもせめ。只上人の御下向、ひとへに彌陀の來迎なれば、かしこぞ長生して、此稱名の時節にあふ事、百龜の淨木、うどんげの、花まちえたる心地して、老の幸身にこえ、悦びの涙たもとにあま。されば此身ながら、安樂國に生るゝかと、無比の歡喜をなす所に、輪廻妄執の間浮の名を、又あらためてならん事、口惜しうこそ候へとよ。

(誦曲、實感)

●ありがたの御事や、誠に諸天納受して、此子を我等にあたへ給ふかありがたや。斯

くて餘りのうれしきに、時刻をうつまず、暇申して唐人は、船にとり乗り押し出だす、悦の餘りにや、樂を奏し舟子ども、棹のさす手も舞の袖、をりから波の鼓の、舞樂につれて面白や。

(誦曲、唐船)

●秋もうからぬ故郷に、歸る心ぞうれしき。これは九州日暮の何某にて候ふ。扱も某自訴の事あるにより、十ヶ年餘り在京仕り候ふ處に、自訴悉く安堵し、喜悅の眉を開き、唯今本國にまかり下り候ふ。

(誦曲、鳥追船)

●あら物すこの深谷やな。寒林に骨をうつ錨鬼、位くく前世の業を恨む、深野に花を供する天人、かへすも幾生の善をよるこぶ、いや善惡不二、何をか恨み何をか喜ばんや。

(誦曲、山姥)

●四十七人の人々敵の館へ忍び入り、師直を討ち取りしと、まさしく見しは正夢か、ハテ不思議なと思案に心暮六つ過ぎ、鎌倉よりの御飛脚に、かけくる寺岡平右衛門、ヤア義平殿か、悦ばつしやれ。由良之助様大望成就、師直を討ち取つたる知らせのお使、ヤア扱は只今見し夢は、神のお告げなりつるかどぞくく小踊り、喜び合ふぞ道

理なり。義平重ねて、箱の主石堂殿、拙者をいたはり機々に、せめくたのぶる御情、御恩報じは此時と、奥に向ひ聲張り上げ、天河屋義平只今白狀仕ると、詞に奥より立ち出づる、石堂も悦喜の眉。

(淨瑠璃、忠臣蔵)

●誠や人間の吉凶は、生るゝ時の運に任すといふ。母の胎内を出でしより、誕生の祝儀連、さよんざ願ふ悦は、貴人高位は言ふに及ばず、下萬民の我々迄も、悦に悦を重ぬるが親子の縁。

(淨瑠璃、廿四孝)

●太子の尊容、時のまに御背丈も立仰て、早七歳の御舉動。吳三桂々々と召さるゝ御聲おとなしく、雪の深山に黄鳥の、初音を聞きし思ひにて、靡々々と頭をさげ、天を拜し地を拜し、嬉しさ足も定まらず。二度夢の心地せり。

(淨瑠璃、岡性遊)

●うれしさを哀しいかにこたへまし故里人にとはれましかば。

(新古今)

●うれしさを忘れやはする忍草しのぶるものな秋の夕ぐれ。

(伊勢大輔)

●うれしきは忘るゝ事もありなましつらきに長き形見なりけり。

(深養父)

●法の爲しきみが花につみそへばすぐる川

口もうれしからまし。

(契沖)

●うれしさを何に包まん唐衣たもとゆたかにたてといはましな。

(古今)

●年月のつれなかりつる恨さへとけてうれしきよはのした紐。

(芭蕉)

●うれしさを昔はそでにつみけりこよひは身にもあまりぬるかな。

(説人不知)

●うれしきもうきもわきいづる水のごとくもにながれてとまらざりけり。

(蘆庵)

●うれしさを引かされよと春の立つけふに千日やめぐりきぬらん。

(春海)

●うしと見るもうれしと見るも春のゆめさむるまつまの世とは知りなき。

(長流)

●京の水つかうて嬉し冬ごもり。

(太祇)

●屋根低き宿うれしきよ冬ごもり。

(無村)

●うれしさを我にあまりたるむかご哉。

(同)

●布子きて嬉しがほなる十夜哉。

(凡童)

●こよえ来て手足うれしく逢ふ夜かな。

(同)

●蒟蒻と柿とうれしき草のいほ。

(芭蕉)

●白瓜の出そめてうれし市中の中。

(支考)

●須田町の初物うれしけきの秋。

(許六)

●夜着の香も嬉しき秋の宵燈哉。

(支考)

●嬉しさにいくらもほどく縁哉。

(士朗)

●こひじにといふてくどけば落ち葉のおちて命を拾ふうれしき。

(聖廣)

●鳥羽にかく文字ならで懐に蒸して讀みける文ぞうれしき。

(竹由)

●春ぢやとてさしたるあてはなけれど先正月はうれしかりけり。

(白人)

●よるこびのこぼれ松の葉かんざしのかざしにさして幾千代もへん。

(しづ子)

●よきことにまたあふぎやと聞くうへはまきよし原と喜びぞする。

(説人不知)

●かはらじと心のたけなをしめかざり今日逢ふことをまつの嬉しさ。

(川長)

●白紙の文をぬらせば明ばんといふ約束の出づるうれしき。

(空風)

●花さかぬ身はうき草と思へどもねはたえぬとのその嬉しさ。

(袖廣)

●空也とおそれおほけれ嬉しさに我もあたまのはちたふきする。

(木綱)

●立ならぶ子の愛らしくかあいに親はらげて嬉びぞする。

(近月庵)

●うれしがるそばに禿は泣いてゐる。

(川柳)

●死にきつて嬉しきうなる顔二つ。

(同)

●人の物なれどうれしき長い出穂。(同)
●鉢まきへよろこびをいふ産みまひ。(同)

●うれし／＼が、みうれしござる。初手に
ござつても、ふられぬうれし。宿の首尾さ
へ、首尾さへうれし。うらか港にや、ほだ
すくうれし。うれし軒の玉水、とく／＼
ござれ。しげくござればしげく、人が、人
がしる。(俗語)

●一夜あぐれば又氣もはる、花の盛は梅
屋敷。初音一聲驚の、ほうほけきやうの約
束も、實にうれしいなかない。(同)

●志賀の唐崎一つ松。夜毎々々の、泊り鳥
がむれくるを。あを／＼と、嬉涙のかわく
まもなく、盛りがちな夜雨。(同)

●愛あれば芽あり。(俚語)

●奔騰道路人。僂僕田野翁。歌呼相告報。
感泣涕霑胸。順人人心悅。先天天意從。
詔下織七日。和氣生神融。凝爲油々雲。
散作習々風。晝夜三日雨。凄々復凄々。萬
心眷戀々。白綾背々々。人變愁爲喜。歲
易侯爲豐。(白居易)

●胡人向月吹胡笳。胡笳怨兮將送君。

泰山遙望隴山雲。邊城夜々多愁夢。向月
胡笳誰喜聞。(岑參)

●酒酣起舞和兒歌。眼中盡是漢山河。韓
彭受誅豈布衣。且喜壯士今無多。(張昱)

●重城車馬紅塵起。乾鶴無端爲誰喜。鏡
中獨語人不知。欲插花枝淚如洗。(元好問)

●聖人之喜。以物之當喜。聖人之怒。以物
之當怒。是聖人之喜怒。不繫於心。而
繫於物也。(程頤)

●得老加年誠可喜。當春對酒亦宜歡。
心中別有歡喜事。開得龍開八節灘。(白居易)

●人喜則斯陶々、斯咏々、斯猶々、斯舞。
(禮記)

【よろひ】 鎧
甲冑。鎧冑。堅甲。鐵兜。甲冑。
身甲。

鎧のそで。もの／＼ぐ。はらまき。
させなが。胴丸。ひをどし。卯
の花をどし。しなかはをどし。
小櫻をどし。

●爲義今度は最期の合戦と思ひければ、重
代の鎧を一領づつ、五人の子どもに着せ、
我身は御金を着たりける。源太産衣と漆
丸とは、嫡々に傳ふる事なれば、雜色此澤
して、下野守の許へぞ遣しける。爲朝冠者
は器量人に勝れて、常の鎧は身に合はざり
ければ着ざりけり。此藤丸と申すは、牛千
頭が膝の皮を取り威しなりければ、牛の精
や入りけん、常に現じて主を嫌ひけるな
り。されば座などを拂はんとて、精進潔
齋して取り出しけるとなり。かかる希代の
重寶を、敵となる子の許へ遣しける、親の
心ぞあはれなる。(保元物語)

●能登殿、今はかくと思はれけん、太刀薙
刀をも海へ投げ入れ、甲も脱ぎ捨てられけ
り。鎧の袖草摺をもかなぐり捨て、船のかり
きて大室になり、大手ひるげて、船のやか
たに立ち出で、大音聲をあげて、源氏の方
に我と思はんものあらば、寄りて教經組か
て生捕にせよ。鎌倉へ下り兵衛の佐に物一
言いはんと思ふなり。よれやよれと宣へど
も、寄るもの一人もなかりけり。(平家物語)

●こゝに一息休めて、城の中を吃と向上げ

の最上方、しやうじの板の揚巻に、四目結
ひを附けたるは、近江源氏の佐々木とは、
誰も知ららん白糸を、染めぬ心に色と香
を、錦皮のむなめ綴ち、鬼の腕をするどく
も、一際目立つ指物こそ、淺利の與市と御覽
ぞよ。扱八番に飾りしは紺系威の胴丸に、
纒褌輪の筋兜、大旗小旗吹き流し、お花流
しの染こみは、武藏の國の住人、仁田の四
郎忠常、次に列ぶはいつとも、向ふ敵を
宇都宮、好む處の藤堀目龍虎の指物殿めし
き、末座なれども隠れなき、黒皮威に金紋
の、二つ頭のまふたるは、駿河國の住人天
智天皇の末孫、竹の下の孫八左衛門。

ければ、錦の御旗に、日月を金にてうちて
着けたるが、白日にかよやきて、光り渡り
たる其陰に、透間もなくよろうたる武者三
千餘人、甲の星を耀し、鎧の袖を連ねて、
雲霞の如くに並みたり。(太平記)

●三月九日右衛門陣よりおそろしげなるも
のふ三四人、馬に乗りながら九重の中へ
はせ入りて、うへにのぼりて女嬪がつぼね
のくちになちて、やうといふものを見あげ
たれば、たけたかくおそろしげなる男の、
赤地の錦の鎧直垂に緋樹の鎧きて、たゞ赤
鬼のやうなるつらつきにて、みかどはいづ
くに御よるぞといふ。(増鏡)

●門の外に、あまたの士卒ら、たちならび
て、鎧のかなもの、さし／＼しく光りあひ
て、盤などのとびかふやうに見ゆ。(雅遊)

●既に此夜も明方の、山塔の鐘も杉間の雲
の、光かよやく月の夜に、着たる鎧は黒平
のなどしにどせる大鎧、草摺長に着なし
つゝ、もとより好な大長刀、真中取つて打
かつぎ、ゆらり／＼と出でたる有様、如何
なる天魔鬼神なりとも、面を向くべきやう
わらじと、我身ながらも物頼しうて、手
に立つ敵の戀しきよ。(謡曲、橋辨慶)

ひ、追ひ詰め、攻め滅ぼして、東夷を平げ
悪魔を鎮め、治まる御代となりけるも、此
物具の威徳とて、無相とこそめされけれ。

(浄瑠璃、文武五人男)

●をどし毛も花とのみなる世の中を昔にか
へす小櫻もかな。

(博覧)

●あつゝあつゝかきかされても思ふかな鏡もわが
でねぶりけん世な。

(廣足)

●飾りつゝ見れば人めくよるひかなたが魂
もこもるばかりに。

(言道)

●樟隠に代をゆづりはの鏡哉。

(其角)

●衣更鏡のぎたる心地哉。

(北島)

●蚊のやせて鏡の上にとまりけり。

(一笑)

●鏡着て須摩の初の炬燵哉。

(整太)

●鏡着てつかれためさん土川干。

(去來)

●鏡にも散るは覺ゆる櫻かな。

(路通)

●重代の鏡かき出す虫干におのれも汗はく
さりかたびら。

(安見)

●治れる御代に鏡の土川はし袖を通すは虫
斗なり。

(雪解)

●太平の代は虫干にむら氣なき子供おとし
の鏡きてみん。

(三陀羅法師)

●さし當る羅義の矢さきよるひをも殺しか
けたる質の駈引。

(素人)

●鉄砲にうらなをかゝる鏡だに虫のほせ
し御代のためたき。

(鬼貫)

●治りしためしをみるの土用干鏡は蜘蛛の絲
をどしにて。

(和光庵)

●波たゝぬ御代を見馴の川の邊に蟹も鏡の
虫や干すらん。

(秀作舎)

●なげなしの鏡朝比奈ひつちぎり。

(川柳)

●鏡をばめざしにしたる御弓勢。

(同)

●甲冑をたいた所へ暑氣見舞。

(同)

●精雲の鏡はしめしくさくなり。

(同)

●源左勝門よくも鏡をくはぬなり。

(同)

●勾當の内侍鏡をひつかくし。

(同)

●まさかの時は質におく鏡なり。

(同)

●新道はみないせ武者の鏡を着。

(同)

●甲冑に樟腦匂ふ太平さ。

(同)

●道盛は寐まきのうへへ鏡を着。

(同)

●女武者鏡着る間に日が暮れて。

(同)

●かざりなくしづかなる世やふく風も、勿
来のせきの山ざくら、鏡の袖にちりかゝり、
花摺衣みちのくに、駒をすゝむも君が爲。

(俗語)

●甲鏡之施。并、紫鉄矢。命、其堅剛。或用
厚兜。内以存身。外不傷害。有似仁人。
厥道廣大。好徳者譽。好戦者危。專智

(同)

侍力。君子不爲。
●黄沙百戰穿金甲。不破樓蘭終不還。
(李尤)
(王昌齡)

ちノ部

〔ちら〕牢

牢獄。囚獄。鐵窓。獄裡。禁獄。
禁籠。禁錮。呻吟。沈思。暗黒。
ひとや。月日の光も見えぬ。歳
月のうつるもしらぬ。

●今は昔、唐土の秦の始皇の代に、天竺より
僧渡れり。帝あやしみ給ひて、これはいか
なる者ぞ。何事によりて來れるぞ。僧申し
ていはく、釋迦牟尼佛の御弟子なり。佛法
を傳へんために、遙に西天竺より來り渡れ
るなりと申しければ、帝腹立ち給ひて、こ
の姿極めてあやし。頭の髮禿なり。衣のて

い人に逢へり。佛の御弟子と名のる。佛と
は何ものぞ。これに怪しきものなり。たゞ
に返すべからず。囚獄にこめよ。今より後
かくの如く怪しき事はいはんものを、殺さし
むべきものなりといひて、囚獄に掛られ
ぬ。深く閉ぢこめて重く成めておけと宣言
を下されぬ。囚獄の司の者宣言のまゝに、
重く罪あるものおく所にこめておきて、月
に數多じやうさしつ。この僧惡王に逢うて
かく悲しき日を見る。我本師釋迦牟尼如
來、滅後なりともあらたに見給ふらん。我
を助け給へと念じ入りたるに、釋迦佛丈六
の御姿にて、紫磨黄金の光を放ちて、空より
とび來り給ひて、この囚獄の門を踏み破り
て、この僧をとりて去り給ひぬ。その序に
多くの盜人ども皆にけりぬ。囚獄の司、
空に物なりければ、出で見るに、金の色し
たる僧の光を放ちたるが、大さ丈六なる空
より飛び來りて、囚獄の門をふみ破りて、
こめられたる天竺の僧を取りて行く音なり
ければ、このよしを申すに、帝いみじく恐
ぢ懼れ給ひけりとかな。この時に渡らんと
しける佛法、世下りて後漢には渡りけるな
り。

(隆國)

●斯りけれども、吳王猶心ゆるしやなかり
けん、君子は不近刑人として、勾踐に面を
見え給はず。刺勾踐を典獄の官に下され、
日にゆくこと一驛に驅して吳の姑蘇城へ入
り給ふ。其有様を見る人、涙かゝらぬ袖は
なし。口をへて姑蘇城につき給へば、即ち
械を入れて、土の籠にぞ入れ奉りける。夜
あけ日暮れけれども、月日の光をも見給は
ねば一生冥暗の中に向ひて、歲月の遷易を
も知り給はねば、泪の浮ぶ床の上、こそ
は露も深かりけり。

(太平記)

●途に五月三日宮を直義朝臣の方へ渡され
ければ、數百騎の軍勢を以て路次を警固
し、鎌倉へ下し奉りて、二階堂の谷に、土
の籠をぬりてぞおき進らせける。南の方と
申しける上臈女房一人より外は、つきそひ
進らす人もなく、月日の光も見えぬ闇室
の内にむかひて、よこぎる雨に御袖ぬら
し、岩の滴に御枕をほしわびて、年の半を
すこし給ひける、御心の中こそ悲しけれ。

(同)

●たのしみは大憍慢のあたなり。あはす
なほち惡趣に引きおとす。貧は又道心のさ
またげならず。則善所に引きあぐ。たのし

(同)

みは先生の怨敵なり。食着身をしばりて四
生の牢獄にこむ。貧は今生の智識なり。愛
欲心をゆるして、三界の樊籠を出す。此故
に世をいとふ人は沙門となづけて、たのし
める人とす。
(光行)

●此石堂は大切の役目、たとひ五十日でも、
百日でも、そのの明りが立つ迄は某が預り、
寐る共ねさゝぬ現責、覺悟致せと目に角も、
此場を立つる情の獄屋、口を閉ぢたる藥師
寺に、かけしおりの石堂が、めぐみも深
き智惠の海、底意限なき夜嵐に。
(浄瑠璃、忠臣講釋)

●座敷牢鳥羽の離宮がはじめなり。(川柳)
●かまくらはしつけのふかい牢へ入れ。(同)
●座敷牢母も手錠がものはあり。(同)
●あはれむべし終にむすこは座敷牢。(同)
●五重の罪人大塔を牢に入れ。(同)
●劍術稽古顔斗り牢へ入れ。(同)
●座敷牢とつつかすの後家が出來。(同)
●煎じつまつた眞藥は座敷牢。(同)
●資本を母のなげ込む座敷牢。(同)

●わしが京のときさんの、よしなきもの、請にたち、明日きりに金たてれば、わしをやるの判ぢやげな。わしはこゝへ身を賣つて、さきからつれに來るときは、二重うり二重判、牢金は鏡にかけた事、ならぬ事なくとくと、思ふは愚痴の至りなり。

(俗語)

●賦之將、就遠也、使謂臣曰、賦早衰多病、必死於牢獄。死固分也。然所恨者、少抱有爲之志、而遇不世出之主、雖願於當年、終欲効尺寸於晚節、今遇此禍難、欲改過自新、洗心以事明主、其道無由。況立朝最孤、左右親近。必無爲言者。惟兄弟之親、試求哀於陛下而已。臣竊哀其志、不勝手足之情。故爲冒死一言。

(蘇轍)

●見賦所犯、若顯有文字、必不敢抗拒、不承以重得罪。若蒙陛下哀憐、赦其萬死、使得出牢獄、則死而復生、宜何以報。臣願與兄賦、洗心改過、粉骨報効、惟陛下所使、死而後已。臣不勝孤危迫切、無所告訴、歸誠於陛下。

(同)

「ちらし」浪士

浪人。退糧。流浪。流離。顛沛。さすらふ。すみ家定めぬ。かくれすむ。昔わすれぬ。おもかげのこる。

●娘少しも騒ぐ氣色なく、如何なる事ぞ、我は知らず。人の家に断なしの曲者一人も餘さじと、掛吉びたる長刀おつとり、切つてかゝる。女に手向はならず。三人共に身を潜め、難義の折から、近所の人々集りて死や角詮議の所へ、二親御堂より下向し、父は肩衣かけながら、母は綿帽子取りもあへず、是はと娘に縋り、始を聞き届け、安堵して、親仁三人の者をひきつけて、我今こそ哀れ、以前は疲馬にも乗り、鎧鎧の二筋も持せて、豊田長五左衛門と名をよばれしが、今かく淺間し住家なればとて、娘計の内証に入りて、存外せし故なし。已等捷を背く物取なるべし。さもなくば主人を申せ。其儘にはかへさじといふにぞ、三人道理に貸められ、襟々手を下げて人を殺めし者を付け込み、折節長持を締めさせ給へば、

心の急くまゝに、誤り申すと、段々訃言聞き届けて、然らば左もあるべし。近頃見するも恥しけれど、此上に改めれば、武士の本意にあらずと、益取つて蓋をあげ、三人のうち一人にのぞかせけるに、哀や浪人の有様、衣類の入物なるに、辻なしの傘一本、日光掬のはした盆、鎌倉の繪圖の破れ、釋古乘の木馬、袖付の紙合羽、塗足駄、箔付の大鼓、ひとつも錢になるものはなかりき。皆々見兼ねて立ちかへる。三人の者も、禮義を述べて別れぬ。其後事なく鎮つて、夕ぐれ方になつて、長五左衛門つれあひに語られしに、人の難義は何時を定め難し。今日の迷惑思ひもよらず。昔ならば、譬へば、駆込の者なればとて、天晴出しはせじに、其時々を擱きて、長持の耻を晒せし事よと、棒鞘の相口握りて、泪を流す。娘も今淺猿し親の御容し、思へばいと心の亂れけるを静め、今日の御難義は自かなす事なり。仔細は是れも浪人らしき侍の、血刀さげて駆け入り、頼むといふ一言、見捨てがたく、さへ抜けさせ、長持に入れたる様に見せかけ、其隙に逃げのび申すべしと存じ、追手の者の氣をとり候ふと、此事

委細に語れば、長五左衛門夫婦、手を拍つて、女の早速には扱もくと、我子ながら頼母しく、是れに付けても、浪人恨めしく、日敷を送る内に、今は賣るべき道具もなく、憂き秋九月の節旬前になりて、追々菊の霜枯に、一日を暮しかね、世の人は千歳を延ぶる蓋事、水呑む力もなく、此儘朽ちほつる身の習、日影に埋む昔の石にて、手をつめたる如くにせりぬ。はや九月七日の夜、武藏野の月清く、品川表の薄照りて、遊山船の歸きに、遠音の糸竹、心は其にうつりて、頭を振つて鼻唄話へど、昨日の腹にて今は淋しく、置かる棚をまぶれど、鼠も荒れぬ宿の悲しく、妻子の去るを思へば、長命へて甲斐はなしと、常にもてなし、磯邊にいで、小脇橋にて心元をつくに、足利車の膝ふるひ出で、手先に力なく、死ぬる事さへ我儘ならずして、其口惜しき、武運しかくまで盡きぬるものと、地に伏して嘆きぬ。

(西鶴)

●と見れば一人の武士の浪人、白蛇皮箱の單衣の、申時ばかりなるをきて、編笠をかしたれば、年の輪は定ならず。道のゆくての左のかたなる、年ふりたる松の下の

葛石に尻をかかけて、右手に奪りたる一口の太刀を、やたら膝推したてつゝ、忽聲をふりたて、世に千里の馬なきにあらず。只これを知る伯樂なきのみ。今も鏃那が似なきにあらず。只これを知る其將なきのみ。惜しいかな、わが、この名刀、屠兒の内証にのせられずば、農婦に鍋の炭をかゝれん。恨むべしとくりにかへし又くりかへして、顔にひとりごちたりける。

「ちらし」老人

老衰。老軀。老林。白髮。白頭。鶴髮。戴白。凍梨。桑榆。老の波。額の波。かしの雪。腰に弓はる。

●さいつ頃、雲林院の菩提講にまうで、侍りしが、例の人よりはこよなく年老い、うたてげなる翁二人廻ときあひて、同じところにおめり。哀に同じやうなるもの、さまかなと見侍りしに、これらうち笑ひ見かはしていふやう。年比むかしの人に對面して、いかで世の中の見聞く事どもなきに、